

無個性ヒーローは無個性
ヒーローNo.1を目指す

超ちくわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無個性でこの世に生まれた少年、つやぼし艶星 かなめ 萃。

いじめられっ子の少年だった彼は幼き頃にヒーローに憧れた。

無個性と認識されてからは無個性なりに守るべきものを守り続けた。

無個性だから敵に勝てない：サイランそんな屁理屈常識はぶち壊し、無個性でも敵を倒せると

証明させていたら世間を騒がせることになった。

そんな無個性ヒーローのまったりしていそうでいない日常です。

目次

# 0	プロローグ	無個性ヒーローの誕	生	2
# 1	無個性と個性			14
# 2	友達が出来ても嫉妬は嫉妬			25
# 3	個性の相性と突然の展開			35
# 4	兎と無個性			46
# 5	無個性の暴走			57
# 6	謹慎とお掃除と盗撮			69
# 7	謹慎明けからのインターンシップ			81
# 8	兎と無個性のはちやめちやな見回			81
# 9	いんたーんしつぷさいしゅーび			91
# 10	無個性	：らいじんぐ		102
# 11	卵の根性と暴走と			115
# 12	意識、暴走、自壊			125
# 13	優心			134
# 14	気持ち			145
# 14.5	公式バトルイベント			156
# 15	コレジヤナイ感			168
16話	互角			180
				194

# 17	無茶（マジ）と本気（マジ）		
207			
# 18	海と特訓	219	
# 19	特訓とは（哲学）	229	
# 20	先生 vs 1年A組	239	
# 21	計画	252	
# 22	襲撃ふぃーばー	264	
# 23	vs 侵略者（インヴェーダー）		
276			
# 24	悪魔	288	
# 25	悪魔の子	300	
# 26	はーどなおしおき	314	
# 27	女性相手だと調子悪くなる。		
# 28	Enemy of the t		327
# 29	親、襲来。次いでに事件。		
351			
# 30	前夜のように見えて前夜ではな		
	い作戦会議。	364	
# 31	厄介者は何処からでも	374	
# 32	急成長	385	
# 33	苦戦、勝敗、波	398	
# 34	再来	408	
# 35	一時的の平和な日常	421	
# 36	安らぎの一日	432	
r u t h		340	

# 3 7	擬似戦闘訓練	445	# 4 7	正体	566
# 3 8	変装、下見、ゴキブロス		# 4 8	全力を越えた先	575
459			# 4 9	目が覚めて	587
# 3 9	蟻の巣、地上、華	473	# 5 0	体のバグ、平和な一日	599
# 4 0	人と人、愛と相	484			
# 4 1	侵略者(インヴェーター)日本支				
部攻略戦、開始	——	497			
# 4 2	ホイップクリームの概念				
508					
# 4 3	お調子者	520			
# 4 4	情緒不安定	533			
# 4 5	表のボス、真のボス	545			
# 4 6	完全個体と真ボス	556			

#0 プロローグ 無個性ヒーローの誕生

「う、うわあああああ！ツイラン 敵だあああ！」

「ふええ…マジかあ…。」

俺はつやほし艶星かなめ萃。

英雄高校を目指している無個性の人間だ。

僕の周りには個性を持つ人ばかりで、虐めを受けていた。

え？今？今は休日で街をほわほわ買い物とか行ってたよ？

そんでなんか敵ツイランに出くわした。

「あー…うん、鬨るか。」

「おらああああ!!ヒーロー出てこいやあああああ!」

「きやあああ!!」

「うええええん！お母さあああん!!」

「ふんっ!!」

「殺らせるかよっ!!」

ベキッ!!

「ぐうううつ…!!」

闘るしかなかったが、子供が泣いていて危なかったんで庇ったら腕逝った。

だけどソイツはそこまで力を出していないのが分かる。

無個性で挑むのは「死」同然だが、守るべきものは絶対に守ると決めている以上死ぬまで闘ると決めていた。

「なんだあ？てめえは無個性か？てめえのようなヒーローモードキは消えな!!」

「だから何だ…！無個性でも護るもんは護るのがヒーローっもんだろーがああああ
ああ!!」

「ならここで潰してやるよ!!」

「殺れるもんなら殺つてみるやあああああ!!」

「お、お兄ちゃん!!」

「無個性の力…見てな!!砲雷撃戦用意…！7.7mm機銃・対陸戦闘態勢!!」

「効かねー!!俺様の暴走列車には適わねーよ!!」

「どらららららららららららららららら!!」

ズブツ

「ぐあああああっ!!?目があああああああ!!」

「おらおらおらおらあああああああ!!」

ドツ

「おぶっ…!？」

「無個性筋力現段階最大100%36cm三連装砲・二砲同時発射!!」

ズドオツ!!!

「ごはあああつ!？」

ビュンツ!!

「トドメだ…無個性筋力オーバーフロー!%計測不能!46cm三連装砲・撃槍!!」

「お、おいちよつと待てや…コイツ…まさか…!」

ドゴオオン…!!

僕は個性を持っているように見えて無個性だ。

僕の使っている技は大戦の時に活躍した日本帝國軍・海軍の軍艦達の装備の名前を使っているだけ。つまり、ただの殴り。

ちなみに闘ることに夢中になっていたけれど、野次馬達に撮影されていたみたいで動画でめちやくちや流されていた。

「あちゃー…やりすぎちゃったかな…?」

「やりすぎも何も…どうやったの!？」

「普通に物理です。」

「答えになつてない!!」

「ふええ…?」

その後なんかめちやくちや感謝された。

他のヒーロー達にもなんか色々褒め言葉をもらったけれど、やはりその反面にはアンチ的なのもいた。

無個性が個性に勝てないとか決めつける人とか色々いたが、それは確かに分かる。だけど誰が個性に勝てないと公式に発表した? 個性が無ければ頭脳で勝負したらいい、それだけだ。と言ったらなんか静まった。

「いててて…腕逝っちゃっているから結構きちいな…。」

「H A H A H A H A!! よくやったな少年!」

「お、オールマイトさん!」

「無個性ながらも個性を持つ敵に勇敢に立ち向かうのは久しぶりに見た! 君は何て言うんだい?」

「つ、艷星 萃です…。」

「萃少年、君はよく頑張った。だが無個性でも強いとはいえ、負けてしまえば周りに危害を及んでしまうこともある。過信しすぎないことが重要だ。」

「分かっています。俺は無個性だからと言って虐めを受けていた身なので、出来ない相

手と判断したらヒーローにお願いしようと思っただけです。」

「うむ、いい判断だ。君の戦闘目撃情報もよく他のヒーローから聞いているが、ちゃんと分かっているようで良かった。そういえば、君は中学生だね？」

「はい…え？何故知っているんですか!？」

「さっき言っていたように、情報だよ。」

「情報…あ、もしかして!」

「うむ!警察からの身元を見せてもらったぞ!」

「やっぱりかあ…。」

「それと、君は雄英高校に興味があるかい？」

「ま、まあ…気になってはいるんですけど…俺じゃあ落ちるの確定だって…。」

「私に任せておきなさい!君、個性を持ちたいかい？」

「持ちたいですが、自分なりのやり方で個性と同じように扱える技ができましたので…」

今のところ大丈夫です。」

「艶星少年…雄英高校に入るには個性を使わなければならない…それに対抗できるか?」

「俺の力でやってやります。時には個性に勝てる無個性もいるんだって知らしめてやりたいんです。」

「緑谷少年と似ているな…。分かった、だが君にも教えてあげよう、私の秘密を。」

「いや待ってくださいいしれつと重要なこと言っちゃっているんですけど!」

「君は無個性でも個性より強いヒーローになれる。そう思ったからだ。」

「…分かりました。試験はキツいと聞いているので合格してみせます。見ていてください。」

「ああ!見ていてやるとも!」

なんかオールマイトさんに会った。

入院している最中に入ってきてビビった上にすごいオーラかましてた。

しかもしれつと口外しちゃいけないものを聞くことになったが、俺には個性がない。個性がない俺にそれを聞いても意味ないと思うけれど、平和の象徴になったキツカケと分かる気がする。

まあ聞いてみりや分かるかも。

それで、退院してから数日後。

「マズイ…:なんか雄英高校に入る勢いになっちゃった…。」

「あら?萃ちゃんじゃない?」

「ぶえつ…:ミッドナイトさん…:。」

「ぶえつって何よぶえつて。萃ちゃんって本当に可愛いわね♪それっ!」

「ひゃあつ!?ちよつと抱きつくのは厳き…ん…コケツ すう…すう…。」

「疲れが見えてるんだからゆつくり休みなさい、私の可愛い雄英生予定の生徒ちゃん♪
よいしょつと…。」

「ん…お姉…ちゃん…。」

「本当…夢の中では甘えん坊さんだから…。」

ミッドナイトさんには色々お世話になつていたので何もできないというか、とりあえずお世話になつてる。

親がミッドナイトさんとめちやくちや仲が良くて俺を預けている時はめちやくちや可愛がられてたの。DSだけど。

「ま、萃ちゃんは無個性ながらもここまで成長したとしても他の子達とあの試験をやるには難しいから、萃ちゃんだけ違う試験にさせちやおうかしら♪」

「マ…マ…。」

「本当可愛いわね。襲つてしまいたいわ…。」

試験当日…。

俺はどうとう雄英高校の前に立った。

めちやくちや緊張する。

緑髪の男子も凄くばあああつてしてオーラが凄かった。

めちやくちや憧れていたんだなって一目で分かったけれど、その男子には少し不安そうなおな表情をしていた。

「絶対に試験に受からないと……！オールマイトから授かったこの力は無駄になる……！」

「オールマイトの秘密……個性の秘密が分かるのかも知れない……。ここは無個性の俺でも受からないと……！」

「……えっ?」

唐突に始まったこの出会い方。

思わず口に出てしまったが、どうやらお互いに同じような目的を持っていた。ちなみに緑髪の男子は3時間前にオールマイトから授かった力を持っているみたいで、俺は完全に無個性で挑む。

お互いまさかこんな形で会うとは予想していなかった。

「萃ちゃん、あなたはこっち。」

「ミッドナイトさん?どして?」

「あなたは別の試験で決めてもらおうよ。」

「ちよつと待って?!俺は皆で挑む競い合いのところじゃないの!?!」

「危険になっちゃうから来なさい。萃ちゃんは私と戦ってもらおうよ。」

「……はあ?!待って待って?!ミッドナイトさんと!?!」

「私に勝てば、特盛りいちごパフェを^ご馳走するわよ?」

「ぐうつ…!や、やるよ…!スイーツで釣るなんて小悪魔だよ…!」

「うんうん♪それじゃ、始めましょ♪試験内容は簡単、制限時間まで生存もしくは私を倒す…それだけ!さて、初手からダウンさせるわよつ!!」

「うわつ!いきなり眠り香なの!?!ヤバい…眠い…。」

「さあ私に従いなさい♪」

バキツ!!!

「え…?」

「はあ…はあ…痛い…。」

「ちよつとそれは初めて見たわよ!」

「力加減無しで…いいんだあよおねつ!!!?」

ビヒュッ

「ひえっ!?ねえ萃ちゃん!?!本当に無個性なの!?!」

「俺は無個性だよミッドナイトさん。敵を倒して守るべきものを守る為に頑張ったんだもん。個性無しでも守れるってことを世に知らしめる為に…ねっ!!」

ヒュッ

「流石ね…だけど、私もこの個性だけで戦うと思っているのかしら?」

パシッッ!!

「ひっ…!?む、鞭…!?」

「萃ちゃんのような可愛いらしくてか弱そうで小さい子は好きなのよ♪痛ぶつてあげたくなつちやうの…♪」

「はわわわ…み、ミッドナイトさんが…こ、怖い…!!」
ブワッ

「そろそろ本気出しちやおうかしらあ!!」

「あ、ダメだ終わつた逃げられnパシッ あっ…グイツ うわあっ!!」

「ほらほらどうしたのかしらあ!?本気出さないと死ぬわよ!!?」

「み、ミッドナイトさん待つてドガッ ぶあっ!!」

ミッドナイトさんと試験を受けていて、カメラに映されていることにすら気づかず、別の部屋から見ていた先生方がいた。

もちろんオールマイトも見ていた。

俺はミッドナイトさんの本当の力を知らず、そのままミッドナイトさんの猛攻を受けていた。

「はあ…はあ…ガシッ ううっ…。」

「本気で闘るんじゃないの?本気でやらなければあなたは本当に死ぬわよ。」

「まだ…本気じゃないさ…ミッドナイトさん…女性として見ているから本気を出せないんだよ…ただ…ここに入るからにはあ…ぜってーに…負けていられるかよ
おおおお!!64cm三連装酸素魚雷発射ああああああ!!」

ゴチンツ!!

「あつ…くううううううう!!石頭ああ…!」

「…ツ!!(痛い…泣きそう。)」

「これだけで逆転できるとでも…ズキツ 頭痛いいい…!」

「最大火力で終わらせる!!無個性筋力%オーバー…46cm三連装砲・滅 発射あああ
ああああ!!」

ドゴオオオオオオン…

「そこまでっ!!」

「えっ…オールマイトさん!?」

「お、オールマイト…なんで!?」

「タイムアップだ。」

「あ、本当だ…だけど…落ち…た…。」

バタッ

「艶星少年…君は合格だ。ミッドナイト、立てるか?」

「ええ…本当、圧倒されちゃったわ。あんなにか弱くてビクビクしていた小動物の頃とは違うわね。立派になってくれて良かったわ。」

「む？ミッドナイトは艶星少年と何か関係を持つているのかい？」

「この子のお母さんと友達でね、よく可愛がっていたのよ。本当に今も可愛いくて我慢できないわ。今襲ったら終わっちゃうわね…。」

「とりあえず艶星少年を医務室に連れて行こう。先程のダメージを蓄積した上に艶星少年の最大火力をこの手で受け止めた。この少年には無個性ながらも人間本来の力を引き出している。代償が大きすぎて脳が強制的にシャットダウンさせたようだ。」

「本当…無個性でも恐ろしい子がいるのは変わりないわ…。この子は特にそうね…。」

俺は医務室に運ばれ、そのまま治療を受けた。

ちなみに落ちたと勘違いしてギャン泣きしていたら合格してた。

雄英高校唯一の無個性ヒーローが生まれ、この先どうなろうとも守る覚悟ができた。死ぬなんてことは考えていないが、体が減じるまで守り続けると心に誓った。

ちなみに合格したお祝いにミッドナイトさんが約束通りに特盛りいちごパフェをご馳走してくれた。めちゃくちゃ美味しかったです。

1 無個性と個性

入学してから数日、俺はなんか目を付けられていた。

クラスメイトの皆も不思議がるようにこちらを見ていて、ソワソワと近寄って来た。

「あ、あの…お名前よろしくて…?」

「えっと…俺ですか?俺は艷星 萃と言います。まあ…見ているだけで皆が不思議がるのも分かります…。」

「わ、分かるんですの!?!」

「はい、試験で俺とミッドナイトさんが戦っている途中にカメラで見られていたことに気づいていたんで。」

「本当に無個性ですか…?」

「無個性つす。」

「本当にケロ?」

「本当なのです。」

「艷星君ッ!本当に無個性なのかいつ!?!」

「本当に無個性なのです。」

「……けっ!!」

「??」

「すごいよ艶星君!ミッドナイトとあんなに戦えるなんて!最初はどうなるかとヒヤヒヤしたけれど、眠り香に耐えながらタイムアップまでダウンしなかったのは本当に凄いよ!」

「あれは気合いでなんとかあったんだけどね…あはは…。」

「なんか不思議がっていた皆だったけれど、逆に興味を持つてくれていたみたいで嬉しかった。いじめを受けていた自分が恥ずかしく感じた。」

「だけど、ここからが大変になる。」

「個性のあるクラスメイトに追いつけるかが課題となる。」

「着席しろ…授業を始める。早速だが、身体測定をするぞ。」

「…マジか。」

「その無個性君、名前は…何だ?」

「艶星 萃です。相澤先生。」

「艶星、お前も参加するか?」

「もちろん上等ですよ。俺だけ特別扱いされちゃあ困りますからねえ!」

「その目…お前は無個性ながらもいい度胸をしているな。頑張れよ!」

「はー！」

身体測定開始した。

俺の記録は今のところこんな感じ。

100m走 5・279秒

反復横跳び 163回

走り幅跳び 36m

走り高跳び 9m25cm

これ全て本気の素^すでやっています。

残すはハンドボール投げ。

無個性とは言えないくらいに身体能力と言われているけれど、ほぼ限界にまで本気をかましていたから結構やばかった。

ハンドボール投げはマジで自信がない。

普通の人間でも大体30m〜60m以上しかいかないからね。

無個性の俺だからこそガチで自信がない。

「艶星君、頑張れ！」

「もちろんだよ、出久君。あと萃って呼んでいいよ？」

「うん！」

「艷星、お前は個性を使えないから本気を出してしまっても構わない。だが、腕が逝つても喚くなよ?」

「もちろんつすよ先生。いきますか…すう…はあ…。」

「何しているやろ?」

「気持ちを落ち着かせているんだ。艷星君は僕達と違つてかなりのプレッシャーを持っているからね。どのような結果を持つかは分からないけれど。」

「無個性筋力%計測不能 現段階最大火力200% 風向き無し 46cm三連装砲
弾倉一発発射準備よし…。」

「お、オイラは一体何を見ているんだ…!?!」

「すっごい筋肉してる!アレ凄くない!?!」

(艷星、お前本気でやるつもりか…。壊してしまうだろうが、見届けてやろう。やつてみたが、本当に無個性だ…無個性である以上俺には何もできねえ…。)

「最大火力200% 46cm三連装砲発射あああああああ!!!」

ギョーンツ!!!

「いったあああああああ!!!」

「なんぼいったん!?!」

「おおおおおおおおお?!?!」

「あぐっ……!!くっそ……やっちゃまった……!!」

ピッ!

「おっ……艷星、お前の記録は683mだ。」

「へ……へへっ……何も言えねえや……。」

「萃君凄いや!とにかく、医務室に行こう!?!腕が痛いことになってる!!」

「出久君ありがとう……あでで!!めちやくちや痛てえ……。」

「分かるよ萃君、僕も君と同じようになってるからさ。」

「そっか……出久君の個性はO F Aだもんね。ワンフォーオールいきなり100%ぶち込むと腕に大きすぎる負荷がかかっちゃうもん……。」

「うん、今後はオールマイトにアドバイスを聞きながら特訓をしないと体が追いついていけないからね。」

「だな、俺も調整すつかなあ……。」

「なんか、似た者同士だね。」

「確かに笑」

医務室に行きました。

リカバリーガールに治癒してもらったが、めちやくちや疲れが出た。

治癒速度を無理に上げているからそうなるのかな?

身体測定が終わって授業^{座学}を始めるが、そこそこやれる。だけど…。

「すう…すう…。」

プニツ

「もにゃ。」

「居眠りはダメですわよ？（寝顔可愛いですわ…。）」

「あ、ありがとうございますしゅ…。やべ、涎出ちった…。」

（萃君、身体測定から眠そうだ…元無個性の僕でもこのような感じは初めて見たかも…。もしかしてあの力を使った代償？）

「萃君、この個性の問題は分かりますか？」

「あ…：はい、パワー型はゴリ押しで相手を倒せるタイプですが、慣れない力がかますと負荷が大きいかかり、下手したら再起不能になります。スピード型は速攻で片付ける系のタイプですが、持久戦には弱くて潰されやすくなります。タンク型の個性は耐久戦を得意としますが、弱点を突かれると結構めんどくさくなります。」

「居眠りしていたのに流石だな…。」

「ぶえっ…バレてた…。」

（なんやあの子可愛いすぎやろ…！）

（コイツ…無個性の割にはいい度胸してんじゃねーか…。個性と無個性の違いを見せてやる…!!）

（見くびっていたよ萃君。君は無個性だから勝てないという概念を壊し、人間本来の力を引き出しているのはとても凄いことだ…だが、あの右手の震えはやはり目立つな。）
居眠りとか結構やらかしやすい。

しかも一撃をかました代償として右腕の痙攣が収まらず、左手で読み書きしていた。だいぶ慣れてきてはいるけれど、調整をしないと腕が使い物にならなくなってしまうかも知れない。

まあ、一撃をぶち込んでKOさせるのがやっとなんだけど（）

キーンコーンカーンコーン

「さて、授業は終わり！次は自主訓練だからコスチュームの着用を忘れないように！」

「『『『はーい！』』』」

「あと萃君、ミッドナイトが呼んでいるから来るように！」

「分かりました。」

「おい。」

「なんでしょか？」

「お前、俺と勝負しろ！」

「か、かつちゃん!?いきなり萃君に勝負を仕掛けるなんて…!」

「あ、あ、!?クソナードは黙ってる!」

「ご、ごめん…。」

「えつと…君は確か爆豪勝己君でしたね?どうして俺と…?」

「気に食わねーからだ。おめーのようなやつが無個性とか言うんじゃねえ…!」

「そ、そつちですか!」

「文句あつか!」

「ないでござんす。」

「萃ちゃん!私が呼んでいるのになんで来ないの!」

「あつ、それじゃ訓練場で勝負受けて立ちますよ。多分俺が確実に負けるけどさ…。」

爆豪君に勝負を仕掛けられ、そのまま乗ってしまった。

「ただ、どういう戦い方をするのか見物になるし勉強になるから寧ろありがたいのかも。」

俺は爆豪君を見た感じ、敵意というより興味を持った行動なのだと思う。無個性で個性に勝てる人間ってそうそういないから分からなくもないしね。

「ミッドナイトさん、用はなんなの?」

「萃ちゃん、コスチューム無いでしょ?」

「あつ…そうだった…。」

「ふっふっふく♪萃ちゃんの為にコスチュームを作ったのよ♪これよっ!」

「うわあい、なんかすっごいいっちいやっただあ、…マジ?」

「そうよ? だけどこれは普通のコスチュームとは違って、萃ちゃんの為にもう一本の腕を搭載されているの。着てみてちょうだい?」

「うん…って見た目がちよつと恥ずかしいな…。」

「最初はね♪このコスチューム自体が萃ちゃんの神経とリンクしてあるから、性能としてはとっても優秀だから試して使ってみてね♪」

「なるほどね? このもう一本の腕の使い方が分かれば大丈夫ってことね?」

「まあそうね。そ・れ・とく♪えいっ!」

モミッ

「ひあつ!? ちよつ…ミッドナイトさん…:ツ!」

「私の可愛い萃ちゃんなんだから少しくらい襲っちゃってもいいわよねえ? じゆるり…。」

「せ、セクハラだつてばっ…! ちよつと本気でやめとひゃあああつ!」

ドサッ

「私はあなたのことが好きなのよ? ちよつとくらいキスしてもいいじゃないの?」

「先生と生徒の関係は結んだらダメだって言われてないんですかねえ？」

「そ、それは言われてるわよ！だけど…あなたのことが好きすぎて毎日ストーキングしてるのよ!？」

「お巡りさんこつちでーす!」

「やめて呼ばないで！分かったから！ストーキングしないからそんな可哀想な人を見る目で見ないで!」

「そんなに俺の事が好きなら、手加減無し的一本勝負でミッドナイトさんが勝ったらでいいよ。俺も負けないからさ。」

「萃ちゃんツ：／／ちゅーしていい?」

「ダメ。」

「むうく!ケチ!」

「可愛い。」

めちやくちやイチヤイチヤした。

付き合っていないけれど、説明したようによく可愛いがられていたのでよくあることなのだ。

だけどミッドナイトさんもめちやくちや可愛いところあるんだけどね？

DSなだけ可愛いところがヤバいくるんだよ。

甘えてくるところとか構って欲しい時とか猫さんみたいですよっごいヤバいんです尊いんです。なんか年上好きって感じになっていいるのかも知れんけど、年齢関係なく可愛いく見えるんですよ！

「やべ、爆豪君に勝負をかけられたんだった。行って来るね！」

「行ってらっしゃい。」

バタンツ

「んゝ…三本目の腕はどうやっていけるかなあ…。機銃としてもいけるし、三連装砲でもいけるけれどスタミナが終わるやつだなあ…。スタミナつけとくか。」

訓練場に着いた頃にはギリギリだったという…。

ちなみに爆豪君と勝負を挑むことにはなつたが、まさかの先生からの許可が必要だったっていう…。

「おい無個性！勝負だああああ！」

「受けて立つぜ爆豪くうううん！！」

#2 友達が出来ても嫉妬は嫉妬

初っ端から爆豪君に勝負をかけられ、そのまま訓練場で勝負することに。

本気出すことは禁じられるが、できるだけ力を出しすぎないように勝負しろと相澤先生に言われた。

相澤先生も実際被害者だからね。

こういうことになったきっかけは多分俺に原因があると思っっているし、絶対納得いかないからだと思った。

「おい無個性！タメで正々堂々かかってこいや！」

「遠慮なくタメでやるぜええええ!!」

「えー、それでは爆豪vs艶星の勝負を始める。訓練だったのに何故こうなったんだよ全く…。あいスタート。」

ピッ

「どらあああー！」

「12cm単装砲ツ!!」

ボゴンツ!!

「ちっ！」

「あちちち…そう言えば、ミッドナイトさんが言ってたな…。やってみるか。」

「ガンガン行くぞおらあああ！」

「換装、駆逐艦 島風型一番艦 島風…：でりやつ！」

「は!？」

ドスツ

「ぐ…ふっ…!!」

「これ…絶対コスチュームの強さだよな…。」

「ちっ…くしょおお…！おらおらおらおらあああああ!!」

「わっ！ちよつと！乱射しすぎっ…!!俺も対抗しちやる…！7. 7 mm機銃じゃああああ!!」

「す、凄い…！萃君、かつちゃんの大距離攻撃を萃君の拳で抑えてる！無個性ではほぼ不可能と言われていたはずなのにそれができちゃっていて、しかもコスチュームの補正でしつかり狙いが定まって正確に当てているとは…！」

「す…：凄いですわ…：コスチュームに着いている腕を既に使いこなしていますわ…。」

「艶星を敵に回すとなれば、厄介な相手になっていたな…。」

「おいおいアレ見ろよ！萃のやつバクゴーに対抗できてるぜ!?!しかもしつかり攻撃を防

いだ後に攻撃も仕掛けられるとか個性のある人間でさえムズいぞ!!」

「くっそ……! 拳でやってやらああああ!!」

「なら俺も拳一つで決める!! 行くぞおおおお!!」

ドガアツ!!!

ブオツ!!

「おー……すげー衝撃波。あれは勝負がついたな。」

「ぐっ……!」

「くうっ……やっぱり……ダメかあ……。」

「おめー……無個性のくせにやるじゃねーか……その腕を使わず、おめーの個性のねえ拳一

つでなんてよ……。気に入らねーがなあ……!」

「はいそこまで。艶星は回収して医務室行きな。爆豪はそのまま自主練な。」

「艶星さんは私が運びます。無理してしまうかも知れないのでとても心配で……。」

「分かった。艶星は八百万の肩を借りろ。無理したら縛り付けるからな。」

「分かってますよ……もう少し力量を考えないとなあ……。」

俺は八百万さんの肩を借りて医務室に向かったけれど、身長差があつてお姫様抱っこされるハメになった。

歩けるのに運ぶと言っていたのでお言葉に甘えて運んでもらいましたお嫁に行けま

せん助けてください（○）

（この子体が軽すぎますわ…ちゃんと食べているのかしら…。）
グギユルルル…

「うっ…は、恥ずかしい…。」

「ふふっ、艶星さんったら本当に可愛いところありますわね♪」

「か、可愛いなんて言わにや…言わないでええ…。」

（ダメ…この子可愛いすぎて人をダメにする危険生物だわ！）

「そんで…お姫様抱っこは恥ずかしいからそろそろ降ろしてくれても…。」

「ダメです、怪我しているのですから無理してはなりません！」

「あっはい。（なんか強く掴まれているから一向に動けない…。）」

（医務室に着いたが、リカバリーガール完璧に不在（○））

まあそうだよね。治療させるためだとしても相手のことを考えた方がいいかもだし
ね。

ちなみに俺と八百万さんの二人だけです。

「…。」

「…。」

「あ、あの…おひとついいでしょうか？」

「どうぞ。」

「女性にナンパされたことありますか？」

「…ほえ？」

「い、いえ！ やつぱり聞かなかったことに…！（私ったら一体どういう質問しているのかしら!?!）」

「なんか年上にナンパされるかな。よく分からんけど。」

「ええ…。」

「まあ、大体強引に食事に誘われて終わるだけなんだけどさ。」

「逃げられなかったのですね…。」

「うん。個性を使っても食事に誘いたかったとかそういうのよくあるし、めっちゃくちゃ困ってるの。ミッドナイトさんにはよく連れ回されるけれどね。」

「ミッドナイト先生と？」

「言つてなかったね。小さい頃からミッドナイトさんによく可愛いがられて色々な場所に連れ回されてたの。今は完璧に変態になってるけど。」

「な、なんか悔しいです…。」

「へ？」

「も、もし私と艶星さんがお互い勝負することになって、私が勝ったら一つだけお願いを

言ってもよろしいでしょうか!？」

「う、うん…別に大丈夫だけど…手加減しないでね…? こう見えて結構しぶとって言われているからさ。」

「約束ですわよ!？」

唐突に変わった展開。

八百万さんと勝負することになったらお願い事を一つ聞くということになった。もちろん手加減無しの勝負だけど女の子相手だと絶対に力加減をしてしまうため、どうしようもできねーと思った。

ミッドナイトさん相手なら容赦なく行くけれどなー()

そして賑やかな授業の時間が過ぎた放課後…。

「じゃ、また明日。」

「ええ、艶星さんもまた明日。」

「あ、峰田君一緒に帰る?」

「おう! もちろんだ!」

「ありがとう。」

「なあ、一つ聞きたいことがあるんだけどいいか?」

「うん、いいよ?」

「萃ってさ、女子に弱いだろ？」

「ごふっ!!」

「大丈夫か!？」

「ご、ごめん…クリティカルヒット喰らった…。その通り、女子に弱いんだ…。」

「やっぱりな、萃の表情が分かりやすいぜ? ヤオモモに肩借りてた時の顔真っ赤にしてたのオイラ見たんだぜ?」

「峰田君、恐ろしい子…!」

「ミッドナイトとも仲いいのも羨ましいな…。」

「あ…ミッドナイトさんはマジでやべー人だから気をつけた方がいいかな…。あのめっちゃくちやドSな上に強いからもう勝てない…。」

「マジかよ! そーいや、どうだったんだ? 入学試験さ、別だったろ?」

「うん、めっちゃくちや痛くて死んだ。」

「お前すげーよ…。」

「おっと…なんかミッドナイトさんがすっげー顔で手招きしてるぞ…。」

「ウツソだろお前…。」

峰田君と帰宅している途中、ミッドナイトさんがすっごいヤバい顔をしながら手招きしてた。

舌なめずりしているってことを知った瞬間、俺は悟った。

「峰田君、逃げよう。あの人マジでヤバいことする。」

「え？」

「萃ちゃん？何で逃げようとするのかしらあ!?一緒に帰りましょお!?」

バチン!!

「ひいやあああああ!?」

「全速後退だア！（海馬感）」

「萃どーなってるんだよこれ！」

「嫉妬深いからよくあーゆーことする人なんだ！とりあえず全力で帰るぞおお！」

「そーれっ！」

パシッ

「あつ。」

「あ。っ。。。ズザザザアア いやあああああ!!助けー (☒ω☒) スヤア

…

「か、萃ええええ!?!はっ。。。帰らないとヤバい。。。すまん萃!サラダバー！」

「っーかまーええたっ♪私の可愛い萃ちゃん♪」

ミッドナイトさんに捕まりました。

強制帰宅^{連行}させられ、ミッドナイトさんの家に放り込まれた。

亀甲縛りをされて宙に浮いたまま俺は起き、どうしようもできない状態でした助けてください（）

「ぶえっ。」

「お仕置き好きよね？」

「無理矢理俺をお仕置きしているのに、無理矢理好きって言わせにやいでくdギユムツもんにゅ。」

「お仕置きはキスでいいかしら？」

「やだ。」

「他にあるとしたら腹パン20発、鞭打ち30発、ビンタ30発、首絞め5分間、関節技20連発のどれかしが無いわよ？」

「まだ腹パンの方がマsdゴツ うぶっ…!!？」

「これを20発よ？耐えられる？」

「ご、ごみえんにやしやい…き、きしゅでおねがいましたしゅ…。」

「じゃ、キスを10分間でキスマーク入れるわね？」

「うう…絶対に勝つてやrchウウウ… んむうう…。」

（ほんと…唇柔らかいわね…♪八百万ちゃんと保健室に行ったの目撃して思わず萃

ちゃんのお腹に一発入れちゃった…。萃ちゃんは私のものってことを身に染み込ませておかないと…。)

ミッドナイトさんのお仕置きを受け終わって解放されたが、帰るのがめんどくさくなつたのでそのまま彼女の家泊めさせてもらった。

襲われはしなかったが、めちやくちや距離が近くなつたり無理矢理一緒にお風呂入れさせられる事態も発生していた。

彼女は俺のことがめちやくちや好きみたいで、こういう行動をとっているみたい。ちなみに歳離れしているが、お母さんと友達なので彼女ととの血縁関係はない。

「やべ、体育祭の練習しないと死ぬじゃん。」

#3 個性の相性と突然の展開

「体育祭…どうしよう…詰んだなこれ。」

「艶星さん、よろしくお願い致しますね♪」

「相性的にヤバイやつだああ…。」

「ヤオモモ嬉しそうじゃーん!! 萃ちゃんもガンバだよー! 萃ちゃんを溶かしてえちえちにしたかったけれどねー!」

「芦戸さん、それはヤバくないかな…?」

ソッコーで決まった体育祭の対決表。

八百万さんと対決することになった上に、先生と特別に対決することになった。いや待って基準が頭おかしい()

なんか無個性が先生と勝負するところを見てみたいと言う希望が多くて、それが決まっちゃったみたい。

「ねえ帰っていい?」

「萃、お前死んだな。」

「おい無個性! おめー負けんじゃねーぞ! おめーの強さが分かるからこそ言ってるか

「らな！根性と気合いでぶっ殺せ！」

「爆豪君：口は荒いけど言っていることは間違いないね。頑張るよ。」

「かつちゃん：やつぱり凄いや。よし、僕も負けないように頑張らないと！」

個人での特訓が始まった。

俺はミッドナイトさんと八百万さんの対処方法を探らないと勝機がなく、弱点を見つけないとヤバイ。

本当誰なんだよ俺とミッドナイトさんの対決が見たいって言ったやつ：！あとでしばき倒してやらあ！

「確か、コスチューム無しで対決だから三連装砲は撃てないか…。単装砲か連装砲、機銃に高角砲くらいしか行けないかもな…。」

一方、八百万さんは…。

「艶星さんとの対決では接近戦は免れないですわね…。手加減無しで挑むのであれば、このやり方でやってみるしかないですわ！」

俺の対策をしていた。

ちなみにめちやくちや弱点があるからすぐに八百万さん側の勝機が見えてきた。俺は一切勝機が見えない。

寧ろ絶望しか見えないんですけど（

「はあああ……どうしよおお……。対策できねえええええ！八百万さんつて確か材質が分かれば限界まで生成できるんだっつけ……。流石に難しすぎじゃねーかあああ！」

「萃ちやーん！ヤオモモ対策してるのー？」

「あ、芦戸さん「三奈でいーよ！」三奈ちゃん聞こえてた?！」

「うん！めちやくちや聞こえてた！」

「マージか……あ、そうだ！三奈ちゃん、俺の相手してくれない?!八百万さんと同じ戦い方で！」

「あ、うん。いーよ！だけどエツチな状態になつても怒らないでね！」

「それどゆこと?!」

昼休みに屋上で八百万さん対策していたことが三奈ちゃんにバレてしまったが、何とかできそうなことを三奈ちゃんに再現してもらうことに。

だけど注意するべき点は、三奈ちゃんは酸を使うため服がジュンジュワーしちゃうつてところ。だけど濃度的には服が溶けるほどの濃度にして……いや待って服が溶ける程度つてやばくね？

「そーれっ！」

「待ってそれつて八百万さんの使う技?!いや待てよ……もしかしたら……！三奈ちゃん！そのまま自分なりのやり方をお願いしていいかな?!」

「分かったー！ー！てりやああああ！」

ベチャツ

「ぼじゅっ！」

「あつ…！萃ちゃんごめえええん！大丈夫!？」

「だ…大丈夫b目があああ!!」

「わあああああ！ム○カ状態になつてるううう!？」

ハプニングは起きたけれど、三奈ちゃんの攻撃パターンでなんか掴めた気がした。そういうえば騎馬戦で勝ち進んだ後にタイマンするみたいだけど、今回はタイマンから始まるみたい。

まあそういう方がいいかもだし…多少はね？

待って、八百万さん対策出来ていなくない？やばくない？オワタよね？

とりあえず徹夜してでも対策を考えていたらもう遅かった、体育祭当日が来ちゃった。急展開すぎる。

「マジでどーすつか…。」

「艶星さん、負けませんわよ？」

「お、俺だつて負けないからね！」

「萃君…頑張れ！」

「おい無個性！勝つなら勝て！負けるなら動けなくなるまでだ！根性かましやがれえええー！」

「バクゴースつげー気に入ってたんだな…。萃はどう攻撃するんだろうか…。」

「萃、負けるんじゃないぞ…！オイラも応援してるぞ！ヤオモモも頑張れ！」

パシッ

「八百万さん、負けないからね…！手加減無しで…いくよっ！」

「それでは…八百万 百vs艶星 萃のタイマンを開始する…。始めッ!!」

バラアツ

ポコッポコッ

「へ…?」

「あ、マトリョーシカです。」

「何故マトリョーシカ…。もらっておこ。」

「スキありますっ！」

「ぬおっ!!…なんちってね☆64cm酸素魚雷ッ！」

ゴチーンッ!!

「あうっ！い、痛いですわ…。」

「あ…ご、ごめん…大丈夫…?」

「にやり…。」

ギユムツ

「ふにやつ!？」

「身長差で言えば私の方が勝ち!このままやりますわよっ!」

「あつ…や、ヤバ…。」

「や、優しさが仇になってる…。」

「ちつ…やつぱり無個性だから期待した俺がバカだった…!」

「艶星君、戦闘中に優しさは仇となるんだ…。時には必要だけど、流星に優しすぎますよ…。」

八百万さんの罠にまんまとかかかってしまい、ホールドされてしまった。

しかも身長差で余計に出られなくなっている、動こうにも上手く動けないし動いたらまた捕まるかも知れないしでどうしようもできなかった。だけど、諦めないししぶとすぎてやかましいって言われたことがあるのが俺だ。

「ま…負けにやいんだからあ…!がぶっ!」

「痛ツ…!ふんっ!!」

ブンツ

「うわあつ!？」

ズザザザ…

「わ、私の腕に噛み付くなんて…ひ、酷いですわ!」

「ごめんって! 勝つても負けても何かするからさ! ね!」

((((あー…弱点分かりすぎるやつだ…)))

「言いましたね…? それじゃあ…負けてくださいっ!」

カチャツ

「え…? やば…。」

ドンツ!!

「終わったな、あの無個性。」

「やられるだけのタイマンなんて面白くねーな。」

「他のやつのタイマン見たいから早くくたばってくれねーかな…。」

ロケラン用意してたとかやられた。

捕まった時に背後でロケランを創造していたなんて予測できない。

しかも直撃だから俺自身も終わったと思っていたけれど、どうやらそうはいかなかつたみたい。

「ぐううツ…! 終わらせねえ…! 体が動く限りは勝つても負けても諦めないんだからあああああああ!」

「自ら右腕を犠牲に…!!」

「12cm単装砲…!!」

「ううっ…!肉弾戦なら…私も負けませんわ!」

「やっ和本気出してきたね…!teriやっ…!!」

肉弾戦が始まった。

お互い不利な状況になっているため、もう投げやり肉弾戦になっちゃった。ブーイングが来るかと思っていたけれど、めちやくちや歓声が聞こえた。他に見られない戦い方をしているからだね。

観戦席側めちやくちや盛り上がったた。

「や、ヤオモモが肉弾戦を!」

「いや待て!ロケランで一撃喰らったのに耐えてるってどういうことだよ!?!しかも右腕を犠牲にしてるとか根性ありすぎだろ!」

「ロケランに耐えられる切島がそれ言うの?!」

「アレこそ無個性の根性じゃねーか…!もっと見せやろ…ダメだ、アイツ負ける。」

「かつちゃんも分かったの?!」

「見りやわかんだろクソナード!無個性の野郎の動きで見分けがつかだろーが!」

「うん…他にも右腕を犠牲にしたことよって左腕だけだからブレが生じて遅くなつて

きてる…。」

俺視点に戻る。

「はあ…はあ…おぷっ…。」

「艶星さん…耐久ありますわ…。降参してください…。」

「こ、降参なんて……しない…！」

「それなら…無理矢理にでも…！あなたが軽くて良かったですわっ！」

バシィッ!!

「しまっ…！グイッ うぐうううう！」

「いい加減…諦めなさいっ!!」

ブンッ!!

「あ…やばっ…。」

謎の布生地で脚を取られ、八百万さんにそのまま投げ飛ばされた。

普通なら死ぬくらいの高さだけど耐えることは出来たものの、出血量が半端なくて瀕死になりかけていた。

観客席側も決まったかと思つて静まった。

「はあ…はあ…！」

「ぐうっ…まだ…まだ負けてな…い…！」

「艶星さん……」

「負け……：ら……：れない……：んだよおお……：！無個……：性……：でもお……：……：！絶対にい……：！ヒーローになる……：……：んだよお……：！！ヒーローはあ……：諦め……：ない限……：り……：……：まだ……：立てるからあ……：！！」

「……：艶星さん、あなたの言う通りに手加減無しで気絶させます。優しさが仇となつてあなたの思考が一気に崩れたのですから……。その上、その体じや私に勝てるんでもお思いで？！すっかり学んで出直して来なさいっ！！」

バチイーン！！！！

「あ……。あーあ、負けちゃったな……。だけど色々学べたし……。いつか……。」

ドサツ

「ぶえっ。」「ピツ

白旗振りました。

白旗を振ったまま気絶していて、八百万さんは思わず笑った。

その笑う顔が似合うなと思つたまま意識が遠のいた。

ま、結局医務室で泣き崩れて慰められたんですけどね。

「ミッドナイトさんとのタイマン……：辞退したいんだけどおお……。」

「それなんだけど、急遽変わってNo. 5のミルコさんになつたらいいですわ。」

「いやだああああああ!!うさぎさんとタイマン張るなんて絶対無理いいいいいい

!!
」

(この年齢になって動物にさん付けするなんて可愛いの他ないですわ。)

負けて号泣したのにもっとヤバいことになってまた号泣した。

結局突撃参加してきたミルコさんとのタイマンになるまで医務室で泣きまくってめちゃくちゃ目が真っ赤になった。

八百万さんに慰められるなんて申し訳なく感じた。

4 兎と無個性

「やべえ…ミルコさんとか絶対に勝てないし…！」

俺は今待合室の隅っこでどんよりと蹲ってた。

だってミルコさんが相手とかますますヤバいし、勝ったことすらない人だし。

向こう側の待合室ではミルコさんがすつげーやる気満々になっていて、オーラをめちゃくちゃ感じた。死にたい○

「萃ちゃんが相手かあ…楽しみだなあ！」

観客席側では…

「あの無個性は言葉に力あるけど、タイマンでは力にならねーな。」

「だなwあの無個性を除いた競技とかねーのかよwww」

「他のクラスや先輩方がもう飽き飽きしちゃってる…。」

「これはしょうがないよ…萃君はクラスメイトに手加減無しでも流石に躊躇っちゃうからさ。」

「優しさが仇となってきたね…。だけどヤオモモとタイマンして学んだはずだから切り替えると思うよ！」

俺の話題でなんかんや盛り上がっていったけれど、飽き飽きしちゃった。まあ、無個性と個性の戦い方は断然ちがうからしようがないと思う。

だけど、中にはもう一度あの肉弾戦を見たいとか無個性でも立ち上がるのは凄いと褒めの言葉やアンコールを期待してたみたい。

ちなみに、俺とミルコさんはコスチュームありで戦います。

「Y E A H H H H H H H H !! 始まったぜえええええ！教師 v s 教師のタイマン勝負！だが、今回はそれだけじゃねー！とある生徒達がこれを見て欲しいとリクエストしてくれたので特別戦をかましてからやるぜええええ！」

「は？」

「え？」

「来たね、萃君…今度こそ頑張つて！」

「本当はミッドナイトが出る予定だったが教師とのタイマンで待機しているから、特別戦として突撃参加してきたヒーローNo. 5 ラビットヒーロー・ミルコとド根性無個性・艶星 萃が戦うぜえええええ！」

「「「「はあああああ?!?!?!」」」」

「マイク先生…俺のこと言わんといってくださいなあ…。」

「あーあ、言っちゃったな！萃ちゃんと私の勝負を見られるのは本当に少ないから楽し

ませてやらないとね！死ぬ気がかかってくることを願うしかねーな！」

「両者登場だああああああ!!」

ビュンツ!! シュタツ

「やほやほー！皆元気にしてるー?!ほら萃ちゃん出て来なー！」

「み、ミルコさん何でそんなに平気で言えるのさー！」

「いーじやんいーじやん！ほらピースピース！」

「ていつ。」

プニツ

「ぶあつ!?何するのさー！」

「ミルコさんがそーやるからだけど…。」

「はいはいプライベートのことはプライベートでやりましょーか、はいスタート。」

「じゃ、早速先制取らせてもらう…ねっ!!」

ズドツ!!!

「うぐっ…!?!ごぼあつ?!」

「やつぱり柔らかいなあ♪…あれ？」

「おえっ…ミルコさん…手加減無しなの…?」

「そうだけど？萃ちゃんでも容赦なくいくからねっ!!…つてひやあああ!?!」

「なら俺も本気でやるからね……! 36cm三連装砲!」

「あつ、このゼロ距離はヤバドズツ うぐつ!!」

「標的捕獲…角度85度…脚部出力35%…! 10cm高角砲!!」

ビュッ

「あー不味い…この高さは正に不味いね…。つて言うでも思ってた?」

「え…? ガシツ あ…ヤバ…うつそだろおおおお!?」

「あんたが真つ先に落ちなあああああ!!」

ブオンツ!!

「うわあああああ?!?!」

ドガアツ!!

「がはっ…!!ぐうつ…! 右脚…大破…背骨…軽傷…左脚小破…死ぬなこれ…。」

俺の技でもあり軍艦の装備である10cm高角砲がミルコさんの技で無効化され、逆に俺が喰らうハメに。

え? ミルコさんとは何の関係があるのかつて?

ミツドナイトさんと同様に可愛いがられた人で、怒るとめちやくちや怖い。何回か骨逝つてるし、噛み跡とか酷いもんだよ?

あとは気分でめちやくちや撫でくりまわされたり、もふもふさせてくれたりしてる。

めちやくちやもふもふです。

「やっぱり弱いな萃ちゃんよお！そんなのでヒーローになろうだなんて100年早えんだよー！」

「ムカついた。俺の本気…マジで出す。」

「死ぬ気なんだ。なら…そのまま逝きなあ!!」

「筋肉質量測定不能、最大出力300%オーバー…標的補足、砲撃準備…！」

「右脚逝つてるのにそれを使うんだな！根性だけはいんだけどなあ！」

「これが…俺の全力だあああああ!!!!46cm三連装砲・激滅大乱射あああああ

あ!!！」

「遅い遅い！もつと早くなったのかと思つてもバキツ うぶつ!!」

「おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらあああああ!!！」

観客席側。

「お、おい…あんなの見たことねえぞ…。」

「コスチューム頼りかと思つていたけれど…あんなに壊れるまで連続で拳を出すなんて…。」

「萃君の大技だ…！本気をあまり出せなかつた原因つてそれだったんだ…！力加減が上手く行かずにこうなることもないからねえからだ！だから制限していたんだ！」

「艶星さん…そこまでしていたのですね…。」

「け、けろお…あの動きは素人じゃできないわね…。」

俺は全身を壊す覚悟でミルコさんに大技を繰り出した。

ミルコさんも避けきれずにダメージを負い、体勢が崩れて喰らいに喰らっていった。

だけど俺の技は通用したものの、流石No. 5。

俺の腕に限界が来る頃に襲うという選択をしていた。

「とつとと…倒れてよおおおおお!!」

「倒れねーからな！お前じゃあたしに勝とうだなんて到底できないからなあ！あんたが

倒れなあ!!」

「いやだ!!でりやあああ!!」

ガッ

バキツベキベキツ

「うぐうううううツ!!」

「や、やるじゃん…！だけどねえ…あたしを舐めないでねっ!!」

ズダァン!!!

「つがあああああああ!!ガシツ あっ…!」

「とつとと…寝てろ!!」

バガツ!!ズダアン!!!ドゴツドガアツ!!!

「本当…相変わらず負けず嫌いなんだから…。」

「あ…うう…!!ま…まだ…負けねえ…!俺だつて…負けていられねえんだよお…!」

「ド根性脳筋バカが…!」

「無個性…舐めんなああああああ!!」

ガブツ

「い…っ…!!?」

ダンッ!

「おりやああああああああ!!」

ゴツ

「おごっ…!!?」

「うぶっ…ごぼっ…!!ごはあつ!!ほんと…ミルコさんは強いや…これで…俺は0勝1

53敗…か…。」

ドシヤツ

「き…決まったああああ!勝者はNo.5ラビットヒーロー ミルコだああああ!」

「萃ちゃん強くなつたなあ…。よいしょつと…相変わらず体の部分を壊すなあ…。ミツ

ドナイトが激おこになるのにさ…。こんな勝ち方は納得いかないけれど、いいとこまで

成長したね。」

「よ、ちゃんと本気出したのか？」

「あ、イレイザーヘッド。本気出したさ。手加減はしてないけれど、死んだら困るから死なないような技でやってるつもりだよ。」

「ま、その通りにしねーとあんたも終わっちまうしな。…にしても艷星のやつ…。」

俺は最後の一撃をミルコさんの顎に拳を入れた。

しかし、ミルコさんは俺よりも筋肉質量が高く硬いヒーローであるため、KOにはならなかった。

だけど観客席側の人達は賞賛の言葉も出ていて、A組のイメージは一気に激変してすげーやつのクラスという語彙力がなくなった勲章的なものももらった。嬉しいよう嬉しくねえ…○

なんか最近相澤先生が俺のことを調べようとしていたのはまた別のお話…。

「あ、リカバリーガール…。俺の体…ヤバいですか？」

「そりゃあねえ…あの攻撃を喰らったり無理矢理限界突破させて体にダメージを入れてるんだもの。次もまたこのような無理矢理限界突破するようなことがあれば、艷星君の体は崩壊するよ。」

「やっぱりなあ…。ミルコさん相手にこんなにあつちやあキツイよなあ…。」

「萃ちゃん生きてるかー!？」

「あ、優おねーちゃん。」

「なんでミルコにあんな自分を犠牲にして壊れるようなことしてんのさー! 本気で食べちゃうよ!？」

「優おねーちゃん食べないで…。お願いだから唾液まみれにしようとしなくて…。」

「全く…。18禁女にも呆れるわ! 私の萃ちゃんに色目使いやがつてえ…。」

「おねーちゃんはいつ俺のものになったの?」

「ずっと前からでしょ!？」

「ただの幼なじみじゃなかったっけ?」

「食べるよ?」

「やだ。」

「じゃあキスして。」

「やーだ。」

「襲うよ?」

「人いるよ?」

「…えいつ!」

「へ?」

ゴフツ

「ん〜ツ♪やつぱり萃ちゃんつて抱き枕になるわあ〜♪」

「全く…おねーちゃんつたら…。」

M t. レディこと岳山 優に絶賛抱き枕にされています。

幼なじみです。おねーちゃんと呼んでいます。

俺の周りの知り合いに何故女性ヒーローが多いのかは分からん。

ただ一つ言えるのが、女性ヒーロー強すぎる。

特にミルコさんには勝てない。あの人の本気が強すぎて骨数本持つて行かれたもん。ちなみにミルコさんに負けたらめちやくちや頬つぺとかぶにぶにされたり、抱き枕にされます。

めちやくちや絞められて毎回死にかけます。

「萃ちゃん大丈夫k先客いたかあああ!」

「あ、ミルコ。」

「ミルコさん、どしたの?」

「どしたのじゃないよ! あたし本気出しちゃったから萃ちゃん大丈夫なのか気になって

さー!」

「そなの? 俺は大丈夫だよ。ミルコさんこそ大丈夫なの?」

「いやあ…その…ごめんね…？熱が入ってあんなこと言っちゃったことを反省しててさ…。」

「いいよ、だって俺もそれに乗ったし無個性の人達に自信を持たせられると思うし。無個性代表として俺が頑張らなくちゃ。」

「とりあえずさ…お詫びとしてだけどさ…耳触る？」

「うん。もふもふしたい。」

() () () () ()

この後ミルコさんの耳をめちゃくちゃもふもふした。

びこびこ動いていてミルコさんがより可愛いと感じた上にすっげーもふもふしてた。身長差は結構あるけれど、ミルコさんはどちらかというとおねーちゃんというよりおねーさんって感じ。

かっこいいし可愛いし強いからかな。

この時俺は気が付かなかったけれど、俺の目標はいつかミルコさんを越えたいという目標を持っていた。

#5 無個性の暴走

体育祭が終わって数週間、俺達は実技試験に向けて対策をしていた。

学力テストはそこそこな成績。

だが、一番不安なのが実技試験だ。

俺自身の力の制御が上手くいかず、失敗ばかりでクラスメイトから色々なアドバイスをもらいながら練習と対策に励んでいた。

「ぐええ…ちかれたあ…。」

「お疲れ、スポドリいるか？」

「ありがとう、障子君…。」

「…萃、一つ教えて貰いたい。」

「ん？」

「どうしたら…君みたいに強くなれるんだ…？」

「ん…努力！って言いたいところだけど…努力じゃどーにもならないかなあ…。俺は障子君みたいに強くないし、寧ろ君の方がよっぽど強いよ。ちゃんと先まで見えて動いているし、しっかりターゲットを逃していないからさ。俺は全然強くないしまだまだだ

よ。」

「そうか…だが、君の動きやアドバイスを学ぶことができた。実戦の時は宜しく頼む。」

「もちろん！」

「萃ちゃんすつかり馴染んでるね。」

「そうだね、勇気ある人は無個性でも立ち向かうんだってね。萃つてば本当人を動かすね。しかも可愛いし。」

「そうそれ！あの子つて本当は個性あるんじゃないの?!」

「いや、それは流石にないかも。技が拳な上に相澤先生の個性を使つても効果がなかった。つまり真正正銘の無個性つてことだよ。」

「なんか凄いなあ…萃ちゃんが雄英初の無個性ヒーローになるつてことだよね？それつてスゴすぎない!？」

「スゴすぎるとかそれどころじゃないよ。個性無個性関係なく人々を助ける人こそヒーローだつてことを世間に教えたいんだと思う。あの子の目標はそう決めてるんだつて。」

「盗聴したんだ…。」

「うん、萃のことも知りたかつたからね。」

「襲つてもよかつたんじゃない?」

「反撃されたらどうしようもなくなる!?!」

「大丈夫だよ? 萃ちゃん、結構力加減分かってきてるようだし。ほら!」

「出力30%、12.7cm連装砲ツ!…あつやべっ!」

ドゴオツ!!

「あちゃー…直前で暴発とか力加減って難しいなあ…。」

「ごめん、前言撤回。」

「まあ、戦闘時のみしか使わないから大丈夫ですよ。」

「だね!」

(萃君、デク君の個性に似てるけれど違うもんね。だけど凄いなあ…。うちも頑張らんと…)。

「萃ー!俺と相手してくれるか!?!」

「もっち!切島君!」

女子達は話をしつつもほんわかした空気を醸しながら訓練に励んでいた。俺は切島君と訓練、さつきは障子君とやっていたが交代交代でやることになった。

対策と技術向上だな。

お互いにどの点が苦手でどの辺りが上手いかないかアドバイスを返しあったり、苦手克服とか色々しまくった。めっちゃくちや頑張った。

そしてその夜…。

「疲れたあ…。」

「お疲れ様〜。皆どうだった？」

「俺は弱点まみれ。」

「僕はまだまだかな。」

「オイラは…自信ねええええ！」

「皆色々対策しないといけないからなあ…。バクゴーはどーだ？」

「あ？俺なりにやつてらあ！文句あつか!？」

「ええ…。（困惑）」

…とまあ皆様々な返答だった。

ちなみに寮で暮らしています。

数ヶ月経って寮が完成してヒーロー科1年A組メンバー全員分入れた。

もちろん皆入っています。

男子棟と女子棟に分かれているのだけれど、俺は何故か女子棟に…なんでだよおお

おお！

「ねえ誰か俺の部屋と変わつてガッ もごっ!?!」

「はいはい萃ちゃんはお部屋に戻ろーねー!」

「ああああああ……！」

「行っちゃった……。」

「か、萃のやつ……羨ましいぞこんやろおお……！」

「だけど萃君は大変らしいよ？彼曰く、よく質問責めされたり癒し系に使われているんだって。」

「くっ……！俺もアイツみたいになりたかったぜ……！」

一方、俺氏は。

「ねえねえ。」

「なーにー？」

「なんで俺が女の子の格好を？」

「いーじやんいーじやん！ヤオモモー！萃ちゃんにこれ似合うよねー！」

「とても素敵ですわね♪艶星さん、他にも沢山ありますから！」

「ふええ……こ、困っちゃうよお……。」

『続いてのニュースです。午後6時頃、都内で敵による無差別襲撃が発生しました。容疑者は逮捕されておらず、今も捜査は難航している模様。』

「ねえ、この襲撃のニュースって何かおかしくない？」

「そうかしら？私から見るとそんなに変わっているようには見えないわよ？」

「萃君、急にどうしたん？」

「その…普通ならヒーローと協力して捜査を続けています的な発言だったのに、今回は捜査だけだった。このアナウンサーは必ずヒーローと協力してくる的なことを言うのに、今回はそれが無いんだよ。」

「読み忘れではないの？」

「このアナウンサーの読み忘れはありえないかも。読み間違いや読み忘れは絶対になかったと記憶に残ってる。」

「つまり…？」

「ヒーローによる捜査は行われていないってことだね。危ないなこれ。」

ドゴオオン…!!

「きゃあっ!」

「なんじゃ!」

まったくしていた俺達が住んでいる寮に突然の敵ヴァイラン襲撃。

しかもなんか脳ミソ丸出しのやべーやつが数体、コスチュームもない上に皆少し慌てている。

夜だからこそなのだろうか、その油断によって隙が生まれてしまったのかも知れない。

「おいおいおいおい……なんだよあの脳ミソ丸出しのやつは！」

「とにかく皆避難しよう……！誰か先生方を呼んで！僕達がこの場で抑えてるから！」

「お、俺もやらないと……！（だけど個性のない俺はどうしたらいい……？足を引つ張るんじゃないのか？個性があつたとしてもあの脳ミソ野郎達に勝てる算段はあるのか……？寧ろ敵の方が優勢になつているんじゃないのか……？」

「G A A A A A A A A A！」

「萃君！危ない！」

バキッ

「ぐあっ!!」

「い、出久君!!」

「萃君……早く……先生に……！」

「だ、大丈夫……飯田君が全力で伝えに……あ……。」

「おまえ……ヒーロー……じゃない……！殺す……！」

「に、逃げるんだ……！」

「いやだ……逃げたくない……！」

「今のままじゃ……君は壊れるんだよ……!?」

「俺の体よりも……自分の体の心配をしてよ……。俺だって逃げたいよ……！逃げたいけれど

…仲間がやられている姿を見てさ…ギョロツ 悪意のある敵（ヴァイラン）を殺らねばならないんだよなあ…!!」

「か、かな…め…君…!!?」

俺は禁断の箱を開けてしまったのかも知れない。

決して触れてはいけないもう一人の自分。

仲間、家族、友人が傷ついてしまった時に出てこようとするとても危なっかしいもう一人。

俺はこう呼んでいる。

もう一人の自分（エ、ヴァイラル、キ） 悪殺（ラー）し。

「標的、敵（ヴァイラン）…殺意、殺気等の感情のみ。ヒーローの命に危険あり、奴らを殲滅する。設定変更、殺戮形態に入る。 ……ひゃあつはあああああああ!!!」

「!?!」

「おい萃! いや…動きが……動きが萃の動きじゃない…!?!」

「くききききききき…うちのシマあ……荒らして楽しいかあ?」

「GRRRRRRR…!」

「答えるつもりはねえようだなあ…なら……殺す…!!」

バツ

「お、おい…アレは本当に萃なのか…?!」

「違う…萃君じゃない…。」

「似てる…俺のダークシャドウの暴走に…！」

「力…カヲもつと…！もつと…強イヤツを…！」

「貴様にやあ生きる価値やあねえんだよ！クソつえーやつに勝とうなんざ…6兆年はえーんだよクソゴミがあああああああ!!！」

「なんか口がすつごく悪くなってる!？」

「月の審判 大鎌!!」

ズバツ

「チ…チ…カラ…。」

ドシヤツ…

「力を求めるなら…俺達に勝つてからにしろ…。生ゴミが。」

「SYAAAAA!!」

「てめえは死ぬ。」

グシヤツ!!!

ピクピク

「悪い遅くなつちまつ…た…何だ…これ…。」

「おい無個性！その勢いで潰しにかかれ！」

「言われなくても分かかってらああ！シマを荒らした生ゴミ共をぶつ殺す!!!」

「UGAAAAAAAAA!!」

「な、何…あれ…？艶星さん…？」

「艶星君！先生が来たから戻りたまえ！」

「不味いな…飯田、艶星はヤツらを殲滅することに夢中で声が届いていない。悪いが、飯田は芦戸達と一緒に緑谷達を安全なところに頼む。俺は敵をやる。艶星はその後だ…とは言いたいがもう終わったようだな…。」

「はあ…はあ…つ、疲れ…た…。うぶつ…気持ち悪い…。」

ドサツ

「こりゃ派手にやったなあ…。」

俺はその後の記憶は覚えていない。

医務室に運ばれてそのまま部屋で看病されていたらしい。

相澤先生曰く、暴走したままずっと敵と戦っていて抹消しようとしても変わりがなかったとのこと。

他の先生方は無個性であるの暴走はありえないと言っていたのだが、カメラではつきり分かっていたため理解してた。早い。

「どうやら、俺が派手に殺った奴らは脳無と言われている厄介者らしい。」

「脳無か…そーいや個性が複数出てきていたな…。」

「艶星、お前覚えているのか？」

「まあそこそこですけど…。一応危なっかしいもう一人の俺でも記憶ははつきり残るんで。」

「二重人格か。」

「ざっくり言えばそうですね。」

「とりあえず…複数の個性が出てきていたのはどういうことだ？」

「舌を伸ばしたにも関わらず、目からビームかましていました。あとはなんか念力みたいな何かですね。力でねじ伏せましたが。」

「お前…本当に壊れるぞ。」

「そうですね…流石におねーちゃんにもこんな姿見せられん…見られてたわ。」

「とりあえずお前は危なっかしいからミッドナイトをお前に付ける。暴走したら強力な眠り香を使ってもいいように言っておいたからな。」

「そうしてくれるとありがたいです。」

「暴走しないように18禁ヒーローならぬ俺限定セクハラヒーロー ミッドナイトさんが付くことに。」

また面倒なことになりかねないけれど、暴走しないだけまだマシンだと感じた俺でした。

ちなみに夜はめちやくちや抱きつかれて眠れませんでした。

髪めちやくちやもふもふでした。

#6 謹慎とお掃除と盗撮

「謹慎喰らった。」

「そりやそうだよ萃…あんな派手でヤバイ暴走すると流石に問題視されるよ…。」

「うわあああああん！萃ちゃんが謹慎だよおおおお！」

「とは言つてもお掃除や片付けくらいですわよね？」

「お掃除は結構ミッドナイト先生が厳しいらしいわよ。」

「萃君かなり根性必要みたいだね…。」

「お仕置きだけは勘弁だから頑張ります…。」

「行ってくるねー！」

「それじゃ萃君、行つてきます！」

「行つてらっしゃーい…。」

「いい友達持つてるじゃないの萃ちゃん♪」

「俺の服の中から出てこないで変態。」

「おねーさんに向かつてその口なんてひっどーい！キスしちゃうわよ？」

「するならすればいいじゃん。」

「…気にしてるのね、あの襲撃のこと。」

「そりゃ気にするさ。気にしてないなんて言ったら金属メンタルでしょ。」

俺達は一昨日、突如現れた脳無と言う脳ミソ丸出しなクソ敵サイランの襲撃に遭ってひとまずは無事に済んだ。

だが俺の暴走によって俺は要注意人物として問題視され、教師の中で一番関係深いミッドナイトさんが見ることに。

暴走したら濃厚眠り香を送られます。死にます。

「もし、また俺が暴走したらさ…お願い。殺る覚悟で止めていいから。」

「萃ちゃん…小さい頃から本当に変わってないわね。」

「…なんで？」

「平気でそんなこと言わないでほしいの。助ける算段なんて山ほどあるし、あなたなんて簡単に止められるわよ。すぐに…ね？」

「どうやって俺を助けたのさ。その傷だって俺がつけたんだよ？」

「ふふっ…あなたを侮っていたからこうなった…その油断でこうなったのは私よ。」

「だけど、俺が本気の暴走だけは本当に殺る気で止めて。敵はサイランどうでもいいけれど、俺の初めてできた友達や仲間、ヒーローを傷つけたくない。だから…お願い…。」

「分かったわよ。あと、すぐに泣くのはやめなさい？男の子なんだから、強くなりなさい

よ。」

「な、泣いてないもん!!ただゴミが目に入ったただけだもん!」

「ほら泣いてる。その口調で分かるんだから♪抱きついていいから来なさい?」

「……うん。今日だけはおねーちゃんって呼んでいい……?」

「本当、甘えん坊ね♪おねーちゃんって呼んでいいわよ♪」

俺は少しの時間だけミッドナイトさんに抱きついた。

甘くていい匂い、癒し効果のあるラベンダーの香り……これは眠気が来るわけだ。

ソファの上で少し寝ちやっただけれど、掃除をパパッと終わらせて食器等を洗い終わらせた。お風呂掃除が一番疲れたかな?

「つ、疲れた……」

「ふふっ♪お疲れ様♪ちゅーしてもいいかしら?」

「や、やだよ……おねーちゃんにされるとなんか恥ずかしいもん……」

「可愛いなああああ!」

「襲うのはやめて。」

「キスだけしたい!」

「うう……わ、分かったから……その……舐め回そうとするのはやめてくれない……かな?」

「じゃあちゅーするね!!」

「ちよつと待つてぶええ…。」

欲のセクハラヒーロー ミッドナイトさんは今日も元気です。

ちなみにめちやくちや襲われるけれど、勉強とかちやんと教えてくれて凄く頼りになります。寝たらガチビンタ喰らうけれど。すつごく痛い。

そして夕方…。

「たつだいまー！萃ちゃん寂しかったー？」

「しーつ…。」ヒョイヒョイ

「あつ寝てる…可愛い〜♪（小声）」

「どうしましたの？」

「（小声） 見て見て！萃ちゃんの超貴重な寝顔！すつごく可愛いよー！」

「おお…可愛い…。写真撮っちゃお。」

「わ、私も一枚…。」

「んっ…パ…パ…マ…マ…。」

「撮るのやめようかな…。」

「にへえ…しゆきい…。」

「やっぱ撮るツ!!!」

カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ

「女の子に人気ね萃ちゃんったら…。」

「先生は撮らないんですか？」

「大丈夫、撮ったから☆」

「おお…萃君の寝顔…！めっちゃ可愛えやないか…！」

「癒されるわね♪頬も柔らかいし触れる機会があつてよかつたわ♪」

「萃ちゃんめっちゃくちゃ可愛いじゃーん！すつごくなでしちやうもんねー♪」

男子達が学校から戻つて来てからも女子と同じような感じになつた。

ミッドナイトさんにずっと膝枕されていてあまり動かなかつた。

ちなみに女子達で交代交代で膝枕されていたのには全く気が付かなかつたでござい

ます○

「ふにや…？」

「おはよ、やっと起きたのね？」

「うん…今にやんじ…？」

「20時過ぎよ？」

「あ…お風呂入れてなかつた!!」

「大丈夫、私が入れておいたから。」

「ごめんなさいミッドナイトさん…。」

「大丈夫よ、可愛い寝顔に免じて許すから♪」

「うう…その…お詫びにはならないけれど…一緒に寝りゆ？」

「寝るわよ♪抱き枕にして涎まみれにするからね♪」

「ごめん、やっぱり床で寝る。」

「やーだー！萃ちゃんと一緒に寝ないと落ち着かないー！」

「全く…可愛いじゃないか…！」

チラア

「おほお〜♪イチヤイチャしてますなあ〜♪」

「可愛い…私も艶星さんのような子が欲しいですわ…。」

「ヤオモモ、あの子奪っちゃう？」

「ず、ズルくなりますが…奪いたいです！」

「それじゃー拘束具を大量生産だー！」

ドルドルドルドル…

俺は気が付かなかった。

女の子達が俺を奪うということに…。

ちなみにミッドナイトさんの他にも優おねーちゃんとミルコさんにさえ襲われます。R15な意味で。

んで、謎の音の正体はすぐに判明されるです。

「ふわあ…お風呂入りゆ…。」

「一緒に入る？」

「やーだ、そもそも異性同士で入るのはダメなんだけど…。」

「小さい頃は一緒に入っていたのに、もう入れなくなるの？おねーさん寂しく！」

「本当、甘えるのだけはベテランだわ…。」

「だけって何よ。」

「とりあえずガツシリ掴んで離さないならもうしようがないな…。一緒に入りましょ。」

「ふふっ♪ありがと♪」

「だけどタオルはして。」

「む…分かったわよ…。」

「分かったからと言って俺の胸を触らないでセクハラおねーちゃん。」

「あ、バレた？」

「モロバレ。」

チリア

「盗撮準備OK？」

「こっちは盗聴準備大丈夫。」

「マジックミラーなのがすごいね〜♪」

「あ、来たみたい。」

ガララッ

「「「「?!?!」」」」

「ミッドナイトさん、なんで俺を抱き抱えるの?」

「可愛い上に女の子みたいにタオル巻いているからでしょ?」

「誰のせいで胸を隠さなきゃいけなくなっただんかなあ?」

「いいじゃない♪萃ちゃんなら女の子になっても大丈夫でしょ♪」

「何さそれー…。」

盗撮されていることすら気がつかず、そのままシャワーのところにぼすんと座って洗い始めた。

ちなみにミッドナイトさんからどんなに距離を取ろうとしてもめっちゃびったりついて来るので諦めています○

「ふおおおおお…萃ちゃんの裸…しゅげええ…!」

「艶星さんなんて綺麗なお肌…!はわわわ…全身が…全身がああああ…!」

バタッ

「ヤオモモおおお!!!」

「萃ちやーん♪洗ったげるよー?」

「ひやあつ?!ミツドナイトさんちよつと恥ずかしいから見ないでよおお…!」

「可愛いわねええ〜♪ほらほら頬っぺぷにぷに〜♪」

「もんにゆうう…ひやめへええ〜!」

「こ、これはなんて言えいいのか分からないわね…。可愛いらしいというか大人っぽ
い絡みみたいなの…。」

「こりやたまらんわあ〜、鼻血が止まらん…ティッシュくれへん?」

「あれ?透は?」

「さつき突撃していったよ?」

「んなつ…!?!」

チャプツ

「あ、あ〜、生き返るわあ〜」

「萃ちやん疲れて寝てたわよね♪盗撮とかされないように気をつけるのよ?」

「寝顔盗撮したんだ…。」

「どうやら、他の子にも見られているみたいだけどね?ほら。」

「へ?」

「やほー!」

「きやあああああああ?!?!?透ちやあああああん?!」

「てへっ☆」

「ふええん…お嫁に行けないよおお…!」

バシヤンツ!!

「ぷくぷくぷく…。」

(か、可愛い…ツ!)

透ちゃんに裸を見られて泣きました。

ちなみになでなでされてなんか落ち着きまみた。

上がった時には俺は体が真っ赤になるまで入っていたんで逆上せまみた泣きたいです。

「の、逆上せたあ…。」

「はいアイス。」

「ありがと…んで、なんでアイス一つだけなん?」

「萃ちゃんに口移s「ていつ!」ベシツ 痛っ!」

「アイス食べていいから寝かせて!ミッドナイトさんほんとスケベすぎるよ!」

「なんでさー!大抵の男の人はご褒美じゃないの!」

「ご褒美かも知れないけれど俺からしたら罰ゲームだよ!クラッ あうっ…。」

ポスッ

「間接キスは嫌い？」

「き、嫌いじゃないけれど…そういう問題じゃ…：はむっ。」

（可愛いなあ〜♪ここうやると楽しくて萃ちゃんをもっとからかいたくなっちゃうのよ
ね〜♪）

ナデア…

「ふあ。」

「私の娘にしたいわね♪」

「俺は男なんだけど…。」

「男の娘でしょ？」

「漢字が違うけれど…実際そうさせられてるのもあるから何も言えないや…。」

チラア…

「うう〜…羨ましい…！なんであんなにイチャイチャしているの〜！最高に尊いんだけ
どー！」

「奪えはしませんでした…盗撮で奪うことができましたので、私は満足してますわよ
♪」

「むう〜…しょうがないや…次ある時は奪っちゃお！」

「諦めないのですね…。」

謹慎は少し続くが、俺の謹慎生活はこんな感じになるようです。

平和な日常ってなんだろうなあ…。

18 禁おねーちゃんもいるしセクハラするしで彼女はやりたい放題だからちよくちよく反撃はするけれど敵わないしどうしたらいいんでしょかねえ…(○)

ちなみに寝た瞬間に襲われたと思ったけれど、抱き枕にされただけでしたいいい匂いしてました。

#7 謹慎明けからのインターンシップ初日早々の出来事

「謹慎明けから終わったわ。」

「ミルコとインターンシップとか羨ましいじゃんか!」

「あのNo. 5のミルコとインターンシップだなんて……! 体育祭以来じゃないかな?!」

「いや、俺は嬉しくない……!」

「どーしてだ?」

「ミルコさんもミッドナイトさんと同じように可愛いがられた挙句、彼女とは違ってキツく扱われたからさ……!」

「お前にうってつけじゃねーかよ無個性。シバかれまくってインターンシップ明けに勝負しろ!!」

「マジすか()」

インターンシップが始まる季節が来た。

俺はミルコさんのいるところで始めるのだが情報提供が早すぎるせいか、俺が来るころによってミルコさんがめっちゃ燃えてるみたい。

北海道産の人参沢山持っていいこ。

そしてインターンシップ初日から事件発生した。

「迷子になったー!!」

初日から迷子になりました。

ちゃんと連絡して待ち合わせ場所に來たと思つたら全然違う場所に來た。はりきり過ぎた。

ちなみに人参いっぱい持って來ちやつたのでめちやくちや焦つてます。

「どうしよう…人参いっぱい持って來ちやつたから時間内に目的地に行かないと…。」

「萃ちゃん♪どーしたのっ?」

「ま、迷子になつちやつてもミルコさん!」

「そろそろルミって呼んで欲しいなー!」

「だ、だつてー…。」

「とりあえず早く行くよツ!」

「ちよつ…ちよつと待つてビュンツ!!! ひゃあああああああ!?!?」

「本当お前は高いところダメだな!飛ばすぜええええ!」

「いいいいやああああああ!!!」

ミルコさん宅に着いた。

「も、もう立てないよおお…。」

「全くよ…ほら、肩貸してやるから…ってお前小さいんだった。」

「し、しようがないじゃん…。」

「とりあえずお前は修行だ。高いところに弱い上に力の調整ができてねえ。明日から敵潰しに行くよ!!」

「分かったよ…。てかルミ姉って本当に事務所持たずにやってるんだね…。ちよつとびっくり。」

「ま、ゆっくりしてな。…んで、その鞆はなんだ?」

「人參。北海道産だよ。」

「マジで!?!くれ!!」

「そんなにがつつかなくても…はい、いっぱい持つて来ちゃったから大変だったんだ。」

「さんきゆうな萃ちゃん!冷蔵庫にぶち込んでいい感じに冷やしてから食べるわ!」

(ルミ姉めつちや可愛いんだけど…。)

耳をめつちやびこびこ動かしていた上にすつごいるんるんしてた。

すつげー可愛い。

事務所を持たないからこそその自由だとは思うけれど相澤先生曰く、ニュースを見て飛んできたりするらしい。

特攻隊長長か何かなの？

「てりやつ！」

「へあ!?る、ルミ姉!？」

「ぶにぶにしてがるなあ!食っちまうぞ！」

「ちよつとそれはダメでしょ!ミッドナイトさんと同じくなくなつてガブツ 行ってー！」

「あんたのような可愛いやつがそのまま居られると思つたか？」

「ぶえっ。」

「発情期が来た時は…よろしくな☆」

「や、やめろー!それだけはやめちよくれえええ！」

「お前あんなに乱れていたのにまだそんなこと言うのか!!そうなればもつと墮としてやるよー。」

「まずこれは18禁じゃないから!R15だからその発言控えて！」

「メタ発言やめろバカ!犯すぞ！」

「大胆に脅迫したよこの人!!」

ルミ姉怖い。

ただそれだけ。

ウサギさんと同じように発情期が来るのだが、この人はめちやくちや凶暴になる上に

俺にしかターゲットを捕えるからやばいんです。

発情期に入ったら逃げないとやばいし捕まればやばいしで俺の心と体に危険が及んでいるのです。その時期だけは戦争が起きます○

ナデナデ

「ルミ姉、いつまで俺はこのままなん？」

「いいだろ別に、可愛いお前は捕食される側だろ。」

「ルミ姉には一生勝てねえや…。」

「だけど久しぶりかもな、お前とこうやってるのはさ。」

「ま、まあね…。」

「そーいやミッドナイトにも襲われているらしいじゃん。」

「ぶえっ。」

「ま、お前のことだからしやーないだろ。」

「うう…だってあの変態姉さんは眠らせてくるからよく襲われてるんだもん…。」

「DSの変態だからなあ…。萃ちゃんの怖がる顔が好きみたいだからな、分からなくもねーよ。」

「ルミ姉だつてDSじゃん。」

「うっ…それは言い返せない…。」

「ねーねー、暇だから見回り行こーよ。ついでに買い物もしたい！」

「相変わらず可愛い喋り方だなあああ！襲うぞ！」

「襲わないで！」

「なんやかんや平和です。」

喧嘩する時はルミ姉のサンドバッグにされるけれど、必ず何かで仲直りする。買い物で好きなものとか買ったりしてプレゼントしたり、レストランで好きなものを注文してあげたり…あれ？これ付き合っているようなものになるじゃん??!

「本当の姉弟みたいだねルミ姉。」

「だな！お前のような弱つちいやつの面倒とかはめんどくせーけど、お前みたいな性格はめっちゃくちゃ楽だ！」

「わあ〜、素直すぎるう〜へ〜」

「なあ、もしさアタシが敵に襲われてぶっ倒れても暴走すんなよ？」

「…分かった、暴走しない。んで、何でそんなはなすドガアアン!!!! どううええええええい!?!」

「こういうことが起きたからだなっ!!」

バキッ

「GRRRRR…」

ドスッ

「うっ…!!」

「る、ルミ姉…大丈夫!？」

「急所喰ら痛え…普通こんな喰らつても立てるけれどなあ…。先輩として、世話係として萃ちゃんに情けねーとこ見せちやったなあ…。この程度じゃ死なねーけどな! どーやら萃ちゃんともう^キ一人の萃ちゃん^ラの出番だ! 悪いけど、運んでくれない? アキレス臆もやられた。」

「そう言われなくても分かつてるよ…本当、無茶しやがる…。ルミ姉、申し訳ないがこのままで居てくれないか…? 俺の体が抑えきれねえ…ギョロツ 殺るしか…ねえ…!! 殺す…!!」

「GRRRRRR…GAAAAA!!」

「通常設定から緊急変更、殺戮形態に入る。月ノ裁判 絶葬。」

ズブッ

「GA…aAaAaAa a a a A A a!!」

「…死にな。」

ズビヤアア…!!

「うっわあ…派手にやったなこの子。」

「狩りの時間じゃあああああ!!!」

「ちよつと待つてあの子萃ちゃんじゃないの!？」

「あ、ミッドナイト。悪い、脚やられてあの子のあの子が抑えきれなかった☆」

「ミルコのバカー! あの子ヤバくなつてきてるのに何してくれてんのさー!!」

「え、マジ?」

「そーなのよ!?! あの脳みそ敵が初め^{サイラン}て出てきた時なんてもーヤバいのよ!?! あの子つたら悪魔みたいに変貌して形を留めていないくらいに殺つているのよ!?!」

「あー……すまん、あの子もうやつてる。」

「ひゃあああああつはあああああああ!!!」

「……………どうしようもできないわねこれ。」

ルミ姉が負傷したことにより、また暴走した俺。

そして見に来ていたミッドナイトさんにまた目撃され、野次馬もまた俺の暴走を撮影していた。

殺戮形態から通常形態に戻つた時にはぶつ倒れてそのまま気を失つた。

被害は出ていなかったものの、俺の声が敵^{サイラン}そのものに聞こえていて逆に怖がついて、ミッドナイトさん以外寄ることがなかった。

「萃ちゃん!」

「み、ミッドナイト…さん…?」

「…バカ!これ以上謹慎喰らったら大変なのに!!いくら無個性でもそんなことしたらマズイのよ!」

「あはは…笑い事じゃないけれど…:…またお仕置きされちゃうね…。」

「ほんと、たつくさんお仕置きしてやるから!身も心も私のものにするくらいにしてあげるから!!」

「つたく…ミッドナイトは相変わらず仕置き好きだな…。」

まあ結局、俺はミッドナイトさんにめちやくちやお仕置きを喰らった。

「ただどそのお仕置きはただ痛いだけじゃなく、何処か優しい叩き方をしたお仕置きだった。」

ルミ姉にもお仕置きという名の頬つぺぶにぶに攻撃を喰らわされた。

これ以上暴走とかさせないようにする為の修行も開始されるが、通常一週間のインターンシップが俺だけ二週間のインターンシップが行われることになっていた。その理由としては、案の定もう一人の自分の暴走やスイッチのオンオフを制限すること。

そこから始まるのだが、ルミ姉はそこだけとても厳しいから頑張らないと罰として北海道産の人参をまた大量に買わされることになる。

俺はそこだけは負けたくないと決め、二週間インターンシップと修行に挑み始めた。

#8 兎と無個性のはちやめちやな見回り

「萃ちゃん待てやこらああああああ!!襲わせろおおおお!!」

「はあ…はあ…いーやーだー!!」

遡ること数時間前…。

「ルミ姉ルミ姉!」

「あ?なんだよ萃ちゃん…。」

「あのお店行ってみたいっ!!」

(やべえ…なんだこの可愛い生き物ツ…!)

「ルミ姉?」

「襲うぞ!」

「なんで!?!」

俺とルミ姉は敵^{ツイラン}退治した後、見回りがてら買い物再開。俺はなんかすつごいキラキラした目でルミ姉を見ていたらしい。

ただルミ姉の襲うは恐ろしいものなの。何故かって?

動物に発情期ってあるじゃろ?ルミ姉の個性は兎さんじゃろ?

発情期が来るとどうなる？襲われます。

毎回めちやくちややられていきます。血縁関係はないから大丈夫だけど、ルミ姉にかなう相手なんざいないから歯止めが聞かない。

止めようとした人もいたけれど毎回首吹っ飛ばされてるの。

「なあ萃ちゃん。」

「にやにー？」モツチモツチ

「襲っていい？」

「やだ。」

「なんでさー！」

「だってルミ姉強いし勝てないし痛いんだもん。てかなんで俺を襲うの？」

「耐えてくれるやつがお前しかいねーからだな。一応女を襲ってたことあったけれど、やっぱり耐えられないらしいからさ。」

「男じゃなくて女を襲ってたの!？」

「まーな！だけどやっぱりお前の方がよっぼど締めつけがいいからさ☆」

「ねールミ姉これR15だよ？」

「メタ発言やめろバカ！蹴るぞ！」

「ひえっ。」

ルミ姉が暴走しそうだったのでとりあえずメタ発言。

唯一止めさせる一言ではあるのだが、運が悪ければ襲われる。言わば鬼蛇だ☆

ただどこれは泣く。ルミ姉に襲われて食べられていることを隠していたかったのに
大胆にバラシやがった許早苗。

「萃ちゃん、とりあえず頬噛んでいいか？」

「やだ！」

「蹴るぞ！」

「なんでさー！」

「噛みたいのに拒否るからだ！」

「噛まれたくないよ！ルミ姉の痛いもん！」

「痛くないようにしてやるから！」

「頬っぺ持っついていかれるからやだ！」

「蹴る!!」

「逃げりゅっ!!」

ガタッ

「待ちやがれええええええ!!」

ビュンッ

「待たないッ!!」

「どりやああああ!!」

ゲシッ

「うみやつ!!」

「うわわっ! 萃ちゃん!」

「げっ…ミッドナイトさん!」

「てことは…ミルコも一緒だね!」

「おらああああ! 萃ちゃん捕獲じゃああああ!」

「はあ…やつぱりね…。助けたら言うこと聞く?」

「うぐっ…いい、言うこと聞くから助けて!」

「じゆるり…それじゃ、眠らせtガバツ きやああああ!」

「萃ちゃんに手出したらあんたも襲うぞ!」

「何この子!?! どんだけ欲湧いてるの!?!」

「ミッドナイトさん後はよろしく!!!」

ピューン

「こらああああ! 逃げるなあああ!」

逃げきれた。

ルミ姉の欲の湧き具合が尋常じゃなかった。怖い。ただけど一つ問題が起きたことは逃げ切った後に気がついた。

「あれっ？(´▽｀)ど(´▽｀)？」

迷子になりました。

無我夢中に逃げ回っていたら知らないところに来ちゃった。

ルミ姉とミッドナイトさんがある意味恐ろしいことは理解しているものの、ちゃんとくつついていればよかったとちよつと後悔。

気がつければ面倒なことが起きたという負のサイクル（^{ウイラン}）

「敵だあああー！」

「うっそーん…この街治安悪スギイ！」

「街でつえー奴出てこいやああああ!! オールマイトいねーのかあああああ!!」

「いでで…しくじった…。てか、乳繰りあつてる場合じゃなかったな!!」

「眠らせるの失敗しちゃった…萃ちゃん何処行った!？」

「そーいや見てねー! アタシらを見て止められねーからアイツ猫みたいにすぐ逃げち

まったんだった!」

「あんたのせいじゃない!!」

「それは認めるわ!!」

「ルミ姉にミッドナイトさん何呑気に話しながら捕まってるのさああ!!」

「あ、おせーよ萃ちゃん!」

「あはは…ごめんね捕まっちゃった☆」

「捕まっちゃった☆じゃないわ!!今コイツぶっ飛ばすから待ってて!」

「ああ?コイツ噂の無個性じゃねーか!ぶっ潰してやるよ!!」

ブオンツ

「きやあああつ!」

「おいちよつと待てやあああああ!何処狙ってんじやポケエエエ!!」

ガシヤアアン!!

鳴り響く金属音と爆発音。

逃げ遅れた上に足が挟まって動けない女性がいて、ピンポイントで車をぶん投げた。

俺は思わずツツコンだけど止めるの結構しんどい。

ルミ姉達は終わったなって顔はしておらず、寧ろニヤツと笑みを浮かべていた。

「無個性は無個性らしくくたばってな!」

「全くよお…本当に何処狙ってぶん投げてんのさ。車を受け止めるだけでも無駄に面倒

くさいのによお…!」

「ははっ!やっぱり萃ちゃんは萃ちゃんだな!」

「本当、無駄に動きが早いんだから…。」

「こ、コイツ…おらああああああ!!」

「よいしょつと…とりあえず逃げ遅れた人はもういないんで大丈夫です。あとはやり返すだけなんで。」

「い、いくらなんでも無個性の君じゃ無理だ!…つて拳が飛んで来てるって!!」

「粉碎すりやどうにかかりますよ…つと!!」

「二うわあああああああつ!!」

ドオオン…!!

「……へ?」

「20. 3cm連装砲ツ…!二連砲撃!!」

ドツドゴオツ!!

「ぐおつ…!?!」

「ふあつ?!あの拳を殴った…!?!」

「お、おい…アレって噂の無個性のやつじゃねーか…?本当に無個性なのかよあれ!!」

ヒーロー達もびっくりしていた。

無個性は力が劣ると言われている人達がいるけれど、それを目の前で覆したからだ。

ヒーロー達は予想外だったかも知れない。だけど、二人のヒーローは予想していた…

いや、完全に分かっていた。

「さーて：俺が行こうと思っていたお店がぶっ壊れたから倍にして返してやるよ!!」

「か、萃ちゃん！コスチュームは!？」

「あつ。」

「アイツ何忘れてんの!？」

「だつてだつてー！ルミ姉達が悪れていたせいで予定が早まって俺の楽しみにしていたスイーツにウキウキして思わず一人で普通の格好で来ちゃったんだもん！」

「な、なんだその理由…。」

「俺の前でなーにぺちやくちやと喋ってんだああああ!!とつととくたばr」お前うる

さいー! あべしつ!!」

「「「「あつ…。」」」」

バタツ

「ん?」

「ツツコんだだけで倒れちゃったわ…。」

「技名のない殴りだけか!いくらなんでもそれはねーぞ!!」

「その前に落ちるうううう!!」

「そーらよつと!」

「萃ちゃん：可愛いクセにかっこいいところあるじゃない…！」

「とりあえずルミ姉も着地できないからそのまま行くよっ！」

「萃ちゃん早くしてえええええ!! 流石に落ちた状態は着地できねーんだよおおお！」

「キャーッッ!!」

ポフッ

「な、ナイスキャッチ：さんきゅーな…。」

ペキッ

(痛え…。)

ツッコミパンチを敵の顎ウイランにめがけて仕留めたため、一撃で倒れちゃった。しかもドジッて捕まったルミ姉とミッドナイトさんはそのまま落下したが、ギリギリ二人をキャッチしてなんとか済んだけれどめっちゃ痛かった。ガッツリ骨折していたので病院行きました。

「てりやっ！」

ベシッ

「いてっ！」

「萃ちゃん無茶すぎ！」

「だ、だってー！あのままだったら終わってたんだよ!?他のヒーロー達は救助や避難で

手一杯だったのにー！ポンッ んにや。」

「ま、お前らしいが…無茶したということであらうからな？」

「な、なんでー!?」

まあ色々あつて現在に至るのだ。

ミッドナイトさんにも襲われたけれど、ハグハグされただけだった。

ルミ姉に関しては何も襲うことしか頭になくて、僕はそのまま全力逃走しました。

「お前がアタシに勝てると思つたかー!?」

「ぎやあああ！捕まってチュウウ… ん、む、うう…。」

無理でした。

ルミ姉に捕まつてそのまま襲われた。

えちえちな方じゃなくて俺の唇が襲われたの。

必死に引き離そうとしてもガッツリ抱き締められているから離すことも離れることもできなかつた。あの筋肉で離れられるワケないもん！

ルミ姉の力には勝てないもん！

「ふええん…もうお嫁に行けないよおお…。ぐすつ。」

「んじゃ、帰宅してそのままやるぞー！」

「いややあああああ!!」

「お持ち帰りはさせないわよ！私が管理かつ持ち帰りするんだから！」

「なんでそーなるの!？」

「お礼するって言つてたじゃない！」

「それはするけれどお持ち帰りは聞いてないよ！」

「お礼するって言つていたなら、私の命令に従いなさいよ！」

「それって完全に服従じゃないの!？」

「ごちゃごちゃ言つてねーで早くやるぞ萃ちやあああああ!!！」

「早くインターンシップ終わつてええええええ!!！」

ルミ姉とミッドナイトさんがいると大体カラスな展開になる上に巻き込まれる。襲われるのもよくあるけれど、紛れてセクハラも容赦なくしてくるから正直怯えてる。

インターンシップの最終日はもつとヤバいことになりそう ()

#9 いんたーんしつぶさいしゅーび

「ルミ姉ルミ姉ー！」

「んー？どしたー？」

「ひまー！」

「見回り行つたのかー？」

「異常なさすぎー！」

「だからって甘えてくるなよ萃ちゃん：困るだろ？」

「だってルミ姉しか構つてくれないんだもん！」

「お前可愛いすぎんだろーが！襲うぞ！」

「それはやだ！」

「はあ!?お前はあたしに襲われるだけでいいんだつーの！」

「ルミ姉それ酷くない!？」

「うるせえ！覚悟しろおお！」

「ああああああ!!」

朝から騒がしい日常です。

ルミ姉と俺がいる街では敵の出現率が下がり、なんか暇になっちゃった。脳無とかは例外だけど、本当に暇。

なのでルミ姉にめちやくちやかまちよしてた。

かまちよしてたら襲われた。以上！

「このまま終わってたまるかあああ！つてルミ姉待つて待つて！ヘッドロックはやめt
ゴキツ うぎゃつ！」

「相変わらずアタシには弱いなあ！もしかしなくても力はアタシの方が勝ってるからか
？」

「きゆうう……。」

「まあいつか！……ん？」

『速報です。〇〇市で敵が出現して暴れ回っている模様。ヒーローは苦戦しており――
』

「萃ちゃん一狩り行くぞ!!」

ベシッ

「ぶにやつ……んえ……ちよつ、ルミ姉待つてー!」

相変わらず自由奔放で動き回るルミ姉だ。

ルミ姉の可愛いところつてもふもふしたところもそうだけど、やっぱりこの性格とす

ぐに飛んでくるところだ。

毎回絞め技喰らわされたりするけれどね…うん、だけどそれがいいっ！

…とりあえず現場に着きました。

「ぐっ…何だコイツ…！」

「オールマイトはここらにはいないか…。ヒーローもそこまで強くもない…消すか…。」

「クソツ…こんなガキにいつ…!!」

「おいコラ離れろおおおおお!!」

ドゴツ

「ぐっ…!?!」

ズザア…

「あ、あんたは噂の無個性ヒーロー…!?!」

「大丈夫ですか!?!とりあえず安地に移動して手当てします!」

「チツ…無個性のクセにやるじゃん。」

「あ…予定変更!怪我人はすぐに安地に配置しつつ、敵を捕獲もしくは蹴る!ルミ姉行くよ!」

ベシッ

「痛い!」

「萃ちゃん！アタシに命令するな！蹴るぞ！」

「しようがないじゃん！緊急的なことになったんだから！」

「しよーがなくなーねーだろ！後で蹴るからな！」

「ルミ姉酷い!!」

「あー…ごちゃごちやうるせえ…！無個性…お前から消えろ!!」

「とりあえず俺から相手のようだな！ルミ姉は観戦してて！ヤバくなったら援護求む
！」

「わーったよ！とりあえず死ぬんじゃねーぞ！」

「気をつけろ！そいつに五本の指で掴まれると確定で死ぬ！」

「ご忠告感謝！」

敵対心丸出しの敵は俺を始末するようで、俺は闘る気満々に立ち向かった。もちろん勝てる相手ではないことは分かっているが、骨を折ることくらいでやれば何とか撤退はしてくれるだろうとは思っていた。

「だけどやっぱり強敵な敵には通じない。」

ドスッ

「うぐっ…!?!」

「どうした無個性…そんなもんか…？噂の無個性ヒーローは結局雑魚だったってことだ

よなあ……?」

「へっ……そう言つてな……萃ちゃん!!」ルミ姉はまだ出ないで!」

「最期に言うことはあるか?」

「まあ……強い相手には強い人がいるってことかあ……。だけど負けないさ!」

ガリッ

「ツ……!!」

ドゴツ!!!

「無個性の全力をナメちや困るわ!」

「てめえ……個性がねえのに個性があるのか。」

「ま、無個性だけどな!!!」

「黒霧、一旦退く。厄介な奴が現れた。」

「もちろんですとも。」

「あつ!お前逃げんのか!!」

「深追いはダメだ!!」

「ええ!?!あともうちよつとだったのに!!」

「ヒーローは悪人を捕まえることだけど深追いは違う!自殺行為としか言えないし、今のあんたじゃアタシにでさえ勝てないのに勝てるわけないでしょ!」

「うっ…そ、そうだよね…。行動を泳がせてみるよ…。」

「いい子だ。とりあえず逃げ遅れた人がいねーか見回ってみる。何かあったら呼べよ？」

「分かったよルミ姉。」

俺と戦っていた敵が言っていた無個性なのに個性があるというのは理由があつた。それはミッドナイトさんとの出会いから始まったからだけど、また別のお話で。

ルミ姉と俺は手分けして逃げ遅れた人の救助や搜索に回って終わらせた。そして俺の知名度はその崩壊敵戦以来、無個性ヒーローの称号（仮）を持つことができた。それと取材がすつごい来た。

「質問で申し訳ありませんが、無個性ヒーローさんのヒーロー名はなんでしょうか？」

「お、俺…?」

「はい!」

「る、ルミ姉…。」 チラッ

「あ…この子はまだインターシップ中で名前はまだ本名のままで!それと、私の愛弟子だ!」

「ほえっ!?!」

「愛弟子さん!師匠のミルコは普段どうい感じですか!?!」

「え、えつとく…闘争心の塊？」

「おいこら。」グニユ

「もんにゅ…頬つぺ掴まにやいで…。」

(ふあああああ!!この二人…なんて尊い…!!)

「あ、ヒーロー名今決まったわ。」

「お前もう決まったの!？」

「決まるの早いですねツ!!聞かせていただきます!!」

「今日から俺のヒーロー名は…無個性ヒーロー【ラビットシップ】だ!!」

そこからネット記事や新人ヒーローに関するニュースが上がり、コメント欄では名前
の由来とかも考察されていた。

当たっていたり外れていたりと閲覧していた俺はちよつと楽しんでいました。もち
ろんこれは単純すぎてどストリートな由来です。

ルミ姉に似た兔技と俺の技である拳技・総称 艦艇拳に因んだもの。

あと、インターンシップ前にヒーロー名を皆で考えていたけれど全く思い浮かぶこと
がなかったのでミッドナイトさんに報告して爆豪君と同じような感じになった。

気がつけばニュースやネット記事に上がってから数日経ってた。

「そーいや今日インターンシップ最終日じゃん!」

「ソーだぜ？」

「なんでそんなのんびりしてんの!？」

「だって暇だろ?ここら辺の敵も出なくなっちゃまったんだしょ?」

「ニユースでは大分面倒事になってっけどな?」

「よっしゃ行くぞ萃ちゃん!!!」

「待つて待つてコスチュームがああああああ!!」

ドオオン…ドゴオオオン…!!!

「だから何でインターンシツプ最終日にクソデカ敵がいんのさあああああ!!」

「的がバカでけーから捕獲しやすいだろ!!おら行けええええ!!」

ブオンツ!!!

「いつものやつかよおおおおおおお!!?!」

俺とルミ姉はソツコーで駆けつけた。

クソデカい敵な上にクソデカいなので顔面クリーンヒットして倒れて元の人間に

戻った。

だけどそこに違和感があった。

「ルミ姉、この敵…。」

「ああ、これは予想の斜め上をいく面倒事になりそうだな…。」

「個性の類が分からねえ…。」

「複数とかそういうレベルじゃねーなこれはよ！」

「ヒーロー…：殺ス…！人間コロす…！！」

「うーわめんどくせ！！ルミ姉、これ二人でどうにか出来るよーなもんじゃねーぜ？」

「オールマイトは出張中だから駆けつけるにも時間がかかるから期待はすんな！つーかプロヒーローが何人いても鬨りきれねーけどな！」

「とりま避難優先に…：つてワケにはいかないようですねおねーちゃん。」

「そうだな！まずはあの拳を…！」

「蹴り／＼ぶつ壊す！！！」

「でりやああああああ！！！」

「コスチュームがねえから…：このままりミッター解除する！！！」

個性には類がある。

炎系／爆破系／氷系／パワー系 e t c …：だけど、俺とルミ姉と鉢合わせしている敵はクソデカだけどデカいだけではないやつだった。

つまり、個性判別測定不可なものだ。

個性が複数あれば大体判別はつくが、この敵は複数というレベルではないスケールのデカさだった。

もちろん無個性ヒーローは太刀打ちできません！しかもコスチューム置いてきたからね！！

「通常形態維持、標的確認。二隻武装換装、航空戦艦 伊勢、日向：35cm連装砲準備。火力調整…片腕火力、275%！！ルミ姉、このまま蹴つたら避けて！！」

「おうとも！！」

「伊勢型航空戦艦一番艦、二番艦砲撃用意！！35cm連装砲、爆裂砲撃じゃああああああああああ！！！」

クソデカ敵の拳を破壊したけれど、流石にキツイ。

コスチュームで力の調整をしていたけれど、今現在の最大火力である300%手前のほぼ全力の火力で連打撃を繰り返したものの、両腕が一時的に再起不能になった。

もちろん脚は使えるが、そこまで強くさせていないので雀の涙程だと思っただ方がいいな。

「いつてええええええ！両方折れたあああああああ！ルミ姉ええええええ！」

「言われなくても分かっているぜおらあああああああ！！」

ポーン！

ガコッ！！

「おゴお……！？ヒー……ロー……！！潰ス！！」

ああああ!!!

ズズウウン…

スツ

「おめー無理しすぎだろ!!」

「しよーがないじゃんルミ姉! あんなクソデカ敵を延長戦に持ち越したら街全体が終わるんだもん!!!」

「まー一件落着だからいつか!!!」

「とりあえず病院行きたい!! すっげー痛てー!」

病院行きました。

病院によると、脚は折れたけれど両腕は全脱臼で済んでたらしい。

いやいや、あの連打撃をかましといて脱臼はありえなくね? って言ったんだけど、俺の体がぷにぷにで柔らかいから衝撃を和らげていたらしい。脚は筋肉の塊みたいなものになっていたので筋肉が硬すぎて衝撃に耐えられなかったとかなんとか…。 いやどゆこと?」

インターンシップはこれで終わりだけど、ミッドナイトさんにめちやくちや怒られてめちやくちやもふもふさせられて溶けました (○)

「ルミ姉もふもふしてた。」

「あら、尻尾触ったの？」

「耳。」

「蹴り飛ばされればよかったのに。」

「なんで!？」

「なんでも?!」プイッ

「えー!？」

病院内でミッドナイトさんとお話していたけれど、めちやくちや和んだ空間になりました。なんか嫉妬してるミッドナイトさん可愛い。

#10 無個性 : らいじんぐ

インターンシップ明けてから一週間。

雄英高校で俺の話題で持ち切りばかりだった。助けて。

「ぼえー…。」

「萃、脚大丈夫か？」

「あ、焦凍君。脚はまだ難しいかな。」

「テレビで見てたが…普通の無個性じゃできない一撃だろ？」

「まーね…だけどアレは正直結構キツイかな。」

「どういうことだ？」

「あの強さを出すには無理矢理引き出すことによつて生まれるものなんだ。人間本来の力の100%を出せば筋肉がボロボロになるんだけどね。言わば火事場の馬鹿力つてやつと同じ。」

「つまり…萃はそれを慣らせたということではないのか？」

「そこそこね。今は100%のところに限界かな。」

「ん?」

「どしたの?」

「100%のところが限界ってどういう意味だ?」

「あ、言ってなかったね。俺の場合は現段階で300%まで力を引き出すことができ、痛くならない領域が100%なんよ。」

「な、慣らしすぎだろお前…。300%にまでいくとどうなるんだ?」

「使った場所の衝撃が重すぎて粉碎骨折。」

「お前よく治せたな…。」

「あはは…本当俺でも俺の体にビビるよ。」

「おいこら無個性!!勝負すつぞ!!」

「かつちゃん!?萃君は今脚を怪我してるから勝負できないよ!?!」

「なんだとおお!?!」

「あはは…ごめん爆豪君…。あと数週間待っちゃくれ。」

「ちっ…!お前はしっかり完治してから勝負だ!!また期間が伸びたら許さねえからな!!」

(言葉荒いけれどめっちゃ良い奴やあ…!出久君、いい幼なじみを持ったもんだなあ

…。)

モニッ

「もんにゆ。」

「萃、何暗くなつてんだ。お前は一人じゃねえ、お前のお陰で俺を含めて無個性の価値観を知るようになったんだ。個性無個性であれ、お前はヒーローになるんだ。無個性で唯一入れたんだ。無駄にするなよ?」

「う、うん…焦凍君。それとなんで掴んでるの?」

「鰻頭みたいに柔らかいからだ。」

「なんじゃそれ。」

(はっ…轟さんが艶星さんの頬っぺを…!?尊いッ!!)

「とりあえず見られてるからそろそろ離しちよくれ。」

「すまん、それと完治したら俺も手合わせしてくれないか?。」

「もっち!」

俺は出られずにいたが、焦凍君の言葉に動かされた。

焦凍君はなんやかんや人を動かすことができる人間なんだなって思ったし、爆豪君も口は荒くても言っていることがしつかりしているから不器用って本当は器用な人より器用なんじゃないかなって感じた。

それで放課後。

「萃君!」

「どした出久君。」

「教えてほしいんだ！」

「技はそんなにないけれど…。」

「君の技を教えて欲しいんじゃないんだ！」

「へ？」

「萃君ってN.O. 5のミルコとインターンシップを行ったでしょ？あの息の合わせ方と合図が普通じゃできないやり方だったって気づいたんだ！」

「おうふ。よく気がついたね。目で合図を送っていたら気がついたら二人でできた。」

「あの距離じゃ目を見ることは出来ても合図が分からないはずなのに…凄いや！僕にも教えてくれるかい?!」

「もつち。だけど出久君は俺にはできない合図の送り方なかったっけ？」

「そ、そうかな…？僕はかっちゃん仲間がいいとも限らないし…。」

「いや、そんなことないと思うよ。爆豪君は思っていることを表に出さないだけだと思う。それに爆豪君の名前が真っ先に出たってことはやれそうってことじゃないかな？」

「そうだと思いたいな…。」

「まあなんて言うんだろ…今後、出久君は爆豪君と絶対に誰にも負けない最強で最高のコンビになると思うよ。俺はそう見えるしそう思ってる。」

「分かった、やってみるよ！」

「ガンバツ！」

俺は友達というものができてよかったと感じた。

だけど不安はやっぱりあって、本当に友達になれたのか？また騙されていないだろうか？という気持ちに追い回されていた。

中学まで無個性だからと言ってハブられたこともあったし、皆よりも弱くて強くなるとなれなかった。

帰り際でそう思いながら寮に着き、おふとうんにダイビングした。

「友達かあ……。雄英こへいに来てから初めてその概念持ったな……。」

コンコン

「ふぁーい？」

「艶星さん……入って大丈夫ですか?？」

「大丈夫よー？」

ガチャツ

「お邪魔しますわ……つてなんて可愛いお部屋……!!」

「あれ？見たことあったよね？」

「ええ、だけど模様替えしました？」

「あ、うん。模様替えした。そーいや模様替えした後の部屋見せてなかったね。」

「はわああ…!もふもふしてますわ…!これ何処で買いましたの!」

「それ? ネット限定ストアで買ったの。」

ガチャアアアアツ!!

「かーなめつちー! 生きてるー!」

「あ…そーいや女子棟だったわここ。」

「今更!」

ギュー

「もにゆうう…。」

「萃っち抱き枕みたーい! 抱き心地が凄くあるー!」

「芦戸さん!? ず、ずるいですわ! 私にも抱かせてください!」

「もちろんいいよー!」

「あれ? 俺抱き枕にされてる?」

八百萬さんが入って来たり、芦戸さんが入って来たりでわちやわちやしてた。ちなみに俺は動けずじまいで思考停止しました。

動こうにも動けないんだもん!

つーか部屋は男子が入れるレベルの距離じゃないし寧ろ女子と女子の間のだ真ん中

で二階にあるんです（〇）

「ね、ねえ？ちよつとすつごいくすく撥くつたいよ？もしかしてヤバい匂いしてる!？」

「そんなことないですわ…スンスン…甘い匂いしてますわね…♪」

「なんでそんなに甘い匂いするのー?」

「そ、それは…分からん!」

「男子には取らせませんわ!!（大迫真）」

「ヤオモモ本気ヴオイス〜!」

めちやくちや和みました。

それとご飯や掃除は毎週代わる代わるやる形となっていて、今週は俺含む6人ご飯担当になりました。

「今日のご飯何にするー?」

「すまん、決めてない。」

「俺もだ。」

「あー…あたしも決めてない…。」

「私も決めていませんわ…。」

「僕も決めてなかった…。」

「皆決めていなかったのね…。まあしょうがないよね、色々なこと起きたワケだし。と

りあえずカレーとかシチューにする？迷ったらこれが一番！」

「「「賛成く!!」」」

「んじや、素材は…つと。結構使うね…。」

緩い感じでご飯を作っていたので周りもすつごい和やかになってた。もちろん何もしていない。

言うなればアレか、やさしいせかいつてやーつだな？

それにしても、耳郎さんの袖クイクイ可愛いすぎて吐血しちゃったわ。

そしてわちやわちやしまくった後、就寝時間になった。

「ふわああ…ねみ…。」

「萃っち眠そうだね〜。」

「それもそうですわ。この子も頑張っていましたもの。」

「すう…すう…。」

「あ、寝た。」

「いい寝顔してるなあ〜♪写真撮っちゃおーつと！」

「ぬあつ!!そ、それはアカンと思うんだけどお…?」

「あたし達の秘密つてことにしておきましょう。」

寝顔撮られたことすら知らないまま就寝した。

襲われることなく無事に朝を迎えたのだが、しっかりとオフトウンに入った状態で抱き枕まで用意されてた。

「ふわああ…朝かあ…。皆部屋に戻って寝てくれたのかな？」

バタアアン!!!

「萃君大変やああああ!!」

「いきなりなんざや!?!どしたん麗日さん!?!」

「宣戦布告状が萃君宛に来てるんや!!」

「What!?!」

朝から事態が急変。

一部のナンバーヒーロー達が本当は俺に個性があるのではないかという疑問や疑惑を抱いていたため、宣戦布告を出してきた。

体を回復させている最中なのに唐突な展開に対して俺はフリーズ&クラッシュしてしまい、麗日さんはめちやくちやびつくりしてからの悲鳴が出た。

「あー…萃ちゃんまだ回復してねーからなあ…。ま、アイツは回復してなくてもやる時はやるからいつか!見てくつか!」

「ムムツ!!艶星少年に宣戦布告だつて!?!それは大変な事態だ…早く止めねば艶星少年の体が不味いことになる!!」

「これは歯止めが効かないわ…。萃ちゃんには申し訳ないけれど、頑張ってもらうしかないわね。」

「…こりや止まらねえな。艶星には個性がねえから無闇矢鱈むみやたらに他のヒーローの個性を消すわけにはいかんな…。」

事態が発生した為が故にクソデカリングが設置されており、俺はそこへ入ることに。

ちなみに休日の朝っぱらからとんでもねーことが起きていたから皆パニックっていた。俺は何故か冷静にはなっていたが、その理由は単純に理解していた。

「俺の実力はめちやくちや弱い説ってやつだなこれ。」

#11 卵の根性と暴走と

「いや〜めんどくさいな〜。」

「私達が近くで見ているも、画面越しからでは伝わらない人もやつぱりいるんだね〜。」

「芦戸さん俺への見破りがすごいよ?」

「萃ちゃんに褒めてもらえると嬉し〜な〜!」

「艶星さん、お怪我は大丈夫ですか?」

「いーや流石万全じゃないね。」

「萃君、僕止めてくるよ!」

「出久君、気持ちは有難いけれど…多分止められない。相手がすごい目で見てる。」

「あつ…(察し)」

「…万全だったらフル稼働は可能なんだけど、どーやら今回はそういかないみたい。」

俺は朝っぱらから唐突に宣戦布告状を受け、クソデカリングが設置された場所で待機していた。

先生方もいたけれど止めることができなくて、結局プロヒーローと戦うハメになり、先生方は俺に謝罪をしていたが俺自身は気にすることはなかった。

「さあ始まりました臨時対戦！個性を隠し持っているのではないかと疑念や疑問を持った自称無個性ヒーロー ラビットシップ（笑）が今、リングに上がりましたああああ!!」

（笑）を付けんバカ。」

「この自称無個性に対する対戦相手はく…コイツだああああああああ!!」

「やほー♪ラビットシップの実力が気になって参加しちゃった♪」

「なーんで女性ヒーローなのおおおおお!??!?!?こんな意味不な対戦するくれーなら男性ヒーローと戦わせてよおおおおお!!!!」

「弱点丸見えだなあ…。」

「しかも萃つちが怪我しているからってMt.レディと戦わせるってどーゆーことよ。」

「つーか…プロヒーローと戦わせる時点で無謀じゃねーかよ…。しかも萃のやつ怪我してんだぞ…?」

「メディアの奴らまでいやがる…。アイツらぶつ殺していいか!」

「か、かつちゃん!それは流石にマズイよ!」

「オイラ…正直結果が見えない…。萃がまた怪我してこの繰り返しだったらずーつと雄英で保健室か病院生活になるぞ?」

「もう見守ることしかねーよ。」

「No. 5のミルコ!?どうしてここに!」

「弟みてーなもんだからな。メディアアの連中が何を企んでいるのか知んねーが、アイツはそう簡単に斃くはらねーよ。何をしてもな。」

「あ、あの時…：そう言つてましたわ…：。立てる限りは諦めない…：つて。」

「アイツのド根性、見届けるぞ。」

クラスメイトや他の学年の人達も見ていて、一般の人達も観覧していた。ちなみにそのクソデカリングはどうやって建てたのか分からないけれど、ちゃんとした作りになつてた。

なんかプロレスみたいな作りです。

カアアアアン!!!

「ゴングがなりましたあああ！それでは開始でええええす!!」

「Mt・レディさんと戦うなんてええ…：。あーもー死ぬこれ。」

「さーて、実力見せてもらおうかなっ♪」

「早速巨人化ですかい…：ヤル気満々ですわねえ〜。俺終わったな。」

「ふんっ!!!」

ゴオツ!!!

「まーヒーローコスがあるから助かるし…：やるか…：。主砲火力現時点限界300%から限界突破、350%に火力限界上昇…：主砲装備、46cm三連装砲から20cm三連装

砲に変更し出力限界上昇…連続射撃じゃああああああああああ!!!!」

ズドドドドドド

「そんなの痛痒い程度よ!…ん?痛痒い?」

「オラオラオラオラオラオラオラアアアアアアアアアア!!!!」

「待つて痛くなつてきた…あたたたつ!ちよつと何この子足の腹に集中しとボゴツ イヤなどこ入つたああああ!!!!」

「はあ…はあ…!手加減したいところですがあ…!本気でやらせてもらいます!!でりや あああああああ!!!!」

バゴツ

「くッ!!!脛すねはやめろこのチビツ子!!」

ブンツ

「へ…?ベゴツ!!! ぶいあつ!!!」

ドガアアツ!!!

「か、萃君つ!!!」

「艶星君!!何故だ…!艶星君にだつて限界はあるのに…!!」

「げほつ!いつてえ…コスが無けりや終わつてた…。つーか今も体終わつてらあ…。多分三本は逝つたかなあ…。」

「おく耐久性抜群だね〜♪だけどこれはどうかなっ!?」

「緊急換装、島風!」

ボガアッ

「あの一撃は終わったな。」

「だな、結局個性持ちのヒーローが自称無個性ヒーローにバフをかけたただけだな。」

「Mt.レディに敵う相手なんて巨大敵しかいないだろうし。」

「流石に死んでないよね? 踏み潰しちゃったら結構どころかかなり不味いよね!」

「その心配…ないんですけどね…Mt.レディさん。」

「いつの間に!」

「10cm高角砲!!!」

ドストドスト!!!

「痛ああああ!! 痛いじゃないこのチビッ子!!」

ブオン!!!

「…え?」

俺は死を感じた。

敵でもなく悪の立場ではないヒーローである立場の個性の持ち主による一撃が俺を

襲った。

何の防御もできず、俺はそのまま一撃をまともに喰らって表から地面に叩き落とされた。まるで蠅ハエを叩くかのよう。

ドガアアンツ!!!

「Mt. レディ何してんの!?あの大ききで萃ちゃんを強く叩いたら…!!」

「ヤバ!いくらなんでもやりすぎちゃった!!」

「萃君!!!」

「おいコラ萃えええええ!!死んだら殺すぞゴラああああ!!」

一方俺は…。

「……あれ?ここどこだ…?」

「よう、本体俺。」

「もう一人の俺?君がいるってことは…やつぱりか…。」

「死の淵を彷徨っていんだよ。このバカ。」

「あはは…やつと一撃を与えたと思ったら浮いたままMt. レディさんの一撃には太刀打ちできないよ。」

「全くお前はどうしようもねえ奴だな!こんな茶番に付き合うくれえなら自分めえ自身で主催者を潰せばいいだろ!!」

「もちろんそのつもり。奴らは無個性アンチのバカ連中だからな。無個性の本当の恐さ

を叩き込ませてやるさ。」

「その意気だ。お前本体が死んだら俺が出て来られねえだろ？」

「だね。それに俺は君には助けられてるな。」

「んなことねえよ。それと、悪いが俺も出るからな。」

「え？」

「奴らのタチが悪いんだよ。プロヒーローを操ってまで無個性を殺した！っ！考えがな！」

「ああ、そのことか。もちろん出て来てよ。常識をぶっ壊してやろうじゃん。」

「一つの体で俺と本体俺が出たらかなりの負担がが出るがな。」

「いいさ。何れいすにしろ、直しきにこの体はもう壊れる。」

覚めた頃には体が酷く壊れていた。

かなりの重症だったらしい。俺はプロヒーローを許してはいるが、プロヒーローを操ってまで俺達無個性を消そうとした連中が許せなかった。

病院には運ばれていたものの、報道陣の連中は無個性の脆さに言及を求めており、雄英高校にまで来るようになっていたみたい。

「……rrrr」

「萃ちゃん……！目が覚めたのね!？」

「ミッドナイト！近寄ったらダメです！！萃君の様子がおかしい！！」

「何言ってるの緑谷君!? 萃ちゃんの様子がおかしいって…どういうことよ!？」

「いいから離れてろや!!!」

ピキピキ

「G A A A A A A A a a a a a a a a a a
!!!!!!」

「か、萃…ちゃん…?」

ギロツ

「ひっ!？」

ガシヤアアアン!!!

「萃君!？」

「G r r r r r r r r r …。」

スンスン

「……ツ!!」

クルツ ビュアツ

「か…かな…め…ちゃん…?」

「おいコラなにボケツとしてんだ！追っかけるぞ!!まだアイツとの勝負が着いてねーんだよ!!あのまま斃くたはつたら殺す!!」

「萃君…。」

俺は七割方意識がないまま暴走を引き起こした。

もう一人の自分が齎エツイルキラーもたらした現象ではないことはハッキリ分かっている。

そして残りの三割の意識は一体何なのか？

二割は敵もしくは悪を抹殺することだけの意識と一割は俺の意識の一部しかなかった。

「……Grrrr…ろス…あく…こロス…。」

「ククツ…日本に潜入してからは最高じゃねえか！ここはスパイ天国かよ！日本を乗っ取るのは時間の問題だが…まさかこの計画が採用されるとはnガタツ 誰だ!!」

「てメえ…アク……。」

「ああ…噂の無個性ヒーローだったっけか？ここに何の用だあ？個性持ちの俺様に太刀打ちできるってか？やってみるよ！」

「ブース…とモー…ど…ヤ…ツぎ…キ……！」

「八つ裂きだあ？素手でかよwwww 俺様の個性である鉄壁に敵わねえんだyブチツ

は…？え…？」

「マズ…イ……サミシ…イ……。」

俺は壊れかけの体を鏡の前で眺めながらそう呟いた。

1 2 意識、暴走、自壊

『続いているニュースです。昨夜、何者かにより首筋を噛みちぎられて死亡している人がいると通報が入り、警察は現在捜査中です。判明した内容は死亡した被害者は海外からのスパイであり、こちらら日本を乗っ取る計画をしていたことが判明しました。』

「萃ちゃん…。」

「ミッドナイトしつかりしろよ！萃ちゃんは帰って来る！！絶対にだ！！」

「帰って来ないわよ…あの子…萃ちゃんじゃない…！」

「…何が起きたか聞かぜ？」

美女説明中…。

「ああ…萃ちゃんが獣のようになってアンタの匂いを嗅いで去ったってワケか…。」

「私臭いかしら…？」

「いや、そういうモンじゃねーよ。まさかな…。」

「どういうこと？」

「あの子な、時々おかしい行動を取ることがあんだよ。匂いを嗅ぐ行動をたまに見かける。」

「…?」

「多分あの子は善か悪かを嗅ぎ分けていると思う。」

「つまり…私の匂いを嗅いだ理由って…。」

「そういうこと。あとアンタいい匂いしてるからな。治まらない暴走でもアンタの匂いで意識が戻れる為に忘れられないようにしているか、助けを求めてんだろ。」

「変態なことしかしてないの?」

「認めてんのかよ。」

ミッドナイトさんの自宅にてルミ姉と話をしていた。

俺がいなくなったことにより、ミッドナイトさんは凄く^{やっ}竅^つれていてルミ姉は驚いた様子。

「とりあえず見つけ次第捕まえる。あの子はまだまだ未熟でカツチカチの卵だ。最善の策を考えておきな。最悪、殺されるかも知れねえからな。」

「あの子はまだ死なせない…。ミルコ、あんたは萃ちゃんをどうしたいの?」

「私か? 私は萃ちゃんに言われてんだ。あの子が暴走したら殺る気で殺れてな。」

「相変わらずあの子らしくないわね…。本当は弱いのにいざとなれば殺れて…お説教してやらないとダメね! お仕置きもしてやらないと!」

「その意気だぜ! んじゃ探しに行ってくるわ。」

ルミ姉は俺を探しに、ミッドナイトさんは対俺用超濃縮催眠弾を作成した。もちろんすつごくバテていたとのこと。

出久君達も暴走した俺を探してくれていたのだがその時の俺は察しがついたせいかわ道避けるようになった。

「Grrrrr…チツ…。」

「萃つちー！出てきてよおおおお!!」

「艶星いいい！お前もいねーとバクゴーがまた暴走すつぞー!!」

「萃…！お前は良い奴のハズだ…！折角お前とも友達になれたのに…！」

「か、萃くーん！君とまた動物の話したいから早く出てきてええー！」

「……………」

「萃君…！一体何処に行ったんだ…！そう言えば、どうしてミッドナイトの匂いを嗅いだんだろう…？」

俺は無意識の中で未だに漂っているが、薄らと意識が見えて来ていた。

今の俺は俺ではないことはハッキリ分かっていたが、この俺は正しく…敵だ。先程までの行動も敵のような動きだった。

つーか、なんで俺四足歩行になってんの？

「敵だああああ!!ヒーロー助けてくれえええー！」

「……………Grrrrrrrr!!!」

シュバツ

「ひーロー…ツブす…ムむすツ!!」

「なんでこんな時に脳無が出てくるんだ…!!」

「この脳みそ野郎おとお!!今出て来てんじゃねーぞゴラああああああ!!!」

シユツ バチィツ

「ぐっ!？」

「かつちゃん!？」

「ムこせい…むこせいドこだア?でテコおおオオオオ!!!」

バシユツ

「あ…。」

「芦戸さん!!」

「三奈ああああ!!」

「芦戸君!!クソツ間に合わnバツ むっ?!」

ドズツ

「え…え…?か、かな…め…っち…?」

「GRRrrrrrrrr…。」

「あ……？」

ベキベキググシャアアツ!!!

「ガああああ!!」

「シね……のウミそ……!!」

ブチブチブチツ!!!

ドサツ

「か、萃……君……。」

「いやあくっしいよ無個性君。」

「死柄木……!?!」

「君の暴走を見させてもらったよ。本当……いいもの持つてるね〜?」

「Grr……a……AAAaaaaaaa!!!!」

「ふっ……僕の個性……分かるクセに突っ込むんだね……?モノ分らないな……。」

「萃君……ごめんっ!!」

バキィツ!!!

「Ga……!!」

死柄木を襲おうとした暴走車^俺を出久君は触れられる前に飛び蹴りした。もちろん暴走状態の俺は喰らってもまた襲おうとしているが。

しっかりと出久君に押さえられ、他のメンバーも俺を押さえつけた。

流石に俺でも皆の力には抜け出すことはできず、藻掻くにも藻掻けなかった。

「死柄木弔…君の狙いはなんなんだ…!!」

「邪魔な無個性を抹殺する…それだけさ。まあ今の状態でも殺れるけれど…真つ向勝負で闘りたいから存分に回復してからにしておくよ。それだけさ…もう満足したから帰るぞ黒霧…。」

「G r r r r r r r r r r!! G A A a a a a a a a a a a…!!!」

「艶星さん!!!しっかりとしてください!!!」

「艶星いいいい!!やつと見つけたと思っただよお前ええええええ!!!」

バシユッ

「え…?」

「G…A…a…a…?」ドッ

「ふう…やつと間に合ったわ…。まあアレを見れば少し遅かったけれど…。」

「ミッドナイト!?」

「どうも♪全く萃ちゃんったら本当におバカね…。」

「どういうことですか?」

「この子ね、助けてほしいって伝えていたらしいのよ。私の匂いを嗅いで…ね?」

「匂い……あ！」

「そう、この子つたらずぐ抱え込むから……ミルコもたまに萃ちゃんの行動を見てそう伝えられたことあったんだって。しかもこんな体が無理に壊しちやつて……本当お仕置が必要ね。起きたら承知しないわ。」

「ミッドナイト怖い……。とりあえず萃君はどうする?」

「そこは私達が引き受けよう。」

「警察の人まで出動する自体になってんじゃん!!」

俺はミッドナイトさん特性催眠弾を撃ち込まれたままなので起きるまで何処にいるか分からず、真つ暗闇の拘束部屋に閉ざされていた。

もちろん暴れたり妙な動きをしたらめちやくちや痛いものが飛んでくるみたい。

「やあラビットシップ。気分はどうだ?」

「げほつ……。こ……こは……? ガシャツ なに……こ……れ……?」

「覚えていないのかい? 君が暴走した記憶。」

「お……れ……びよ……う……いんか……らの記憶……あま……りない……。」

「あまりつてことは多少残っているんだね? 分かる範囲でいいから教えてくれるかい?」

「覚め……た……とき……くる……し……かった……。あし……どさん……危な……かつ……た……。」

「ふむ…ミッドナイトとラビットシップのクラスメイトの言っていたことが一致しているな…。ミッドナイトは彼が目を覚ましたと同時に頭を抱えながら苦しうもがいて泣いていた…それとクラスメイトが脳無という脳みその敵による攻撃を受けそうになった瞬間に身代わりになって受けて助けてくれた…と。彼の言葉は本当だな。」

「警部、本当ですか？嘘を言っているのかも知れないですよ？」

「無個性だからこそ分かるんだよ。しかもクラスメイトがそう言っていたんだ、嘘を言っているようには見えない。」

「なるほど…。」

「うっ…。」

「ん？」

「うっ…うう…痛…い…痛…い…あ…た…ま…い…たい…!!あ…ううう…!!ぐあ…
…がああAAAAA!!!」

「まずい…今すぐ看守に伝えるんだ!!麻酔を打たせろ！」

「AAAAAaaaaaaa!!!」

「ぐうっ…！なんて声だ…!!耳がおかしくなる!!無個性にしてはあまりにもレベルが桁
違いだ!!!」

突然の頭痛と暴走により俺は叫んだ。

ビリビリと空気が振動し、この部屋の中の人達の耳もおかしくしてしまうほどの声が出た。

バキィツ!!!

「ら、ラビットシップ!! 暴れちゃダメだ!! これ以上暴れてしまえば体が持たないぞ!!」

「G A A A A A A a a a a a a a a a a!!」

ベキヤツバキィツ!!! バキバキバキツ!!!

「くそっ……! 看守はまだか!! アクリルガラスが持たない!!」

「コロす……!! コロス!! ヴェいらんコロす!!! マっさツスル!!!」

ガチャツ!!!

「警部!! こちらへ!!」

「すまない!!」

ガシヤアアアアン!!!

「G R U A A A A A A a a a a a a a a a a!!」

バシユツ

ビスツ

「G a ……!! a ……: A a ……! A A A A a a a a a a ……!!!」

「くそっ! ヒーローの卵がこんなことあっていいのかよ!! しかも麻酔耐性あるなんて聞

いてねーぞ!! 強め打つぞ!!」

バシユツ!!!

俺は飛びかかろうとした直前で倒れ、そのまま救護室へ入った。

頭蓋骨には罅ひびが入り両腕は複雑骨折、肋骨は4本折れており、右脚首は完全に骨折、左膝は逆向きに折れていた。

それで立っていられたことにも驚きがあつたらしく、俺は過去に事例がなかった超要注意危険人物として監視されることになった。

そして俺は手術はされたものの、暴れられないようにしっかりと四肢を固定させられ、意識を彷徨っていた。

「全く……とんでもない卵を見つけてしまったようだな……雄英高校。」

13 優心

「うーわひでえなこれ。」

「もう一人の自分はどうしたらいいと思うかな？」

「いやもうどうにもならんだろ。」

「だよ。多分同時に発動しようとしたらなんか知らんけど歪みが生じて暴走しちゃったね。」

「スイッチが大事ってワケかい。」

「そーした方が安全かもね。」

気絶した時に意識の中で俺はもう一人の自分と話していた。暴走した俺はいるのかって？

それはいい。暴走した原因は俺ともう一人の自分が同時に表に出そうとしたら性格の歪みが生じて意識のバグが起きたとのこと。つまり、混ぜんな危険だクソがつてやつよ。

そして意識内の中の俺視点から現実視点にモトール。

「G…rrrr…。」

「せっかくの国民が期待していたヒーローの卵でもあり、話題の無個性ヒーローがこんなんじゃないなあ……。」

「どうやらラビットシップの中のエヴィルキラール？ってやつとの関係があるらしい。ラビットシップは彼をもう一人の自分、キラールと呼んでいるみたいだ。」

「とは言え、そのキラール？ってやつ大丈夫なのか？敵の連中と同じじゃないか？」

「彼曰く、大丈夫だつてさ。最初は暴走していたものの、切り替えも上手くできるようになっていたらいいんだ。だけど今回は全く別物が出てきた。獣のような動きで敵を殺戮していた。仮の名前だが、その超要注意人物 ラビットシップのもう一つの性格を^{ビースト}獣人と呼ばせてもらっている。」

「ビー……スト？」

「キラールは彼のもう一つの性格だ。キラールがあんな動きをした覚えはないだろう？」

「確かにないです……。サイコパスみたいな感じはありましたか……。」

「さ、サイコパスって……他に言い方はなかったのかい？」

「それしか出てきませんでしたツツ!!」

「ぶ……ぶう……ガシャン……?」

「目を覚ましたところで済まない。暴走して体の一部がやられてしまつては元も子もないから念の為拘束しておいた。」

「お、俺……は……。」

「君は今、どっちだ？」

「キラー……じゃ……ない……。」

「うん、どうやら戻ったみたいだね。暴走してからの記憶はあるかい？」

「そんなに……ない……です……。」

「あの記憶だけってことかな？」

「はい……。」

「うむ、とりあえず監視を付けておこうか。ラビットシップ、申し訳ないんだが君にもう一人監視を付けておくことにする。君が暴走してしまうと歯止めが効かないからね。」

「……言うことは何も……ないです……。」

「すまないね。リニューキュウ、ラビットシップを頼んだよ。」

「分かりました。ラビットシップ、これからよろしくね。（こんなに可愛い子が暴走するなんて……何かあるはずよね……。）」

「は、はい……。」

「さてと……ラビットシップ、皆が君に会いたがっている。判断は……君に任せる。」

「ラビットシップ、どうする？」

「お、お願い……します……。」

暴走した後なのに皆が会おうとしている理由は俺には分からなかった。

俺の立場上敵の立場になるのだが、そう考えてもおかしくないはずなのに、何故か俺を敵判定にすらしなかった。それすら全く理解が出来なかった。

バアアンツ!!!

「萃ちゃああああああああああん!!!」

ガバアツ!!!

「ぐえっ!!!」

「み、ミッドナイト…ラビットシップに飛びつく勢いが…。」

「だってえ…だってえええええ!萃ちゃんのバカッ!本当あなたは何しているのよっ!!!」

「ご、ごめんにやしい…。」

「萃君!良かった…戻ってる!」

「萃ちゃん!ちゅーしていいわよね!?元に戻ってもしっかりお置きしないと落ち着かないわ!!」

「か、勘弁してください…ちよつと待ってあああああああ!!」

「艶星君戻ったんだn何しているんだねっ!!!」

「拘束具のせいでミッドナイトさんからのちゅーは避けられなかったあ…。」

「くっくっ」

「あ、あはは…ミッドナイトの暴走は止まらないみたいだね…。」

「あ…それと皆、迷惑かけて本当にごめんなさい！俺…暴走していた記憶はほとんど無
いけれど」「大丈夫だよ萃君」でも…！」

「僕達が見てた。暴走とは言っても君の暴走は敵を捕まえる方の暴走に走ってた。やり
すぎでいたこともあったけれど…。」

「萃ちゃん、警部さんから聞いたけれど私の匂いを嗅いだことと芦戸さんを庇ったこと
以外覚えていないの？」

「はい…全く覚えていなくて…。」

「ビースト。」

「…え？」

「萃っち、ビーストモードって言ってた。なんか腕の筋肉が凄いことになって、髪の毛
が凄いバサアってなってた。とにかく語彙力がなくなるくらい凄いことになってたん
だよ！まあ…表情が見たことないくらい怖かったけれど…。」

「そうなんだ…ごめん、怖い思いさせちゃって…。それと多分暴走した原因が分かっ
た。」

「どういうこと？」

「俺の中にもう一人の自分と一緒に表に出そうとしたら性格に歪みが生じて暴走し

たんだと思う。暴走後、麻酔を打たれて意識がない間に中で現実の俺の姿を見たからさ。」

「待って待って、どうやって自身の体を見たの？」

「つ、つまり…艶星さんは一度抜けたってことよね…？」

「うん、八百万さん正解。まあ…一度じゃないけれど、何度も抜けて見てるの。」

「簡単に言えば幽体離脱ってやつだな？」

「そゆこと、クイズみたいになっちゃったね…。とりあえず寝てる間だけなら自由にとまではいかないけれど適当にやったらそれが出来た。」

皆驚いた様子だった。

まあそりや自由にやれたら今でもできるんだがな。

適当っていうかコツを掴みながら適当にやったようなもんだけど正直なところ、抜けると起きた時めちやくちや疲れる。

今回は疲れるといったようなことは起きなかったが、普段は汗びっしりです。

んで、一時的に捕獲されていた俺だが、監視を強化されつつも皆と雄英に通えるようにまで回復して休日に入った。

「…。」

「…。」

「……………」

「あの…。」

「なにか？」

「いつまで俺の腕を抱いているんですか…？」

「暴走させないためよ。ダメかしら？」

「い、いえ…ただその…。」

「？」

「人がいないからといって…ガツシリと腕を抱くのは…。」

「むう…可愛いからいいじゃない…。少しは癒しをくれない？」

「なんか急にキヤラ変わったぞこの人。」

「あー!!りゅーきゅー!!私の萃ちゃんになんてことしてるのおおお!!」

「あなたのじゃありませんよミッドナイト。皆のラビットシップですから。」

「はーじまったよこれ…。」

監視役二名（大人女子）と雄英生一名での謎のお出かけ。

ミッドナイトさんは相変わらず俺に抱きつくわキスを責めてくるわ眠らせてくるわ襲ってくるわでもう既に大変です。

それとは真逆でリユークウさんは大人しくて面倒見のいい人でなんとなく落ち着

く。だけど腕をガツシリ絡ませてくる。痛いです。

ちなみに買い出しではなく、ただ単に欲しいものを買いたかっただけなので買わされに来たわけではないです。だけど嫌な予感がします。

「ねえねえ！萃ちゃんにこの服似合いそう！」

「何言っているのですか。こっちの方が絶対似合いますよ？」

「いやー！萃ちゃんは可愛い方が似合うの！」

「可愛いだけではなく、大人しめも似合うと思いますか？」

「ねー！俺の欲しいやつを買ってからそーゆーの買って!？」

「むう〜！萃ちゃん大改造したかったのにー！」

「とりあえず今は休戦しましょうか。ラビットシップの欲しいものが優先なので。」

「ちえく。ま、萃ちゃんだから許そつと！」

「あ！おかーさんおかーさん！ラビットシップいるよ！」

「ほえ？」

「こちらら！…ごめんなさい！この子ったらラビットシップの大ファンで…。」

「はわわ…そうなのですね…？」

「えへへ〜♪」

（うん、子供と接してる姿最高に可愛い。）

「ねーねー！サインほしい！」

「こ、こら！本人に対してそんなことを…。」

「大丈夫ですよ。お嬢さん、ちよつと待つててね？ミッドナイトさん、ペンありますか？」

「え？ええ、あるわよ？あ、書くの？」

「そですけど？」

「成長したわねえ…。本当天使みたいだわ…。」

俺はたまたま声をかけられ、サインが欲しいと言っていた少女にサインをしてあげた。もちろんサインはしたことがなく、俺のファンだということも知らなかった。寧ろファンが居たなんて思わなかった。

「えへへ♪」

「いいのいいの♪」

「わざわざすみません…ほら、ありがとうは？」

「ありがとうーラビットシップ！だいじにするね！」

「こ、こちらこそ…／／ ファンがいたなんて思わなかったけれど、こんなに嬉しいことだつて気付かされました…。」

「わたしもラビットシップみたいにつよくなるからね！」

「この子、無個性で生まれた子なのですが…ラビットシップを見て憧れを持ったんです。グズが出たら全部欲しいって言うくらい大好きで…。」

「萃ちゃんやっただじゃん！ファンがいて、その上元気をもらった子もいるのよ?!とても嬉しいことじゃないの!」

「う、嬉しすぎてどんな表情していいか分からない…。」

そのあと俺とリユーキュウさんとミッドナイトさんはそのファンの子の家族と別れ、俺はめちやくちや嬉しそうな顔をしたまま買い物をした。

帰り際は事件もなく久しぶりの平和な休日を送ることができた。

そしてその夜。

「はあ…疲れた…だけど良かったな。今日の休日は。」

「嬉しそうじゃないか…ラビットシップ…。」

「…!!し、死柄木…弔…!?何故ここnスツ ツツ…!?!」

「あと一本の指で掴まれたら君はバラバラになる…。抵抗はしない方がいい。」

「も、目的は…何だ…。」

「君を知る為に来たのさ…。殺すつもりはないが、抵抗したら英雄ごと消す。」

「へえ…らしくない質問だな…。オールフオーワンが指示したんだな?」

「……………」

「やっぱりか…すまないが、君が知りたいとしても俺自身も全く分からないんだ。俺は人間の出来損ないだからな。」

「はああ…そういうことか…。今君を殺すのは惜しい…実つてから殺してやる。」

パッ

「死柄木弔、過去に何があつたのかは分らんが…俺のクラスメイトに手を出したら真つ先に牢獄にぶち込む。」

「それはどつちのセリフだろうねえ？それじゃあな、未来の無個性ヒーロー君。」

スウ…

「……………ぶはああああああ!!死にかけてたああああ!!なんやねんいきなり!!物理的に殺害予告してんじゃねーよ!!かまちよなの!?!ねえ!死柄木君かまちよなの!?!ゆっくりしている日に心臓止まらせかけるのやめてくんねーかなああああ!!」

急に死柄木弔が黒霧のワープで侵入してきて殺害予告とか知りたいこととか聞いてきた。もうなんだよこれ死にかけるわ(○)

平和に終わったと思つたらまーたこれだよ!

平和つてなんでしょうか…?

ちなみに就寝時はゆっくり寝られましたでしたが、翌朝は芦戸さんが突撃して起こしてきたので心臓止まりました(○)

1 4 気持ち

「最近、日本側からの連絡が取れていない。連絡はしてみたか？」

「いや、連絡はしたものの一切出て来ずだ。」

「気付かれたか…？」

「ボス！何者かに殺されたと今情報が入りました！」

「何だと？奴の個性はヒーローでも厄介だと言われているハズが…殺った奴は誰だ？」

「今捜査中です！」

「日本を乗っ取るまであと一歩だったハズが…！今すぐ奴を探せええええ!!」

俺達の平和な日常は続いていたものの、俺達の知らない裏側では闇社会が動き始めていた。その発端は俺が暴走した数日後に起こっていた。そう、暴走した俺が噛み殺した敵から始まっていた。

「ふわああ…おはよー…。」

「おはよう萃君。凄く眠そうだね…。」

「うん…最近ねー…キラーが毎度毎度一緒に出てこようとして大変…。」

「萃君とキラーって意外と性格が真逆なんだね？」

「そうなんよ…180度真逆なんよ…。」

「デク君萃君大変!!とんでもないことが起きてもうた!!」

「麗日さん／お茶子ちゃん?」

「これ見て!!」

ザザッ

『不味い不味い不味い!!!逃げろおおお!!プロヒーローですら苦戦してる程の敵が来るぞおおお!!』

『いやああああ!!お願いだから来ないでえええええ!!』

『かーっはっはっはっは!!お前ら雑魚には雑魚死がお似合いだぜええええ!!』

ブツッ

「……………ツ。」

「な、なんだよ…何だよこれ…!!」

「雄英生出勤の話も入ってるって…。」

「悪い…俺。パス。」

「な、何を言ってるんの萃君!」

「そうだよ!こんなに酷い状況が動画で出てるのに!!」

「いくら俺が回復したところでそこに行けば暴走する。結果は分かっているハズだ…。こ

んな…こんな俺が救助するなんてできねえ…。怖がられて当然だよ…！」

「そんなことない！芦戸ちゃんを助けた時に感謝してたんだよ!?なのに怖がられるなんてことg「あるんだよ。市民達に…。」なんなら…！」

「分かってくれねーんだよ。暴走した俺のことが根強くイメージに残されているはずだ。どんなに分かってもらおうとしても逆に殺されかけるだけなんだよ…。」

「認めてもらえるようにしたらええやろが!!あんたは殺されかけていようが死にかけていようがお構い無しで戦闘に突っ込んでいるクセに今更殺されかけるのが怖いなんて弱音吐くなボケ!!」

バンツ!!!

「萃君…確かに分かるよ。君が怯えてる理由も救助したくても恐れることも…。だけど君は違う筈だ!!そんなこと言っていたって成長できないんだよ!？」

「できないんだよ!!」

「ツ…!!」

「俺だつて皆に追いつけるように成長しようとしたつてできねーんだよ!どんなに努力しても、どんなに考えても、どんなに変わろうとしたつて君達ができることをしたつて俺はできねーんだよ!暴走した時なんて皆を傷付けたくなくて逃げたしとんでもねー迷惑かけtバキツ!!! ぐツ…!!」

「そこまで言うなら成長しなくていいよ！君だけ成長できないなんて言っている時点で大間違いだ!! 萃君がそこまで言うなんて珍しいとは思ってたけれど、人を襲うかも知れないから救助に行かなくていいみたいなのを簡単に言わないでくれ!! こんなの…以前の僕を見てるようだよ!!」

バンツ!!!

「……はあ。なんでこんなこと言ったんだろうな…俺…。」

「…どうしよう…萃君を殴ってしまった…。凄く気まずい…。」

お互い複雑な気持ちを持ったが、俺が悪い。

お茶子ちゃんや出久君の言う通り、俺は今更弱くなったところで何も変わらないし何も出来ない。

似たようなことを誰かに言われたような気がしたが、俺は未だにそういうことは成長できていない。出久君が言っていたように成長しなくていいところは無理にしなくてもいいかも知れない。

俺はダンマリとしたまま放課後を迎え、図書室で読み物を見ながら考えまくっていた。

「成長しなくていい…か。バカだよなあ…俺。」

「あら、何ぼけーつとしてるのよ？抱きたくなるわあ〜♪」

「しれっと過激なセクハラ発言しないでくれませんか？」

「いいじゃない♪減るもんじゃないし♪」

ギョツ

「はあ…全くこの人は…。」

「珍しく抵抗しないのね？何か悩んでいるのは分かるわよ？あのことをまだ引きずっているの？」

「そ、そうですけど…。」

「もう大丈夫なのよ？皆分かってくれているし、無理に治そうとしたって余計に体への負荷がかかるだけ。だからあなたはゆっくり治していけばいいのよ。救助活動すらできないくらい不安もあるだろうけど、あなたはもう子供じゃないし一人で考えているんだから。あなたにしかできないことだってあるのよ？」

「俺にしかできないことって…？」

「私を誘惑させること。」

「聞いた俺がバカだった。」

「待つて待つて！行かないで！あなたは緑谷君と同じようなことができるのよ！だから、目指すものを目指していきなさい？」

ドガアッ!!!

「なんじゃ!?」

「敵ね!? タイミングが悪すぎる…! 萃ちゃんの中にいて!」

「まずい…!! あそこに出久君とお茶子ちゃんが!!」

「なんですつて!?!」

一方…

「くそっ! なんだよこの個性…! 初めて見る個性だ…!!」

「デク君! 気を引きつけるから仕留めて!」

「分かった!!」

「がーっはっはっは!! 悪いなあ! 俺の個性は個性からのダメージを無効化させる個性だからなああ!!」

「ワン・フォー・オール…フルカウル…ツ!!」

ゴッ!!

「がはっ…!!」

「デク君!!」

「麗日さん…逃げ…て…!!」

「イヤヤ! 逃げるならあんたも連れてくわ!!」

「おうおうおう! お友達の面倒を見て暇はないぜえ?」

ガッ

「うぐっ……!」

「雄英生って結局弱いもの集いじゃねえかよw あ、俺がさいきよーだからか!! はっはっは!!」

「……麗日……さん……!!」

「……脚部換装 駆逐艦 島風 全速力+64cm酸素魚雷ツツ!!」

ベキヤアツ!!!

「おっおっ!!」

「うわっ!!」

トテッ

「はあー……本当俺って成長できてねーなあ……。」

「かな……め……君……?」

「ごめん、出久君。俺が間違えてたよ。バカでポンコツな俺だけ……今は俺にしかできねえことをやる!!あの時の発言は前言撤回だ!!死者を出さずに救助してから敵をぶっ飛ばして牢にぶち込む!!」

「萃君……本当バカ。最初からそう言っていればよかつたのにつ!!」

「とりあえず二人は安全なところに!こいつあ俺と相性がよさそうな奴だな!!」

放課後に起こっていたことが幸いだったからか、俺は出久君と一緒に鍛錬していた所に砂塵の勢いで敵がいることに即で気がついた。

出久君は普段砂塵を起こすような特訓をしないし、遠隔攻撃の特訓しかしていなかったからね。

「私はまだ行けるよ！萃君にだけ無理はさせられへん!!」

「僕も…これ以上負担はかけさせられない!!」

「本当…雄英に入って正解だったわ!!二人とも行くよ!!合図を送るからそれに合わせてほしい!!お茶子ちゃん、重要な役割になるけどいいかい?」

「うん…!」

「今のうちに蔓状のものか木の根っこでもいい、奴を縛れるようにしたいんだ…!」

「分かった。」

「よし!そんなじゃあ…行くぜっ!!出久君は遠距離攻撃で頼む!奴を観察していたから分かるが、攻撃属性に変換された個性を無効化する個性だ!」

「そういうことか…!任せて!」

「なーにごちゃごちゃ言ってるんだガキ共おおおお!!」

ブオンツ

「てめーうっせーぞ!!」

ベゴオツ!!

「ツ……! 何だコイツ……力が……!?!」

「相手は彼だけじゃないぞ! 無化澤 効司!!」

「……何故俺の名前を知っているクソガキやああああああ!!」

出久君は何故か名前を知っていた。

多分すぐに調べたと思う。早すぎる。

敵の個性は無効化、全ての個性で攻撃属性となった個性は無効化される個性だ。だが、奴自身は全てを無効化できると思い込みすぎて理解していなかった様子。過信しすぎたんですね。はい。

結構凄い体格はしているが、動きは鈍くてすぐに避けられる物理攻撃ばかりだった。弱点多すぎじゃね?

「ワンフォーオールフルカウル……! デラウエアスマツシュ エアフォース!!!」

バシユシユシユ!!!

「いでっ!! 何故だ! 何故無効化するハズのものが無効化されない!!?」

「お前自分の個性を分かってねえなあああ! 全ての攻撃を無効化なんて出来るわきゃあねえだろーが!! バカ野郎おおおお!!」

「なっ……!?!」

「全力アツパーあああああああ!!!」

ベキヤアツ!!!

「おごっ!!!」

「ワンフオーオールフルカウル! シュートスタイル: セントルイススマッシュ!!!」

ドゴオツ!!!

「何故ええええええあああああ!!!?」

「脚力40・9%:!! 目標補足: 砲撃準備完了ツ!!」

「お、おいおいおい: 嘘だろっ:!!?」

ビュオツ

「お前は選ぶ相手を間違えた!! 牢でしっかり反省しやがれ!!」

「ワンフオーオールフルカウル: 20%:!!」

「金剛型戦艦参番艦 榛名 火力100%:!!」

「なんて思ってたかガキども」

「ド根性マンチェスタースマッシュ!! / 36cm三連装砲!!!」

ドガアアアツ!!!

「ごほあああああああつ!!!」

「お茶子ちゃああああああん!!!」

「でえやあああああああああああ
!!!!!! 解除おとおおとおおとおお!!!!!!」

ガガガガガガッ!!!

ズドオオオオン!!!!

「着地いいいいいい!!!」

ドオツ!!!

「萃君派手に着地したけれど痛そうだなあ…。」

スタツ

敵を無力化させ身柄拘束をしたのは良かったが、出久君とお茶子ちゃんが酷くではないけども怪我をしていた。

出久君は打撲と骨の一部に罅ヒビ、お茶子ちゃんも同じく打撲で擦り傷、俺は静かに怪我をしていた。

敵との拳の撃ち合いによって手全体に罅が入って一部骨折、腕に多少の罅が出ていた。

「はあ…はあ…! やつと追いついたあ…! つてもう捕獲したの!?!」

「ミッドナイトさん遅いです!」

「報告しなきゃいけないかったのに貴方が急に飛び出すからでしょ!?!」

「とりあえずあの敵を眠らせて! 気絶しているからもう少ししたら起きちゃうの!?!」

「えっ…まさかあの敵…!」

「誰か知っているのですか?」

「萃ちゃん…これはとてつもない異常事態になったわ…! 緑谷君、麗日さん!」

「はいっ!!」

「貴方達は保健室で体を休ませて回復しておいて! もしかしたらゆっくりできる暇がなくなる!」

「ミッドナイトさん…?」

「萃ちゃん、このことは私が先生方に伝えておくわ。貴方達が協力して拘束したことももちろん伝えるわ。だけど、コイツ…本当に面倒なことになったわ…!!」

ここからまたえげつない事件に巻き込まれるなんて俺は知らなかった。

いや、もうとつくに巻き込まれた上に巻き込んでいたのだ。

ミッドナイトさんにひよいと抱き抱えられたまま言われていたから説得力はなかったけれども…。

#14.5 公式バトルイベント

「ねえー！ミッドナイトさんなんで教えてくれないのおおお！」

「しようがないじゃない！萃ちゃんに教えたらまた貴方壊れるでしょおおお！」

「おーしーえーてー!!」

「いーやーよおおおお!!」

「おねーちゃんって呼ぶよおおお!!」

「言われる前に眠らせたるわああああ!!」

「ねえ、ミッドナイト先生と萃君がすごいことしてるよ…？なんか凄く癒される光景なんだけど…っ！」

「まるで姉弟だねえ…。」

現状を説明すると、帰り際に起きた敵との戦いでミッドナイトさんが気になるワードを放っていたので細かく聞こうとしていた。

最近雄英に侵入者が多いのはそいつらが原因かと思う程なので気になってめちゃくちゃしつこく聞いてみたのです。

グググ…

「もによおおお……!!」

「かーなーめーちやーん!!はーなーれーてー!!」

「いーやーだー!!」

「なら眠らせるだけよ!!!」

グイッ

「ひゃあ!？」

「しっかり寝ておけええええ!!」

抱き抱えられたまま眠らされました。

離れようとしていたのにまた引き寄せるなんて……。

ミッドナイトさんには勝てないし、可愛いし綺麗だしで何も逆らえないっす (○)

あれ? さっきマイダーリンって言ってなかった?

パチッ

「お、目が覚めたな。ミッドナイト先生が運んで来たらしいが、また暴走したのか?」

「おはよ障子君…敵が侵入してきていたけれど俺と出久君とお茶子ちゃんできつ捕まえただけだから大丈夫。あんまし覚えていないけれど、ミッドナイトさんが気になるワードを言っていたから無理矢理聞こうとしつこく詰め寄っていたら強制的に眠らされた。」

「そ、そうか…。」

「障子君。」

「なんだ？」

「障子君って個性の中で上手く使いこなすのが難しそうなイメージするけれど、実際のとこ難しいの？」

「まあ…難しいと言えば難しいかも知れないが、こなせば大分楽だ。」

「ほへえ…警戒する時に周囲を見渡すのはかなり大変だったりする？」

「そりゃな、俺の個性はメリットがあってもデメリットがあるんだ。」

「どんなデメリット…？」

「例えばこの腕で沢山の目を使うとして、最初に出した目と新しく出した目があるとする。」

「ほむほむ。」

「最初に出した目と新しく出した目でどちらが見えやすいと思う？」

「んー…一般的な考えだとしたら新しい方が見えやすいってなるけれど、デメリットとしての考え方だとしたら、新しい方が見えにくくなって最初に出した方が見える…って感…。」

「そう、出せば出す程質が悪くなっていく。だが、自身を鍛えることによつて大分範囲が

「拡がるんだ。」

「ほほう…俺も無個性ながらも使える技の範囲が拡がるのかな…。」

「お前なら無個性でも拡がる筈だ。無個性の中でも強い存在ではないか？」

「いや、俺はまだまだ弱いさ。特に心コイツが弱い。」

「あるあるだな。」

「あ、萃君起きたんだね！」

「おいコラ無個性!! タイマンやるぞコラア!!」

「かつちやん落ち着いて!!?」

「萃っちいいいい!!」

ボフッ

「ぎよべっ!?!」

「三奈、寝起きだからあまり刺激するなよ?」

「ごめんごめん! 萃っち、このニュース見た?」

「なんじゃ?」

芦戸さんが見せてきたのは二年に一度開催される公式のバトルイベント、ヒーローとヒーローの勝ち抜きバトル。

雄英生も参加するという特大イベントで、あの殺意マシマシな非公式クソイベントと

は違い、しつかりとしたルールが設けられている。

「んーと…『戦闘不能、気絶、失神、リタイアをすると試合終了。上位ナンバーズヒーローが対戦相手になることもあるが、そこはリタイアしてもよい。だが！血気盛んな生徒やヒーロー達は対戦相手になったとしてもリタイアせずに挑んでヨシ！』…なんか文章のテンション急すぎない？」

「萃つち知らないんだっけ？」

「うん、俺こういうのあんまり分かん。」

「どうせ参加することになるから、皆で対策を練ってみない？」

「ヒーローに関することならあのクソナードに聞いてみる。キモイ程メモしてやがるからな。」

「き、キモイって…。」

「とりあえずコイツの学びっぷりは侮れねえから死ぬ気で教えてもらいやがれ！」

「爆豪君めつちや優しいやん…。ツンデレのツンだけが究極に強化されたやつやん…。」

「か、かつちゃん…一体何があつたんだろ…。」

出久君は珍しい表情で爆豪君を見ていた。

彼曰く、発言がいつもより丸くなっていたとかなんとかだと言う。

俺は全く分からんが。

「無個性…デク…アイツら二人には負けたくねえ…！上り詰めて俺が最高のヒーローになつてやるんだ…！」

「おいバクゴー！なーにしてんだー？」

「切島かよ…！ビビらせんなクソが！」

「相変わらず口が爆弾だな！なあ、俺と組んでみねーか？」

「あ？」

「なんつーか…お前の個性に耐えられるのってクラスでは俺と轟とヤオモモくれーしかいねーからさ。」

「何故アイツの名前まであんだよ。」

「防御面では中々たけーから。あとその二人は他のメンツと組むつてなった。」

「…しゃーねーなア！俺の足引つ張んじやねーぞ！」

「おうよ！」

一方、俺は…。

「やべえ…いねえ…。」

「二人で一組つて書かれていたから一人にさせてしまうのは申し訳なく感じるんだが…。」

「よし、大丈夫だ。俺に秘策があるからな！」

「『『『あるの!?!』』』」

「思いつきだけどな!」

「マジかよ…。」

俺達はその公式イベントに出場が^{強制}確定されており、一般人も見られるようなものになつていた。

俺はもちろん出るものの、とんでもねー批判が飛びそうなのは分かっているけれど、対策もしつかり考えた。もちろんその場の思いつき。

そして数日が経つて公式イベント当日…。

「さあやって参りました! ヒーローvsヒーローの公式バトルイベントオオ! あの有名なヒーローからヒーローの卵達まで勢揃い! もちろんタッグバトルで出場があるわけですが、2vs1でのバトルも可能となつております!」

「うわ…マジで2対1の戦いあんじゃん…。俺終わったつぼくね?」

「いえ! 艶星さんならいけr…あ…難しそうかも知れないですわね…。」

「でしょ!?! 相性が最悪な個性もあるから相手にしたら泥試合だぜ!」

(涙目の艶星さん…可愛いですわ…。)

「一回戦目は…!?! いきなりの話題になつているヒーローの卵^{ルキ}!! 運悪くも、一時期悪い話題にもなつてしまった被害者でもある無個性ヒーロー!! ラビットシップウウ!!」

はい、予想通り。

俺が最初に出るということは正に終わりを告げる運命みたいなやつ。

あの暴走の件に関してのニュースがあまりにも流されていたため、クラスメイト以外の周りから避けられていたので聞いた瞬間に周りが凍りついていた。

「あんだと!? あんな危険な奴をヒーローと呼べるかア!!」

「暴走するんでしょ!? 今すぐ降板させて!!」

「あーはいはいどうも、話題の無個性ヒーローでーつす。」

「なんだとガキコラアア!!」

ブンッ

ガシヤアアツ!!!

「…イテエ。」

「大ブーイングだなあ…。いきなり瓶もぶん投げられて萃のやつ大分キテるだろーな…。」

「萃君…。」

ギャーギャー!!!

「司会者さん、ちよつとマイク借りてもよろし?」

「あ…はい…どうぞ。」

「すうう…。」

「ッ…!! おいおめーら! 耳塞げ!!」

「「「ふあ?!?」「」」

「う r r r r r っせええええええええええええええええええええええ!!!!」

ギイイイイン…!!!

「ううっ…! み、耳がああ…!」

「なんちゅーデカさ…!!」

「観客からの罵声が雑音にしか聞こえなくなってきたか…!! だが分かるぞ…その気持ち
!」

「俺に悪口やら何やら言うのはいいけどよおーてめーらの周りをよく見てみろ! 楽しんで見ようとしている客が目に入らねえのか!? 俺に罵声を浴びせることだけ楽しもうと思っただけでねーだろーなあ!! てめえらのその行動を見て他のヒーローファンはどう思う!!? 俺は別として、他のヒーローの応援をしようとしていた人達からしたら不快極まりねえ行動だぞ!?! 場を弁えろ!!」

「うっ…た、確かにそう…だよな…。他のヒーローを応援したい人からしたら俺達のやっていること…敵と同じようなことをしているな…。」

「アイツ暴走するから何を言っても正直言われたくねーな。」

「それな。あんな危険人物に言われるくらいなら死んだ方がマシだぜ？」

「そ、そんなことないもん!!」

「ち、ちよつと……!」

「あら？ 萃ちゃんのファンの子……？」

「ラビットシップは凄く可愛くてカッコイイヒーローなんだもん!! 私知ってるんだから！ 他のヒーロー達よりもすごーく強いんだから！ どんな強い敵にだってやられても負けないし挫けないし、倒れたりなんかしていない!! ラビットシップはムコセーでもどんなコセー相手にだって負けないで立ち上がり続ける最高のヒーローなんだからあああ
あ!!」

「「……………!!」」

パチパチパチ

「よく言った少女！ 君はラビットシップ君のことをよく分かってくれている！」

「うん、こういうことを人前で言うのって勇気いるけれど、君はしっかりしていて素晴らしいよ！ 萃君！ 聞こえたかい?!」

「おうとも！ ありがとね!! 君のおかげで冷静さを取り戻せたよ！ あとで何かサービスしたげる!!」

「はわああ〜！ ラビットシップありがとおおお!! 頑張つてええええ!!」

((うわあすっごい和む…))

「お、お嬢ちゃん…その…すまねえ…。俺らはどうやら彼を勝手に悪者扱いにしてしまっていた。お嬢ちゃんの言葉にラビットシップへの熱意が伝わったよ…。確かに彼は個性相手でも怖気づくことなく怪我人を守っていたし、助けられていたのを思い出したよ。謝罪と同時に感謝するよ…ありがとう。」

「あ、あの…そろそろマイクを…」

「あつ…すみません、どうぞ…(汗)」

「さ、さてさて！仕切り直しづらいところ申し訳ありません！続けていきます！ラビットシップが出場し、対戦相手はどんな相手になるでしょう！！対戦相手は…！この人だああああああ！！」

ガコツ

「…………ウツソだろおい…！！」

「あ、ラビちゃん。」

「また萃ちゃんじゃねーかよ！！もう皆飽きてるだろ！！」

「…「わあああああああ！！」…」

「来たあああああああ！！この組み合わせでの戦いは正に恒例と言っている程じゃん！！」

「しかもリユークユウまでいるからもっとハードな戦いになるぞおおおお!!」

「ラビットシツプー! 頑張つてえええええ!!」

「ふふっ♪全くこの子は本当にラビットシツプ大好きなんだから…♪」

「いやマジかよおおおお!! お世話係担当してる人じゃねーかあああああああ!!!」

い つ も の ()

1 5 コレジャナイ感

「ねー待ってよおおお!!納得いかなーよおおお!!」

「こ、これはあ…いつもの組み合わせ+リユーキュウでやっておくと何故か盛り上がる
と言われてそのままこうなりました…。」

「とりあえず察した!暴走をした時に対応できるようにしたんだな!?そんなら感謝する
わ!!」

「萃ちゃん!闘るぞおお!!」

「ミルコ…血の気多すぎじゃない?」

「アイツの成長した姿が見てーからな!お互い連携しながら闘るか!!」

「そうね…闘りましたよ。ラビちゃん、手加減はしないからよろしくね♪(ニッコリ)」

「ひえっ!?!と、とりあえずよろしく願います!!本気出しますからね!」

「ルールは簡単!場外、時間制限は無し!気絶、失神、戦闘不能になれば試合終了!それ
では…」

………カアアアアアアアアア!!!

「スタートオオオオオオオ!!!」

ビュバツ!!!

「えっ……?」

「何ぼーつとしてんだあ?」

ドボツ!!!

ミシツ

「こはっ……!? (る、ルミ姉……強くなりすぎっ……!）」

シユツ

「休ませないよ。」

「し、しまっ……!!」

ズツ……

「あ、かわ躲された。」

「殺意剥き出しじゃないですかっ……!!」

「いきなり押されてんじやねーか!!雑魚になつてんじやねーぞクソ無個性!!!気合い出せやコリアア!!!」

(うぐっ……ヤバい……早速追い詰められた……こんなの……俺が消されるにッ……!!)

ドズウツ!!!

「くびゅっ?!」

「先制攻撃には弱いからね。だけど、私達には関係ないから！」

「今まで何してきたコラア!!本気出しな萃!!!あたしに殺られる前に闘れ!!!」

ボゴオツ!!!

バキツ

「がっ……あ……!!? (不味い……死ぬ……コスの意味がっ……!)」

「ま、負けちゃイヤ……!ラビットシツプ頑張つてよおおお!!負けないでええええええ!!」

(わ、悪い……お嬢ちゃん……俺……力が……出せないや……闘つてやる……!!)

ザツ

「もう一人の自分頼む!!!」

「やっとなたわね!!」

「クヒヒ……!久々に出たぜえ……!!ミルコ、リユーキウウ……てめえらをぶつ飛ばす!!」

「萃ちゃん切り替えたな!？」

試合開始されて五分が経つてキラーが発動された。今の俺ではいきなり不味い状況に追い込まれてしまった為、キラーを呼び出してとりあえずは交代した。

本当は通常形態で戦いたかつたんだがな。

「ごんのっ……!月輪!!!」

「兔踵撃ッ!!!」

ドゴツ

「うぐっ…!!」

「ごほっ…!!?」

「隙が見えるよラビちゃん!!フンッ!!!」

ゴオツ!!!

「やっべ。」

ドガアアッ!!!

「ぐあああああつ!!!」

ピヨンッ

「一撃…重かったぜ萃ちゃん!!ルナ・フオール月面落下!!!」

「おいおい…隙が無さすぎだろ…。」

ズガアアンッ!!!

パラパラ…

「お、おい…どうなった…。」

「ミルコ相変わらず容赦してねーな…あんなの喰らえば多分死んだろ。」

「うっ…うう…ラビットシップラ…!!負けてないよねえ…!!負けないんでしょお

「おお!? 返事してよおおお!!」

「んー…おつかしーなー…手応えがねえぞ?」

「そんなはずないわ。寸まで動きを止めてたはずよ?」

「そーなんだけどなー…。」

「あつ…。」

「はあ…はあ…はあああ…!!」

「ん?」

ズパッ!!

「ラビット・シックル 兎の脚鎌…!」

「ラビちゃん…!?!」

「お嬢ちゃん、俺は負けてねーから安心せい…!」

「ラビットシップううう!!」

「俺らの知らねえとこでいきなり成長しやがったかあの無個性!」

「だが艶星君の様子がおかしいぞ!? 髪型が…。」

「萃君、無茶したんだ…。ミルコの一撃が避けられないからリューキュウに押さえつけられて寸で離れた後、少しだけしか動けなかった筈だけど右肩を犠牲にして、体が浮く程の衝撃を利用して離れたんだ…。萃君体が軽いからね。」

「めっちゃ分析してるやんデク君…。」

「萃の勝利は見たことねーから勝ってほしいって思うんだけど、やっぱりあの鬼タッグだから余計に難しいか…?」

「いや、ほんの少しだけ勝率が上がってるよ。彼、雰囲気がめっちゃやくちや変わってる。」
 「んー…やっぱり慣れねー…複雑な感じだ…。右肩めっちゃやくちやクソ痛え…。キララの奴無理しやがって…あとで説教だな。」

出久君の言う通りルミ姉の一撃を喰らったものの、なんとか態勢を立て直していた。もちろん元の俺の人格。

元の俺は本気を出そうにも相手の本気が強すぎて何もできなかつたが、このイベントが始まる前までの数日間は何もしてこなかつたワケではない。獣ビーストの発動に専念していたのだ。

めっちゃしんどかつた。

ビースト「獣モード…兎!」

「私のいないところでそんなことをしていたのね…!!早く倒れて休みなさい!!」

「…休めません!!」

「萃ちゃん、よく見てみな!今のあんたは井戸の中の蛙だからな!」

「ルミ姉…それは負けフラグってやつ!」

「あ、やべっ。」

「そんなフラグなんてへし折ってやるわよっ!!」

ゴオツ!!!

「折らせない!!」

ドンツ!!!

「はああああああああああつ!!! 《兔の憤怒》!! 兔ふんぬ 噴射ラビット・レックジエット!!」

ビュツ!!!

ドゴオオツ!!!

一方観客席では——

「なんなんだ! 今までの萃とは違いがありすぎる!!」

「このまま押せるんちゃう?」

「いや! このままじゃ押し返せない!!」

「緑谷どうしてだ!」

「萃君の髪は今金髪から白に変色しているけれど、よく見たら元の色に戻ってきてるん

だ!」

「時間制限付きかよ!!!」

「アイツ本当に無個性なのか!? 個性がある気がするんだけど!」

「個性が発現する前人間が皆、無個性だった頃に一度も例がなかった事件があったんだ。」

「どういことだ…?」

「戦時中、とてつもない力で侵略者を撃退して死角からの攻撃をも避けて圧倒させた人が一人いたらいいんだ。」

「なんだよそれ、マンガの見すぎじゃないのか!？」

「最初はそう思ってたんだよ。だけど彼は最後の奥の手として残していたらしいんだ。しかもその人は目立つような位置にはいなかったけれど、教科書にも載っていた人なんだ。」

「それは…誰なんだ…?」

「せき てつみね 隻 鐵嶺。通称、人間戦艦や人間戦車と呼ばれていた人なんだ。『隻腕の砲台』『轟速の隻』って言われて二つ名になったんだって。」

「それが今の艶星に関係あるのか!?! オイラ、難しいことは分からねーから簡単に教えて欲しいんだ!」

「つまり、萃君はその人との関係があるんじゃないかって話なんだ。」

「なんだと!!?! おいクソナード! あとで無個性の野郎に問い詰めるぞ!!!」

「かつちゃん!?! 聞いてたの!?!」

「つたりめーだろーが！丸聞こえだぞ!!」

「だよねえく…。」

俺はちまちま新しい技をぶっ込んできてはいるものやっぱりキツイ。

まず俺の髪型はうさ耳になっていたり、小麦肌ではないがルミ姉と似ていたりで紛らわしいとか何とか言われてた。だけど盛り上がったた。

ビーストモード

獣は髪の色が白くなって一時的に脚力と腕力が上昇、スピードも三倍程の速さを持つようにはなるが、スピードの出し過ぎには注意だな☆

俺視点に戻る。

ビキビキッ

(うっ…脚に罅^{ひび}がっ…!!)

(ぬううっ…！な、何なのこの子ッ…！力がさつき以上につ…！)

「おりやあああああ!!」

バキッ!!

「けひやつ…!?!」

ズサアッ…

「おいおい飽きさせんなよ萃ちやくん…♪相手はリユーキュウだけじゃねーんだぞ?」

「ううっ…プロヒーロー二人は鬼畜すぎる…っ。」

「今すぐ諦めて降参するか、骨を折られるか…どっちがいいんだ？」

「ミルコ、流石に言い過ぎじゃない？」

「いーんだよ、この子は潔く決めるからさ。」

「おつとおおおお!!?ここでラビットシップが微動だにせず!ここでラビットシップはダウンスルーのかあああああ!!?」

(するわきやねーだろ…まだだ…もう少し…!)

「コイツ…!」

ビキビキツ!!!

「リユーキュウ!避けろ!!」

「え…?」

ビュンツ!!!

「死ぬ気で倒す!!!ラビットトロービード自壊!!!」

「は、速つ…!!」

ゴキヤツ!!!

「あううつ!!なんて威力なのよ…!!脚がやられた…!!」

「うぐううううつ…!!いつてええええええええええ!!!やっぱやらんきやよかつたあああ

あああああああ!!!」

「脚を抱えてる暇はねーぞっ!!」

「あつ…くつそ…!!」

「月面ルナ・フオー落下ツツ!!!」

ズガアアーンツ!!!

「うぐうつ…!!! やつべ折れr」

バキツ!!!

「あああああああ!!! こん…のおおおおおおつ!!!」

ブーンツ

「おつと…。まだ闘る気か!?! いい加減諦めろよ!!」

「いやだ…絶対に負けられねえ…!! ぶつ倒sベチツ ぶぎやつ!」

「あつ、潰れた。」

「私のこと忘れてない?」

「ううつ…ち、ちか…ら…があ…入ら…ね…。」

シュウウ…

「成長が早いわラビちゃん。私達も手を負わせる程にね…褒めてあげるわ。だけどつ。」

プニツ

「ぶぎゆつ。」

「自爆行為はダメよ？」

「つーかよ、成長しすぎじゃね？萃ちゃん、後で話聞くからお前寝てろ。」
「やだ。」

「ラビちゃん、最後の最後でその発言は可愛すぎない？」

「最後じゃにやいもん！頬つぶにぶにしにやいでくらひやい！」

「可愛いなあああああ!!萃ちゃんただ可愛いんだよこのやろおおおお!!」
「ルミ姉そろそろ呼び捨てして欲しいんだけど!？」

「可愛すぎる。ミルコごめん、この子予想以上の可愛さに負けちゃった。」

「アタシも負けたわ！萃ちゃん、お前の勝ちだわ！」

「……………え？」

「審判悪い！コイツの勝ちだ！」

「……………えっ?!」

「いーからコイツの勝ちだから結果を言えー！」

「し、勝者は…ラビットシップです！最後の最後にラビットシップの奥義である可愛い
さで二人を圧倒させたああああ!!」

「おいこらどーゆーことだああああ!!？」

「急展開すぎて情報量が掴めねーよ!!」

「ラビットシップちゃん可愛いわよね…♪映像に写ってる彼の姿は確かにズルいわ！これは負けるわよ!」

「ラビットシップって可愛いってイメージよりもポンコツなイメージが…。」

「誰だー！今ポンコツって言ったやつはー!!出てこーい!!」 プンスコ

((((あ、これは確かに可愛い。)))

急展開過ぎて皆もびっくり。

俺も勝った感じがしなかった。

俺には分からないが、俺が可愛いという理由だけで負けを認めたらしい。コレジャナイ感が強いし望んだ勝ちはこれじゃねー! って思わず叫んだ。

「こんなの認めない!!俺がこんな勝ち方するのなんて納得いかない!ルミ姉!サシで勝負して!!」

「わり、無理!」

「ナンデ!」

「ん。」

「ラビちゃん…可愛すぎじゃない…!こんなの…守りたくなるじゃないの…!!」

「あー…うん、分かった…。俺のこんな勝ち方は認めないけれど…今度はちゃんと勝負してよね!!」

「おうよ！今度は手加減しねーからな！」

この日、俺は納得のいかない勝ち方をして俺の一日目が終わった。

初めての勝ちとは言え、医務室にぶち込まれながらも負のオーラを出しながらブツブツと呟いていた。

勝ったことを祝福してくれた出久君達にも申し訳なかつたけれど、正々堂々とした勝ち方したいと言いつつ放つたのだが、皆もちろん認めてくれた。ちなみにミッドナイトさんに頭をめちやくちや撫でられた。

16話 互角

二日目。

なんとか回復はしたが、未だに痛みが残る。

ルミ姉の一撃で俺の右腕が死にかけていたから完治までとはいかなかった。そして俺のいる部屋に小さなお客さんが入ってきた。

バアアアン!!!

「ラビットシップうううう!!」

「おおつと!?あの時のお嬢さんじゃないの!!」

「こらー!ラビットシップが痛がっちゃうでしょー!?」

「お母さん大丈夫ですよ!俺はこー見えて丈夫な体なので!」

「本当、娘がすみません∴。」

「いえいえ!お嬢さんも元気そうで何よりです♪」

「私ね、みなかたはるか南方 遥はるかって言うの!」

「遥ちゃんって言うんだね∴可愛い名前してるなあ〜♪」

「えへへ〜♪」

「私はこの子の母親の南方 有砂ありさと言います。私も正直、ラビットシップに心を惹かれて応援していますが…遙にはやっぱり敵わないくらいで…。」

「こんな俺を応援してくれるなんて…ありがとうございます。」

「いえいえ!!そんな…!」

「ねーねーラビットシップー!私ね、ラビットシップのお嫁さんになりたい!」

「ふあっ!」

「は、遙!」

「ラビットシップみたいに強くなってラビットシップを超えるヒーローになってメロメロにさせたいんだもん!」

(やんべえ可愛い。)

こんな可愛いお客さんにそんなこと言われるとそりや俺も惚れるわ。

そう思いました。まず、こんなこと言われて惚れるとか言ったらロリコンじゃねーかって思われる。死ぬわこれ○

バアアアアアン!!!

「かーなめつちいいいいいいいい!!!」

「なんじゃああああああああああ!!」

「ピンキーだー!可愛い!」

「あ！昨日の女の子！かつこよかったよおおお!!萃っちもすつごく喜んでたんだよー！」

「芦戸さん!？」

「いーじやんいーじやん!あ、そうそう!萃っち、次の対戦相手はヤバいよ!今度はクラスメイトとの対決になるんだって！」

「うっそだろ!？」

「今度は緑谷とお茶子のタッグとだって！」

「余計にまずいじゃん!？」

終わつたと悟つた俺。

しかも名コンビすぎる名コンビ。

出久君は攻撃特化の継承型個性で、お茶子ちゃんは攻撃とサポートの両方が可能な個性だからかなり苦戦するやつ。

足場を取られたら勝ち目すらないのも目に見えてるし、多分先にお茶子ちゃんをダウンさせてからの出久君に移るかも知れない。

考えていたら出場ゲートに着いてた。

「うぐうう…先にお茶子ちゃんをダウンさせるか、出久君をダウンさせるか…どつちにしたらいいんじゃないやあああああ!!」

「お待たせしましたあああああ！二日目の2回戦目の出場者はこのタッグとあの人だあああああ!!！」

「うーわ司会者変わってんじゃん。めっちゃ苦手なテンションで来るのはやめくりい…。」

「よっしゃあああああ！待ってたぜラビットシップ!!今度はどんな戦いを見せてくれるだああああ!!！」

「話題のラビットシップちゃんと雄英体育祭で活躍した子が対決するんだって！楽しみになってきたわ！」

「う、麗日さん…すっごい歓声だね…。」

「めっちゃ緊張するわあ…。」

「だ、だけど作戦通りやっていくよ！頑張ろうっ！」

「うん!!！」

ギイイ…

「昨日と同じく、ゴングが鳴れば試合開始!!以上!!！」

扉が開くと同時に出久君とお茶子ちゃんが現れ、俺は少し遅めに出てきた。めっちゃくちゃ緊張しています。

両者が定位置に着くとお互いに一言を言い始めた。

「出久君、お茶子ちゃん…本気で行くからね…!」

「もちろんだよ。僕達も本気で行くつもり!」

「うちも本気でやらせてもらうから! クラスメイトだからって手加減はしないからね!」

「スタートオオオオ!!」

カアアアン!!!

(ヤバいどうしよう作戦なんて考えてなかったわ。どう動こうか…。)

(まずは様子見で動かず…いや、萃君も様子を伺っている…? お茶子ちゃんには彼が動いたら用意してもらおうとところなんだけど…もしかして僕達が動くことを狙って…?)

(あかん、萃君全く動かん! どっちから動くんやろ…!)

(そう言えば萃君の利き足はどっちだ…?! そこをしつかり見ていなかったせいで予測ができない…!)

(やつべえ圧だこれ…。きちいよおお!! ええい! 動いちやえ!!)

シュツ!!!

「左だつて…?!」

「あかん! デク君お願い!」

「狙わせないよつ!!」

ガッ!!

「ひえっ?!?しつかり作戦考えてんのね!?俺がサポート役を狙うの分かってたか…!」

「予想だね!萃君ってたまに予測不可能な動きをするから!!」

バッ

「ふんぬっ!」

ベキッ!!ピシピシッ…!

(来たっ…!)

「64cm…酸素魚雷ツ!!」

ドヒュッ

「ワンフオーオール…フルカウル…!!デラウエアスマツシユ・エアフォース!!!」

バシユッ!!

「ほわっ!?!」

「麗日さん!!」

「あいよおおおおお!!」

ゴオオオッ!!

「マジかあああああああ?!?!?」

俺は予想はしていたけれど、それ以上に予想外なことが起きた。

お茶子ちゃんは重力グラビティの個性を最大限に使い、その場内の地面を抉り出した。いや、俺が力加減も無しに亀裂を作ってしまったことから始まったんだけどね。

しかもめちやくちや浮いていたし、落ちてる。

「ううっ…立ち直れないっ…!」

「もらったよ萃君!!」

「まだまだじゃあああああ!!」

「ワンフオーオール…!!」

グググッ…!!

「落下距離推定30、角度調整…。緊急火力調整…出力75%、火力調整20%…!」

「おいおい不味いぞ!萃がこのまま落下して普通に死ぬぞ!」

「艷星のやつ、緑谷タツグとの戦い方が特殊すぎて対応してないんじゃないのか!」

「落ち着けやボケ!!あの無個性がそのまま落下すると思ってるのか!!?よく見てみやがれ

!!

「むっ…?艷星の動きが少し変わってるぞ。」

「緑谷と似た動きをするんだな。これは真似出来ないくらいだ。」

「デトロイトスマアアアアアアアッシュ!!!」

「15・5cm三連装砲おおおおお!!!」

ズドガアアアアアアアアアア!!!

「ううっ…!!衝撃波が尋常じゃない…!デク君は大丈夫なんか?!」

パラパラ…

「はあ…はあ…よ、避けられた…。」

ドカツ!!!

「ぶえっ!!!」

「!?!」

「あたたた…着地って慣れないもんだな…。」

「萃君流石だよ…あの距離をコンマで躲すなんて。」

「あの高さからの体勢を変えるなんてやっぱり慣れないよ?!」

「そろそろ現段階での最大火力で行くよ…!!」

「よし、準備運動終わったから本気で行こうか!!」

「ワンフオーオール30%…!!」

パリパリ…

「^{ビースト}獣モード…!!」

ゴオツ!!

「デク君、援護するよ!! 解除ツツ!!」

ビュオオオオツ!!!

「いい足場があるじゃんっ…!!」

「まずい!!」

シユツ…

「あつ…。」

「そいつ。」

トスツ

「こ…こんなん…は、速すぎ…やろお…。」

バタツ

「麗日さん!!」

「サポートがいると不利になっちゃうから…申し訳ないけれど寝ててもらったよ。」

（うう…なんとか意識を保てたわ…だけどこのまま動けばやられるだけや…。様子を伺つてみるしか…。）

気絶させきれなかったことに気づかず、彼女をそのままにしていた。

ちなみにサシでやり始めるのだが、やはり個性と無個性の場合火力が桁違いで、太刀

打ちできるかすら分かっていない。

増強系の個性と対決するとなれば、俺は必ず何処かをやらかすかも知れないのも分かっていた。

(さてと…対策考えていなかったわ。)

「行くよ萃君!!」

ビュオッ

シユバツ!!

ラビットバースト

「兎 裂!!」

「でやあああああああ!!!」

バガアアアアアッ!!!

ピシッ!

「うぐっ…!!」

(まだ怪我が完治しない…!?なら、ここは僕が優勢かも知れない…!!)

「捕まえた…!!」

「んなっ!!」

「そおいやあああああああ!!」

ドカッ!

「がはっ！何処まで強くなって…ブンツ うわっ!?」

「10cm高角砲おとおお!!」

「萃君の力絶対おかしいつて!!とりあえずは壁があつて助かつたけれども!!」

ドツ!!

「あ…やべっ。だけどスピード勝負なら…!!」

ビュッ

ラビットラビリンスハイド
「兎の迷宮!!」

「ラビットシッブって本当に無個性なのか…?個性を持つた無個性ではないのか?」

「そーなりや普通に個性じゃねーのか?」

「そう言えば…私の知り合いに個性が発現される前の時代に人間兵器って言われていた人がいたって聞いたことがあるわ…。」

「へえ…人間兵器ってどんなもんなんだろーなあ…。」

「詳しくは知らないけれどね!」

「てか、目で追えない速度になってない!?」

「映像でもギリギリじゃないか!!しかも壁がベコベコになってるし!!」

ビュババババツ!!!

「ここで決めるっ!! ワンフォーオールフルカウル…!!!」

ラビット・リベンジ!
「兎の逆襲!!!」

「デトロイトスマアアアアアアッシュユ!!!」

ドゴオオツ!!!

無個性とは思えない程と言われるくらいの速度で出久君を追いかけ、壁もボコボコに
して腕全体がボロボロになっていた。

そして出久君のタイミングに合わせて合わせられてしまい、俺も咄嗟に技を繰り出し、拳と拳
の衝突による衝撃波が強くて周囲に砂塵が巻き上がった。

結果が分かったのが砂塵が収まってからだった。

「お、おい…結果はどうなったんだ…?」

「無個性の野郎…!」

「大分収まって来ましたわ。」

「ん? まだ二人が立ったまままだぞ!」

(いつまで倒れたまままでいたらええんや…?)

「はあ……はあ……!!」

「ぐっ……うう……!!」

「し、勝負あり……つてところだね……。」

ブシュッ

「うぎっ……!!ま、まだ……負けてnポカッ ぐえあつ!」

「はあはあ……!!とつとと休んでよ萃ちゃん!!倒れた演技すんのめっちゃ疲れるわ!!気絶させるならしつかり気絶させんかいボケエ!!」

「う、うぐぐ……足りていなかったのか……!ならっ……!!」

ビュッ!!

「んなっ……!?!」

「今度は強めにッ……!!」

後半へ続く。

#17 無茶（マジ）と本気（マジ）

「今度は本気でツ…!!」

「麗日さん避けて!!」

「ツ……………!!」

フワツ

「おうっ?!」

「…え？」

「あつ…か、解除おおお!!」

ゴオオオツ!!!

「ぬわっ!!?」

ガシヤアアアアン!!!

触れたもの、人を浮かせることが出来るお茶子ちゃんの個性「重力」。

俺には理解が出来なかった。触れられた感じがなかったのに、浮かせられて吹き飛ばされるなんて分かるワケもなかった。

そりやそうだ、彼女は俺が気付かぬようにこっそり触れていたのだから。

「麗日さん、どうやって萃君に触れられたの？」

「えっへへへ♪ここだよ！」

「靴の…底？」

「そう！一緒意識を失ったけれど、すぐに覚めた時もまだ居たからこっさり触れられたんよ！しかも現段階の最大重量よりすごく軽いからね！」

「想定外なことになったけれどよかったあ…あともう少して決着が着くはずだ…！行くよー！」

「うん！」

「ビースト 獣 モード…ラビット 兎…部位欠損 61%…最大火力…79%…脚力 78%…腕力 37%

…。脚は…まだ行ける…目標二人…自身勝率…6%…相手勝率 94%…無理だから。体がまともに動かん。」

フワッ

「マジかよ…。」

「ワンフォーオールフルカウル…!!」

「ラビット 兎のオ…!!」ギュルルル

「セントルイススマアアアアアアッシュ!!!」

「抵抗アアア!!!」

ベキヤツ!!!

「うぐっ!!!」

「があっ!!!」

ドガアアアアア!!!

「解除……」

腕に力が入らず、脚で対抗するしかなかった。

とは言えども、やっぱり個性の方が圧倒的に強くて遂に脚まで罅ひびが入ったのと同時にお互いに吹っ飛んだ。

お茶子ちゃんのサポートが強力で対抗なんてできるワケがない。

そもそも距離を取られるとまず対策なんて不可能だ。

パラパラ……

「ううっ……」

「つ、強……すぎ……だ……ちくしょう……」

ザツ

「えいつ。」

ピトツ

フワツ

「…え？」

「解除おとおお!!」

ビュンッ

「ぬあああああああ?!?!?」

ベシヤツ!!!

「ぶえあつ!!!」

「麗日さん…何をしてっ…?!?」

「まだでしょ…! まだ力残ってるんでしょ萃ちゃん!!!」

グアツ

「お茶子ちゃん…もう力が出n「嘘つかないで!!」ぬあつ!?!?」

ズガガガガガ!!!

「麗日さん! 萃君はもう力が入らないんだ! これ以上の攻撃はやめるんだ!!」

「まだや! 逃げられる余力があるなら動けないまでやらんと嫌な予感がする!!!」

「何故そこまでして攻撃をするの!?! お茶子ちゃんらしくないよ!?!」

「まだまともに勝負してないし、私だけ無事にいるなんて絶対に嫌や! 私だってヒーローになる人間なんや!! デク君のサポートになれていたのはいいいけれど、守ることはできなかつた!! だから今度は…うちが守る番や!!」

「そっか…なら、俺も本気で行かせてもrズキツ うぐつ…!!」
 「行くよ萃ちやああああああああん!!!」

ゴアアアアアツ!!!

「目標確認、相手飛弾数約20…両腕大破、現段階最大火力36%…最大発弾速度86%
 ……。両腕火力20%、発弾速度最大でぶつ壊す!!」

「油断とか手加減なんてさせないから!!」

「想像換装、吹雪型壱番艦・駆逐艦吹雪…小口径主砲…12.7cm連装砲・大連射あああああああ!!!」

ズガガガガガ!!!

「うぷつ…!…!…!はあああああああああ!!!」

「でりやあああああああああああ!!!」

ベキツ!!!

「うぐううつ…!ドスツ!!! づつ!!」

ゴオツ!!!

「ふんぬあああああああ!!!」

バゴオツ!!!

最後となる巨大な瓦礫は脚で砕いたものの、俺の腕は完全に壊れて動かなくなった。

お茶子ちゃんとなればかなり手強い対戦相手だと観客側は思ったらしい。

出久君は立ち直ることが出来たものの、戦闘できるような状態ではなかった。俺との一戦で一部をかなり負傷してしまっていたから。

「はあ……はあ……痛てえ……！すっげー痛てえ……！！」

「な、なんでそんなに耐えるの!?そろそろ倒れてよ!!」

「ラビツトシツプ……どんだけ耐久力高いんだよ……」

「無茶しすぎじゃねーか!?無個性とは言っても素手とコスチュームだけであの瓦礫を破壊するなんて普通はできねーんだぞ!?ぜってー個性持つてる!!」

「普通はねえ……」

「無個性ってこんなに強いんだ……無個性のことをナメてた自分が恥ずかしいんだけど。」

「あの女の子からの攻撃を受け続けても立ち続けるなんて素晴らしいわ!ラビツトシツプちゃん素晴らしいわよ!」

「チツ……うるせーな向こうの奴ら……。あの無個性野郎と一発闘れると思ったが……今回もできねーなア!!」

「バクゴー落ち着け、萃と闘れる機会はまだまだあつからさ!」

「麗日君が艶星君に猛撃仕掛けているんだが……大丈夫なのだろうか……」

「オイラ…萃が心配だ…。アイツ大丈夫だよな!？」

「お茶子めっちゃ攻めすぎてない?!萃がちがこれ以上耐えられないの分かるはずだよ!？」

「それにしても…艶星のラツシユはすげえな…。普通は腕が使えない状態になるはずだが…。」

「重力女と無個性野郎の戦い方、じっくり見てろ雑魚共!」

ボタツ…ボタツ…

「はあ…はあ…!」

「うぷっ…おええっ…!」

「無茶すぎだよ二人共…!萃君…まだやるのかい…?」

「ま、だ…脚、が…あ、る…!」

「くっ…!無茶されると…こつちも困るんだ!!」

ダッ!!!

「ワンフオーオールフルカウル45%オ…!!」

「目標確認…以下略省…。ラビット 兎オ…!!」

「テキサスマアアアアアアアアッシユ!!!」

「オーバーレック超越脚・ファースト初撃!!!」

メ、リ、ッ……

ピシピシッ

「おおおおおおおおああああああああ!!!」

「ぐっ……！負け……ねえええええええ!!!」

ググッ

「あっ……押さる」

ドガアアーンツ!!!

「はあ……はあ……萃君……君の分は……僕達が背負うから……」

この日、俺は敗退して医務室に運ばれた。

お茶子ちゃんらの猛撃は無個性だと普通なら腕は消し飛んでいる筈なのだね、俺の腕や指が無くなることはなかったとしても案の定両腕骨折。

脚は罫ひびが入り、歩くことは結構めんどいやつになってしまった。数日経つたらなんか治っていたが。

「まーた医務室生活かよー！やりすぎたあああああ！」

「萃っち無茶しすぎー！」

「いつからそこにいたー!!?」

「こっそり入って来たー☆」

プニツ

「うにゆっ…。頬っぺ摘まにやいで…。」

「無理したアンタをお説教しに来ただけどね！服溶かすよ？」

「やめてください死んじやいます。」

「あー…ごほんっ！」

「あ、常闇君。」

「邪魔してすまない、今回の勝負を見て分かったんだが…艶星、本気出していなかったな？」

「やっぱりが鋭いなあ…。出していなかったっていうより…出せなかつたが正解だね。」

「どういうことー？」

「つまり、ミルコとリユーキュウのタッグと戦って治りきっておらず、本気を出せなかった…ということか。」

「そゆこと。まあ…言いたいことは分かるが…すまない。本気を出せずに勝負してしまった…。」

「いや、いいんだ。俺は艶星の戦い方と緑谷に教えてもらったやり方を融合させておこ

うと思って勉強させてもらったただけだ。寧ろ感謝する。」

「感謝されるようなことしてないんだが…まあ、どういたしまして? かな?」

「萃っちー! 今からお説教すr」

「常闇君、すまないが…芦戸さんを連れて行ってもらえないかね…?」

「う、うむ…芦戸、行くぞ。艶星が痛がっている。」

ズルズルズルズル…

「ああああああああ…!」

「はふう…ま、数日経ちゃあ治るからいつか。それにしても…芦戸さんすつげーテンシヨんで食いついてくるなあ…。」

そして一週間続くイベントが終わって怪我もほぼ癒えてきた頃、雄英の裏側では秘密裏に計画を立てていた。

それは、俺もクラスメイトも全校生徒が知らない先生方によるとんでもない計画だった。

「対侵略者迎撃型ヒーロー…とはなんでしようか校長…。」

「元雄英^{うち}出身生徒からの情報を耳にした。いつ起こるか分からないが、予想を遥かに超える戦争^{インヴェーダー}が起きる。我々の住んでいる日本を侵略する国、組織が動き始めた。敵というより、侵略者^{インヴェーダー}だね。オールマイト君に任せようとは思ったのだが…そろそろ時

期が時期だから、補助に回ることになる。」

「…と言いますと？」

「I—A組の戦力増強のサポートをお願いしたい。特に暴走を起こしつつも敵のみを仕留めた無個性君には注視するように。あの子はよく体を犠牲にするからねえ…。」

「分かりました。艶星少年にはなるべく暴走を起こさぬように伝えておきます。」

「それと、この計画は無個性君にかかっているからね。」

「んなっ…!?ま、まさか艶星少年を…!」

「悪く言ってしまったえば彼を兵器にする。」

「当時は個性が発現しなかった時代では無個性最強と呼ばれ、二つ名で人間兵器と呼ばれたあの方と同じ運命を辿れと言うのですか!!」

「…そうなってしまうかも知れないね。彼を最大限までサポートするつもりだが…。あとは彼の気持ち次第による。」

「校長…拒否権はあるのですか。」

「…それは君に任せる。」

敵の次に出てきた厄介な敵 インツエーター 侵略者。

奴らは国そのものを奪い、自身の国にする連中だ。

政府も頭を悩ませていて、ニュースに載ると言えば簡単には載らない極秘の問題であ

る。

ニュースに載せない理由としては平和に過ごしている一般人を巻き込むワケにもい
かなくて、その上警戒しつつも不安に怯えながらの生活だけは回避させたいとのこと。

ま、敵がいるからそこまで不安になることはないが（フラグ）

「さあーて…トレーニングやってくかねー！」

「おい無個性！完治したなら勝負しやがれ！」

「よっしゃー！！挑むところだー！！」

俺達はすっげー賑やかな生活しているがな☆

#18 海と特訓

イベントが終わって数日経ったある日、俺はミッドナイトさんの下へ^{もと}尋ねた。

「攻撃の避け方を習得したい?」

「うん。ミッドナイトさんの武器の一つである鞭って結構複雑でしょ? だからそれを元にして突っ込みながら攻撃を避ける方法を探りたいの。」

「私目当てに来たワケじゃないの?」

「んなわけないでしょ。」

「ピキツ 酷いコト言うわねえ…! 最近生意気になつているからお仕置きしてあげないとねえ!」

パシッ!!!

「ひえっ!?!」

「今謝ってくれたら許してあげるわよ♪」

「ごめんなさい許してください何でもしまさ」

「ん? 何でもするって言った?」

「何でもしません。」

「よし許さない。」

寝かされました。

しかも何故か彼女も俺に抱きついたまま寝ていました助けてください。

ちなみにミッドナイトさんの寝顔が可愛くてそのままの状態でした。

：ワケないでしょ!?!もぞもぞと抜け出そうと試みたんだけど、彼女の腕のみならず、脚でガツシリとホールドされていて抜け出せませんでした。

(ふふっ、可愛いわあ〜♪顔を真つ赤にしながら抜け出そうとしてる…♪ちよつとイタズラしちやおうかしら♪)

ギチツ…!!!

「んぶえっ!?!」

「すう…すう……んー…。」

「あつ…ちよつと…お、起きてツ…!?!」

(本当、彼氏にしたいわね♪まあ…ダメだろうけど…。)

チュツ

「あうっ…うう…頬っぺにちゅーされたあ…。」

「んー…あら、おはよ♪抱き枕にしちやつてたわ♪お仕置きはこういうことだから、もしされたくなければ言葉を選ぶことね…ふわああ…。」

「もうお嫁さんに行けないよおお…。」

「私がいるじゃないの♪」

「冗談はよして!?!」

「むう…ケチいく。」

「とりあえず早く特訓させて欲しいんだけど!眠らされたせいで数時間無駄にしたんだけど!?!」

「分かったわよ。だけど…手加減はできないからね?」

「うん。」

「それと、私のことはお姉ちゃんって呼んで?」

「ふあっ!?!」

「呼び方がやつぱりぎこちないでしょ?だから私のことはお姉ちゃんって呼んで?」

「わ、分かったよ…お、お姉ちゃん…// //」

(照れ顔可愛えええええ!!)

「んで、早く特訓させてくれます?!」

「もちろんよ♪だけど、厳しくいくわよ?」

「はい。」

めつっちゃユルい返事したらビンタ喰らった。めつちやくちや痛い。

ドSモード発動したお姉ちゃんはすっごく怖い。

俺がビビって怯んでいるところを舌なめずりしてニンマリした表情をしているのが俺にとって恐怖ではない。

「さあ…特訓開始よ!!」

ビシユッ

「ぬあっ!?!」

「避け方が汚い!もつと綺麗に避けなさい!」

バシインツ!!!

「わつとと…。ふんぬっ!」

「ほらほら休んでいる暇ないわよ!!」

バチンツ

「づっ!!」

(ヤバいわね…すっごく虐め倒したい…!治まらないわ!!)

「待って待って待って!!お姉ちゃん激しすぎだつて!!」

「避けている貴方の避け方が重いからよ!!」

「俺重くないもん!!」

「そつちじゃない!!」

3 時間後。

「はあ…はあ…まだまだ行けるわよねえ!」

「いちいち…お姉ちゃん、ちよつと休憩しよ? 避ける俺よりもお姉ちゃんの方がだいぶ辛そうだよ?」

「私に歳だからって言うつもりじゃないでしょうねえ!!」

「ち、違うよ!?! ただその…お姉ちゃんの腕にすごく負担かかっているから少しは休憩した方がいいかなって思ってる…。」

(何この子優しい襲いたい。)

お姉ちゃんは多分肉食系ですなハイ。

休憩中に俺の頭を撫でながらすつごくニツコリしてた。

え? その笑顔にキュンツと来てないのかって? めちゃくちや来てるし、肩に寄せられて眠らされると思ってますよ? だけど彼女は俺を眠らすことはなく、話をかけてきた。

「萃ちゃん、私ね…正直心配なのよ?」

「どゆこと?」

「貴方怪我しすぎだし、身の程知らず。その上自身の体を犠牲にしてまで敵に挑んでポロポロになって帰ってきて…いつ死んじゃうんじゃないか不安になっているのよ?」

「あー…。」

「心当たりあるのは分かっているでしょ？」

「うん…ごめんなさい…。」

「いいのよ、分かっているだけでも。だけど無茶はしないで？ 私が貴方を虐められないから。」

「そっち!?!」

「萃ちゃんしか虐められないもの!!他の生徒をいじめたらパワハラで訴えられちゃうでしょう!?!」

「むう…やっぱりお姉ちゃんってちよつと曲がつてる…。」

「何か言った?」

「イエナニモ。」

「その怯えた表情大好きよ♪」

「むぐぐ…お、お姉ちゃんそろそろ特訓再開しよ!?!なんか付き合っているような感じがして怖い!?!」

「えっ!?!付き合っているんじゃないの!?!」

「寧ろいつ付き合うって言ったの!?!」

お姉ちゃんに心配されるのは確かに嬉しいけれど、付き合うなんて一度も言っていない

よ？俺氏困惑だよ？

結局この日は合計7時間程特訓したのだが、まだ足りなかったのとある仕込みをし
て明日にまた特訓開始しようと考えていた。

それで翌日の休日。

「よし…これなら動ける範囲だけどいけそうだな…。」

「萃ちゃん！海行くわよー！」

「なんで!？」

「そつちの方が脚力鍛えやすいでしょー？」

「急に言われても着替え持ってきて」着替え要らないから早く来なさい！」わーつたよ
!!」

海行くことになった。急すぎます。

..。ちなみに彼女は水着の姿になっているのだが、俺は水着無しで特訓再開することに

お姉ちゃんすつごい自由気ままで気まぐれすぎるけれど、お姉ちゃんらしいことをす
るから憎めないし可愛いんだよなあ…。

「さーて、着いたわ！私のお気に入りの浜辺よ！」

「…とりあえず特訓させて？」

「えーっと…貴方の水着はこれね。」

パスッ

「ぶっ…んんん??お、女物の水着…!?」

「ちなみに私のよ♪」

「着んわ!!」

「着なさい!!!」

「やだ!!」

「襲うわよ!!!」

「やめて!!」

「力づくで着させるわよ!!」

「やれるもんならやってmパシッ ああああああああ!!!」

無理矢理着替えさせられました。辛い。

ちなみに下も脱がされるどころだったが、必死こいて死守して自分で履きました。お姉ちゃんはずつごく沈んでたけれど、俺の姿を見た時にはずつごく明るくなつて息を荒くしていた。

「か、萃ちゃん…ずつごく可愛いわ…!!涎が止まらないわねえ…!」

「恥ずかしいから見ないで!」

「恥ずかしさのあまりに女の子になつてるのも可愛いわあく！ねえ、一回だけでいいから襲わせて!!」

「趣旨変わつてない!?早く特訓しよ!」

「違う特訓もあるわよお!!はあ…はあ…!」

「お姉ちゃんが襲いたいだけじゃん!!!」

「いいじゃない別に—!」

「よかね—よ!!」

「抱きつかせてええええ!」

「いやああああああ!!!」

ガッ

「あつ…!」

「ちよつお姉ちゃんほわああああ!」

ドサッ

本当にミッドナイトさんなのかと疑う俺。

イチヤイチャカツプルかのようにお姉ちゃんにいじられたり、逃げる俺を追いかけようとしたものの、お姉ちゃんが勢いよく躓いて俺を巻き込んで転んで倒れた。

「うう…萃ちゃん大丈夫あつ。」

「んむむむ…ぐる…じい…。」

「か、可愛い…やっぱりこのままにしておきたいくらいだわ…!」

ググググ…

「んゝむゝむゝむゝむゝ…パツ　ぷはあっ!!お、お姉ちゃん苦しいよ!?!なんで押し付けたの!?!」

「虐めたかったから♪」

「本当ドS…。」

「いいじゃない♪せっかく二人きりになっているんだしい♪」

「も、もう…!とにかく早く特訓しよーよ!時間がなくなっちゃう!!」

「しょうがないわねえ…傷ができてても文句は言わないでね♪」

「無理矢理着せたお姉ちゃんが言うかそれ!?!」

ドゴオオン!!!

「ほわっ!?!」

「萃ちゃんと海に来れたのに敵が来るとか有り得ないわねえ!!空気読みなさいよ!!」

特訓を始める前に敵戦が始まってしまったお☆

しかも水着姿且つ女物の格好で○

#19 特訓とは（哲学）

「お姉ちゃん、敵ってアレなん？」

「らしいわね。多分ナンパに失敗して投げやりになったバカね。」

「あー…たまにいるよねー…。ナンパに失敗して暴言を吐くクズとか人の目気にすることなくナンパするバカとかしつこくナンパした挙句ストーカー行為と見なされて*ワツパかけられたりする奴。」

*ワツパ⇨手錠

「へいへい姉ちゃん達遊ぼうぜえええええ!!」

「いやああああ!!キモイ!消えろ!死ねええええ!」

「イケメンな俺にそんなこと言うなんて酷いなあ〜!カラダで教えてあげようかああ!!」

「ぎやああああああ!!!」

「ええ加減にしやがれボケクソがああああああ!!!」

バキッ!

「(バ)ふっ!!」

「ひゃああつ!!」

「よつと!!」

ポスツ

「あ、ありがとおお……!怖かったよおお……!」

「お姉ちゃん、この人を安地に避難させといて。他のヒーローが来るまで時間を作っておく。」

「ダメよ、また萃ちゃん怪我するわ。」

「大丈夫、今度は怪我しないから。」

「そう言つて何回何十回怪我してるのよ……ここは私に……!」

「違うんだよ!!」

「な、何がよ!!」

「あの敵はかなりヤバいんだよ!お姉ちゃんの個性は室内での戦闘に向いているけれど、ここは潮風が強くて一般人を眠らせて被害を生む!!その上、一本鞭やバラ鞭じゃ対応しにくいやつなんだ!」

「なんでそこまで分かるのよ!」

「奴の感触に違和感があつたんだよ!」

「いつてえなあ……!誰だあ?イケメンな俺の顔に傷を付けた奴はあ!!」

「あーもー！起き上がっちゃったじゃん!!とりあえず見てなよお姉ちゃん!!」

「…おつひよおおお!!ナイスバディな姉ちゃんが二人追加されてんじやーん！俺と遊ぼうぜええええ!!」

「きめえ…お姉ちゃん、やっぱ殺るわ。キモすぎて吐き気する。」

「そうね…半殺しにしてやりましよ。避難させてから向かうわね。」

「そんじや頼みます。」

俺はふと思った。

二人??まさかな…?と思いつながら戦闘態勢に入った。

お姉ちゃんは被害者を安地に避難させに行つたが、厄介なのは敵の特徴であります。

女好き、ナルシ、やべーやつ、お餅の個性持ち。餅だけに。

「可愛い貧乳の姉ちゃん遊ぼうぜえええ!!」

ボンツ!!!

「のわっ!!」

モチヤツ

「…うん??」

「なんで躲すんだよおおお！女のクセによおおお!!」

「あー…すつげーめんどくs今さつき俺のこと女つて言つたか?」

「わりーか!!」

「わりーに決まってるんだろののポケクソがあああああああ!!」

「ぎゃあああああああ!!!」

数分後…

「ごほっ!!ど、どうなつていやがるんだ…コイツの個性は…!」

「うっせ、お前は俺を女だと認識していて分かっていなかったようだな。俺は無個性の男さ。」

「お、男…だと!?その見た目でか!」

「付いてるの分からんか?お前の目エ節穴なんか?」

「お、つぶ…こんな可愛い男がいるなんて…それも…いい…ッ!!」ガクツ

「あ、^死気絶した。」

「萃ちゃん!戦況はどうnつてももう終わったの!」

「あ、お姉ちゃん。んとね、終わっちゃった。俺を女だと認識していたけれど、男だと分かっててもそれでいいって言って^死気絶した。」

「死んだの!」

「あ、そっちの死んだんじゃなくて気絶の方。」

「処理が早くて助かるには助かるけれど…怪我してないわよね?怪我したらお仕置きだ

からね?」

「し、ししししてないよ!!!」

「怪しいわねえ? ちょっとと見せてみなさい!」

「いやああ!!お姉ちゃんがセクハラしてくるよおおお!!!」

「してないわよ!!!ほら見せなさい!」

「そんなことより早くコイツを連行してよ!!!」

敵は連行されたものの、お姉ちゃんには相変わらずもみくちやにされてぐったりしていた。

怪我はそこまですていないのだが、いつも怪我するからそういうことするようになるのかなと感じて気づいた。ちょっと反省。

ちなみに特訓再開したのは2時間後だったという…。

「萃ちゃん、怪我していなくても体はキツチリ見させてもらうからね?」

「なんで?!」

「いつも敵戦で怪我しているからでしょ!」

「だからって体をお姉ちゃんに見せるなんて嫌だよ!」

「裸にしてとか脱いでとか言わないわよ?!折れていても無茶するからその確認をするためよ!」

「あ、そっち?!」

「貴方が変なこと考えているじゃないの!!」

「お姉ちゃんがそーゆーことしてるからでしょ!? そんなに怒らないですよ!!」

「怒らせているのは貴方でしょ!? 毎回怪我して戻って来てるのは何処のおバカさんよ!!」

「ごめんによしやい!!」

「分かれば良し!!」

ナデナデ

「あふっ…。」

（可愛いから頼っぺスリスリしちやおっ。）

スリスリ

「ぶえあつ?!」

「萃ちゃん、このままハッテンしと「それはダメでしょ!」じゃあキスだけ!!」

「じゃあじやないよ!? っってお姉ちゃん聞いている!? 待つて待つて分かったからキスしよう
としないでええええええええ!!」

何とかキスは免れたのだが、にゃんこの如く持ち上げられたまま帰宅した。ちなみにお姉ちゃんが無理矢理俺をお姉ちゃんの膝の上に乗せて来てすぐさまシートベルトを

され、助手席に乗せてくれませんでした。

「ねえ萃ちゃん。」

「なーにー?」

「萃ちゃんって獣^{ビースト}モードになったら髪型と髪色が変わるでしょ?」

「うん。」

「あれって個性に入らないの?」

「入らないみたい。俺の中に二人いるの知ってるでしょ?もう一人の自分とは違ってその獣^{ビースト}の姿がアレなの。兔ちゃんなの。」

「もう個性じゃないそれ。」

「そうなんだよね、だけど病院では俺の個性因子が完璧に0だつて言われてんの。先生も一件もそういつた例がないからつて言つててすつごく困惑してた。」

「ま、萃ちゃんの遺伝子は凄く特殊なものだからね?」

「どゆこと?」

「なーんも?」

「えー!?教えてよお姉ちゃん!気になるよー!」

「だーめっ!貴方が知るにはまだ早いのっ!」

「むー!けちー!」

「かーわいっ♪」

帰り際もめちやくちやイチヤイチヤしてたわ。

カップルかってくらいにイチヤイチヤの度合いが強すぎるし、怪しまれるどころか熱愛報道されるレベルだと思うんですがそれは○

家に着いた頃には俺の髪はすっごいもっさもさになっていました。

お姉ちゃんにめちやくちやわしやわしやされたからねしょうがないね。

「お姉ちゃん、俺の髪どーしてくれんねん。」

「あははは…ごめんごめん♪」

「お姉ちゃんももっさもさにしてやろうかあああああー!」

「その前に眠らせるツ!!」

「ほわああああああああああ!!!」

眠らされた。

翌日。

「萃ちゃん!朝よー!」

「んゝ…眠いい…」

「全く…スイーツ食べに行かないのー?」

「そんな気分じゃない…」

「はあ…お布団に入るわよー？」

「やだ。」

「むっ…。それえええ!!」

ガバアツ

「ぶっ!!」

「はあああああいい匂い…♪萃ちゃんって本当女子ね♪ベリー系の甘酸っぱい匂いが好きなのね♪」

「あー…もー…好きにして…。」

「それじゃそうさせてもらおうわ♪」

体がバキバキで動けなくて寝込んでいたのに、お姉ちゃんが俺のオフトウン（お腹辺り）へダイビングしてすっごく死にかけて。

ちなみにダイビングされた後ポカポカ叩いた。反撃のビンタ喰らった。

痛かった。

「お姉ちゃん痛い。」

「いきなり叩くからでしょ?」

「お腹にダイビングされると流石に反撃するでしょ!?!」

「器が小さいわねえ…。」

「それとこれは別でしょう!？」

「まあ痛かったらごめんね? お詫びに何かするわよ?」

「あ、それじゃなでなでしてほしい。」

「それだけでいいの?」

「うん。」

ナデナデ

「えへへ：／／／」

「たまに子供みたいになるのは狡いわよ? 襲いたくなるじゃない。」

「襲うのはやめて?」

特訓はまだまだ続くけれど、お姉ちゃんとの関係はめちやくちや訳ワカメな関係です
はい。

まあ一つあるとしたら完全に付き合っていると思込んでいますな。

俺は付き合つてすらいないし、上と下の関係くらいしか見ていないんだけど…これマジでどうしたらいいんですかね?

と考えさせられながらまったりと一日を過ごしました。

#20 先生vs1年A組

寮にて…。

「はあ!?先生と対決!」

「うん、またなんだ…。」

「やだやだー!もう先生と戦いたくないー!!」

「あちゃー…子供になつてん…。」

「おーい!今さつきすんげー声が聞こえたぞー?」

「あ、切島君!」

「おつ、艶星もいんじゃない!今日は珍しく寮にいなな!」

「まーね、別に遊び歩いているワケじゃないからね?」

「そりゃ分かつてるさ!んで、先生との対決第二弾で驚いたってワケだな?」

「お察しが良いようで。」

「萃君はもう存分に力の差を知ったからもうコリゴリだつて言つてたから…。」

「だつてあんなの作戦練つたところで確率が高くて半々だからね!」

「それだけでも十分だよ。勝つことが目的じゃないからさ。」

「あ、そっか。」

（（凄い早さで納得した…！））

組む相手は芦戸さんなのだが、何故か男子と組むことが少ないのが変だと感じていたが俺と組みたい女子がめちやくちや押し寄せて来ていたらしくて、やむを得ず組ませることになったとか。

対決相手はセメントスこと石山先生だ。

触れたコンクリートを操る個性で、場合によってはめちやくちやキツイとのこと。ちなみに戦うっていうより先生に触れば勝ちらしいです。

話聞けよ俺氏（）

数日後。

「萃っちよろしくねっ！」

「こちらこそよろしくね芦戸さん。」

「萃っちと一緒なの嬉しーっ！抱きしめていいーい?!」

「言う前に抱きしめてるじゃにやいの…。」

「えっへへ〜♪」

「さて、どんな攻撃を仕掛けてくるか…お手並み拝見としようか。」

始まりました。

俺はちやんとやっていけるか不安でしかなかった。

だつて抱きつかれたまま石山先生を探してるんだよ？大変なのですよ？可愛いからしょうがないけどさ？

「ねえねえ芦戸さん？」

「なにー？」

「芦戸さんの個性つて酸だよね？」

「そーだけど…どしたの？」

「戦闘時にその酸を俺の手に纏わせてほしいの。」

「なんで!？」

「まあそれはその時に見せるよ。…つと石山先生がいたね。」

「来たか…珍しい組み合わせだね。私も少々苦戦するかも知れないな。」

「まずは…素手でコンクリの硬さを確かめるかっ!!」

シュツ!!!

「でりやあああああああああ!!!」

「なるほどな…!」

ズドドドド!!!

ボガアツ!!!

「あ、やべっ。」

スッ

「萃ちゃんどうだった？」

「やっぱ素手じゃ無理☆」

「だよー！もう手から血イ出てるし！」

「よーしアレお願い！」

「おっけー！……ってなるわけあるかああああ!!」

バシヤアツ

「にやーにしてくれてんのおおお!!」

「右手から血出てるのに纏わせるわけないでしょー!!」

「左手あるでしょー!!」

「それでもダメ!!」

「なんでさー!!」

「萃ちゃんをあまり怪我させないよーにするためだから！」

「もう俺怪我しちゃったよ!!」

「仲間割れしてる場合かねっ!!」

ズドドドドドド!!

「あああああああ!!?」

芦戸さんはどうやら先生にお願いされたらしい。

絶対お姉ちゃんが言ったやつだなこれ。

芦戸さんは個性を上手く使いこなして滑るように着地をしたのだが俺は個性すらないので着地はおろか、転がってすっ飛んでいきました。

ちなみにぶつかるとはなかったのだが、芦戸さんにキヤツチされてから気づいたけれども、お姫様抱っこされていたのは恥ずかしかったです。

「えっへへっ♪お姫様抱っこしちゃった♪」

「とりあえず顔を真っ赤にするのはいいいから前見てええええ!!」

「そおれっ!!」

ジュワアアア…

ビジャツ

「ぶえっ！俺にもかかっちゃったっていうかコスが溶けてるんだけど!?!」

「ごめん！量が多すぎちゃった!!」

「謝ってくれたからヨシ!!」

「ふむ、一時戦線離脱か…私の個性を試したのだな?」

一方、俺達の戦闘を見ている側の部屋では…。

「うう…芦戸さん羨ましいですわッ…！艶星さんをお姫様抱っこするなんてっ…!!」

「萃が寝ている時にヤオモモはいつもお姫様抱っこしてるでしょ？」

「ううっ…！そ、そう言われましても…。」

「俺のシュガーラツシュと相性合いそうだな。今度手合わせとかしてみてーな！」

「そーいや俺、萃にお願ひされてたことあつたわ！忘れてた!!」

「ん？上鳴君、それってどんなお願ひ？」

「萃が帯電してみたいて言つてたんよ。」

「またとんでもないこと考えてるよね萃君!!」

「萃らしいやり方だわ。」

「無個性野郎の言うことだ。あのままの状態じゃ面白かねえってこつた!!おいデク！今

度勝負すつぞ!!」

「急すぎない!？」

（艶星少年…色々試しているみたいだな…。元無個性の私でさえ思いつかない方法を生み出すとは…流石だ。だが、彼は無茶をするが大丈夫なのだろうか…。）

俺視点にモドール。

「萃っち！何度言つたら分かるの!？」

「だーかーら！一回試さないと分からないでしょー!？」

「それがダメなのー!! いったつも怪我するからあまり戦わせないでつてミッドナイトに指示されたのー!」

「やつぱりかあああああ!後でお説教してくらバツ もごおつ!？」

「静かにつ!石山先生が近くにいますっ!いきなり口塞いじやつてごめんね…?ちゃんと聞いていなかったけれど…萃つちの作戦つてどういうものなの?」

「ぶはっ!えつとね…まず俺と芦戸さんでもう一回石山先生と戦うでしょ?その時に俺が攻撃を仕掛けると多分防壁を張るから、その時に俺が下がって芦戸さんの攻撃を数発でいいから連射しながら俺の左手に酸を纏わせて欲しいの。」

「萃ちゃん、私の酸は濃度的に操れるとしたら結構幅が広いから教えてくれない?」

「コンデイションナーくらいの濃度でお願いできる?」

「分かった、それで…その後はどうするの?」

「俺は獣モードになって石山先生の背後を狙う。先生は反応が早くても同時展開は遅くて三秒程で完璧に塞がれるけれど、上手くいけばギリギリでタツチできるかも知れない。もし芦戸さんが行けそうだったら俺に構わず自分で考えた作戦で先生をタツチしてほしい。」

「んー…アタシからもいい?」

「いいよ?」

「アタシの酸で先生の足元全体を溶かせば早く済むんじゃない?」

「あつ…。」

「あれ?! 何で涙目になってるの!?! だけどやつぱ可愛いな!!」

「俺の練った作戦が泡沫となっちゃった…。」

「ごめん! 今さつき思いついたからさ!!」

「大丈夫…: だけど落下時間考えるとちよつと厳しいから死角のある高さから突っ込んでいい?」

「あー… 鷹みたいに突っ込む形ね? いいよ! その時に合図送るからよろしく!」

「うん!」

作戦は一気に変わり、芦戸さんの作戦に変えた。

俺の作戦は慎重になりがちだからかなり遠回りした。

もちろん泣きました。撫でられました。

作戦通りに芦戸さんは先生の前に立ち、俺は獣^{ビースト}モードで少し離れた建物の二階にスタンバイし、距離からしたら93m程離れた位置で死角となる場所に入った。

「おや、艶星君は何処に行ったのかな?」

「萃っちは先生でも考えられない所にいますから!」 スッ

「むっ……！彼が不在ならば都合がいいものだねっ!!」

ドドドド!!!

「濃度96%！アシッドマン!!かーらーのおおお!!」

ビッ!!!

（来たッ！脚部出力153%…標的確認…よし！）

「マズいな、避けるしかないか。」

「アシッド・ウエーブ!!」

バツ!!!

（ふむ……これは厄介だな。私からしたら相性が悪く、芦戸君からしたら相性がいい形だ……。それにしても艶星君は何処に……？）

ヒュッ!!!

「艦上攻撃機・九七式艦攻!!!」

「なるほど……！よく考えたものだ!!私の死角からの位置に居たわけか!!だが、これはどうかなっ!!」

ピタッ

ギョルルッ!!!

「その防御壁は対策済みですよ先生!!」

「アシッドレイン!!!」

ジュツ

(くっ…中々やるじゃないか。芦戸君の個性で半個体の酸性雨を降らせ、私の防衛を弱体化…艷星君は無個性とは思えない程の速度での確に私の位置を狙ったのか…)

ジツ

「ううっ…!でえりやあああああああ!!!」

バガアアッ!!!

「ここまで成長していたとは…!これは少々侮っていたようだ!」

「タツチいいいいいい!!!」

石山先生に触ることができ、勝つことができた。

喜んだ芦戸さんが抱きついてきてめちやくちやもみくちやにされた。

クラスメイトにも褒められたりなでなでされたりされたが、雄英こへいに来てここまて言われることがなかったからすっごい照れた。

だけど俺は芦戸さんの作戦があったからこそ上手く行けたと言ったらまたもや撫でられまくった。

ちなみに撫でられすぎて髪が大変なことになった。

「あれ?そう言えば萃君。」

「なんじやらほい？」

「髪の色戻ってなくないかな…？」

「えっ!？」

「本当だ！萃つちの髪色が戻ってない！しかも兎耳!!」

「どゆこと!？」

「まだ獣モードになつてる状態じゃない？」

「いや、元の状態になつてるんだが…。」

「あ、目見たら確かに元に戻つてる。獣だと赤目だもんね。」

「うん。ちなみに赤目に気づいたのら特訓していた時に最近知つたの。」

「艶星さん本人が気づかないとダメじゃないかしら!?! だけど…これもこれで可愛すぎま

すわ…!？」

「なあ艶星。」

「なしたの焦凍君？」

「触つてもいいか？」

「いいよ？」

サワッ

「お、おお…なんだこの…なんだ？」

「轟が語彙力を失ってるぞ！ 艶星何したー！」

「俺何もしてないよ!？」

「にしてもなー…オイラ、艶星の凄さに憧れるなー…。」

「なして？」

「オイラは艶星みてーにあんなにはなれねーからさ…。」

「んなことないよ？ 峰田君だつて中々いいものあるつしょ？」

「そーか？」

「うん。峰田君の個性は攻撃には不向きだけど、敵側からしたらめっちゃ厄介だと思うんよ。ゲームで言えばめっちゃくちゃ凄いやデバフ要因。」

「例えが分かりやすいな。艶星、峰田の個性はシンプルでも強くさせることはできるのか？」

「できるね。実践するとまた凄いことできるかも知れないよ？」

「マジか。」

「おい無個性、話がある。」

「どしたの爆豪君？」

俺は爆豪君に呼ばれて二人きりで話すことになった。

しかも二人きりで話をした内容が衝撃的且つ何故知っているんだというくらいの内

容だった。

あ、ちなみに獣^{ビースト}モードを解除しても姿が変化しないのでこのままの姿で生活することになりました。

2 1 計画

「無個性、お前限界知らねーだろ。」

「限界って言葉そのものを忘れてた。」

「バカかお前！」

「ごめん…。」

「んなことはどうでもいいとしてだ!! 本題だ。」

「?」

「お前、隻 鐵嶺てつみねって知ってるか？」

「じいじのこと?」

「…は?」

「え?」

「再度聞くぞ? 隻 鐵嶺だぞ?」

「ん? じいじのことでしょ?」

「てめえ…。」

「どしたの?」

「なんちゅーもんを隠してたんだ!!?」

「どゆこと?」

「お前のじーさんのことだ!!」

「????」

「ダメだコイツ!話になんねー!」

爆豪君に話があると云われて二人になったのだが、俺はアホの子のような顔で?を浮かべていた。

正にその通りだ、俺の祖父である隻 鐵嶺という者をよく知らないのだ。祖父のことを知っている者は極僅かであり、爆豪君はその話がたまたま耳に入っていたのでこっそりと校長室の前で聞いていたのだ。

「お前のじーさんが何をしていたか聞いてねえのか?」

「うん、あんましね。ただ戦争に駆り出されたって話しか聞いてないね。」

「他は聞いてねえのか?」

「うん。」

「お前のじーさん自体隠していたつもりが知らぬ間に出ていたわけか…。聞かなかったことこそしろ。」

「なんでなん?」

「ちっ…これ以上言ったからには言うしかねえか…。お前のその持っている力を雄英^{こへい}で利用しようとしてんだ。インヴェーダー？って連中の対策としてお前が選ばれていた。」

「インヴェーダー…侵略者ってことか。やつべえ面倒事になりそうだな…。」

「はあ!?!てめえどーゆーことだそれ!!」

「暇潰しに敵を捕まえていたらね、日本を乗っ取ろうとする連中がちらほらいんのよ。しかも見つけたアジトでたまたまその計画を目にしたんよ。しかも敵のほとんどがアジア系の外人だったよ。」

「お前の暇潰し感覚で敵を捕まえること自体おかしいだろ!!っーか俺の話した内容よりももっと重大な情報じゃねーかよそれ!!」

「あ、マジ?」

「マジだわボケ!!」

「んで、そこで聞いているのは相澤先生ですか?」

「!?!」

「…察知能力が高すぎだろ艶星。個性持っているだろ。」

「たまたま気配を感じただけですよ。うちのじいじの話をしようとした辺りからいましたよね?」

（艶星：お前は無個性とは言え、五感がかなり研ぎ澄まされているな…。）

「もしかしてですが、先生方全員知っているんですね？この話そのものを。」

「ああ…そうだ。」

「何故…俺なんですか？」

「お前の祖父、隻 鐵嶺の孫である上に相当な力を持っているからだ。」

「あんまし期待しないで欲しいのです。」

「もちろんだ。お前の強さはクラスメイトと関係しているからな。お前のサポートはいるから安心しろ。一人ではやらせねえよ。」

「お前が暴走しても俺が爆殺させてやっかん!!」

「爆殺はやりすぎじゃない？」

「とりあえずそーゆーこった。まだタイマンしてねーし、先に斃くたばったら許さねえぞ。」

「わーってるよ。」

爆豪君、俺、先生達しか知らない話になった。

当日がいつになるかなんて誰も知るわけがないし、分かるまで全く分からない。その上、襲撃だつていつ来るのかさえ分からない状態だ。

今日であればすぐに対応しなければ秒で混乱になりかねない。

俺は敵陣に突っ込むけれど（）

「おい。」

「ん？」

「お前は何故無個性で英雄こに入ろうと思った？」

「んー…分かんね。」

「はア!？」

「いや、理由はあるだろうけど…なんか分かんない。」

「ヒーローになる為じゃねーのかよ!？」

「なる為なんだけど…なんでだろ…思い出せない。」

「…まあいい。お前が思い出すまで待っていてやる。今の状態だとモヤモヤしかしねえからな。」

「すまんね。」

「あ、いた! かつちゃん何処行つてたの!？」

「うっせえ! お前にや関係ねー話だ!」

「萃ちゃん何か言われた？」

「んーん、ふつつーに内緒話だよ。何か言われたって言われても酷いことすら言つてなかつたよ?。」

「か、かつちゃん…いつからそんなに丸くなった…?。」

「う、うっせえ!!そんなん別にいーだろーが!」

「爆豪、丸くなったな。」

「最近そうだよね。」

「オィラもそう思う。」

「お前ら、雑談は後にしろ。とつとと始めるから次出る者は準備するように。」

次々と対決していき、個性を活用した技の組み合わせを考えたりしていた生徒もいたが、皆の結果としては五分五分といったところだった。

個性の組み合わせには相性があるが、上手く使いこなせば相性が合わない個性同士でも飛躍的に変化することも。例とするならば轟君、彼は氷と炎の二つの属性を持った個性だ。

実践でドライアイスに熱を加えて爆発を起こすことができるし、自身の現段階の限界まで超高温と超低音にすることにより、超火力を引き出すこともできる。だけどやっぱり個性にはデメリットは付き物で、体を物理的に壊すくらいの火力を引き出すから、本人の状態によるとのこと。

「そーいや、緑谷と麗日と艷星で急に現れた敵を捕まえたんだってな?」

「あえ?切島君聞いてたの?」

「ああ、ミッドナイトから聞いたけれど、敵の個性がかなり厄介だったらしいな?」

「うん、確かね……物理的に触れられたら個性を無効化される個性だったよ。切島君だったらかなり苦戦していたと思う。」

「うっわ相手にしたくねえ！ソイツ無敵じゃねーか！どーやって捕まえたんだ!？」

「間接的な攻撃方法と気合い。」

「気合いで片付けたぞコイツ。」

「出久君の個性も無効化されていたから、最終的に二人で敵を力でねじ伏せた。お茶子ちゃんも凄く活躍してたよ。てか、お茶子ちゃんがいなかったら多分連携取れていたとしても時間がかかったと思う。」

「いやスゲーわ。艷星、今度タッグ組もーぜ！」

「もっちー！あ、上鳴君との用事終わってからで大丈夫かな？」

「おうよー！」

数日後。

俺は上鳴君にお願いしていたことを試みていた。

個性は持たなくても、多少は溜め込みができるんじゃないかなと思ったので、思いつきで試しているのだ。体内帯電を。

「艷星、本当に大丈夫か？」

「うん、最初は微弱からお願いいしてもいい？」

「もし痛かったりしたら言えよ？俺こういう調整すつげー苦手だからよ。」
「おっけ。その時は言うよ。」

「よし、行くぞっ。」

パチパチッ

「んっ…結構来るもんだね…。」

「一応これでも弱くしてるからな。もうちよい上げつか？」

「うん、頼みます。（コイツを体内に溜め込むイメージを作つて…。）」

バチバチバチバチッ!!!

（あれ？艶星…耐えすぎじゃね…!?なんか急に耐性が強くなつてんぞ?!）

「んゝんゝー…ぱはああああああ!!一旦休憩しよつか!!」

「へ？お、おう…。つーか艶星大丈夫か？」

「ん？何が？」

「何が…急に耐性付いたからだよ!!普通だつたら悲鳴上げるくれーやべー火力なんだぞっ!!」

「あ、マジで!!」

「コイツやべー!!なんかスゲー奴見つけたんだけどおお!?とりあえずどーだった!!」

「うん、溜め込むイメージは作ったけれど中々溜め込めないね…。溜め込んだ電気が漏

れちゃう。」

「お前多分アレじゃね？器がねえから漏れてるんじゃないかな？」

「器？」

「そ、器。俺は今のところ130万Vまで出すことはできるが、そんなに一気には出してねーんだ。器から取り出すような感じで使っているからな。」

「ほほう…なるほど…器か…。ん…あ、なるほど分かった。イメージで作れた。」

「お前覚えが早すぎだ!!てか、艶星ってつえーのにまた強くなってどーすんだ？」

「いんや、俺はまだ弱いさ。力が強くなっていても、心が弱けりやただの強がりなんだ。皆は痛かろうともそれは二の次にして目標や目的に立ち向かっているのに俺はまだ痛くないフリをしたただの痩せ我慢さ。まだまだスタート地点には立っていないんだよ。」

「そんなことねーよ艶星。」

「なんで？」

「俺はバカだけだよ、お前には力以外にも強いところは十分あるぞ。聞いただけなんだけどよ、もう既にお前にファンがいるらしいじゃんか。お前の影響が強いおかげで無個性の人とか無個性の子供達にすっげーいい影響を出したんだってよ。お前には人を動かす力があるんだ。緑谷と同じくらいすげーよ。」

「…俺には実感が無かったけれど、既にそこまでいったのね。だけど俺はもつと上を目指すよ。暴走しないようにね。」

「だな！あ、お前はどのような感じで使うんだ？」

「これは追撃で使うつもりだよ。イメージはついてる。」

「一応サンドバッグはあるから試すか？」

「うん、試す。」

俺は上鳴君の電気で耐性を作り、帯電することに成功。早すぎですね。

サンドバッグも用意はされているが、壊してしまいそうで少し不安なのだが。まあ、不安ながら前に立って構えた。

「しゅうう……っ。」

（見たことねえ構えだな…。たまに見かけるけれど、格闘技でもこんな構えは見たことねえぞ…。）

「脚力強化65%、腕力90%…追撃火力200%、その他調整…標的確認。仮 独創型
零番艦 クウハク…二連……!!」

シユバツ

「…早くね？」

「電磁砲ツツツ!!!」

ビシャアアアンツ!!!!
パラパラ…

「……………は？」

「ごめん…壊しちゃった。」

「んーと、まず何が起きた？」

「イメージ通りにやったらこうなっちゃった。」

「いやそーじゃねーよ!?!?なんであんな早くないんだよ!?!?」

「まず脚に帯電した電力65%を付与させて脚力上昇させて、腕本体には力を入れずに電力にほぼ任せて腕に電力を束ねて纏わせて二連撃を高速でぶち込んだ。」

「バカでも分かるけど、最後のやつは雷槍みたいなやつだな?てか見えなすぎだし、ただけイメージを出してんだよ…。そーいや、さつき言ってた名前って一体なんなんだ?」

「アレは練習用として使う名前。どれに付けるかは技を発動したあとに決める予定かな。」

「付ける…?」

「うん、初めてやることだけだね。俺には艦艇の種類を色々使うから、その内のどれに組み込もうかなって…多分拒否反応起こすかもだけど。」

「ざっくり言うとう？」

「筋肉ぶっ壊れる。」

「うんやめとけ。」

「あい分かった。」

上鳴君に注意されたのであまり新しい技を組み込むのはやめておこうと思った自分がいたが、結局入れました。

ちなみに常時の俺には使えないので、もう一人の自分に無理矢理組み込んだ。珍しくめちやくちや抵抗してた。

一見平和的に見えるが、裏では敵がとんでもねえ早さで計画が立てられており、死柄木達とは全く違う勢力。侵略者の連中が動いていた。

2 2 襲撃ふいーばー

とある休日…。

「おーい艶星〜。」

「力道君なした〜?」

「スイーツ作り過ぎてさ、良かったらいるか?」

「欲しい!力道君流石ツ!」

「良かったらだけど、リビングに行つて食べないか?」

「もっち!部屋でのぼっちは寂しいもんだからな…(っーわー、)」

「お、おう…。」

少年達移動中…

「よお艶星!上鳴から聞いたぜ!帯電を覚えたんだつてな?!」

「あー…まーね。技は模索中つてところだけどね。」

「個性無個性関係なく、萃つちが凄いやね?」

「もうこれさ、艶星に個性がある疑惑が浮上するんじやねーのか!」

「メディアが今でもそんなことを書きそうで怖いな。」

「大丈夫、そんなときや俺本人がメディアをぶっ壊すだけだね。」

「萃君物騒なこと言うなあ〜…。」

めちやくちやまつたりした空間です。

しかも久々のゆつくりとできた休日なので皆とこうやってお喋りし合うのも久々な気がする。

ちなみにツンデレボーイの爆豪君も参加していました。珍しい。

「習得したところで、個性相手に対抗できるのか？」

「それはできないかな、習得しても会得できる力は補助的なものだよ。言わば追撃メイソン。もちろんデメリット付き。」

「デメリットはなんだ？」

「もちろん知つての通り、使えば上鳴君から電力を貰わないと行けない上、彼の範囲に入らないと帯電ができない。その上、使えば数秒間の麻痺、数分の意識喪失が今のところのデメリットかな。」

「デメリットが大きすぎますわ！どうしてそうなるのですの!?!」

「実践したらその結果だった。」

「度胸が俺達よりも上をいつてるじゃん!」

「まあだけど習得できるものはちゃんと限度があるから、何でも会得ができるワケでは

ないんだ。そこもちゃんと理解はしているよ。」

ドドドオオオン!!!

「およよ? なんだろう?」

「皆、あそこつて……!!」

「校舎のド真ん中じゃねーかよ!!」

「おいおいまたか!! しかも今度は瓦礫がびよんびよん飛んでいるんじゃないか!!」

急に起きた爆発。

また襲撃じゃないかと思い、A組全員駆けつけた。

案の定また襲撃イベントですふぎげんなクソが（本音）

「……めんどくせえなこれ。」

「ひやははははは!! ユウエイってのはココなんだナ!? ココを破壊しまくれれば日本を略奪できるんだナ!」

「りや…略奪だなんて…! アレはなんなの!?!」

「インヴェーダー侵略者…。」

「い、いんべーだー…?」

「敵連合とは全く別の組織で、海外から来た敵の連中が日本を奪い盗ろうとしてる外道よりもクソ汚え連中だ。」

「何故それを…?」

「まあ個人的な事情でね。」

「Hey! 来たね!! ちよーつと援護してもらえると助かるrrrrrrrrるああああああああああ!!!」

「せんせーうるしやい。」

「はい耳栓。萃大丈夫?」

「ありがとう響香ちゃん。」 スポツ

(うん、可愛い。)

「んで…俺の相方を殺ったヤツは何処のどいつだあ…? この写真に見覚えはねえかああああ!!」

「誰?」

「誰だ?」

「知らね。」

「あ、俺だわ。」

「萃っち?!」

「暴走した時にコイツすつごく悪いヤツだったから容赦なく殺っちゃったヤツだ。」

「艶星さん…そう言えばそう仰っていましたわね…。まさかのトリガーがそこからだつ

ただなんて…ちよつと艶星さん!」

「大丈夫、多分俺に用があると思うから邪魔が入らないように見張っていてもらってもいいかな?」

「わ、分かりましたわ…もし危なかったら退いてください!」

「もつち!」

トテトテ…

「そつかさつか、俺の相方を殺したのはお前か!」

「うん、そだよ。」

「ぶつ殺す!!!」

「あ、急にキレた。」

どうやら俺も次いでに探していたみたい。知らんけど。

聞いたらあらびつくり、俺を殺害しようとしているじゃありませんか。もちろん適当に反応したので余計に怒らせちゃいました。

ヒュッ

「あ、消えた。」

「艶星さん後ろろつ!!」

ドカッ!!

「ツ……!!」

「ひやはははははは！俺の個性は『瞬間移動』だ！テメエの個性に当たることあねえんだよ!!」

「……遅え。」

「は……？」

「遅すぎるよ。侵略者♪」

インヴェーダー

「こ、コイツ……!!ぶつ殺すツツ!!」ビキキツ

ヒユツ シュバババツ!!

「幻影弾丸!!」

ファントムブレット

ガガガガツ!!ドスツ!!

「おうっ……!やつべ入った……。」

「チビガキがあああああ!!!死ねエ!!」

「ピキツ ああ……?」

パシツ

「………は?!」

「おrrrrrrらあああああ!!!」

ブオンツ!!

「ぎゃあああああああああ!!!」

ドカアアアッ!!!

「萃っちどしたの!?!」

「芦戸!今はこの連中をなんとかしないと不味いぞ!」

「つ、艶星さん…?」

「コイツ!俺のことチビって言った!ガキならまだしも、チビって言われるの一番ムカつく!ちっちゃいとかわられる方がいい!響きが可愛い方が好きなのに、暴力的にチビって言った!!」

「怒るところそこですのね…。」

「この俺の瞬間移動を使った『幻影弾丸』ファントムレットを掴むとは…:テメエ何の個性だ…!!」

「は?無個性だけど。」

「んなつ…!?!くつ…ひやははははははははははは!無個性がこんなことできるわきゃねーだろ!馬鹿でも分かるぞチビガキ!」

「よし殺す。命乞いしても殺すから。」

遂にスイツチ入った。

クラスメイトや身内になら許せるが、敵相手や知らない人は知らない禁止ワードがある。それを今戦っている侵略者インヴェーダーの一人が言ってしまったのです。俺、静かに怒ってま

す。ぶんすこです。

ザッ

「様子見はここまで…死ぬ覚悟はあるな？」

「ひやはっ！マグレで掴めたからって調子に乗んなよチビガキ！」

「すううう……。 (艦艇じゃ太刀打ちできねえ…別のもので殺るか…。)」

ヒュッ!!

「おらああああああ!!」

「そーれっ。」

バヒュンツ!!

「…は？うっそだろ!? あんなの届かねえぞ!!」

「やっぱりな。騙せると思ったか？」

「もう見破られていたのかよ! このクソガキやああああ!!」

「バレバレに決まってるんだろ。瞬間移動にしては遅すぎる。ルミ姉の方がもつと速エわ

!…高速野郎!!…んん?」

「っ、艶星さん…なんて目の良さを…。あれで遅いだなんて…次元が違いすぎますわ…

!」

「クソがつ!! 斃^{くたば}りやがれええっ!!」

「くそっ…なんだあの個性は…! いくらなんでも耐性がありすぎじゃねえか…!!」

「大きすぎる…!! こんな大きい敵がこのまま進行されたら…雄英^{こへい}が不味い…!」

「ねええええ!! オイラのもぎもぎが全然効かねええええ!! 地面が抉れるんだけどおおお!!」

「ここは僕に任せてっ! ネビルレーザーツツ!! 膝カツクン!」

カクーン

「オ、ヴツ…!!」

ズズーン…

「こんなの足止めにすらなんねーけど…崩すことならいくらでもやってやらああ!!」

「(なるほどな…コイツはリーダーではないワケね…本命は別にいるんだな?) スウウ
…八百万さん!!」

「はい!!」

「予定が変わった!! 緑谷君達のところへ行つて援護をお願いします!! 俺はコイツをソッ
コーで終わらせてから向かいます!!」

「分かりましたわ! 艶星さんも気をつけてください!」

「あいさあああ！」

「行かせるかつ!!」

「テメエの相手は俺じやろがボケえええええ!!サマーソルト・フオール 兎踵落 下!!!」

「ベガアアアツ!!!」

「うおおつ!?!」

「テメエは俺を殺りに来たんだろ? なんなら俺を殺つてからにしろ。」

「ひひつ……コイツあ生かしちやいけねえヤツだな……! 相方の仇討ちをしてからが本番開始だああ!!」

ヒュビツ

俺を殺りに来たハズなのに目的がコロコロ変わるやべー相手だけど、正直な話、コイツは幹部とかそういう類ではないと推測した。

目的が変わる、石ころみたいにいるようなチンピラの口調、個性を似たような動きで嘘をかます……こんなやつが幹部だったら組織が終わってるよ!

「速度少し上がったか。だが……遅せえ!!」

「もらったぜ……チビガキ!!」

「ブチツ!! ぶつ 殺す! ! !」

ビュオツ

「そんなもんじや当たらんガシツ …は？」

フイタルラビット・レジスタンス
「兎の致命的なる抵抗!!!」

ゴオツ!!!

「ウツソだ rベガアンツ!! ぶえがつ!!こんのつ…ガkビダアンツ!!!! ぐべあつ…!」

ビュオンツ!!

「!?」

ラビット・ルナフェール
「月面落下!!!」

ギャンツ!!

「ぬあああああああああ?!!」

一方的でした。

倒したけれども、ほぼ瀕死の状態にしておいて出久君達の下へ加勢しに向かった。

先生方もかなり苦戦しているほどの難敵且つ巨大な相手だった。

跳び上がった時に見たけれども、なんかめちやくちやデカかった。

オールマイトでさえ苦戦しているみたい。

「加勢しに来たぜこらあああああ!!」

「待たせんじやねーぞ無個性このやろおおおおお!!」

「悪い!相手が俺を怒らせたから遊んでた!」

「あ、あれで遊んでいたのですか…?」

「ま、瀕死でさせちやつたけれど。」

「萃君やり過ぎじや…。」

「あら萃ちゃん!ちよつと私をあそこまで運んでくれない?!」

「お姉ちゃ…先生、それってまさか…そういうこと?!」

「ええ、少しばかり…ね?」

お姉ちゃんこと香山ミッドナイト 睡を運ぶハメに。

まさかお姉ちゃんまで参戦しているとは思ってもいなかったし、キツかったんじやないかと思っていた。

いくら眠らせるにしても、ラグを起こしてからの反応だからめちやくちや大変だったのでは?と感じていた上、お姉ちゃんは隠している素振りそぶを見せていたからすぐに気づいた。

インヴェーダー
侵略者の襲撃により、お姉ちゃんの脚が折れていた。

2 3 v s 侵略者 (インヴェーター)

「お姉ちゃん。」

「何よく私が怪我しているから大人しくしろって〜?」

「そうだよ。無理しないでよ。脚折れてるのにどうやって戦うつもりなの?」

「ま、まあね…ちよつと無茶しちやっただけよ?」

「無茶したからあそこまで運べと?」

「ええ、アイツを眠らせる為に…ね。」

「断る。」

「な、何故よ!?!」

「あんな巨体にお姉ちゃんの個性が効くかなんて知らないけれど、まず不可能に近い。その上、眠らせたとしてもお姉ちゃんの体にかんりの負担と支障が出る。だからやらせられない。もしやれるなら…。」

「?」

「保健室に行つて。」

「むう…分かったわよ…。」

「誰かお姉ちゃんを運んで行ってもらえるかな？」

「あたし行くよ！萃っちはどーするの？」

「俺は気分が悪くなったから、あのクソデカ野郎ぶちのめを殺す。」

ゾワッ

「わ、分かりましたわ：艶星さん、役に立てるかどうかわかりませんが…これを…。」

「ありがとう。タイミングを見計らって使うよ。」

俺はお姉ちゃんを傷つけられたことよって静かに怒っていた。

巨大な侵略者インヴェーダーの攻撃によつて脚がやられていたらしい。芦戸さんと八百万さんはお

姉ちゃんを安全圏にまで送り、他のメンバーは戦闘態勢に入っていた。

そして俺は怒りの影響で放電状態になっており、知らないうちに強化されていた。

「もう一人の自分キラー、力借りるよ。」

『珍しいな、お前が俺の力を借りるなんてよ。』

「しゃーねーだろ、ちよつと殺意沸いたからさ。」

『まあいいわ、俺の出る幕じゃなさそーだしな。』

「萃君、どう？」

「あのクソデカ野郎にちよつと殺意が出た。」

「無理だけはしないようにできるかい？」

「ああ、大丈夫。」

「皆で守ろう…僕達の雄英を！僕達の街を!!」

「もちろんだ!!」

「おいおい、おめーら二人で何盛り上がってんだ!!俺達もいるだろーが!」

「お、オイラも戦えるんだ!女子にカツコイイところ見せてやるんだ!!」

「負担をかけさせるワケにはいかなからな、戦える人は存分にいる!」

クソデカ侵略者インヴェーダーの大きさは推定だが150m、幅はあんまし分からん。人型なので既に算段はつけてる。

背後に回れば勝ち確だとは思っているが、重さが重さなのでかなりダメージを与えないと多分まずいと感じている。

「俺の考えたやり方だけど上手くいくか分からん。俺と出久君、峰田君が最初の要だ。

出久君、峰田君、行けるか?」

「も、もちろんだ!オイラはやれるぞ!」

「もちろん。麗日さん、峰田君を頼むね。」

「うん!それじゃあ、準備始めておく!」

「飯田君に囿役をしてもらっているけれど大丈夫かな…。」

「侵略者インヴェーダー…こっちだ!俺を狙ってみろ!!」

ポスッ

「ナイスキャッチ!! 力道君、尾白君!! このまましっかり掴まってなよ!!」

「おう!!」

「現段階 限界領域脚力300%!!」

俺は全力で尾白君と力道君を抱えて120m程すっ飛んだ。

俺も正直その高さに来て至ると思わなかったけれど、まさか予想以上になるとは
 …。ちなみに脚は案の定ぶっ壊しました。

「後頭部にぶち込んで来てやれ!!」

「もちろんだ!」

「やってやるさ!!」

ラビット・カタパルト 「兎上甲板 ヘヴィロングシヨット 長距離重量級発射!!」

バヒュンツ!!!

(やっべ…脚ぶっ壊れた…)。

「うおおおっ!! 艶星めちやくちや急成長してるじゃんか!」

「無個性の力つてすげーな! 艶星の期待に添えてやらねーとな! 『シュガードープ』ツツ

!!」

「はああっ…!!!」

「シュガーラツシュ!!」

「尾空旋舞!!」

「バゴオオオンツ!!!!!!」

「ぐぐツ…!?!」

「グラアツ…」

「轟君!!! 爆豪君!!! 瀬呂君!!!」

「待ってたぜ 艶星いいいい!! 行くぜ二人共おおおお!!」

「しっかり狙え!!!」

「準備完了してる。」

「お r r r r r あああああああ!!!」

「ブオンツ!!!!」

「アイツの胸元でグラつかせるぞ!!」

「ああ! 行けるか?!」

「行けるに決まってるんだろ!! A・P・ショット!!!」

「膨冷熱波!」

「ボゴオオオオオツ!!!!」

「く、クソチビ共がああああああ!!!」

ブオツ!!

「マジかよっ…!!」

「爆豪! 捕まれ!!」

「ああ!!」

パシッ

爆豪君と轟君が宙に浮いている影響で自由には動けず叩き落^{はた}とされるかと思いきや、爆豪君は轟君に掴まって轟君が火力小さめの膨冷熱波で高速で回避して落下のスピードを爆豪君が爆破で和らげたではないか。凄いです。

巨大な侵略者インヴェーターを相手にクラスメイト全員の力ではかできないかと言われたら難しい。

捕えられるかと言えば捕えられる。ただ相手がクソデカいだけだから時間を喰うだけなのです。

それと芦戸さんと八百万さんは途中から来たが、事前にメールでやり取りをしていたのでちゃんと把握していました。

「八百万さん!!」

「はあ…はあ…! お待たせしましたわ! ええええーいつ!!」

バシューンツ!! バサアツ!!

「常闇君!! 耳郎さん!! 切島君!!」

「御意!!」

「りよーかい!!」

「OK!! 二人共耳栓の用意した?!

「もちろんだ!!」

「硬化ツツ!!」

「纏え…黒影!!」
ダークシャドウ

「あいよっ!!」

「深淵闇軀 宵闇より穿つ爪!!!」

「ハートビートサラウンド!!!」

「二合体技 影の音圧落とし!!!」

「ぬうっ?!?」

ズドオオツ!!

「ぬあああああああああつ!!!」

「倒れろ…ツ!!」

「うおらあああああああ!!」

「油断した…! このチビども「青山君!!」ん…?」

「待たせたねー！ネビルレーザーツ！！」

ペカアアツ！！

「目眩しかつ…！！」

「葉隠さん！！口田君！！」

「う、うん…！！」

「おつけー萃ちゃん！！そりやああああつー！」

グネツ

ズブシツ

「うおおおあああああああああつ…?!?!?」

「あ、刺さつちつた☆」

何故クソデカイ相手が攻撃できないのかつて？

皆で必死に腕を弾いたり、一撃一撃をぶち込んでいるから。

俺が指揮しているのは捕える為だけの指揮だ。

腕や脚が邪魔をするようであれば、狙うところだけ邪魔が入らないようにしてくれると助かるって伝えたら皆やってくれました。お礼しなくちゃ。

ちなみに一部のクラスメイトを飛ばしているのは俺、八百万さん、出久君、爆豪君、麗日さんだ。麗日さんの負担が大きいから空中組と地上組に振り分けていたのです。先

に説明しておけって話な○

「よし…つと。俺もそろそろ出ないと…ズキツ　いゝでえゝえゝえゝツゝ！！」

「艶星無理するな！皆に言われたらろ?!」

「ごめん障子君…。だけど俺が指揮だけをするのは間違えているんじゃないかって思っ
てさ…。」

「そんなことない！お前は俺達の為、人の為に考えてくれているじゃないか！」

「そかな…?」

「そうに決まってる!!」

「…ありがとう。よし、無理はしないけれど…ちよつとばかり体勢整えるね。」

「おやおやあく?指揮をしているガキはそのチビちゃんかなあく?」

「ごめん障子君。あのクソ侵略者インヴェーダーのせいで殺意沸いた。」

「落ち着け、ここは俺が時間を稼gズツ!!　ぐつ…!?!」

ドサツ

「障子君?!」

「君には用がないのだよ♪用があるのは…そのチビガキ。」

「障子君!しっかり!!」

「す、すまん…だが致命傷ではない…。俺はまだ…戦えるツ…!!」

「ほほ…う…私の個性に耐えるとは…。やりがいがありそうだねえ♪」

ズブツ!!

「ぐあああああつ!!」

「障子君…ダメだ!!」

「ごふつ…!これしきの…ことでツ…!」

「トドメ…いつちやおうかなあ…?そくれつ!」

ビュオツ!!!

「ぐつ…。」バタツ

「あら…?刺さる前に倒れちやつたねえ…。所詮はガキか。」

「障子君…ごめん…。俺…もう…我慢できねえ…!!」

「や、やめる…んだ…。」

バリバリツ!!!

「GRRR…。」

「おおく怖い怖い。そのチビガキ、君は死ななきやいけない存在だ。大人しく死んでくれたまえ。」

「死ぬのは…てめえだ…。」

障子君が俺を庇って倒れ、俺はそれを見て俺の中の何かが割れたような気がした。もちろん冷静に保っていられるはずがない。

そしてこの日、俺は我を忘れて敵味方関係なく暴走した日でもある。

2 4 悪魔

バリバリバリバリッ!!!

「ん〜? 情報によりや無個性だと聞いたのだがねえ〜? オールフオーワン A F O からもらった個性な
のかね?」

「G R R R R ……」

「つ、艶星…!!」

「まあいい。大人しく死んでくれたまえ!!」

ヒュヒュッ!!

ブスッ!!!

「…くききっ。」

（あの笑い方…マズイ…!! 早く緑谷達に知らせないと…!!）

「くきききききかかかかかかかかかかかっ!!」

「うおっ!? なんだ!? 笑い方気持ち悪っ!!」

「たーゲツと…ホソク!!! 殺ス!!!」

（あんな笑い方おかしいぞ…。前の暴走ときとは違う…!!）

「クソツ!! やつぱりアイツと一緒にやないか!! 危険すぎる!!」

シュツ!!

「月爪!」
げっそう

バキイツ!!

「ぬあつ!?! 私の棘が:?! 貴様ア:!! 死ねええええ!!」

「きけけけけけツ!! 幹部のクセに器が小せエなア!! 月爪げっそう光牙!!」

(なんだ: 艶星の技: 無個性つてあんなことでできるのか:?! 脚力で風圧を作つて上鳴の電力を纏わせるとは:。しかもさつきの攻撃で三倍の量を高速で:。)

仲間がやられたことにより、俺は我を忘れた。

名前はとりあえず知らないけれど、侵略者インヴェーダーの男幹部は器が小さくて、俺自身は何故か

面白がつていた。

「ち、ちよこまかとやかましい:!!」

「くけけけけ!! なら当ててみやがれやバーカ!」

「ブツツ 死ねクソガキイイイ!!」

シュシュツ!!

「けけつ! やるじゃねえか。だがなア: 遅せえよ!! テメエが死ね!!」

バツンツ!!

「あ……え……?」

パタツ

「艶星イイイ!!」

「あ、あはは…な、なんだ…?あのガキ…やつぱりヤツとは違ったか…?い、いや!今はとにかくトドメを刺しておかねば!私達の計画が台無しになる!!」

ズブツ!!

上鳴君から充電していた電力が切れ、バッテリーが切れたかのように倒れた。無個性だからこそその大きな代償だ。

とは言え、本来の俺ならの話だ。

「……。」

「クソツ…クソおおお!!」

「すまない障子君!艶星君は!」

「今…トドメを刺された…!」

「何ツ!」

「ふう…またガキが増えたか…。このガキには少々手間取ったが…こ雄英を破壊させてもらおう!」

「くつ…!指揮をしていた艶星君がやられてしまったのはかなり痛手だ…!障子君、歩

けるか?！」

「あ、ああ……。」

「大人しく死んでくれたまえつ!!」

「俺は艶星君を回収する! 障子君は無理をしないように緑谷君達と合流して事情を説明してくれ!」

「分かった……! やられるなよ……飯田!」

「ああ!」

俺が倒れて数分後に飯田君が駆けつけ、俺を回収するつもりだった。

だが、インヴェーダー侵略者は甘くない。

何せ、日本を乗っ取る為ならばどんな手段を使っても俺達を潰すからだ。女性、男性、子供関係なく殺す組織でもある。

日本人を世界から消し、中身が文化すら無くなった名前だけの日本にさせて、良質な素材を強奪する為だということだ。

飯田君と棘の個性を持った侵略者の相性は良くなく、飯田君が近づけば簡単に刺してしまう距離だ。

簡単には回収させてくれない面倒くさい相手だ。器が小さいのに。

「悪いねえ、あのガキは死んだよ。しっかりとドメを刺させてもらったからね。」

「お、お前エエ!!!許さない!!艶星君は無個性でありながらも自力で這い上がってきたヒーローなのだ……侵略者インヴェーダー……俺はお前達を許さない!!」

「騒ぐなら口だけにしなよぉ?そくれっ。」

ブズツ

「がああああああつ?!影からも棘が……?!そこからも出すのかアイツは……ツ!!」

「君の個性はその大事な脚だろう?だから動けないようにしておけば、痛くて走れないだろ?」

ユラア……

「……?!つ、艶星……君……?!」

「……な、何故生きてる!!トドメは刺したはずだ!!」

「……。」

ギョロツ

「ツ!?!」

「急所を狙い損ねたか……しつかり始末してやる!!」

（なんだ……?艶星君の目が人の目をしていなかったぞ……。気のせいとは思えないくらい恐ろしい目をしていた……!）

「……………きひっ。」

「ニードルラッシュユ!!」

「……………閃^{セン}。」

ズパツ!!

「なっ…!?コイツ…!!」

「ごめん飯田君!遅くなつた!…つて大丈夫!?!」

「あ、ああ…大丈夫だ緑谷君。俺は艶星君を回収するつもりだったが…奴の個性が予想外なところから来てやられてしまった…。」

「萃君は…?」

「今…ちよつと不味いかも知れない…。下手に加勢したら巻き込まれるかと思われる…。」

「…え?」

「こんのクソガキヤああああ!!」

「……………ゲツ」

バキヤツ!!

「ぐあ…っ!!クソがああああああ!!計画を邪魔する外道がああああああ!!奥義…!
影国針山地獄!!」

「……………零^{ゼロ}。」

「えあ……？」

ゴトンツ

俺は意識すらしておらず、俺でも何でもないモノになっていた。

本来ならば体が動けずに意識がなくなつて倒れて数分後に目を覚ますハズだった。普通におかしくね？

「あの萃君……違う……！飯田君、逃げるよ！」

「な、何故だ!?確かに変だとは思うが、何故逃げる必要が……!」

「今の萃君はキラでもビーストでもないんだ!!あの目は敵味方関係なく攻撃する無差別攻撃型なんだよ!!」

「我々でどうにかできないのか!」

「今の僕達に萃君を止める術はない!!先生方に頼むしかない!!」

「きひっ♪」

「不味い!飯田君、しっかり掴まって!!」

「あ、ああ!!」

「きひひひひひっ!!!」

「萃君怖いんだけどおおお!!?」

「緑谷!何が起きた!!」

「切島君!! 萃君をどうにかできない!？」

「ああ!? どういうことだ!？」

「障子君が伝えた通りだよ!! 萃君が萃君じゃない状態なんだ!!」

「おっし分かった!! 止めてやらああああ!!」

「きひやひやひやひやひやひやひや!!!」

ガシイッ!!!

「よお艶星イ……! お前どうしちゃったんだア……!？」

「きひひひひひ……!!」

ミシミシッ

(くっ……! 明らかに様子がおかしいぜ……! 緑谷達が先生方のところへ向かうにも二分以上はかかる……! 俺が止めねーと余計な被害が出る……!!)

「すうう……」

「おいおい嘘だろ……!? させねーぞコラア!!」

ドゴッ!!

「うぶっ……!!」

「いくらクラスメイトだからと言って手加減はしねーぞ艶星! 目覚めますまで止めてやるからな!!!」

「うっ……おええっ……!!」

「あれ？俺そんなに強く蹴ったか?」

「きひっ…きひひひひひひ…!!きひやはははははははははははは!!」
「やっペコイツイカれてるわ!!」

一方、出久君視点

「飯田君大丈夫かい？」

「大丈夫だ…だが、走れるかと言えば走れないところだ…。貫通させられてしまつてな…。」

「リカバリーガールにお願いするしかないね…。先に先生方のところへ向かっていいかい?」

「もちろんだ、一刻を争う時だ…!艶星君を止めるにしても先生方の力も借りるしかない…。」

「緑谷少年、どうしたんだ？」

「オールマイト!実はかくかくしかじかで…!」

「艶星少年が…!?!見えないとところでそんなことになっていたとは…!!私はすぐに向かう!君達はすぐに他の先生方に報告し、避難してくれ!!」

「分かりました!!」

俺がこうなったキツカケは目の前でクラスメイトである障子君が庇って倒れたことから始まり、暴走とは違った暴走が始まっていた。

いや、本当の暴走が始まってしまったのだ。

俺視点に戻る。

「艶星イ…お前、成長したのはいいけどなア…！その暴走が気に食わねえんだ!!それさえなけりゃこんな余計なことなんてしなくて済むっつーのによお…!!いい加減に…目エ覚めろおお!!」

バゴツ!!!

メキツ…

「かつ…は…!!」

ドツ…

「はあ…はあ…！艶星…お前なんつー力持ってやがんだよ…。」

「きしししし…!」

「お前…悪魔かよ…!!」

ギユオツ

「きひやはははははは!!」

「A・P・シヨットオートカノン!!」

「!!」

「バクゴー!!」

「何じやれてんだテメエ!とつとと沈める!!」

「悪い、思ってたより艷星が硬くてな!」

「きししし……!」

「気味悪いわ……こりや誰でもビビらあ……!」

「助けるにしろ、今はもう既に艷星じゃねえからな。今見ているのは悪魔そのものだ……!」

パキパキパキパキ……

「何してんだアイツ?」

「隙ができてんなら沈めるだけだ!!」

ギュルルル!!

「………^{カイ}廻!!」

「バクゴー避ける!!」

「おrrrrrrらああああああああ!!」

ボゴオオン!!

「き、きひひ……きししし……!」

「コイツ…!!」

ガシッ

「うおっ!?!」

「きしやつはああああああああ!!」

「バクゴーおおおおお!!」

俺は悪魔と思われるような笑い方をしたままクラスメイトの爆豪君を倒そうとしていた。

悪魔のような俺は最早俺ではなく、正に悪魔と同等だった。

2 5 悪魔の子

「S M A A A A S H !!!」

ドゴオオン!!

「きひやつ!?!」

「うおっ!?!」

「オールマイト!!」

「待たせてすまなかつた!!そして艶星少年…君は一体何者だ…?」

「きしし…!」

「なるほどな…手遅れになる前に終わらせねばな!!」

「待つてオールマイト。」

「ミッドナイト!?!まだ安静にしなればマズイはずじゃ…!」

「きひっ!?!」

「はあ…萃ちゃんつたらそんな姿で仲間を傷つけるなんて…。今まで以上にキツイお仕置きしてやらないとねえ…!?!」

「きひ…ひいっ…!?!」

「なんだ…？ミッドナイトに怯えていないか…？」

「よかった。僕の予想が当たっていたよ。」

「緑谷！予想ってどういうことだ?!」

「萃君は女性に弱いんじゃない、特定の女性に弱いんだ！彼はミッドナイトとの縁がかなり深いことを前に聞いたからもしかしたらやってみたんだ！萃君には悪いけれど…ここで倒れてもらわなきゃ彼を救えない!!」

「それってどういうことだ！」

「萃ちゃんをこのまま放置したら本来の萃ちゃんではなくなるってことよ。彼は私に對するトラウマを持っているから。」

急に出てきたオールマイトとミッドナイトさん。

爆豪君を倒しかけたところでオールマイトの風圧で引き離し、再度襲いかかる体勢をとったところ出久君がミッドナイトさんを連れてきた。

うん、怯えますよ。だって怖いんだもん。

「さて…抵抗しなくても私を怒らせたんだからねえ…!! 気絶するまで容赦しないわよ!!」

「ビクツ きつ……きしやあああああああつ!!」

「兎ちゃんの耳をしていた髪があんなに乱れて…まるでケダモノじゃないの。ふんっ

!!

ズンツ!!

「ぶっ…!!」

「痛がっても…知らないから!!」

ドズツ

「びっ…!!?」

「緑谷少年、私が出来なくてもよかった気がしてきました…。」

「いえ、来なかつたらかつちゃんがやられていました。助かりました。」

「うへえ…ミッドナイトの攻撃容赦ねえ…。」

「どーやら俺達の出番はここで終了ってワケだな。アイツもすぐに沈む。動きが固くなってるからな。」

「しやあああああつ!!」

「しつこいわよ!!いつまで同じ攻撃を繰り返しているワケ!?そんなに死にたいのかしら!!?」

ガシツ

「きつ!!?」

「死にたいなら…このまま眠らせてあげる!!」

「ぎぎ……ぎいいいいええあああああああ!!!」

グイイツ!!

「うわっ……ちよっ!?!やめなさい!!!」

グンツ!!

「きゃん!!」

「おらあ!!」

バコツ!!

「ぶべっ……!」

「み、ミッドナイト……これ以上やってしまったら艶星少年が……」

「オールマイトも見たでしょ?あの子はちゃんとしているけれど、友達が目の前で倒れられたら自我を失うの。そうなってしまうえば敵なのか味方なのかなんて簡単に判別が
できなくなるのよ。」

「ぎぎ……ぎ……え……あ……っ!」

「フルボッコにされる艶星初めて生で見たわ……」

「あっさりやられてやがる……ダセエ。」

「萃ちゃん、まだ闘る?」

「ぎ……ぎええええええええええあああああああ!!!」

「うるっさいわね!!このバカ!!」

ゴズツ!!

「ぐげっ…!?けほっ…けほっ…!ごう、…!」

「戻り始めたわね。誰か拘束具を持って来てちょうだい。」

「わ、分かりました!萃君:僕は君が戻って来ることを信じているから:!!」

おかしくなつた俺はミッドナイトさんにボコボコにされながらも抵抗をしようとしていた。だけど、やっぱり彼女の方が格上だ。

毎回俺の目に入る彼女の表情は痛めつけていることを楽しんでるかの如く、恐ろしい表情を浮かべていました。怖いです。

「ぐ…ヴ…:おえっ…げほっ!!」

「ふんっ!!」

ベキツ!!バキバキツ…!!

「ぐぎぎぎいい…!!しゃあああああ!!」

ガブツ

「痛ツ!!本ツ当いい加減にしなさいよ!!」

ザザツ

「大変だ!なんか急に乱入してきたミルコが巨大侵略者インヴェーターに吹っ飛ばされた!」

ピクッ

「ぎぎぎ……?!ぐぎぎぎぎ……!!」

「な、何よ……!まだ抵抗しようつてんの!」

「まさか……!ミッドナイト!艶星少年は抵抗しないハズだ!!だからこれ以上の攻撃はしないでおいてくれないか!!」

「何よ!急にそんなこと言われてmシユツ!! あつ!!」

「萃君!無茶だ!戻ってくれ!!」

「俺のターボでも追いつかねえなんてよお……!アイツの身体能力どーなつていやがるんだ!!」

「艶星少年……!一体何処まで成長するんだ……!侵略者め……!まだ抵抗していたのか!!」

「俺の硬化した手もミシミシいつてたからやべえぞアイツ……」

またまた急展開。

ルミ姉が乱入してきた様子。

吹っ飛ばされたことを耳に入っていたからか、本能的にそれに反応して現地へ向かった。お姉ちゃんに肋骨四本と右腕を折られてヒールで腹部を刺されて出血しているが、全く気にせずに向かっています。

意識はほんの少しだけど、戻りつつあります。

「マズツたなこりや…。腕やつちつたなあ…。」

「チビ共が調子に乗るなあああああ!!」

「クソおお!! オイラ達でなんとかしていても倒れてくれねええええ!! 艶星いいいい!!」

「ザザアツ!!」

「あ、萃ちゃんじゃねーか!」

「艶星!!」

「萃っち!!」

「艶星君!! 俺達は味方だ!! だから攻撃は侵略者インヴェーダーのみにしてくれ!! 負傷者が多すぎるんだ!!」

「ぎぎぎ……ぎいい…!!」

「指揮していたチビじゃねえか!! テメエを殺りや俺達や楽に破壊出来んだよおお!!」

「ぎ……ぎぎい…ツ!! オ…きエ…口…!! さ、サつ…リク…た伊しよ…ウ…い…ン
うエ…ーダー…!」

「潰れろおおおお!!」

「きひッ!!」

ド「オオンッ!!!」

「つ、艶星…さん…?」

「きし…きししし…!!コリヤあ…隙だらけだ…!」

「はあ…はあ…間に合わなかったか…!!」

「いや、違う!オールマイト…萃君がいつものに戻ってる…!!だけどなんか変!!」

「ああく…萃ちゃんおかしくなってるねエか?暴走したらアタシは容赦しねーけど…あの子、クソデカ野郎の指へし折ってね?」

ミシツ

「ごぶつ…とつとと…決着をツケネエと…きちい…カモな…。」

「チビが…大人しく死んでくれりやいいものをおおおおお!!」

「すうう…^{ダッ}弾!!」

パアアアン!!

「ぬおつ…!?こんの…雑魚虫めがあああああ!!」

ビュッ!!

「閃^{セン}…!!」

ズツ…

「く…クソ…がああ…!!」

「^{ゲッ}ゲッ
!!」

ズバキヤツ!!

「ぐおおおああああああ!!!このまま叩き落としてやらああああああ!!!」

「きししし……!てメエこそあつケねエ負け方していな……!!」

「超重量級ギガントアツパーああああああ!!!」

ゴオオオオツ!!

「すう………廻^{カイ}!!!」

ギユルルルツ!!!

「回りながら死ねええええ!!」

閃^{セン}!!!

ズパパパツ!!

「コイツツ……!!潰れ^{ゼロ}」 「零^{ゼロ}!!!」 は……?」

ブシユウウツ!!

ズズウウン…

抵抗し続けていた巨大侵略者^{インヴェーダー}は倒れ、俺はそのまま落下していった。高さ的には即

死するレベルの高さからなので誰かが受け止めてくれないと俺は死にます。

「つたく萃ちゃんは無茶しやがるなあ!ほらよつと!!」

バフツ

「……………うっ…ごぼっ…。」

「ミッドナイトにお仕置きされたんだろ？その体だからまあそーなるわな。」

「ミルコ、助かった。私も止めておきたかったのだが…止める出番がなくてだな…。」

「気にすんな、この子の管理責任はアタシにもあるし、リユーキュウは仕事でいねーからしよーがねーもんよ。お仕置きは確定だな。」

「っ、艶星…さん…。何があつたの…？」

「まあかくかくしかじかで萃君はこのような状態になつて…。」

「そうでしたのね…むうっ…！」

「お、おいヤオモモ…？」

コツコツ…

「……………やオ…よろズ…さん…？」

「ふんっ!!」

ペアアアン!!

「づっ…！」

「おい！死にかけの萃ちゃんになんつーことしてんだよ！」

「どうもこうもないですわ!!艶星さんに無茶をしないでつて言つたはずなのに、また無茶をして死にかけですよ?!守つて死にかけているのと無茶をして死にかけている

なんてワケが違いすぎますわ!!」

「ご……め……なさ……い……。」

「当分の間は外に出ないことを願いますわ。」

「ヤオモモ!それは言い過ぎじゃねーのか!？」

「確かに言い過ぎだ。だが…賛成するしかないかも知れない。」

「……僕は艶星君を助けたいと思っっているよ。だけど、艶星君の今の状況からしたら辛
いだろうが…八百万さんの発言に賛成するよ。」

「青山まで!？お、おい…何で…皆なんでそんなこと言うんだよ!!」

「上鳴君……。」

「確かに艶星は危ないかも知れねえ!だけどよ、おかしいだろ!!今回の侵略者インヴェーダーの襲撃で
あのデカブツを足止めできたのだって艶星の指示があったからだろ!!?緑谷と一緒に考
えて作戦を考えてくれていたんだぞ!!」

「分かっていますわよ!!」

「じゃあなんで……!」

「もう…艶星さんの心が…壊れかけているから…!!」

「ん なっ…!?!」

「萃ちゃんは人が目の前で倒れたりするとああなるんだ。アタシがやられた時こそ

うなっていたことがあった。もうこれ以上は負担をかけさせられねえし。」

「俺達にできることはねーのかよ！俺達が助けられて艶星アイツを助けられないっておかしすぎんだろ！！艶星アイツに助けられっぱなしでいいのかよ！！今の状態なんて俺達はヒーロー気取りのただの学生だぞ！！俺から見れば俺達よりも艶星アイツが一番ヒーローに見えるんだわ！！艶星アイツは言ってたんだ！本当は無茶したくなくても無茶しちまうって言ってたんだよ
！」

「だけど、この結果でしよう!?!」

「じゃあ分かるのかよ！努力していたのを目の前で見たのかよ!?!」

「か、上鳴少年…八百万少女…やめないか…?」

「オールマイト、アンタは引っ込んでな。今は出るトコじゃねえ。それにその怪我はマズイだろう?」

「む…ミルコも察していたか…。」

「分かるさ…萃ちゃんの攻撃だろ?」

「ま、まあ…そんなところだ…。」

「緑谷、お前はどうか?」

「ぼ、僕!？」

「そうですわ、艶星さんをどうしたいですか？」

「僕は…。」

「……………ッ。」

「助けたい。」

「だろ!?!」「だけど…。」「なんだ…?！」

「今の萃君は助けられない。」

「なんでなんだよ!!助けられないって…!!」

「助けられる手立てはないんだ…。もう萃君自身の問題なんだよ…ここからどう変わるかが自身で決めなければならぬ…。そうなんですよ、萃君…!」

俺は頷いた。

出久君の言う通り、これは俺自身の問題だ。

俺の中の二人が無理矢理出ようとして暴れていたせいか、それがきっかけで暴走を引き起こしていた。

同じ過ちなんてもう起こしたくない、ていうかめんどくさいから引き起こさないでくれ ()

「とりあえずこの子は少しのの間収監しておく。もちろん、アタシがキツチリ管理させ

てもらかん。何か面倒事起こしたら蹴り潰すから安心しな。」

「ミルコ相変わらず物騒だ……」

侵略者の襲撃は終わり、^{インヴェーダー}雄英の修復作業に入った。俺はまた収監されたのだが、今度はかなり厳重な牢に収監された。

敵の刑務所ではない俺の為だけに作られた牢だ。

そんなものが存在していたのを知ったのは俺が目覚めてからのことだった。

#26 はーどなおしおき

ペチツ

「あ たつ。」

「そ らつ。」

ペシツ

「あ うつ。」

「そ れつ。」

ズブシツ

「い っ だつ。」

今何されているのかって？

ルミ姉にめちやくちやいじられています。

意識がないまま数日後に収監されていたことに気づいたのだが、目覚めてからは何の変哲もない俺に戻っていた。

記憶はあるかって？あるけれども、倒して捕らえた後の記憶がはっきりしていない。しかもあれは異例過ぎた異例だった。

だって無理矢理二人が出てこようとしていたんだから。

今は大人しくしてもらっているからなんとかなっているけれど。

「おい萃ちゃん。」

「なに？」

「お前つて素でいる時はアタシとかには反撃とかしてこないよな。」

「反撃する時はするよ？」

「どういう時？」

「噛まれた時。」

「噛むぞ？」

「やだ。」

「犯す。」

「やだ。」

「蹴らせろ。」

「なんで!？」

「拒否るから。」

ガチャッ

「なんで開けるの!？」

「ブチ犯したいから。」

「ちよつとやめて?!? ルミ姉怖いよ?!? しかもこれR15なn「うるせえ黙って犯される!!」いやああああああああああ!!!!」

「はああ…ミルコつたら…。兎以上に兎なことしているわ…。まあ、あの子の暴走を止めるキツカケが私とミルコであの子にトラウマを植え付けたことだったなんて…。ちよつとやつたこと悪魔じゃないかしら…。」

ルミ姉にあんなことやこんなことされてめちやくちやく泣きました。

お仕置きにしてはハードすぎるお仕置きに見えました。

俺は此処が何処なのかすら居場所が分からず、教えてもらおうにも教えてもらえずにお仕置きを受けていました。めちやくちやくすつげー泣いた。

「萃ちゃんよお、これしきのことくたばで斃るなよ。」

「ひぐつ…い、いくら俺をガチで犯さなかったとは言え…胸を触りまくった上、首筋を甘噛みしまくったりするのは酷いよ…。」

「やっぱり犯せばよかった!! もつと泣き顔見せやがれ!!」

「いやああああああ!!」

「なによこれ…。」↑カメラ越しで見てるおねーちゃんの反応

モ二モ二モ二モ二モ二モ二

「ルミ姉ルミ姉。」

「なんだ？」

「なんで皆に会えないの？」

「ピクツ お前…あの時意識があやふやだったのか？」

「討伐した後あんまり覚えてない…。」

「なるほどな…？まあかくかくしかじかつつわけだ。」

「反省するよ…だけどルミ姉？」

「あ？」

「俺の頬っぺ触りすぎ。」

「いーじゃねーかよ。お前の頬っぺ柔らかくて食っちまいたいくらいなんだよ。」

「北海道産の人参。」

「食わせろ。」

「じゃあ頬っぺ触るのやめてよ。」

「やだね。」

「なら渡せないよ。」

「お前の頬を食うわ。」

「やだ！」

「なら反省しろ！」

「反省する！」

「じゃあ北海道産の人参くれ！」

「連絡手段ないの。」

「じゃあアタシの人形な。」

「うそおん…。」

ガチャッ

「ミルコ、交代よ。」

「えー!?まだ萃ちゃんと居たいんだけど！」

「私も萃ちゃんと居たいのよ!?あなたただけ独占するのはズルいわよ!?しかも勝手に入ってるし…。」

「ちえく…分かったよミッドナイト。それじゃあな萃ちゃん、また今度な。」

「はあい…。」

反省はしているものの、この光景だと俺自身も反省しているように感じていないように見えて泣きそうになりました。

ルミ姉が部屋から出た後、お姉ちゃんがズイズイと近寄って来て抱きついてきた。またこの展開ですやめてくれ()

「お姉ちゃん…苦しい…。」

「すんすん…はああ萃ちゃんエネルギー供給できるわく♪」ガブツ

「びいびい!!?」

「こら!ジタバタしない!!もうちよつとだけだから!」

「俺自身が反省しているように感じられないの!泣いていい!?」

「私からしたらあなたの泣き顔はご褒美よ!」

「やっぱり泣くのやめる。」

「どうしてよ!」

「お姉ちゃんが襲うんだもん!」

「なんで分かるのよ。」

「そんな顔ですぐに分かるよ!」

「顔に出た?」

「出てるし怖いよ!!」

「あなたがおかしくなったから骨を何本か折ってあげたくらいよ?」

「恐ろしいこと言わないで!?!あれ以来二人の俺がお姉ちゃんに対してめちやくちや恐怖

心抱いているから!!」

「いいじゃない♪怖がっているとところが可愛いから怖がらせたいのよ♪」

「やっぱり怖い！」

「…本当に怖いのか？」

「うえ…？」

「私に対して怖がっているの？」

「い、いや…これは…その…。」

「言えないのか？」

「あ…えつと…。」

「無理もないわね。私もちよつとやりすぎたから反省しているわ。そこまで怖がっていたのは知らなかった…ごめんね？」

「お、お姉ちゃんか謝ることじゃないよ…俺はただ…。」

p r r r r r r r r

「電話ね。それじゃあ少し空けるわね。」

ガチャツ

「あ…行っちゃった。はあああああ（クソデカ溜息）…なんであそこで言えなかったのかなあ…。」

ポスツ

「うっ。」

「へ？」

「あ、バレた。」

「きやあああああああああああ!!?!?」

リユーキユウさんがオフトウンに忍び込んだ。

思わずクソデカい悲鳴を上げてしまい、リユーキユウさんまでもがびつくりしてた。さっきまでの状況を見られていたと考えていたらもう死にたくなった。

だってさっきまでの状況をこっそり見られていたんだよ？死にたくなるぞ？

「うううう…死にたい…。」

「わ、悪かったって…。萃ちゃんの布団いい匂いするからつい…。」

「オフトウンはどーでもいいですが、今までのアレ…本当に見ていたのですか…?」

「ええ、バツチリ見ていたわ。」

「誰か俺を殺してくれえええええええ!!」

「残念ながらそれはできないわ。」

「殻に閉じこもるです…。」

ポフッ

「あ、くるまった。(可愛い。)」

ヒョコッ

「リユーキュウさん…。」

「ん?」

「なでなでしてくれませんか…?」

「いいわよ?」

ナゲナゲ

「落ち着くです…。」

(私が不在だったのも失態ね…。それにしても顔だけ出しているの可愛すぎるんだけど何なのこの子。)

ズブシツ

「ぶやっ。」

「どうやったらそんな発音になるの?」

「分からんれしゆ。あと爪が痛いれしゆ。」

「わざと痛くさせているのよ。今回は私が不在だったのもあるけれど、映像見たらあれはやばかったわよ?しかもミッドナイトにしばかれて折られたにも関わらず…。」

ズブシツ

「づっ。」

「今度あんなことしたら骨折じゃ済まさないからね?」

「ご、ごめんにやしやい…。」

「私の言うこと一つだけ聞いてもらえる?」

「にや、にやんでしょか…。」

「ちよつとお尻借りていい?」

「…はい???」

「萃ちゃんにお仕置きしてないからつていうのと、可愛いお尻を叩きたいから。あと悲鳴が聞きたい。」

「リユーキュウさん、もしかしてですけど…一つ目は分かりますが…あとの二つつて…。」

「ええ、私がただやりたいだけ。」

「そんなあ…。」

「ほらお尻出しなさい。今の萃ちゃんには拒否権なんてないわよ?」

「わ、分かりました…。」

お尻をめちやくちや叩かれた。

時には手を変化させて叩かれたからパチンどころか、重い音がしたのだ。しかも鱗だからめちやくちや痛いしグサグサ刺さるから悲鳴を上げっぱなしでいました。

とにかく凄く泣いていたからか、リユーキュウさんの表情はみるみる変わり、お姉

ちゃんみたい目に影がかかった笑みに変わっていった。

めちやくちや怖いです。

「ひぐつ…リユーキュウしゃん…も、もう勘弁しへ…。」

「ダメよ♪もつと反省しなさいっ！」

バチイイイイン!!!

「あびっ…!!」

ガチャツ

「ん?リユーキュウじゃねーか。何してんだよ。ミッドナイトが電話来たから交代してくれて言われたが…。」

「見ての通りよミルコ。この子にお仕置きをしてあげているの。」

「へえ…それじゃ足りないからアタシは首をやろうかなつと…。」

「る、ルミ姉…にや何にをしすゆるる。一気にやの…?」

「おらあつ!!」

ガシイツ!!

「ぐえっ!?!」

「脚挟みだおらあ!」

(やば…これ死ぬ…!ルミ姉の太ももの筋肉が凄まじすぎて抵抗が…!!てか体重がか

かって苦しい…!!)

「よかったじゃない萃ちゃん。このままトべるね♪」

「がっ…あ…!!…いい、いぎ…が…!!」ピクピク

「必死に呼吸しようとしても無駄だ。落ちな♪」

(ヤバい…完全に…殺される…!)

「お、頑張つて抜け出そうとしているな? そんな簡単に逃げられると思うなよっ…!!」

ギチイイツ!!!

「ぼぶっ…!!?」

「んにひひ♪お前の必死に息を吸おうとしているのいいね♪可愛いぜ?」

「やり過ぎないようにしなきゃね。それっ。」

バシイインツ!!!!

「ぶふっ?!」

「ほらほら酸素取り入れねえと死ぬぜ?」

ギギギ…

(死ぬ…!く、首がっ…!)

「びくびくしちやっつて…そんなに嬉しいのかな…? なら、もつとやっつてあげなくちゃ…

ねっ!!」

ベシヤアアンツ!!!

「ぎぎゆっ…!!!」パタツ

「あ、落ちた。おいりユーキュウ、萃ちゃん落ちたぞ?」

「あれ? やりすぎた?」

「多分やりすぎたな。泡吹いてる。」

「え?」

「まあ復活するからいいんじゃない?」

「そうね…だけどまだやり足りない…。」

「暴れちゃ困るから四肢をへし折っておくか?」

「ええ、やっておきましょう。」

お仕置きを通り越して拷問に近いことをされ、俺は起きるまで折られていることが付かなかった。

もちろん気づいたのは起きた時でした。

次回に続きます。

#27 女性相手だと調子悪くなる。

パチッ

「んう…?」

「あら、お目覚めのようね♪」

「お姉ちゃん…?」

「相変わらず可愛いわ…。」

「俺確か…ズキッ うぎいいつ!!いゝででで!!あれ!?なんで折れてるの!」

「ミルコとリユーキユウがへし折ったんだって。萃ちゃんが暴れないように。」

「だ、だからつてここまでするの…?!」

「いや私もあの人達と同じようなこととしていたんだけれど…。」

「女の人怖い…。」

「まあ可愛いからしようがないじゃない。」

「そういう問題じゃ…。」

「うつ伏せの状態だと喋りにくいんじゃない?」

「そ、そうだけど…。」

「起こしてあげる。痛かったらいいなさいね?」

「急に優しくなるの怖いよ?」

「まーまーいいから♪」

ギョムツ

「あうっ。」

「本当、やられっぱなしね。」

「そりゃ抵抗できないんだもん。反省しているように見えなくなるのも嫌だし…。ていうか相手二人な上にナンバーズヒーローだし、力が上だから抵抗そのものができないんだもん。」

「ちゃんと反省の色を見せているの偉いわね♪」

「分かるの?」

「もちろん♪カメラ越しで見えていたし、その兎耳みたいな髪がちゃんと教えてくれているからね♪」

「常に見られていることを忘れちゃダメだな俺…。」

「ちゃんと気づいているのね?それなら私からご褒美をあげるわね♪」

「ご褒美?」

「んっ。」

チュツ

「んツ…!!」

「ん〜…。」

ガツシリ

「んむむむむむ…?!?!」

「♪」

まさかのご褒美がキスとは思わなかった。

さっきまであんなに怖かったお姉ちゃんが今となってはものすごく優しい。だけどキスまでされたら後のことを思うとめちやくちや恐怖で震えるかも知れない。カメラ越しで誰かに見られたりしたら俺は確実に終わる。いやもう死ぬやつ。

「ぶはっ！私のご褒美はどうかしら？」

「あ…あう…お、おね…きゆうう…。」プシユウウ…

「あ、死んだ。」

10分後。

「はっ…!!」ガバツ

ズキイイツ!!!

「ふおおおおおおあああああああああああ!!!?」

「なーに一人で騒いでいるのよ…。」

「お、おね…おねおね…おねーちゃんにや何にしててくるののしさや!!」

「ん?ご褒美のこと?」

「そ、そそそそーだよ!!」

「ダメだった…?」

「い、いいいいや…べ…べべ別に…。」

「ふふつ♪萃ちゃんがキスに弱いなんて…かーわいつ♪」

「か、からかわないでよ!!」

「またキスしちゃう?」

「やだ!」

「こんなに乱れる萃ちゃんも悪くないわね…いつその事襲つてしまいたいわ…♪」

「もうおねーちゃんそのものがこわい!」

一方、ルミ姉とリユーキュウさんは…。

「なーリユーキュウ。」

「何?」

「やっぱりやりすぎた。」

「ええ。私もやりすぎた気がする。」

「いや、リユーキユウは萃ちゃんのケツをぶつ叩いていただけだろ？あたしは窒息させた上に泡を吹かせて四肢をへし折ったんだぞ？あたしがやりすぎた。」

「まあだけどあの子は自覚してくれると思うから大丈夫じゃないかしら？」

「そーか？そんならいいがなあ…。」

「珍しいね。あの子の心配するなんて。」

「実質的にあたしが育てたもんだからな。そりゃ心配だつてする。」

「私も心配していたけれど、あの子のことだから分かってくれると思うから心配するのやめたわ。」

「それはダメじゃねーか？」

「なんやかんや心配してくれていました。」

「本当は見捨てられるかと思われるくらいにヤバいことをしでかしたのに、俺を見捨てるなく管理や監視を続けていた。」

「だけどやっぱリルミ姉達怖いです。」

「俺視点に戻る。」

「ちよっ…お姉ちゃ…そこはっ…！」

「ん…(´▽`)がいいのかしらっ？」

「あっ…そこっ…／＼／」

「気持ち良さそうね♪だけでもっといくわよっ!♪」

グギギギギギ

「あ、だだだだだだだだだだだだッ??」

「えっちい声を出さないでもらえるかしら!!?」

「しょ、しょうがないじゃん!おねーちゃん、の肩マッサージが気持ちいいんだから!」

「なんなら痛くしてやるわ!!」

ペシッ

「うびやああああああ!!?折れてるところはやめてえええ!!めちやくちや痛いんだか

らああああ!!」

「ほらほら、ここがいいんでしょ?」

ゴリゴリ

「い、で、で、で、で!!ごめんなさいごめんなさい!!変な声出さないから痛いところゴリゴリしないでえええ!!」

ガチャッ

「あら?オールマイト、どうしてここに?」

「あーいやあ…艶星少年の具合を見に来たのだが…凄い状態だな…。ミッドナイト、流

石にやりすぎでは…?」

「そうかしら?」

「オールマイトさん、お姉ちゃんが意地悪してくるんですけど助けてください。」

「すまない、助けられない…。」

「ですよねえ…。」

その後もお姉ちゃんに好き放題されました。

これでもかというくらいに撫でくり回されて髪がボサボサになってしまっていた。襲われたにも等しいくらいだわ()

数日後。

「さて、萃ちゃん。」

「何お姉ちゃん。襲おうとするのやめてよ?」

「もう襲わないわよ!あれだけガチ泣きされたら襲うにも襲えないわよ!!襲いたいけれどもね!!」

「キスしてくるのもうやめて欲しいから泣いたんだもん!!」

「ソフトなキスだけなら許してくれるかしら!」

「そ、それならまだいいよ!」

「じゃあ今させて!」

「やだ！」

「ケチ！」

「いいもんケチで！」

「眠らせたげるわ!!」

「やめろおとおお!!」

「あ、ちなみに今日謹慎明けよ？」

「なんやて？」

「おらああああ!!眠れえええええ!!」

「ぎゃああああああ!!」

眠らされた。

数時間後。

「ん…あれ…?この天井…。」

「あ!起きた!!」

「ふえあつ!」ガバツ

ガチコオオオン!!!!

「~~~~~!!!」

「な、何をやっていますの二人共…。」

「あ、頭ぶつけたあ……！」

「萃つちの頭結構硬いよお〜！」

「萃が悶絶してる…：やっぱり可愛いのは変わってないね。」

「3日くらいスヤスヤ寝ていたから皆で触りまくってたけどね！」

「ピクツ はい…？」

「先生が艶星さんをお姫様抱つこで連れて来た時に言われましたの。起きるまではこの子を襲うなり触るなり何してもいいからって…。」

「萃の頬が柔らかくて噛みついてしまっそうだったのは焦ったけれど。」

「うちも思わず食べてしまっそうやった…：めっちゃぶにぶにしていたんやもん…！」

「もう死んでいいですか!？」

「やらせなああああああいい!!」

ガバアツ!!!

「ぎゃああああああああ!!!」

リビングにて。

「あ、萃君起きたみたいだね。」

「相変わらず賑やかなこった。」

「まったく世話が焼けるぜ…。」

「艶星に甘いもの食べさせてやりたいんだが…。」

「砂藤、それはいい提案だ。釣れるはずだ。」

「おいしい艶星く!! シフォンケーキ食べるかー!？」

ガチャツ

「食べrガシイツ!! ぎよえっ!!」

「…艶星、どんまいだ。」

砂藤君がシフォンケーキを作ってくれてすぐに部屋から出たけれど、女子一同一斉に俺をガツシリ驚掴みにされてまた引き摺り込まれた。

安静にしなさいと言われても安静になんかできません(○)

何故かって? 女子一同にめちやくちやいじくり回されているからです。

「砂藤、どうだった?」

「一度ドアを開けてこつちに来ようとしていたが、女子達が艶星を驚掴みにして引き摺り込んでた。」

「…アイツも大変だな。」

「男女問わず人気だからね。」

「オイラもああいう人気が欲しいぜ…艶星羨ましいぞこんにやるおおお!!」

「ケーキ…どうするか。」

「俺らで食つちまおーぜ？」

「だな！艶星にはわりーけれど、俺らで頂くわ！」

一方、俺の部屋では。

「ねえねえ…。」

「なに〜？」

「思いつきり女子会開いていませんか？」

「いいでしよ〜？だって萃ちゃんに抱きつきながら女子会するの久しぶりだもん。」

「あ、芦戸さん狡いですわ！私にも抱かせてください！」

「次私もい〜い？」

「私もいいかしら？」

「あ、あたしも…／／／」

「う、うちも抱いてみたい！」

「ねえ俺ってお人形さんなの？」

「愛玩動物としてなら見てるよ♪」

「結局ペットか何かなの!？」

その日、俺はお風呂やトイレ以外部屋から出られることはなかった。

女子達にいじられていたただけではなく、交代交代で俺の監視に入っていたからだ。ど

うやら俺が眠らされていた際にお姉ちゃんが女子達に伝えていたようだ。

「寝る時は俺一人で大丈夫だよ。出たりしないから。」

「ダメ、一緒に寝るよ。」

「耳郎さん…俺恥ずかしいから大丈夫だって…。」

「それがダメだっての！分かってくれないなら音圧を直接体内に打ち込むよ!!」

「それ酷くない!?!」

「酷くなんかない!」

「俺死ぬよ!?!」

「死ねえ!」

「超絶ドストレート!!」

「あんたを心配してるから言ってるよ!」

「…へ?」

「艶星、あんたはトラウマがあるでしょ?だからそれに似た夢を見て暴れないか心配してんの!」

「あう…そ、それは申し訳ない…。やっと納得できたよ…ありがとう。」

「あ、あたしは思ったことだけを言っただけ!」

「えつと…じゃあお願いしてもいい…かな?」

「な、何が…?」

「添い寝。」

「~~~~ツツ??」

ポカンツ!!!

「ぴゃあつ!?!」

「そ、そそそ添い寝なんて軽く言わないでよ！恥ずかしいじゃん!!」

「じ、じゃあ…監視??」

「あーもー添い寝でいいよ!!おやすみ!!」

「お、おやしゆみ…。」

耳郎さんはぶんすこと怒ったまま毛布を強奪し、俺はもそもそと毛布を取り戻した。俺のベッドは一人用なので耳郎さんを壁側に、俺は落ちても大丈夫のように床側の方で寝ました。

ちなみに寝ている俺の頬を容赦なくつつき回していたとかなんとか。

#28 Enemy of the truth

女子達にいじくり回されてから翌日が経った。

ちなみに耳郎さんに頬をいじられて起きました。

「萃君おはよう！」

「おはよう出久君……」

「まだ慣れてないのかい……？」

「うん……女子達が怖い……」

「髪でできたうさ耳が垂れてる……」

「そーなの？」

「うん、ロツプイヤーみたい。」

「お、艶星だ！おはよー！」

「峰田君おはよ。」

「お前、どうだった……？」

「どうって？」

「女子達のことだよ！オイラそれで少し心配してたんだ…羨ましいけどな!!」
「んー…とりあえずめちやくちやいじくり回されて大変だった。」

「何処をだ!?!」

「頬っぺ。」

「あー…なるほど納得。」

「確かに分かるかも…。」

プニプニ…

「艶星じゃねーか！具合はどうだ!?!」

「あ、切島君!」

ビュンツ!!

「ど、どうした!?!」

切島君がリビンググに来た瞬間、俺はシユバツと手前まで飛んだ。
言いたいことだらけで俺は涙目になっていた。

出久君と峰田君は移動の速さにめちやくちや驚いていたらしい。

「あの時は本当に申し訳なかった!!」

「あ、あの時…?」

「俺が暴走していた時、君を傷付けてしまっていたから…それで…。」

「ああ、俺は大丈夫だ。お前はちよつとやべーとこまで来ていたが、そこまで思ってくれてんなら俺はそれで十分だ。それに、俺や皆は悪くなんか思っていないぞ？昨日は女子達にお前を占領されて話せなかったが、お前の話題で持ち切りだったよ。もちろんいい意味でな。」

「そ、そう…なの？」

「うん、萃君自身がいい方向に制御できたら戦力としてもサポート役としても凄く助かるかもって話もしていたよ。」

「そうそう！オイラも緑谷と話したけれど、お前はやっぱりオイラ達のクラスに絶対にいねーといけない存在なんだって。それに友達ならお互いの悪いところを改善していけばめっちゃくちや良くなるって！」

「それとだな、先生方からお前に何か言いたげなことがあるってよ。」

「え…？ヤバい…俺どうしよう…。このまま何かやられるんじや…。」

「いや、ただの連絡みたい。」

「え？」

心底焦りました。

連絡の内容はただ単に授業の進んだ内容でした。

追いつくまでにめっちゃくちや時間がかかります。

しんどいです。

「あー…それとだ艶星。」

「な、なんでしようか…?」

「そんなに怯えんじやねーよ…お前、オールマイトと対決してみたらどうだ?」

「嫌です!!」

「まあそうだろうな…今のお前じゃあ無理があるからな。」

「俺、正直…ヒーロー科に向いていないんじゃないかって心の何処かで思ってしまったているんです…。あんな暴走こを引き起こしたのにのうのとヒーロー科でいられるはずがないんです…。」

「それは違うぞ艶星。」

「え?」

「お前は個性を持つていない方がまだマシだと思え。個性を利用して悪事を働く人もいれば、知らないうちに個性を暴走させて制御ができない人だっている。それを助けたり捕らえたりするのがヒーローを目指すヒーロー科だ。まあ小さな警察みたいなもんだ。お前にだって小さなファンがいるだろう?」

スッ

「あ…そつか…こりゃあ、弱音吐いてる暇はねエかもな。」

「お前の計画のことももう既にクラス全員にバレたから伝えたが……まあ反対はされていいな。お前ばかりに頼るわけにやいかねえってな。暴走する前にお前を全力でカバーしてやるってな。」

「……あの、相澤先生。」

「なんだ？」

「コスチュームがイカれたので直しに行きたいです。」

「……お前、さっきの話聞いていたのか？」

しんみりとした空気が一気に崩壊して緩くなつた。

コスチュームがイカれた理由は大体暴走が原因です。

ちなみに直しに行った次いでに訓練所を借りました。許可下りた。

「とりあえずは肩慣らしと行こうかな。えいやー!!」

ボカンッ!!

「……………けふっ。」プスプス

「おい！今爆発音が訓練所から聞こえたぞ！」

「誰かが暴れてるに違えねえ!!すぐに捕らえるぞ!!」

バンッ!!

「???」

「誰も…いねえ…?」

「お、おいバクゴー…。」

「あ?」

「踏んでる…。」

「…? うおつ!? てめー艶星!! 何してんだ!! 驚かせてんじやねー!!」

「ご、ごみえん…。」

「艶星、訓練所ごんなところで何していたんだ?」

「うんとね、肩慣らしにあの岩をぶん殴ったら爆発した。」

「どうしてそうなった!？」

「私にも分からん(某乙級映画迷台詞)」

「その誰かが殴った衝撃で爆発させるようにしたんだろうな。おい、俺を見るな。」

「もち。爆豪君はニトロに似た汗で爆発を起こすんでしょ? 遠隔爆発なんてことはできないよね。」

「できていたらとつくにやったら。そもそもテロを起こすようなこたあしねーぞ!!」

「やってそうだけどな!」

「てめーぶつ〇す!!」

「いつものバクゴーだ!」

（何かあったのかと思つたが…あいつらがいるなら問題ないか。俺は入らないでおくか。）

めちやくちやわちやわちやした。

そして俺は気づいた。

切島君みたいに硬くしたらいいんじゃないかね？つて思つたのだ。気合いで。

とはいえ、俺は気合いで硬くするだけだから切島君並には硬くはできない。個性は鍛えれば鍛える程より強化されるからそれには勝てない。

だから俺は強化よりも技を練りつつ弱点を即座に見つけ出すことを重視しようと思つております。

そして色々ありましたが帰寮しまして。

「たでーま戻りもーした。」

「萃君お帰り！」

「萃ちやああああああん!!」

バフツ

「ぶぐつ!!!?」

「艷星、だいぶ遅かつたな。」

「んううう……ぶはっ!!ちよつと特訓をしてたのだ…。」

「特訓？」

「暴走しないための…ね…あの、芦戸しゃんぐるじ…。」

「萃ちゃんに話をしたいことがあるから皆ずーと待ってたの!!」

「あ、芦戸さんごめん。僕が伝え忘れてた。」

「それならしよーがないね！萃ちゃんにお仕置きしておk「なんで?!」私達を待たせたか

らでしよ?!」

「ごめんにやしやい!!!」

((和む。))

「よし。お喋りはここまでにして、リビングで話そう。」

少年少女移動中…。

「艶星、今お前が相手にしている侵略者^{インヴェーダー}ってどういう組織なんだ？」

「あー…そう言えば細かく言っていないなかつたね。その名の通り、国を乗っ取る組織だ

よ。」

「敵みたいな感じかな？」

「敵だけどそれよりもアホみたいにバカデカいクソ組織。」

「艶星さん、口が悪くなっていますわよ？」

「それよりも、何で萃っちがその組織を？」

「最初に暴走した時あったでしょ？」

「そう言えばあったね。」

「その時にゴキブロスみたいにかサカサ動き回っていたら、たまたまそいつらのアジトだったの。」

「某準伝説の○ケ○ンじゃん。」

「それでアジトを潰したら事がおつきくなった。」

「そしてこうなったわけだな？」

「当時動き回っていた時の体勢ってどんな感じ？」

「覚えてないなあ：ゴキちゃん並の体勢だったと思う。」

「おーい、話がズレてるぞー。」

「あつ。」

「要はその組織を潰さねエと国そのものがマズイわけだな？」

「そゆこと〜。」

「答え方が緩い…。」

「だけど、今の俺じゃあ潰すこともままならない上に捕まえられないんだよね。」

「どうする?。」

「んと…また迷惑をかけてしまうけれど、敵を捕まえるのと同時に侵略者の撲滅を手

伝って欲しいのです。お願いしても大丈夫でしょうか!!」

「フン、答えるまでもないな。」

「と、常闇君?」

「お前に協力するに決まっているだろう?」

「常闇に先言われちまったが、既に俺達を巻き込んでいつからなあ!やるからにやあ全力で潰すに決まっつてらあ!!」

「そうですね!もう皆に迷惑をかけているのですから、迷惑どんと来い!ですわよ!!」

「僕も君に協力するよ。あの時は急な襲撃だったけれども、今度は萃君だけが考えなくて大丈夫だよ。僕達もいるし、一緒に戦うよ!そして、侵略者^{インヴェーター}を皆の力で全力で阻止するから!!」

「次いでに、俺は暴走した時のお前を阻止してやるからな!」

「艷星の目の前で見苦しいところを見せてしまったが、サポートをしておくからな。」

「み、皆あ…ありがとう…!また迷惑をかけちゃうけれど、これ以上迷惑をかけないようにするし、心配させないように皆の為に…ん…言葉が見つかからないから皆の為にとにかく色々頑張る!!」

はい、語彙力が消し飛びました。

俺は恵まれているんだなと改めて感じていました。

「だからといって無理はしないようにしておかないといつかは見捨てられるかも知れない、避けられるかも知れないと考えていたのですが、八百万さんにハグをされました。なんで？」

「考えたりするのはいいですが、深く考えるのはよくありませんわ。皆に頼ってもらったらいいことありますわよ？」

「その通りだ八百万君！ 艶星君、何かあつたら俺達に教えてくれ！ クラスメイトであり友達なのだから！」

「ありがとう飯田君、八百万さん…困った時は頼らせてもらおうね？」

会議が終わった後、部屋へ戻ったら不法侵入して凄く自由にダラダラしている女性がいいたのはまた別のお話。

#29 親、襲来。次いでに事件。

「リユーキユウさん？なんで俺のベッドにいるのです？」

「いい匂いがするから♪」

「一緒には寝ませんよ？」

「いやよ？一応監視役なんだから一緒に寝なきやダメでしょう？」

「怖くて眠ることができない寂しがり屋の子供ですか俺は。」

「子供っぽいじゃん。」

「子供じゃないです。」

「見た目がロリじゃないの。」

「ロリじゃない!!」

「可愛いから抱きついていい？」

「好きにどうぞ!!プンスコ」

「このまま襲っていい？」

「噛みつく。」

「牢獄。」

「勘弁してくださいすみませんでした。グスン」

「♪（この子をいじめ倒すのも悪くないね…♪ミッドナイトがいじめ倒す理由が分かった気がする。）」

「もう寝ますので早く出て行つてギユムツ 分かりましたから早く寝ましゅよ。」

「♪」

侵略者はリユーキウウさんでした。

ミッドナイトさんだと思った？ねえねえミッドナイトさんだと思った？

残念、リユーキウウさんでした。

はい、リユーキウウさんに部屋を占領されていました。

ベッドに寝転んで待ち構えていたかのように涎が少し出た状態で寝ていました。寝顔めちやくちや可愛かったです。

一瞬死にかけました。

そして一緒に寝ることを強要されたので仕方なく一緒に寝ることに。

まあ、監視役としてゐるわけだから仕方ないことではあるが…。

「あ、あの…。」

「んっ？」

「俺は抱き枕じゃ…。」

「抵抗するの？」

「なんでそうなるのれすか…。」

「なんか母性が溢れる。」

「なでなでされちゃうと…。」

「なに？照れちゃう？」

「……／／／」

「可く愛いっ♪」

翌日、ゴキツと嫌な音が鳴って気になって目を覚ましたら俺はリユーキュウさんに寝技をキメられて呼吸が出来ない状態になっていました。

ぺちぺちと弱いタツプをしていたが、全然起きる素振りもなかったので諦めて落ちました。

数分後には芦戸さん達が突撃してきたが、俺は落ちているので気づくハズもなく彼女はリユーキュウさんを起こして俺を救出してくれました。

「げほっ…お、おはよ…ごじやいましゅ…。」

「半分死んじやつていたわよ萃ちゃん。」

「うつ伏せヘッドロックで萃ちゃん本体がリユーキュウの体で埋まって腕だけがピクピ

クしとつたよ?」

「ナンバーズヒーローだからじゃないってことがはつきり分かるよ…。女の人怖い…。」

「わ、私達を嫌わないでくださいまし!」

「嫌いにならないれしゆ。」

「あー…萃ちゃんごめんね? 苦しかったでしょ…?」

「大丈夫ですよリユーキュウさん。寝相がたまたまあなつたのは仕方ないことですから。」

「萃くーん!! 生きてるかーい?!」

「あいあい生きてるよー! おはよー出久君!」

「おはよー! 萃君に会いたいわって人が今玄関で待つてるよ?」

「…? 誰かな?」

少年達移動中…。

「あいあいお待たせしm…は!!?」

「やほ、萃。元気にしてた?」

「ママあ!?! なんでママが雄英こに来てんの!?!」

「え!?! か、萃君のお母さんなの?!」

「え、めつちや綺麗…!」

「萃ちゃんのお母さんってあの人だったんだね。そりや可愛いワケだよ。」
「萃ちゃん、とても話題になりそうね?」

「お母さんと少し似ているようで微妙な感じだけれど萃ちゃんのお母さんめちやくちや可愛い!!」

「ねえママなんで来たの!?!」

「あんたねえ…あの事件以降めちやくちや話題になっていたの知らないでも思ったあ??」

「ひっ…!!」

「まーた暴走しておいて黙って見ているわけがないでしょ!?!」

「ご、ごべんださい…!!」

「ちよつとこつちに来なさい。」ゴゴゴ

「全力脱兎!!」ビュンツ

「…あ、逃げた。」…」

「逃がさないよバカ息子おおお!!」

「いやあああああ!!」

「…あ、捕まった。」…!!」

俺のお母さんが登場した。

お母さんの名前は艶星^{つやぼし} 咲^{さき}、一番反抗できない最強の生物です。

地元が北海道なので、わざわざ雄英にまで脚を運んで来てくれたけれども…何故お母さんが来たのが全く理解できませんでした。

「ぐすつ…やつぱりママ怖い…。」

(怯えてる萃ちゃんが可愛いんだけどどうしよう。余計に泣かせたくなる…。)

「いつもおバカな息子のご迷惑をお掛けしてすみません…。」

「い、いえいえ！そんなことないです!!まさか萃君のお母さんがメタルレディだなんて

…あまりにも驚きを隠せなかったもので…。」

「めたるれでい???」

「あれ？萃知らないっけ？」

「うん、知らない。」

「あたし、ヒーローやってたの。」

「今知った。びっくり。」

(萃ちゃんがすごく子供っぽくなってる…。待つて?なんであんなに子供っぽくなる

の??可愛いにも程があるんだけれど??)

「あ、とりあえず置いておいて。なして雄英^{うち}に来たの??」

((なして??))

「様子見だよ。あたしの職場が長期休暇に入ったから萃に会いに行こうって思ってたね。ダメだった？」

「連絡してくれないと分かんべさ！」

(べさ???)

「まあまあそう怒らないでよ。ほらOeTAOのチーズケーキ、皆で食べなさい？」

「L〇TAO??」

「北海道では有名な洋菓子店！なまら美味しいよ！」

「萃君。」

「ん？」

「お母さんが来た瞬間、方言がすごく出てきたね。」

「あ、ごめんごめん！久々に親と会ったら何故か一気に訛りが放しゅちゅ…ほーしゅ…

ほーしゅちゅしゅちゅった。」

(ん…急に噛み噛みイ!!可愛いツ!!)

モニモニ

「えーつと葉隠しちゃん??」

「なーにー??」

「起きた時からなんだけれど…俺の頬っぺってそんなにやわっこい??」

「うん！すごくハマるし食べたくなる!!」

「食べないで!」

「…萃。」

「なにママ?」

「あんたが雄英こへいに入れて良かった。いい友達ができてあたしは安心したよ。それとき、ちよつと二人で出掛けない?」

「何そのデートしない?みたいな感覚:怖いんだけど。」

「久しぶりに萃に会ったんだし、少しくらい親子で出掛けようよ。」

「分かったよ:だけど街中でうろちよろしないよね?ママったらすぐに何処か行っちゃうんだから:。」

「大丈夫、知らない場所では萃に付いて行くだけだから。」

「ママが子供になつてどうするのさ!」

(ねえねえ、皆で付いて行こーよ!)

((((さんせー!!)))

お母さんは真面目な声で俺に言葉をかけてきた。

俺がいじめられていたことを知っていたからこそ言ってくれた言葉だった。結構息子思いの親です。

あ、ちなみに親が現れた瞬間に方言がめっちゃめっちゃ出ます。知らんけど。それと皆は変装をして付いて行っていました。

俺は気づいていません（）

「あたしがここに来たのは修学旅行以来だけど、少し変わったよね。」

「ママ、ここは俺達がよく行くところだよ。品揃えがよくて住みやすいんだけれど…。」

「だけれど？」

「その二人！危ない!!!」

ガシヤアアン!!!

「たまたまに車が飛んでくる。」

「へく…なんで車が飛んでくるのかな？」

（ねえ！萃ちゃんが飛んできた車普通に蹴飛ばしちゃったよ!）

（や、やべえ…! 思っていたより強くなってらあ…!）

（我々が共に歩む道は茨の道、だが艶星はその茨でさえなんのそのでは…?）

「二人とも大丈夫ですか!？」

「あ、大丈夫です。壊しちゃったんですけれど、弁償しておきますか？」

「ここ、壊した…?」

「アレ。」

「…え？なんでそっちに?!」

「蹴った。」

「嘘オ：いやいや！怪我は大丈夫ですか!？」

「なんとも。ね、ママ。」

「大丈夫ですよ、息子は強いですから。それとお…。」

「俺を狙ったね？」

「な、何を言ってるんですか！狙ったって…!」

「じゃあ、誰が乗ってたん？」

「…ツ!!?」

「正直に言えばお巡りさんだけで済むよ？」

「…わ、分かった。何も抵抗はしない。ここじゃ不味いから場所を変えても…?」

「ああ、ただし…下手に動けば容赦はしない。」

（やべえ…思っていたよりめちやくちや無理じゃん…!幹部とか言ったあの野郎共…

無個性だからとかほざいたこと言いやがってエ!!!)

「ねえ、萃ちゃんと萃ママが男の人と話してどっか行っちゃったよ?」

「皆どうする?」

「俺ア見に行くぞ。いくらアイツでも守るものがあるからだ。」

「かつちゃんが素直に…!？」

「うるせえクソナード!!早く追うぞ!!」

俺とお母さんと狙った男の人は人気のない所に移動した。

そして俺達が気づかないように付いてきたメンバー（全員+リユーキュウさん）は一気にバラけて後を追った。

ちなみに影が見えないように皆は慎重に動いていたみたいです。

「さてと…ここだと誰も聞けないな。あんた、名前は？」

「俺は鉄崎てつぎき いっせん一閃だ…。聞きたいことは分かる。何故君達を狙ったのかのも全て話す。」

「ならば話が早くて済むよ。そう言えば個性は何だい？」

「個性は刀剣。自身の体の一部を刀や剣にする個性だ。」

「何故個性じゃなくて車を使ったの？」

「命令さ…。」

「命令?！」

「君達は侵略者インヴェーダーを知っているか？」

「あーなるほど理解。」

「あたしも理解したわ。」

「知っているのか!？」

「もちろんだよ。この子から聞いているから。つまりあんたは俺達に助けを求めているんだね?」

「ま、まあそんなところだ…。」

「雇われ者つてことだな。鉄崎さん、もしかして奴らに脅されているの?」

「な、なんで分かるんだ…?」

「そのペンダント、ネクタイピン、指輪…家族がいるんでしょう?」

「そ、そうなんだ…俺の生活はキツくはないんだが、会社からの呼び出しで急に頼まれて…。断ればお約束の展開つてところだ…。」

「会社は何処です?」

「名刺がありますので…これです。」

「んー…聞いたことない会社だあ…。」

「あたし、聞いたことあるよ。」

「ママが知ってるの?!」

「うん、ここつてさ…裏が超ヤバイところじゃないの?」

「いや、社員として働いていたが…俺は知らなかった。今回行った行為も俺は初めてなんだ…。」

「よし、鉄崎さんはシロだ。このことはお巡りさんにも伝えますが、事情を説明して保護

するようにお願いをしておきます。」

「い、いい…のか…？君達を殺そうとしたんだぞ…？」

「殺意はなかったが、やらざるを得ない状態だったってことだ。」

「そだね。あたしも同じ立場だったらそんなことされたらやるしかなかったかもだし。」

「一先ずは…保護から始めよっか。」

「あ…ありがとう…本当に…申し訳…ない…ッ…!!」

はい、しれーつと事件に巻き込まれました。

たまに車がびよんびよこ飛ぶ場所だけけれど、こんなことが起きたのは初めて。寧ろ俺自身を狙っているかのような感じだった。

加害者であり被害者である鉄崎さんは後ほど先生方に説明をして即刻保護するよう
をお願いをしました。早速頼りました。

今度こそは本当にバカレベルの事件になりかねないと感じた俺です。

#30 前夜のように見えて前夜ではない作戦会議。

「う、嘘…でしょ…!?!」

「耳郎さん、どんな会話だった?」

「不味い!あの子また巻き込まれたよ!!」

「え…?!内容はという…!?!」

「先ずはあの吹っ飛んで来た車は萃ちゃんを狙っていたみたい!その上、あの男性は被害者寄りの加害者だつて…!しかも侵略者インヴェイダーと関わりのある会社に務めていて、あの男性は表しか知らなかったから裏のことを言われて断ったらお約束のやつをやらされたつて…!」

「おいおい!!情報量が多すぎないか?!」

「不味いね…聞いちやいけないことを聞いてしまったわね…。」

「萃君は言うと思います。彼はもう同じ過ちを繰り返さないって決めていますから。」

「あんにやろ、言わなかったら容赦しねエからな!」

「まだ皆には報告しない方がいい。言ってしまったらアイツも混乱するハズだ。」

「そうだね、待ってみよう！あともう少し聞いてみる！」

「さて…ママどうしよつか。」

「ん？どうするって？」

「先生方には報告して保護をお願いしたけれど…作戦がまだ考えてないし、皆にも報告しないといけないんだ。すぐに戻らないと時間的にもそんなに長くない。」

「それもそうだね。萃もだいぶ考えるようになったじゃん♪事件解決したらまた出掛けよっかー！」

「うん。久々にママに会えたのは良かったけれど、事件に巻き込まんじやった。」

「親思いにもなったねええく!!暴走させしなればめちやくちやいい子なのにねええええ!!」

「ちゃんと暴走しないように制御する練習してるもん!!」

「んく…可愛いつ…!萃ちゃんが子供っぽくなるのはやつぱり親と一緒にいる時なのねえ…?癒される…!」

事件に巻き込まれたので帰寮。

先生方にも事情は伝えており、鉄崎さんとその家族は雄英で保護。

俺達I—Aはリビングにて作戦会議。

お母さんも加わっているので心強いけれど、俺としてはやられる姿を見たくないの
寮でお留守番してほしかった。

ちなみに血が騒いでいたみたいなので参加したいと親が騒いでいたので参加させま
した。

「さてと…皆に謝罪をしたい。また事件に巻き込まれました。」

「大丈夫さ、いつものこと！」

「萃つちが事件を連れて来るのは日常茶飯事だからね！」

「いつでも覚悟は決めてるよ萃君！」

「お、オイラも決めてるよ！」

「僕も覚悟は決めてるさ！それで…どんな事件だい？」

「あーつとね…多分襲撃事件よりも規模がクソレベルにバカデカくなることは確実だ。」

「あの時よりもか!？」

「うん、あの時よりも。」

「ヤバい感じか…？」

「ヤバいです。」

「俺達だけで解決できるのか…？」

「いや、俺達だけじゃどうしようもできない。だから先生方やプロヒーロー達にも力を

貸してもらおうところ。」

「どのくらいの規模になるのやら…。」

「あと、1—Bやサポート科にも担任を通じて話すところまでいってる。」

「ただだけデカいの!?!」

「バカレベルにクソデカイじゃ分からないから、例えるなら…蟻あひの巣かな?」

「蟻の巣?!」

「うん、蟻の巣。」

「つまり息子が言いたいのは、表面はたった一つの出入り口だけだけど、中もしくは断面図を見たらとんでもないスケールってこと。蟻の巣の断面図って見たことある?」

「…あ!見たことあります!!それにテレビでもやっていました!蟻の巣にコンクリートをいれて固まった後に掘り起こしたらとんでもない量の部屋があつた…まさか…。」

「うん、そのまさかなの。まさにやべーの。ママも意外に目エ付けていたクソ会社らしいの。」

「こら萃、どんどん口が悪くなりすぎていってる。」

「大丈夫つす!いつもの艶星なんで!」

「本当にいい子達…萃、恵まれすぎて死なないですよ?」

「死なないよ?!」

「だけど本当に死んじやダメだから。」

「それくらい分かってるよ。一人じゃないもん。だけど皆で暴れさせてもらうからな？」

「十分に暴れな！あたしは全然構わないから！責任はあたしが取る！」

「よし、作戦会議だ!!」

はい、作戦会議は割愛です。

長いもん！眠くなるし欠伸あくびが止まらなかつたもん！

ちなみに俺は出久君、八百万さんのペアで行動することに。

八百万さんはサポートに入って出久君は戦闘側に、俺は戦闘兼サポートで動く形となりました。他のペアは後ほど紹介致す。

そして深夜。

（インヴェーダー侵略者はかなり厄介者だ。拠点が海外だから蟻のように巣からわんさか出てくるよ
うなものになるな…。あの鉄崎さんの勤めていた会社は奴らとの関わりは1000ある。
あそこがインヴェーダー侵略者の日本支部みたいなものだな…。）

コンコン

「ぬぐえああく！もう訳分からなくなっちゃうなああく！」

コンコン

「ふあ??」

「萃ちゃん、今大丈夫?」

「んにや、大丈夫ですよ?とりあえず入ります?」

「うん、ありがとう…。」

部屋を尋ねてきたのは葉隠さんだ。

あ、ちゃんとパジャマは着て入ってきているので安心してください。

彼女は何か話したいことがあるような感じでもじもじしていた。

「どうしましたん?」

「電気もつけっぱなしで当日までこうなるのかなって心配していたの。」

「あ…:やつぱり分かってました?」

「分かりやすい。」

「まあそうですねえ…。」

「えいつ。」

ピ
ト
ッ

「ひゃびっ!?!」

「えへへ♪可愛い反応♪急にやられるとそうなるんだね♪」

「も、も〜!葉隠さんいじわるー!」

「あ、怒った！そういうの可愛いからいじりたくなっちゃうんだよね♪」

「むう…：だけど許します！」

「優しいく♪」

「あのあの葉隠さん。」

「ん？」

「俺、皆に会えて良かったって思ってる。皆のおかげで俺は二度成長したし、皆の本当の気持ち伝わって嬉しかった。」

「何言ってるのさ！そんなの、私達も萃ちゃんに会えて良かったんだよ？無個性の強さが萃ちゃんのおかげで知ることができたもん。萃ちゃんが雄英こへいに入っていなかったら無個性のイメージは変わらなかったと思う。」

「イメージを覆すことができて良かったのです。」

「あ、あとさ？」

「ふあい？」

「えいつ。」

ギョッ

「ぶえあつ!!?あ、あの…!?!は、葉隠しちゃん!?!」

「かーわいつ♪ほら、落ち着いて？」

「お、おとおお落ち着けにやい…!!」

「だよね♪だけど、私に身を任せてリラックスしてね？さつきまで当日のことを考えていたんでしよう？」

「う、うにゆ…。」

「頭冷やして今日は寝よ？」

「冷やすどころか暑くなつてきちやつたんですが…。」

「だって、わざとだもん。」

「むう…いじわる…。」

(こんなに可愛いところを見せられたらいいじわるしたくなつちやうじゃん…。そりやあミッドナイトもリニューキュウもいじわるしたくなるよ。)

「すう…すう…。」

「あ、寝ちやつたか。さてと…私も寝るとしますか！」

葉隠さんにいいじわるされたけれど、可愛いから許すと言う言葉があるからそれで許してみた。

ちなみに彼女は俺を仰向けに寝かせて毛布を被らせ、俺の部屋を後にして自分の部屋へ戻った。ちなみに勘違いされたら不味いとかなんとか。

翌日。

「けろっ。萃ちゃん、朝よ。」

「んにや…あと5分…。」

「萃ちゃん起きんかあああいい!!」

バツサア

「んぎやあああああ!!眩しいいいいいあああああ!!」

「毎回賑やかだな。艶星の部屋は。」

「その代わりに萃君はボサ毛で部屋から出てくるよ。」

「お、おはよ…皆…。」

「ほらね?」

「髪のはね方が可愛いのがムカつくな!」

「オイラは思わず女かと思っただぞ艶星イ!!」

「にやははあ…とりあえず寝かせて…。」

ビタアア

「ぴゃあああああ!!?」

「結構疲れているだろうが、学校行く準備しておけ。置いて行くぞ。」

「りよーかい…轟君…冷え冷えの手で項うなじは反則だよお…。」

「だけど目が覚めただろ?」

「うん、めっちゃや目が覚めた。ありがとう。」

((((なにこれ和むっ。)))

「おいお前からチンタラしてつと置いて行くぞ!!」

「今行くー!!」

「……………」

一人だけソワソワしていた人がいました。

クソデカ拠点へ突入まであと一週間と3日。

それまでの期間に迫るものは災いか悪戯か。

あ、この悪戯はゆるゆるな意味での悪戯だから気にしないでくれ。ややこしいけれど

な!

3 1 厄介者は何処からでも

「私が来たア!!」

「あ、オールマイトさん。おはようございます。」

「おはようございます! オールマイト!」

「おはようございます。」

「さて、急で申し訳ないのだが…作戦を艶星少年の母から聞いた! 三人一組で挑む形となれば、戦闘をせねばならない時がある!」

「と、いいますと…?」

「はい戦闘訓練です、ね理解しました。」

「か、萃君目が死んでるよ…?」

「私が全力で挑むとなれば君達が不味いことになるから、私は仕方なく制御装置を装着して戦闘させてもらうぞ!」

急に始まった戦闘訓練。

他のクラスメイトも聞いていたようで、皆別々で訓練することになった。相性よりも

個別での作戦を練って戦うという形らしい。

それが今回のメインバトルだ。

俺達の相手はまさかのオールマイトさん。

出久君は爆豪君とのペアで戦ったことがあるから分かるが、めちやくちやヤバいらしい。

「オールマイトの戦闘はほぼ脳筋みたいなものだからなあ……。スピードもある上に攻撃力、体力もある。その上、制御装置を使つての戦闘……いくら制御装置を使つていても、どのくらい制御されているのかでさえ分からないよね……。」

「ええ……それに手加減はされないのでサポートするにも……。」

「考えはあるけれど……まずは戦つてからの話だね。オールマイトに攻撃を当てるとしても、半端な攻撃じゃ通用しないし、下手したら捕まるんだ。前のようにはいかないのは分かつてる。」

「真つ先に狙われるのは八百万さんかも知れないな。」

「え？ 私ですか？」

「オールマイトさんからしたら八百万さんの個性はかなり厄介かと思われれるのです。特にあの……閃光マトリョーシカ？ とか……。」

「ヤオヨリョーシカのことですね？ はっ……！ 言われてみれば私……狙われる可能性が高い

…!」

「危ないかもだけれど、俺は戦闘兼サポート枠だから八百万さんのサポートにも入るから上手くサポートをします。」

雄英のいつもの巨大な施設にお世話になります。

そして俺達…いや俺達クラスメイト全員が予想していなかった。

別々で訓練するとは言っていたが、他のペアが違うエリアにいるとは言っていないかった。

つまり、先生含める俺達全員がこの施設にいるのだ。

出合い頭になって混戦する可能性も含めているからだ。

ちなみに俺達のペアがそれに気がついたのは戦闘訓練開始してから十分程経過してからだった。

「よし、始まった。先生は手加減無しで攻撃を仕掛けてくる。特にオールマイトの一発は他のヒーローと比べ物にならないからそこは注意!」

「了解!」

「了解ですわ!」

ズドオオン!!

「!?!」

「あの爆発はなんですか?!」

「オールマイトさんが脳筋道開きをしているんじゃないか?」

「私がそんなことをすると思っただかね?」

「…へあ?」

「オールマイト!?!」

ドゴツ!!

「うぐっ?!?!」

バガアアン!!

「艶星さん!!」

「萃君!!」

パラパラ…

ビュンツ!!

「おrrrrrrあああああああ!!!」

ドツ!!

「うおっ!?!」

「速ッ!?!」

バチバチッ

「静電気…?!」

「上鳴君からもらった電気がまだ残ってたの。あと一回くらいしか使えないかな？」

「そ、それよりも大丈夫ですか!?! さっきの一発かなりいったんじや…。」

「あ、大丈夫なのdゴフウツ!!!」

「全然大丈夫じゃないですわよ!?!」

「あとちよつと面倒かも知れないのです…。」

「どうしたの？」

「オールマイトさんが言っていた言葉…まるつきりそのものだった…!」

「??」

「つまり、俺達のペアの他にも別のペア達もしくは先生達がこの施設の違う場所に配置されてたんだよ!」

「他のペアもいるの!?! 不味い状況になるかも知れないね…とりあえず一度退こう!」

「退かせないぞツ!!」

「えーいつ!!」

ペカアアア!!

「ぬおつ!?! 閃光手榴弾かつ!!」

「八百万さん掴まってて!」

「は、はい!!」

「全力脱兎!!」

「は、速いですわ!!」

「萃君、まだ残ってる!?!」

「もちろん!!」

「ぬう…判断が早くなってきたな。成長して私は嬉しいぞ!だが、守れなければ意味がないのは分かっているハズだろう!!」

ギョーンッ

やっぱりオールマイトさんは凄いと思う。

あの状態で制御装置を付けられていてもすぐに追いつかれるし、一撃一撃が強すぎて一人で抑えられるような状態ではない。

いやまず学生がその一撃を抑えられるなんてことは不可能だと思う。

あ、ちなみに五秒程で追いつかれました。

「緑谷さん、来ました!」

「分かった!萃君!」

「あいわかった!!」

シュッ

「垂直飛び!? 艶星少年は無個性…人間本来の力を出しているのは分かっているが…まさかな…!」

「オールマイトさん! もう既に俺達の手の中に入っているのです!!」

(あ、空中歩行はできないのか。)

ググツ

「む?」

「ワンフオーオール・フルカウル…!!」

「八百万さん! 今のうちなのです!!」

「はい!!」

「テキサスマアアアアツシユ!!!」

ラビッツキャブチャーシヨット
「兎網粘着弾!!!」

「艶星少年と八百万少女は囿で、緑谷少年がメインだったか。だが、私を誰だと思ってる!」

ズンツ!!

「!」

ビュアツ!!

「うわっ!」

「きゃっ!!」

「やっべ! 八百万さん!!」

バヒュッ

「む!?! 艶星少年…今、空中を…?」

「キャッチいいいい!!!」

「あ、ありがとうございます…! 助かりましたわ!」

「一回中断だ! 艶星少年! 聞きたいことがある!」

「ん? なんでしょう?」

「今空中を蹴らなかつたかね?」

「…??」

「萃君が空中を蹴つたのは少しだけれど見えたよ! マンホールから出た時には着地して

いたけれど。」

「マジすか?」

「うん。」

「私ははつきり見ました。艶星さんは私を助けようとしてこちらに向かいましたが、この

反応は…。」

「うむ、確実に無自覚のようだ。」

「そう言えば、もう一人の自分や獣ライビーストが出てないけれどどうしたの？」

「あー…なんか出るのめんどいから今回はパスって言ってた。一匹もそうだった。だいぶお疲れのようで。」

「うさ耳の形や髪色がもうミルコなんだよね。」

「ルミ姉に？マジかいな。」

「あ、今私とこのペアは中断という形で終わらせておくぞ。勝敗はない上、驚かせた動きを見せてくれたからなっ！」

ヒョコッ

「なーにー？萃ちゃんまた成長したのー？」

「あ、ミツドナイト。」

「うげっ！お姉ちゃん!？」

「うげって何ようげって。今度は何を習得したの？」

「お、俺も分からないよ…。」

「艶星さんは無自覚ですが、空中を蹴りました。」

「本当!?!凄いいじゃない!?!ご褒美のキスしたげる!!」

「やめろおおお!!恥ずかしいからやめろおおお!!」

トランシーバーか何かからの情報が来たのか分からないが急にミツドナイトお姉ちゃんが現れた。

頬にキスされました。

急にセクハラをしようとしていました。

え？今何されているのかって？背後から抱き抱えられてめちやくちやなでなでしてめちやくちや頬擦りしています。彼女曰く、俺成分が欲しかったとのこと。

何それ（）

「うう…もうお嫁に行けないよお…。」

「私がいるじゃない♪」

「お姉ちゃんの変態だからやだ！」

「あら、そうやって私を拒否するの？お姉ちゃん悲しいな〜！」

「とにかく恥ずかしいから！はーなーれーてー!!」

「いーやーよおおお!!」

（（なんだろう…この和み具合は…）（））

ドツカアアアン!!!

「ほわあああああああ!!?!?」

「きやああああつ!!」

「か、かつちゃん!!?」

「相澤先生!!?」

「ちつ…!こんな奴がいるとか聞いてねーぞ先生!!」

「予想外中の予想外だ…!全員戦闘態勢入ってくれ!!本物の侵略者だ!!」

「…はあ?!?」

「移動系の個性を持っている奴がいる!ソイツさえ捕えてしまえばこつちのモンだ!!」

「待て待て待て!!話が追いつかんぞ!!?急に侵略者が来たなんておかしすぎる!!」

「空から降って来た…!!そう言えば分かるだろう?!?」

「了解解!!」

まるでタイミングを見計らっていたかのように現れた侵略者。俺達は分かっていたのかって?分かるわけないよ?

すぐ戦闘態勢に入りました。

ここからはまた長くなるので次回へ続きます。

#32 急成長

「爆豪君！他の二人は!？」

「はぐれちまった!!つーかテメエらもいたのか!!」

「俺達もびつくりしたよ！爆豪君がいるってことは他の全ペアが何処かにいるってことが確認できた!」

「かつちゃん！個性はどうだった!？」

「そいつあ相性が最悪だ！空気を扱う個性に重力を扱う個性、光を操る個性だ!!あの空気野郎と重力野郎に俺と尾白で手こずった!!光野郎は常闇との相性が劣悪!」

「いやもう最悪の相性じゃねーか!!相澤先生!」

「なんだ艶星!」

「八百万さんとサポートへお願いします！光野郎の対策は八百万さんが既にしてあります!」

「すまない八百万、助かる!」

「空気野郎は策があるから、爆豪君と出久君で頼む!!重力野郎は俺とお姉ちゃんでやる

!!

「おい無個性野郎！俺の話を……ああ分かった!!おいデク！やるぞ!!」

「う、うん!!萃君、無理しないように!!」

「ああ！お姉ちゃん、行くよ!!」

「ちよつと！私に指示しないで！」

「今はそんなことじゃないでしょ!?!」

「つ、艷星少年……私は？」

「ヤバくなったペアのサポートをお願いします!!オールマイトさんは切り札なのでまだ温存しておいてください!!」

突如現れた侵略者^{インザエーダー}。

他のペアにも奴らがいると思うが、上手くやれていることを願うしかない。俺だってやれるか分からないがな。

無理はしないように且つ殲滅することを考えていました。

「お姉ちゃんはサポートお願いできる?！」

「言われなくなつて……サポートするわよ!!」

「そんじや俺を投げ飛ばして！」

「あーもー！我儘が多いわね!!いくわよ!!そりやあああああ!!!」

「人間砲丸を喰らいやがれええええ!!」

「ん。」

ズンッ

「べっ。」

「萃ちやあああああん!!?」

「んむっ……ん……!んんんんん……!!」

「俺の個性を知っておいてそれか?笑わせてくれるガキだ……」

「んんんんん!!!スポーン　ぷあっ!!上半身だけで助かったあ……!」

「助かったじゃないわよ!このおバカ!!」

ペシンッ!!

「痛あッ!!ごめんなさいお姉ちゃん!お願いだから頭叩かないで!縮んじやう!!身長縮

んじやう!!」

「……………」

「侵略者が待っているじゃない!戦闘態勢入りなさいよ!」

「準備はいいか?」

「俺はいつでも。」

「いつでもいいような態度取らないで!?ツツコミ入れるの疲れちやうわよ!もう疲れ

「ちゃったけれど!!」

「それじゃ…俺から行かせてもらおうぞ!」

ボンッ!!

「え…?」

「そーれっ!!」

ドンッ

「萃ちゃん!?!」

ズズンッ

「見えてなかった?今アイツが撃つたのは重力弾。グラヴィテイガン効果は俺が今食らっている状態よ。

めっちゃ動きにくい。」

「見えていたか…。だが、守り切れるかな!!」

「上等だ…やってやるよ!」

結局無茶をした。

重力の個性を持った侵略者インヴェーダーは俺を潰すつもりでわざと狙っていた。お姉ちゃんを守っているにしろ、俺にも限界はあった。動きが大分重くなり、体が言うことを聞かなくなっていた。

ズズズ…

「あー…やつべ無茶しちゃった。」

「萃ちゃんの馬鹿！私の為に守ろうとして何無茶してんのよ!!」

「お姉ちゃんはとりま逃げて？何とかするから。」

「この状態で何とかするって馬鹿なの!!」

「ちよつとアイツ呼び出すから。あと、アレお願いしていい？」

「アイツって…制御は効いてるの？っていうか、もう使っちゃうの?」

「大丈夫。同時には出てこない。あと、俺にやお姉ちゃんの力がないと絶対に勝てないし捕まえらんない。」

「分かったわ。あんたが死んだら全てがパーになるから、覚悟しなさいね!!」

「うん。もう一人の自分《エヴィルキラ》、バトンタッチよろぴこ。」

『バトンタッチが早えーよ馬鹿野郎。無理だと分かかってんなら先にやっておけよな全く…』

通常時の俺では上手くいかないと思ったのでもう一人の自分エヴィルキラを呼び出した。ちなみに任せつきりにしすぎているかと思っています。反省してまあああああす!!

「すうう…はああ…。うっし、やるか。」

「あら?もう一人の自分キラー大人しくなつてない?」

「あ?そりやあな、あんの馬鹿が無茶しやがるからブレーキ役としてもいなきやいけ

ねーからな。とりあえずアンタ、サポートな。」

「ピキツ 生意気な口ね…！後で覚えておきなさいね…??」

「まーそんな怒んなよ。本体俺がビビっちまうだろ？」

「萃ちゃんに伝えておきなさい！後でお仕置き確定って!!」

「伝えられたら…なっ!!」

ドビュッ

「…そういや、あのガキって確か抹殺対象のガキじゃねえか？」

「あー…そーだわ。あのガキを抹殺もしくは生け捕りにすることも目的にしていたわ。」

「目潰しさえできりや問題ねえ!!
エレクトル・ボルト 電 光!!」

「しまった!!萃君!!」

「艶星イイイイ!!」

「萃ちゃん?!」

「艶星…！くそ…間に合わなかったか…!」

「艶星少年は大丈夫です。相澤先生！」

「何故そう言い切れる…?!」

「よく見てください。」

「…?」

バリバリバリ!!!

「うおおおおつ?! (…あれ? 光野郎ってピカピカ光る方じゃねエのか…?)」

「うははははは!! どうだ!? 俺の個性『雷光』は!!」

シューウウ…

「…効くかね。」

「は?!?!」

「寧ろ充電させてもらったわ。」

「あ、そう言えば充電できるの忘れてた…。」

「…そーいやそーだったな。」

「成長しすぎでは…?!」

「お、おい! 話が違うじゃねーか!! あのガキ無個性じゃねエのかよ!?!」

「お、おかしい…! あのガキは確かに無個性のハズ!! 雄英の奴らが何か細工しているに

違いねえ!!」

「あー…そろそろこつちの番でよろしくて?」

「俺の重力で潰してやる…。テメエらはあのガキ共を相手にしておけ。ここは俺一人で

十分だ。かかって来な!」

「あ、んじゃご遠慮なく。」

バシユツ!!

(…!?コイツ…速いッ…!!)

ズツ

「おつとつと…。危ねえなあ…危うく腕が消えるところだったわ。」

「…中々やるな。」

「ま、弱点が分かったし。こつから本気で行くぜ?自称重力君♪」

「ピキツ このガキ…!」

「あ、ミッドナイト。捕らえる為のアレ準備できたか?」

「はあ…はあ…ええ、バツチリよ…。」

パシツ

「ありがとう。無茶させちまってすまねえ…少し休め。」

「ごめんね萃ちゃん…今サポートはキツいからまた…無理させちゃう…。あと命令形はやめなさい。」

「あ、やつべすまん。てか、アンタは十分にすげーことした。本体の俺がそう言うてる。てか、歩けるか?」

「いいえ…少し休まないと歩けないわ。」

「おっけ分かった。すぐにカタをつけちやるから。」

パリッ…

「重力野郎、準備はいいかあ!？」

「来い! 生意気なクソガキめ!! 超重力弾!!」
↑ヴィブラウェイティガン

ボシュンツッ!!!

「月脚反射!!!」
ルナカウンター

パンツ

ドシュツ!!

「跳ね返した…!? できるはずがねえ…なのに…何故!!!?」

ヴウッン

「終わらせるぜ?」

バリバリバリ!!!!

「あの光は…アイツの…!?」

「月輪…。」
ルナリング

バシュンツッ!!!!

「しまっ…!!!」

「落とし!!!」
フォー

ベガアアンツ!!!!

「ごがっ…?!?!? (こ、コイツが…無個性…だと…?! こんなの…勝て…な……………」
 シュウウ……………」

バチツ…バチバチツ…

「はあ…ふう…ふう…すうう…疲れた!!」

重力野郎との戦闘は俺の勝ちだと思つた。

皆がそう思っていたが、俺は少しだけ油断をしていた。

強めにぶち込んだけれど、相手はほんの一瞬だけしか意識が飛んでおらず、俺が背を向けていた隙に攻撃を仕掛け始めていた。

ちなみにお姉ちゃんから受け取つたアレというのはこの後使うところです。はい。

ズズンツ
!!!!

「あえ?」

ズズンツ
!!!!

「ぶ。ぺっ!!」

「これで勝つたと思うなよクソガキイイ!! 斃くたはりやがれえええええ!!」

「あーしつけー…。念の為電気を残してよかつたわあ…この展開はゲームと同じだな。」

「超ヘヴィグラヴィティインフレクタ重力・壊!!!」

ズズンツ!!

「よーいしょつと…。」

「どうだガキ…！俺の…って何故立ってんだよ…!?」

「あ？これ如きで俺を倒せると思ってるの？とりあえずこれでも吸ってる。」

グイッ

「な、何をすr」

「お前の弱点は技を繰り出すと同時に動けないこと。同じように弾を撃つ時も止まらな
いと撃てないこと。そして隙だらけだ。」

「や、やめろおおおお!!」

「とりま寝ろ。」

プシューウウウウ

アレというのは超強力な睡眠カプセルのこと。

お姉ちゃんには無理をさせてしまったが、お姉ちゃんのおかげで引つ捕らえることが
できました。

ちなみにお姉ちゃんはかなり体力を消耗させてしまっているので、少し休ませていま
す。

「おい、本体俺。もういいか？こっからはお前の番だからな？」

『おけおけ。ありがとねもう一人キの自分ライ。お姉ちゃんは俺に任せておいて。』

「りよーかい。」

スススス…

「すううう…はああああ…んにや。お姉ちゃんごめんなさい。無理させてしまつて…。」

「大丈夫よ…クラツ あつ。」

「おつとと…安全な場所に移動しよつか。…つてちよつ!？」

ドサッ

「はあ…はあ…ちよつとだけあなたの胸の中で休ませて…?」

「…うん。」

「ふふつ…付き合っていないのにこうやって甘えるのはあまりないわよね…?」

「そだね…。」

「心臓バクバクしてるわよ…♪可愛い♪」

「だ、だつて…お姉ちゃんも女の子でしょ?だからその…／／／」

「あら、私のこと女の子として見てくれていたの?」

「わ、悪かったかなあ?!」

「嬉しいわ♪萃ちゃん、目瞑つて…?」

「…ん?う、うん…。」

チユッ

「ぴゃあっ!？」

「ふふっ♪可愛い反応♪」

「も、もう…!早く休んでよ!他も心配なんだから!!」

お姉ちゃんはかなりお疲れのようなので、甘えさせました。

急に猫さんみたいに甘えてくるお姉ちゃんがあまりにも狡いというか…とにかくズル可愛いのがもう反則です。

他のペアも気になってしょうがないが、お姉ちゃんが万全になり次第向かおうとしています。

ま、俺も動けないけれどな!!

「萃ちゃん、このまま付き合っちゃおう?」

「ん…考えておkギユツ にやつ。」

「返事はいつでも待ってるから♪」

「うん。」

#33 苦戦、勝敗、波

ズザザザ…

「かつちゃん、萃君が考えていたことって何だと思おう?」

「アイツに聞きやいいじやねえか!!」

「ごめん! とりあえずあの個性 空気の侵略者インヴェーダーをどうかしなないと…! 僕は接近戦でも一気に酸素を消されるし、かつちゃんの爆破も空気がないと爆破ができない…!」

「所詮ガキはガキか。このままあの無個性と消えてもらうぞ!」

「悪いな、無個性野郎アイトツは簡単に死なねえ!! 言っておくが…: テメエらは無個性野郎アイトツの強さを微塵たりとも分かつちやいねエ!!」

「萃君は負けるはずがない! 無茶はするけれど、しぶとさは誰よりも負けていない!」

これは俺が戦っている同時刻のお話。

俺は爆豪君と出久君をペアにして空気野郎の討伐を頼んだけれども、上手くいけるか分かっていません。

ただ一つ言えることは、この三人の侵略者インヴェーダーの弱点が同じということだ。個性には代償

や弱点が必ず付く。

俺が倒して捕らえた重力マンは個性を発動すると同時に動けない状態になる。そして発動した状態で動こうとすれば本人でさえ制御ができなくなり、最終的には個性を再発動しなければならなくなる。

「デク！コイツを片付けたら無個性野郎のところに向かうぞ!!」

「う、うん！」

「何度やつても無駄だ！エアホール・ロスト空気消失!!」

「うっ……息がっ……!!」

ボスツ……ボスツ

(ちっ……爆破が使えねエ……!!まるで小せエ宇宙空間じゃねえか……!!)

ポンツ

(かっちゃん、掴まって!)

(……ああ!コレはお前しかできねえからな!)

ドツ!!

「ぶはあああああ!!」

「ちっ、抜けたか……!!」

「かっちゃん、ここはバラけよう!!」

「ああ！まとまっていちやあこつちがやられる！デク！息合わせるぞ！！」
「うんー！」

出久君と爆豪君は対面で辺りを一定の距離を保ったまま周り始めた。

二人は相手の弱点を見つけたからその行動に移ったのだ。

ちなみに俺は一つしか見つけていません。ハイ。

「今度は何をする気だ…いや、待てよ…俺の弱点をもう突いたのか…?」

「ああそうだ!!無個性野郎はテメエらの弱点を一つだけ見つけてくれてんだ!!個体ごとの弱点も俺らで見つけた!!」

「それはお前の視界に入るところにしか個性を發揮できない!!それともう一つ…!!」

「テメエの一定の周囲に個性を發動することができねえことだ!!」

「ちつ…見破られたか…。だがなあ…。」

「OFA・フルカウル…!!」

「A・Pシヨット・オートカノン!!」

「デトロイトスマツシュ!!」

「^{エア}爆破^{ボム}!!」

「^{エア}パァン!!」

「うわっ!!」

「くっ…!!」

「弱点は当たっている。だが、空気を扱うことはできても武器にできないとは言つてないぜえ?」

「ああそうさ、そんなことあもう分かってんだ!!」

「ビインッ」

「何だこの黒いのは!?!」

「デク!」

「おりやああああ!!」

「うおおおっ!?!」

わざとやられて動けない素振りをしていた二人。

出久君と爆豪君にしかできないコンビ技である上に、息を合わせないとできない技である。出久君が黒いピロピロを出すようになっていたのは、俺がいなかった時に急に出てきたものらしい。

攻撃には不向きなものらしいが、サポート系の使い方で合っているみたい。ちなみに黒鞭つて言うみたいです。

今の状況としては、出久君が相手の脚に上手く黒鞭を引っ掛けることができ、爆豪君が合図を出して空中に投げたところだ。

ボンツ!!

「テメエは重力野郎がいねえと空中戦をすることができねえ!! そりやバランスが崩れツからなあ!!」

「くそつ…! こりや参つた…雄英お前らにや適わねえ!!」

ガツ

「爆破式カタパルト!!」

バゴオオン!!

「はあ…はあ…。」

「ぜえ…ぜえ…こんな相手に二人で苦戦するたあキツいかも知んねえ…。」

「僕達も萃君に追いつかないとね…!」

「とりあえず捕縛しとくぞ! 目エ覚ましたら尋問してやらあ!!」

「手上げたらダメだからね!」

侵略者インヴェーダー 個性 : 空気

V S

英雄ヒーローの卵 個性 : 爆破&OFA

勝者 雄英

そして侵略者 インヴェーター 個性 : 雷光を相手にしている相澤先生と八百万さんはというと

…。

「くっ…スタングレネードも持っていたとは…!」

「はあ…はあ…やられましたわ…! 相手は雷と光を扱う厄介な個性ですわ…! 上鳴さんがいれば…!」

「艷星もここに応援してくれたら助かるが…生憎、個性 重力を扱う侵略者 インヴェーター を相手にしているからな…。」

「サングラスを持つているとは言え、急な光には対抗できませんわね…。先生、その伸縮性のある布? は使えますか?」

「いや、使えない。アイツは雷を腕のように使ってくるから弾かれる。できていたらとつくにやっている。」

「ゴムで代用できますか?!」

「…ゴム?」

「絶縁性のものを纏わせられれば上手くいけそうかと…!」

「…分かった。頼む!!」

ドルルルルル

「八百万。」

「はい?」

「結構出し過ぎていないか?」

「こ、これくらいは平気です!…できれば避雷針を作りたいところですが…お生憎、その体力が足りなくて…。」

「いや、お前はよく頑張った。あとは俺に任せろ。オールマイトも応援で来てくれた。」
「私が来たあ!!八百万少女、君は休んでくれたまえ!私と相澤先生に任せておきなさい!」

「あ、ありがとうございます…(くっ…私にはまだ遠すぎた…!!艶星さんにも追い越されてしまつて、その上私は一体何をしていたの…!!?)」

少々苦戦を強いられました。

どうやら個性 雷光の相手はかなり厄介で、近づかれれば人間閃光弾になったり遠距離となれば雷を操つて攻撃を仕掛けるというめちやくちや面倒くさい奴みたいです。

そして俺とお姉ちゃんというと…。

「はあ…:はあ…お姉ちゃん…逃げて…!!」

「何よ…:あんな大量の相手に萃ちゃんが適うワケないじゃない…!!」

「じゃあ、誰が報告すんだよ…:トランシーバーがぶつ壊れて報告できる奴あいねえ

じゃねーか…!!携帯も忘れたんでしょ?!

「萃ちゃんは持つていないの!?!」

「持つてないよ!ぶつ壊れたら嫌だから教室に置いてきたんだもん!!」

「このぼんこつー!!」

「ポンコツで悪うござーりました!!とりあえず俺はアイツらを翻弄させておくから、その間にお願い!!」

「分かったわ!あと萃ちゃん!」

「何sチユツ …ツ!?!」

「ぶはっ…無理しないでね。」

「も、もう早く行つてよ!調子が狂つちやう!!」

「ええ♪」

タタッ

「行かせねえぞコラあ!!!」

「やらせねーぞオrrrrラあああああ!!!」

ベキヤアッ!!

「このクソガキヤあああああ!!」

『おい、ここは俺に任せた方がいいんじゃないか?!』

「いや、俺に任せろもう一人の自分!! 君は重力野郎で疲れたんだろ!! 無理されちゃ困るし俺の体が持たねエ!!」

『ビースト 獣はどうなんだよ!』

「あの子はまだダメだ!! 発動条件がまだ合わねエ!!」

『もうつてなんだよ! つーか、発動条件つてなんだよ!!』

「二つは体力や体の状態がほぼ万全な状態、二つは体の一部が破損している時!!」

『条件が矛盾してねエか?!』

「二つだけ条件が合えば発動ができた! だが、今の俺は体力が万全じゃねエし疲れ切ってる! その上半端な状態且つ破損を起こしていねエから無闇にバトンタッチできねーんだ! 無理にやりやあ暴れるわ!」

『お前の体めんどくせーなおい!!』

「しよーがねーだろ! 俺なんだから!!」

『ま、お前が主導権だから判断はお前に任せる!』

「おうよ!!」

第二ウェーブがありましたふぎけんな○

お姉ちゃんが大分お疲れだったので先生達のいる場所へ報告をお願いして離れさせて、俺は侵略者の相手をした。

ざっと20人はいると思うです。

ちなみに奴らは何処から来たかと言うと、落ちてきたり歩いて来たりで向かって来ていました。

…は???

「リーダーがやられちまつてる…!」

「あのガキがやったのか!」

「リーダーを助けるぞおお!」

「行くぞクソガキいいいい!!!」

「にひひ…来いやゴミカス共がああああああ!!!」

3 4 再来

「丁度瓦礫が大量にあるな…。久々にやりますか…！換装！！」

ガガガ…

「な、何だあのガキ…！無個性じゃなかったのかよ…！！？」

「いやあく、発目さんに改良してくれたコスのおかげで換装時間が五秒も縮まった！吹雪型壱番艦 吹雪！！抜錨します！！」

「ただの瓦礫の寄せ集めだ！殺れええええ！！」

「駆逐艦を舐めんなクソ共があああああああ！！」

ドツ！！

「標的確認…腕力205%…握力257%…！火力上限300%…連射速度400%！！
12.7cm連装砲A型 連射じゃああああああ！！！！」

ボガガガガ！！

「ぬあああああッ！！？」

「何だコイツはあああああ！！」

「ダメだ！退けええ!! 遠距離で攻撃を仕掛けるぞ!!」

プシューウウ…

「ふう…:…よし、腕の運動はこれでバッチリつと…つてあれ?」

「全員構え!!」

「あれ〜?もう遠距離に入っちゃったの〜??」

「撃てええ!!」

ズダダダダダ!!!

「ひゃつはあああああ!!! 汚物は消毒だあああああ!!!」

「遠距離個性を持つて生まれて良かったわああああ!! 俺達がいりやありーダーも安心するだろうよおおお!!」

「止め!!」

「オーバーキルしちまったか?」

「ガキ相手にやりすぎだつて」 「なあにこれ、豆鉄砲?」 いやいやw 豆鉄砲のレベルじゃ…:…よし?」

「直前で航空戦艦に換装したけれど、傷が一つもないんだけど…おつかしーねー?」

「お、おいおい嘘だろ…?! あんなに集中砲火喰らっておいでか!!」

「いやいやw アレで生きて帰って来れる奴なんていねーよw」

「換装。」

「おい…やっぱり個性持ちじゃねーかよ…!!」

「翔鶴型航空母艦 式番艦 瑞鶴! 抜錨!! 飛行甲板準備よし。九七式艦攻全機発艦!!」

バシユンツ!!

大量に出てきた侵略者相手は俺に集中砲火を浴びせようとしたけれど、直前に換装していた。

伊勢型航空戦艦式番艦 日向ひゅうがに切り替えていましたので。

侵略者達が個性持ちとか言っているけれども、それは違います。単純に俺の親の技術力と発目さんの追加効果が強すぎるだけなんです。

「や、やべえ…! こんなの相手にできねえ!! 逃げろおおお!!」

「奴らが無個性って言ってたのに実際無個性じゃねーだろーがあああ!!」

「金に動かされた自分がバカだった畜生おおお!!」

「ふう…追っ払いはできたつと…。」

「おやおや、遊びは終わりか?」

「あ、??…!!?」

「萃ちゃん…ごめんね…:ちよつとドジっちゃった…。」

「この女を解放したければ、我々のところに来い。」

「……………。」ズズ…

「大事な人なんだろう？ 尚更断れないハズだ。大人しくこつちに来てくれたらいいだけだ。」

「萃ちゃん、逃げて…。こんな奴を相手にしちやったら…！」

「^{ビスト}獣…殺るぞ。」

『G r r r r r …。』

シユツ

お姉ちゃんが捕まった。

奴の体に数箇所^に傷跡や巻き付けた跡があつたので戦っていたんだと察した。ただやはり手加減はしていないようで、お姉ちゃんが傷だらけになつていた。

お姉ちゃんは強がっていたけれど、俺には助けて欲しい顔をしていたように見えた上、いつもお世話になつている人がこんな姿にされていて俺は耐えられなくなつていた。

「選択肢を誤つたことを後悔すrブシユツ づつ…!? しまった…女が!!」

「貴様だけは許さねエ…。半殺しにしてやるから安心しておけ…！」

「萃ちゃん…！感情に振り回されちゃダメよ…!! っていうか助けてくれて嬉しいけれど…。」

「俺ア今落ち着いていられねェンだ…！アンタがこのザマにされてよオ…俺が冷静でいられるかよおおおおお！！！！換装！！！」

ガガガガガガ！！！！

「赤城型航空母艦壱番艦 赤城…！九九式艦爆、全機発艦からの換装…！！」

「小虫を飛ばして何になる！お前は無個性の雑魚以下だ！！だが、お前がいるだけで我々の目的が丸潰れになるから消えてなくなれえええ！！！！」

「断る！！大和型戦艦式番艦 武蔵！！46cm三連装砲！！」

ドカアアアアアア！！！！

「私の個性 地雷の感触はどうだ？」

「ああ…最っ高にへなちよこだなア！！」

「ピキツ ああ…！！？」

「貴様よりも…最強に強エ爆破を持つてる奴がいるんじやボケええええええええええ！！！！」

「五重爆発！！！！」

「名も無き獣の乱撃！！！！」

ボボボボボボ！！！！

ドガガガガガガ！！！！

「換sドゴッ！！ ぶっ！！」

「はっはあ!! お前の腕が使い物にならねえなあ!! このまま死ねええ!!」

「現段階最大火力オーバーフロー…!! リミットブレイク1000%!!!」 バチバチバチ!!!

「十奏b 《オクテイb》」

「64cm 酸素魚雷 十隻同時発射あああああ!!」

ガggggggggggガンツ!!!!

「ぶべべべべべべべあああツ!!」

（か、萃ちゃんの頭突きが…止まつてる? だけど音だけが重複しているように聞こえる…どういこと…?!）

ドサアツ

「はふう…やつべ、やりすぎたか…。」

「萃ちゃん…。」

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「ええ…ちよつと足が折れちやつただけ…。」

「やつぱりコイツ殺すわ。」

「追い討ちやめたげて!?!」

バシユツ

「にや?」

尾白君達の視点

「いつてて…常闇…大丈夫か？」

「なんとか…な。」

「艷星の声が聞こえた…かなりバカデカイ声だった。」

「ああ、俺達は気絶していたから状況は掴めないが…最悪な方向に向かっているみたいだ…！」

「すぐに向かおう!!」

「もちろんだ!!」

俺は何者かに体の数箇所を撃ち抜かれた。

アキレス腱を先にやられた為、立ち上がることもできずに倒れた。

倒れた直後にも腕、肩、太腿もも、胸部を一発ずつ撃ち抜かれ、激痛のあまりめちやくちや泣き叫んだ。

ちなみに耳栓は話には出していないかったけれど、コソコソと皆に渡していました。

「くつつつつそ痛てええええええええええ!!誰じゃゴラああああああ!!」

バシンツ!!

「へぶちっ!!」

「萃ちゃんうるさい!!私の鼓膜を破壊する気!?!」

「ごべんにやじやい…。」

「リーダーも副リーダーもやられて情けねえと思わねえのか…？それに…お前、只者じゃねえな？」

「おうおう貴様かゴラ。小虫のように続々と出てきてはるようじゃなあ!!」

「ふっ…ガキ一匹相手に虫と言われるとはね…舐められたもんだ。」チャツ

「お姉ちゃん、渡した耳栓しておいて。」

「まさか本気でやるの…!?!」

「いいからしろ!!」

「わ、分かったわよ！（なんか怖くなったわよこの子…!?!）」

「すううううう…。」

耳郎さん視点

「マズイ!!皆！耳栓して!!あの子本気で出すよ!!先生方も耳栓の準備を!!」

「おいおいマジかよ!?!」

「上鳴君、慌てたらダメだぞ！ここは冷静に付けよう！」

「飯田こそ焦ってないか!?!」

「萃ちゃんの本気の声…相当やばいかも知れないよ…！油断しちやダメだから！私が合図しておくから、それまでは耳栓しておいて！」

「「「「了解!!!」」」」

常闇君視点

「耳栓の準備をしようか。」

「そうだね、今度は本気でやるかも知れない。本気の声は聞いたことないけれど、周囲が振動したままになっていたことがあつたからね。」

ブラックシャドウ

「黒 影、お前も耳栓しておけ。」

「アイ分カッタ!!」

出久君達の視点

「かつちゃん、耳栓の準備!」

「ああ!もちろんだ!」

「先生方!耳栓の準備を!!」

「分かった。」

「もちろんだ八百万少女!」

皆察していたようです。

地震で例えると、余震と本震みたいな感じですよ。はい。

俺が暴走して謹慎を喰らったからって何もしていなかったワケではなく、暴走の抑制や攻撃の幅を強化とかがしていました。

ちなみにこのクソデカヴォイスはたまたま生まれたもので、よくお姉ちゃんにしばか
れています。さつき頭叩かれたもん。痛かった。

そして俺の視点に戻る。

「ちよつと萃ちゃん無理しないでよ!」

「すううううう……。コク

「足掻こうとしても無駄だ。貴様の声でさえも遮るこの耳あてさえあれば耳は死なん。」

「(たまたま出てきた技だが：一か八かだ：!喰らって壊れる：!!)」

「^{シヨツト}散d」

「KYyyyyyy Aaaa aaaa aaaa aaaa aaaa
ハイトーン・デヴィルツォイス

「『悪魔の高声』!!!」

!!!!!!

バリバリバリツ!!!

「ふっ：何度やつてバキッ は：?!」

「AAAAAAAAaaaa aaaa aaaa aaaa aaaa aaaa aaaa aaaa

「ぐっ：ここ、壊れた!?!高品質ものだぞ!!壊れるハズのないものが：何故だああああああ

ああああああ!?!」

ピシピシ…

(なんて振動なの：!? 一体どうやったら声だけでそんな振動を出すの：?!)

耳郎さん達の視点

「始まった……！」

「うおっ!!なんつー振動だよ!!?これが艶星の声なのか!?!」

「聞いてみたいけれど……鼓膜が瞬殺されるみたいだもんね……。」

「先生方にも影響を及ぼす程の声つてよ……俺達のクラスに本当にとんでもねー奴が入ったな!!」

「……どうしよう、耳栓のせいで皆の音が聞こえない……。オイラも艶星の本気の声聞いてみたいけれど……ダメだ!!オイラも艶星の為に頑張らねーと!!」

「響香ちゃん、目の前では厄介なことになったね☆」

「うん……!だけど音で勝負するならば……私も負けられない!!!『ハートビート・サウンド』!!!」

「俺達も応戦するぞ!耳郎に続けええええ!!!」

出久君の視点

「かつちゃん!」

「ああ!早く着かせるぞ!!デク、掴まれ!!」

「うん!!」

「『爆速ターボ』からの『爆破カタパルト』!!!」

八百万さん達の視点

「ぎゃああああああ!!なんだああああ!!この音はああああああ!!耳が…耳が壊れああああああ!!」

「先生方!」

「艷星のおかげで奴は悶絶している!オールマイト!!」

「もちろんです相澤先生!!テキサスう…スマアアアアアアッシュユ!!!」

俺は一分程声を出し続け、周囲どころか施設全域にまで影響が出ました。ちなみに俺の声の影響が強すぎたせいで窓ガラスが大量に割れたとかなんとか。

#35 一時的の平和な日常

「はあ……はあ……うっ……おえっ……。げほっ……」

パタッ

「萃ちゃん！」

「あ……が……」。

ドサッ

「や、奴は……倒れた……?？」

「ええ、倒れたわ……」。

「これ……最終手段だったのになあ……また開発しないと……」。

「もう十分に開発したじゃない……休みなさいよ……」。

「それじゃあダメなんだ……コレ如きで倒れるなんて俺はまだ弱いよ……」。

「こら、人をコレ呼ばわりしないの。いくら敵や侵略者インヴェーターでも一応人間なんだから……」。

「ごめんなさい。あと歩けないから皆が来るまでちよつと寝る。あとお腹空い……た……」。

コケッ

「本当マイペースね…だけど、お疲れ様♪」
インヴェーダー
侵略者急襲緊急臨時戦闘

雄英 勝利

緊急臨時戦闘が終わり、皆が駆けつけた。

俺は銃を扱う個性を声だけで倒したせいで喉が一時的にぶつ壊れた上、その分一気に疲れが出てきて気絶に近い爆睡をした。

だが…。

ススス…

「ひにゃ…んにゃ…ひつくちゅん!!!んにゃ…?」

「萃っちいいいい!!!」

「萃君!!!」

「おいコラ無個性!!何寝てんだコラあああ!!」

「艶星さん…!!」

「ふあ…?あれ?俺爆睡しちゃつてズキイツ!! あ、だあああああ!!?」

「艶星君、両脚のアキレス腱や体の一部を撃ち抜かれて無理に動かせない状態だ。だからあまり無理はしないでくれ。」

「俺の死角から撃った銃野郎は?」

「ん。」

「クソツ…外しやがれ！このガキ共が！」

「まだ抵抗してんのか。自称リーダーの重力野郎と地雷野郎は？」

「アレか？」

「オイラのモギモギで個性を塞いでおいたぞ！」

「峰田君ナイス!!」

「萃ちゃん、声が…。」

「うん…めちやくちや痛い。アレとっておきだったけれど使っちゃった。次に使えるのは多分本格的に攻略入る途中くらいかも…。げほつごはあ!!! やつべ痛てえ!! ござばつ!!」

「萃君が吐血した!! 死んじやダメだああああ!!」

「だいじよぶ…『悪魔ハイトーン・デヴィルスウオイスの高声』をかました代償だから…。」

「それって…めちやくちや振動していたり建物に罅ひびが入ったりしたアレか？」

「え？振動？罅ひび??」

「え??」

「あ、この子アレだ。自覚してない。」

「耳栓のやつ。」

「あ、アレか！うん、耳栓のやつ！」

「聞いてみたいって思ったから録音しておいたわよ。」

「ミッドナイト流石っす!!流石艶星の…なんだ??」

「妻？」

「なっ…!?!」

「あら…／／／ 萃ちゃんの妻だなんて…／／／」

「ちよちよちよちよ!!?上鳴君!!?妻じゃないからね!!?」

「でも付き合っているんだろ？」

「っ、つつつつ付き合つてにやああああ!!」

（（（慌てる、可愛い。）））

「え？萃ちゃん、私と付き合っているんじゃないの？」

「いつから!!?」

クイッ

「またしちゃう？」ボソッ

「ふぐうつ…!お、お姉ちゃんそれはッ…!」

「萃っちが顔を真っ赤にしている！めちやくちや可愛いんだけど!?!」

「可愛い…女の子にされているように見えるけれど、すっごくいい!!」

「ねえ女子組はからかうの勘弁!! 余計恥ずかしくなってきたよ!!」

(((((やっぱ超可愛い!!!))))))

「それはそれとしてミッドナイト、萃君の声の録音を再生してもらってもいいですか?」
「ええ、もちろんよ♪」

皆が興味深々に俺の声を聞きたがっていた。

特に得するようなことはないし、なんで聞きたがるんだろうって思っちゃったので
す。まあ、興味を持つてくれるのはありがたいけれども…。

ちなみにお姉ちゃんがすごい執拗に近づいてくるので必死にズイズイ押し返して
います。二人きりならまだいいのに…。

「ねえお姉ちゃん近い。」

「いいじゃない♪あ、皆再生するわよ? 一分くらいあるから聞いてみてね?」

ペチッ

シーン…

「…あら?! おかしいわね…音が小さいのかしら…?」

「………ミッドナイト! そんなに音を上げたら…!!」

ガアアアアアアアアアアアッ!!!!

「びぎやああああああ!!! 何この不快な音おおおおお!!!」

「うわああああああ!!皆耳栓してええええええ!!」

「お姉ちゃん音量どれくらいにしてんのさああああああ!!」

「確認してなあああああああ!!」

※音量MAX

「ぎゃああああああああ!!やめろおとおとお!!あのガキの声はうんざりなんだよお
おとおお!!」

「頼むから消してくれええええええええええええええええええええええ!!」

「耳が死ぬああああああああ!!」

パリンパリンツ

耳の被害を受けたのは捕らえた侵略者達インヴェーダーと俺でした。いくら録音した俺の声でも別の声^{インヴェーダー}に聞こえる上、クソうるせえ。

ちなみにお姉ちゃんがやらかしたせいで窓ガラスが割れ、他の先生方には俺がやったと誤解されて弁償する羽目になりました。

お姉ちゃん許さんぞ。

「か、萃ちゃんごめんって〜!あんなに大きくなるなんて知らなかったの〜!!」

「俺のせいにしたのは何処の誰ですかね〜??ニツコリ」

「お、怒らないでよ〜!何でも聞くからさあ〜!」

「ん？今何でもするって…？」

「私のできる限りね?!」

「じゃあ奢ってよ。」

「た、高いものは厳しいかなあ…あはは…。」

「高いものなんて言っていないよ？早くスイーツ奢って!」

「わ、分かったから!お願いだから可愛すぎる動きでポカポカしないで!!襲いたくなっちゃう!!」

「なんでそーなるの!?!」

「萃ちゃんのこと…好き…だから?」

「…は?!」

「な、何よ?!」

「ちよ…それ…本気で…?!?」

「そ、それは…本気よ!!って言うか、前にも言ったハズよ?!」

「覚えてねーや。だけどセクハラしたのは覚えてるぞコラ。」

「キスしたこと!?!いいじゃない別に!」

「よかねーよ!なんで俺のファーストキスがお姉ちゃんなんだよ!!?」

「萃ちゃんが好きだからよ!!」

「ド直球すぎるわ!! スイーツ奢ってくれたら俺もお姉ちゃんの言うことを一つだけ聞いてやるよ! 俺の好きなスイーツが分かったらな!」

「当てるやるわよ! 当てるなら言いなりになりなさいよね!!?」

帰りに際でまさかの痴話喧嘩みたいになりました。

お姉ちゃんが急に音量MAXのよく分からんクソでけー音を俺の近くでかましたので俺は怒っています。

許す条件は俺の好きなスイーツを奢ってもらおうついでに引き当てること。あと満足させてくれること。

その為にスイーツ専門カフェに来たけれども、俺はこの時点で目をキラキラ輝かせていました。

おい誰だ子供っぽいつて言った人は。先生怒らないから手を上げなさい。

「んー…萃ちゃんの好きなスイーツ…変わっているかも知れないから難しいわねえ…
ねえ萃ちゃん」

「んあ?」

「今すつごい目キラキラさせて涎出していないかった?」

「い、いいじゃん別に! スイーツ好きが我慢できるわけないでしょ!?!? (、?、?)」

「もう可愛いわね♪ (もしかして…裏面かな?)」

チラッ

「あふあつ?!」

「あら、苺と桃が出て…あ、もしかして〜?」

「ち、ちちちち違うもん!!決して違うもん!俺が好きな苺と桃がなんか大量に使われたパフェを見て目キラキラさせながら涎垂らしていたとかそういうわけじゃないもん!!」

「だけど本当は?」

「はい大好きなスイーツですごめんにやしやい。」

「じゃあ確定ね♪」

「うう…お姉ちゃんの勘が鋭い…。」

「すみませーん!これ二つd「いや一つでいいよ!」なんで?」

「よ、よく見て…?」

「ん…?あつ!」

「…ね?分かったつしよ…?」

「萃ちゃん…。」

「?」

「素直になりなさいよ。」

「やだ。」

「どうして?」

「恥ずかしいもん。」

「私に言うのが?」

「そ、そうだけど…。」

「ちよつと隣に座るわね?」

「ちよつ…!?ち、近くない?!つていうか隣に座られると恥ずかしいんですけれど!」

「こーやつてくつついた方がいいじゃない♪」

「う、うう…恥ずかしい…。」ギョッ

「そういうえば萃ちゃんは利き手はどっち利き?」

「左。」

「手を繋いだまま食べられるわね♪」

「…はっ!!お姉ちゃんの掌で踊らされているじゃん俺!!」

「今頃!」

「お待たせしました。苺と桃のウルトラMIXパフェです。ごゆっくりどうぞ♪

(百合カップルだ…凄く尊い…ツ!!)」

「あ、どうもです。」

（しかもラビットシップがいる!? 実物を初めて見たけれど…すっごく可愛い…!）
「お姉ちゃんお姉ちゃん。」

「どうしたの？」

「早く食べたい。」

「ごはあああああつ!!!」

「えっ!? 店員さん!? 大丈夫ですか!？」

「救急車呼ばないと。」

「ゴフツ　だ、大丈夫です…! 尊い成分を摂りすぎただけです…!」

「と、尊い…成分?!」

「大丈夫トってまた吐血しちゃったのかい!! うちの店員がすみません!!」

「あ、全然大丈夫です。それに今…またって聞こえましたが…。」

「あ…この子は尊いものを見ると吐血しちゃうんです。尊い成分の過剰摂取をしちゃうみたいで。」

一時はどうなるかと思っただが、いつものことらしいのですぐに解決した。俺とお姉ちゃんはほかんとしていたが、店員さんの素早い動きと対応に感動しました。

ちなみにお姉ちゃんも俺をあの尊いものを見て吐血した店員さんのようになってほしいみたいなのを言っていたので俺はボコスカ叩いていました。

3 6 安らぎの一日

「萃ちゃん、はいつ。あーん♪」

「一人で食べられるからいい！」

「むう…そんなに恥ずかしがらなくなってきた方がいいじゃない…。」

「いただきまー…はむっ…おいひい〜♪♪」

(…ツ!!な、なんて可愛いのに?!?こ、こんなの…理性蒸発待ったナシじゃないの!!)

「か、萃ちゃん…やつぱりあーんさせたいわ。」

「むぐぐ…お姉ちゃんが当てたからしよーがないな…。んあ。」

「あーん♪」

「はむっ。」

「はい、間接キス♪」

「……………」。ポッ

「あらら??」

「お、お姉ちゃんの…いい、いじわる…／／／」

「普段はポコスカ叩くの、今はやけに静かね？」

「だ、だつてえ：／／／」

（ラビットシップちゃん：あの女性と付き合っているのかな：？）

（あの子ラビットシップちゃんだよね？彼女持ちだなんて知らなかったああああ
！！）

（クソおおお！ラビットシップちゃんを襲つてしまえば既成事実もできたハズなのに
いいいい！！彼女持ちとか聞いてないよおおお！）

（ラビットシップガチ勢が多いせい、皆悶えてるな：。あの綺麗な女性と付き合っ
ているとか羨ましいぞクソが！！幸せになりやがれラビットシップ！！）

カフェにて皆が俺とお姉ちゃんに注目をしていた。

多分やり取りなのかな？お姉ちゃんにいじわるなことをされて、俺が顔を真っ赤にし
て恥ずかしそうな感じで喋つた上、お姉ちゃんの満面ならしない笑みで笑つていたか
らかと思いたい。

なんかやらかした気がする。

「お、お姉ちゃん：恥ずかしいからいじわるなことは：その：やめてね：？」

「そんなこと言われたらまたいじわるしたくなっちゃうじゃないの♪」

（（（（分かるツツ！！）））））

クイツ

「ぶあ?！」

「目、閉じて?」

「またあーんするの?」

「ええそうよ♪」

「んあ。」

カコツ

「ん?お姉chチュツ ……ツ!？」

「ぶはっ…萃ちゃん、顔真つ赤♪」

「……………ツツ／／／」

「ねえ萃ちゃん。」

「な、何よ…。」

「キス…まだしたい?」

「嫌よ…恥ずかしいじゃない…。」

「素直じゃないわn女の子になつてない?」

「う、うるしやいわ!!お姉ちゃんにキスされてからなんか変になつちやつたじゃないの

…!？」

(か、可愛い…！萃ちゃんがすつごく乙女になってる…!!) ジュルリ

「お、お姉ちゃん…はい。」

「あら、お返し??」

「や、やられたらやり返す…そ、そうでしょ…??」

「ありがとう♪あー…はむっ。」

「はい間接キス。」

「ぶふっ!!」

「ふにやああー!!お姉ちゃん何するの!?!」

「あなたもいじわるしているじゃないの!!まさか萃ちゃんにやられるなんて…私も舐められたものね…。」

「ブーメランぶっ刺さってるよお姉ちゃん。」

「あとごめんね?今拭いてあげるから。」

「いやいいよ。俺もいじわるしちゃったし。」

「本当にいい子…。抱いていい?」

「なんでそうなるの?」

会計をしようと向かった途中、何故かお客さん達が鼻血を吹き出して倒れていました。意識を保っているお客さんから聞いたところ、俺とお姉ちゃんのイチヤイチヤを見

て鼻血を出したみたいです。

ちなみに俺とお姉ちゃんはそれを知らなかったようです。

とりあえずで済ましていいのか分からないけれど、とりあえずお店を後にした。

「あらら、もう暗いわね。」

「家まで送る?」

「助かるわね。それに積極的な萃ちゃんとても好きよ♪」

ポスッ

「えへへ…♪」

(照れながらのその笑顔最高に可愛いわね…!!抱きしめやダメよ香山 睡!萃ちゃんからの正式交際が許可されたらよ…!!)

色々話して気がついたらお姉ちゃんの家に着きました。

「萃ちゃん、本当にいいの?」

「うん、俺もちゃんと帰らないと怒られちゃうから。」

「真面目♪あ、そうそう!これあげるわ♪」

ジャラッ

「ブレスレット…?」

「私からのお守り♪」

「ありがとうお姉ちゃん。大事にするね。」

「あつ…待って！」

「ん？」

「え、えつと…最後にまた…キスしていい…？」

「はあ…全くお姉ちゃんつたら急に女性らしさ出しちゃって…。いいよ。」

「ありがとう…／／／」

チユツ

帰る前にお姉ちゃんと唇を重ね、長く深い接吻をした。

俺は舌を入れられてびっくりしてたじろいだ。

「ふはっ。大人のお姉さんのキスはどうだったかしら♪」

「は、初めてお姉ちゃんに女の子にされた気分よ…／／／」

「言葉がもう女の子ね♪かーわいっ♪」

「こ、これはお姉ちゃんのいじわるじゃないからあのことは許すわよ…／／／」

「ありがとう♪それじゃあね♪」

「う、うん…。」

パタン

お姉ちゃんを無事に送り届けられたが、キスをされて女の子にされた感じがして

ちよつと違和感があった。だけどお姉ちゃんのことを好きになったのはあながち間違つてはいない…と思う。

そして帰り。

トテテテ

「やっべもう20時になつちやう！用があつて遅くなつたじゃダメかなあ…？あ、これ通り魔にやられるフラグ？」

「萃ちやああん!!」

「え、っ…お姉ちゃん!?ナンデ!?ギユムウウツ ぷにゅっ!!」

「やっぱりうちについて！一人で帰らせたくない！」

「俺はもう子供じゃないよ!!」

「そういうのじゃないわよ！明日送つて行くから私の家に来なさい！」

「わ、分かつたよ…。」

一方、寮にて。

女子達の視点。

「萃っち、ミッドナイトの家に泊まるって〜！」

「襲われないか心配になつちやうな…。」

「あの子結構強がるところあるけれど、女の子っぽいわね。」

「萃ちゃんのお母さんと一緒にいた時はうちすつごくびつくりした！子供っぽくなってたね！」

「確かに子供っぽいところあるかも！」

「だけど、そこがまた可愛いのが艶星ですわね♪」

「」「」「本当それ!!」「」「」

ちなみに女子達のいる部屋はまさかの俺の部屋。

男子達の視点

「萃君がお泊まりだつてかつちゃん。」

「んだと!?あいつ自由奔放すぎだ！」

「いや、帰るところを引き止められて回収されたつて○INEのグループに書かれてる

よ。」

「あ、本当だ。」

「バクゴ―素直だな。いつもは暴れたりしてんのにな！」

「うっせ○すぞ!!」

「ぐぬぬぬ…艶星イイ…！羨ましいぞおお!!オイラも…オイラも泊めさせてくれええ

えええ!!」

「確かに羨ましいなく。そういや俺もミッドナイトに眠らされたんだっけか？」

「そういえばあったね！ だけど峰田君が瀬呂君のテープで切り抜けたんだもんね！」

「あん時、峰田じゃなかったら多分落ちていたかもな！」

「お、おいやめろよオイラ照れるだろ！」

「そういえば、艶星の部屋ってあんまり見たことないよな。」

「あ、確かに。どんな部屋なんだろう？」

「確かにな…女子達に聞いてみるか？」

「それもそうだね☆艶星君って結構不思議な人って感じだから、もう少し僕達も知りた
いね☆」

「あ、そういえば艶星に充電させてねえ!!」

「上鳴と艶星の日課になってるよな。アイツも個性持っていると買ったが、無個性で生
身の状態だなんてな…。無個性の状態ってあまり分からないけれど、どんな感じなんだ
ろうか？」

「艶星君に聞いてみないと分からないこともあるな。艶星君が上鳴君に充電を頼んでい
たりしているが、擬似的な個性にしていると思われる。俺達には特殊な器官や特殊な性
質を持っているが、彼はそのようなものを持っていない。どう言った原理で出している
のだろうか…。」

「萃君については僕もある程度聞いたよ。」

「デク、どんなこと聞いた？」

「萃君本人は戦闘時に力を入れすぎると暴発して筋肉の繊維が千切れたり、力が入らなくなるからあまり考えていないんだって。」

「それだけか…?」

「あまりだからちやんと頭の中に叩き込んでいることはあるんだって。」

「なんだそれ？」

「体の一部一部に腕力、握力、脚力、速度、目標、火力、艦艇の装備名を使った技を言葉にして繰り出すんだって。」

「だから言っていたのか。ただ早くぶつばなしやいだけじゃねーんだな？」

「最近だと頭の中で喋るだけでも出せるようになったとか。口よりも早く喋ることができるところから技の繰り出しに6秒も縮まったんだって。」

「つ、艶星すげーな…最早個性じゃねーか…。」

「オイラ達も艶星に追いつかねーと!!」

「だな! クラスメイト同士で擬似戦闘になったらサポート枠の俺達が活躍すつかもな
!」

男子組も女子組も盛り上がっていました。

一週間くらいには侵略者日本支部の攻略が始まるので、その前にクラスメイト同士

での擬似的な戦闘が始まる為、準備もしていた。ちなみに俺はといと…。

「お、お姉ちゃん…。」

「なあに？」

「なんで勝手にお風呂に入ってきてるのさ!!」

「いいじゃない♪久々に一緒に入れたんだから♪」

「なんで俺はタオルを巻いているのにお姉ちゃんはすっぱんぼんのさ!!」

「え、ダメ??」

「ダメに決まってるでしょ!?!」

「興奮してくれるのかなって思ったのになあ…。」

「やめてよそういうの!!タオル巻いてくれたら一緒に入ってあげるけれど!!いやもう入ってるけれどさあ!!」

「それじゃあ萃ちゃんのタオルをもらおうわね♪」

「やだ!それだけは絶対にやめて!」

「だーめっ!」

「やー!やだー!!」

バサアツ

「ツ…!!?」

「うう…酷いよ…お姉ちゃん…。」

「ご、ごめんね…萃ちゃん…。」

「うん…大丈夫だよ…。」

「こんなに傷だらけだったなんて…。皆には見せてないの…？前の時はこんな傷はなかったわよ？」

「洗つても落ちない特殊メイクをしたからだもん。まさか本当に見られるとは思わなかったな…。ちよつと緩くなつちやつたな。」

ギョツ

「ひやつ!?お、お姉ちゃん…!?!」

「ごめんね…気づいてあげられなくて…。」

「大丈夫だよ…傷このおかげで強くなれたんだから。お姉ちゃんやルミ姉のおかげで強くなれたんだもん。…お姉ちゃん？」

「萃ちゃん、こつち向いて？」

「む、無理だよ!すつぽんぽんのお姉ちゃんは見られないよ!」

「いいからこつち向きなさいっ!」

グリユンツ

「く、首があ…。」

「あ、乱暴しちゃった。タオル巻いているから入れるでs 「今度は俺がすっぽんぽんになってるからダメ!!!」 えー!?ダメなのー!?」
仲良く入りました。

あ、一線は越えていません。

襲われかけたのはあつたけれど、決して一線は越えていません!!

#37 擬似戦闘訓練

「萃ちゃんやつほー！」

「葉隠さんおはようでござやる。」

「擬似戦闘訓練の話聞いた？」

「聞いたけれど少ししか頭に入っていないかなあ…。」

「萃ちゃんは三奈ちゃんと一緒だって！」

「セメントス戦の時と同じ感じかな？」

「多分そうなのかな？もしかしたらたまたまかも！」

「葉隠さんは？」

「私？私は踏陰君と！」

「あ、それならたまたまだね。こりゃあ葉隠さんと対決ってなったらかなり大変だな…。」

「その時は私が萃ちゃんにいつぱいいじわるしちゃうもんねー♪」

「やつべえ負け確定じゃあん…。」

「萃っち透ちゃん何話してるの？」

「あ、芦戸さんおはようです。今、擬似戦闘訓練のお話をしていたところなのです。」

「また萃っちと一緒になれたから嬉しい♪」

「ボンツ そ、そう言われたらなんか…照れちゃうな…。」

朝から戦闘訓練のお話です。

今度はvs先生方ではなく、クラスメイト同士で戦うことに。

クラスメイトの個性に近い個性を持った敵や侵略者インヴェイダーがいる可能性が十分有り得る為、先生方もそういう決断に至ったとか。

「最近は脳筋授業みたいなことしてないが…近頃は奴らの動きも目立って来た。お前らに近い個性や似た個性が出てくる可能性があるから、しっかり頭を使うように。個性の相性が悪いからって諦めたら最悪の結末を迎えると思え。分かったら返事だ。」

「『はーいー』」

「よし、早速だが…艷星と芦戸ペアvs轟と蛙吹ペア。点数は付けない、ただこの戦闘訓練で学習したものを本戦で使えるようにしろ。以上だ。」

「芦戸さん、どうしよつか？」

「急に相性が悪いよおおお!!」

「もしかしたら上手く連携取れないかも知れない。別々になっちゃうかも。」

「あ、有り得るかも…。」

「蛙吹、艷星を別の場所へ。アイツの弱点は女子に手を出せないことだ。お前の保護色でやれるハズだ。」

「梅雨ちゃんって呼んでね。分かったわ、萃ちゃんを別の場所へ移動させたらいいのね？」

「アイツのスピードには流石の俺も氷の生成が追いつかない。それに梅雨の弱点にまで響いてしまうからな。上手く暖められるようなものにしたいが…まだ出来ないんだ。すまない。」

「大丈夫よ、弱点は誰にでもあるの。轟ちゃんは悪くないわ。」

「そう言ってくれると助かる。…始まるぞ。」

「ええ、作戦通りに行くわね。」

「芦戸さん、頼みがあるの。」

「どうしたの？」

「酸で真下をすぐに溶かせる？」

「行けるよ？それがどうしたの？」

「多分一発目に大きいのが来る。だから避けられるようにしたいの。轟君は俺のスピードに追いつけないから引き離すつもりだと思う。」

「了解だよっ！あ、始まるね！」

「うん。よし、まずは慎重に探そう。」

「擬似戦闘訓練 開始!!!」

戦闘訓練が開始した。

お互いの作戦に合わせて行動を開始したのだが、俺達側の方には一番の欠点があった。それは…。

「ねね芦戸さん。」

「ん？どしたのー？」

「俺に酸を付けてくれる？」

「ええ!? 流石に危ないよ!？」

「やっぱりダメかあ… 芦戸さんの酸を纏わせたらもう一つ上にいけたけれど… 俺の体じゃ限界があつたか☆」

「自分自身を実験台にするのは流石にアウトじゃない!？」

「だけどそうしないと慣れないじゃない？」

「うーん… 確かにそうかも…。 だけど私の酸はやり過ぎちゃったら私の服も溶かしちゃうし、萃つちの体も溶かしちゃうかも。物理的に。」

「あ、そりゃ危ないな。だけど教えてくれてありがとう。少しだけ賢くなれた気がする

！」

（うーん可愛い…!!）

欠点は俺がポンコツになる時があること。

芦戸さんは頭を使うことが苦手なこと。

お互いに苦手分野がある為、それをお互いで補って戦うことをほとんどの目的となっている。ちなみに俺は脳筋特攻しかない時があります。

「蛙吹、見えたぞ。」

「ええ、結構堂々と歩いているわね。」

「アイツらも作戦があるだろう。艶星はポンコツになることが多いが、戦闘面では比較的頭を使う。たまに脳筋だがな。芦戸は頭を使うことが苦手なタイプだ。それを艶星がカバーしているが…蛙吹の保護色には勝てないだろう。あとは作戦通りに頼むぞ。」

「分かったわ。」

「ふんっ!!」

「ゴオオッ!!」

「来たか！芦戸さん！」

「OK!!そりゃっ!!」

ジウワアアッ

「火力強すぎた…引き離れたか?…うん??」

ピョコッ

「よし、第一段階は完璧だ芦戸さん！」

「あとはどうしよつか？」

「やっべ考えてない…。」

「えッ…。」

シユルルッ

「ふにやみやつ!？」

「あッ…!!」

「芦戸ちゃんごめんなさいね? 萃ちゃんは引き離しちゃうから。」

「梅雨ちゃん待ちなさあああ!!…つてうわああッ!」

パキイイツ!!

「芦戸、お前の相手は俺だ。」

「ど、どうしよう萃っち…! 負け確ルートじゃないのこれえ…!？」

轟君の作戦にそのまま持つていかれた。

俺は梅雨ちゃんの舌でグルグル巻きにされて違う場所に持つて行かれ、芦戸さんは追

うにも轟君の氷の壁で塞がれた。

多分俺達負ける。

「むむむむっ……！」

「力入れてきたわね。萃ちゃんの相手は私よっ！」

「ぶはっ！こ、呼吸できなかつたよ梅雨ちゃん……。」

「あ、それはごめんなさい。引き離すことに夢中になっちゃったから……。」

「と、とりあえず……芦戸さんのところに行かせてもエズルンツ!! ぶぎやつ!!」

「私の粘液で滑らせるようにしたの。だから無理に動かない方がいいわよ？」

「脚がダメなら……腕でツ……!!」

「え……？」

ドヒュンツ

（あの子どもここまで成長するのかしら……。だけど向かおうたって、そうわいかないわよ

萃ちゃん。）

「よし……！行けっパシツ ふにゃんっ!!」

ピタンツ

「脚よりもスピードが落ちているから仕留めやすいわね。」

「っ、梅雨ちゃん……。」

「このまま終わらせちゃうわね？」

「負けないよっ!!」

バツ

「だけど私の保護色には勝てるかしら？」

フツ

「え、っ…?」

(萃ちゃんは反応速度は早い…だけど保護色の私だと反応はできないハズ…)

「見つけた。」

(えっ?)

ポスッ

「み、見つかっちゃったわね…。でもどうして分かったのかしら？」

「匂いだよ。」

「匂い?」

「保護色や透明化する相手がいるかも知れないって思って獣の^{ビースト}一部を借りて匂いを辿っ

たの。」

「あから、これは参ったわね。だけどこれはどうかしら?」

ヌルッ

「ぬる??」

「えいつ!」

ギョツ

「つ、梅雨ちゃん!?ちよつとそれはっ…!!」

「萃ちゃんの弱点は女の子に手を出せないこと。あとは充電をし忘れることよ。」

「し、しまったああああ!!充電忘れてたああああ!!だけどなんで抱きつくの?」

「もう分かるはずよ。」

「えあ…?か、体が…:う、うご…:か…:ない…!?!」

「私の個性は蛙なのはご存知でしょう?だけど蛙には毒を持っていることは知っているかしら?」

「…!そ、そういうことかっ…!!」

「ええ、そういうことよ。」

俺は梅雨ちゃんの個性に少し疑問を持っていたことがあった。

彼女からには毒を出すことができるのかと思っていたことがあった。だけど、俺は流石に女の子にそんなことを聞くのはマズイと思つてやめていたのだ。

俺や梅雨ちゃんがそういうことと言っていたのは、蛙には毒がある。一般的には毒持ちの蛙と言えばヤドクガエルの類のイメージが強いが、基本的にアマガエル等の一般的

に見かける小さくて可愛い種類にも微弱なものだが、毒があるのだ。

何故そう言い切れるのかと言うと、例としてアマガエルを触ったでしょう。その触った手で目を擦る。その触った手で目を擦ってしまったら目が腫れてしまったり、最悪失明を引き起こしてしまうからなのだ。

梅雨ちゃんにはその毒を出すことができ、俺の動きにも影響が出て来ています。現在進行形で動けません。

「萃ちゃんは毒にとつても弱いからね…弱点が増えちゃったわ。」

「に、ヤツ…あ…：…が…ツ…!!」ピクピク

「蛙吹、どうだ？」

「この子、毒にとつても弱いわ。痙攣まで起こしちゃった。」

「艶星、課題が増えたな。」

「じ、弱点…多しゆぎ…。」

「だけどこの子に保護色は効かなかったわ。匂いで気づかれちゃったの。」

「これはお互いの弱点が新たに分かって良かったじゃないか。」

「轟ちゃんのところは？」

「俺にも弱点があった。芦戸の酸を熱で蒸発しちまって目がやられた。芦戸の方は酸が凍るとあまり効果が出にくいようだ。その代わりにじわじわと溶かしてくる。あとは

熱に弱いが、蒸発するとかなり厄介になった。それとジェル状になるともつと厄介だった。」

「ふええん…萃つちごめくん！負けちゃったあ〜！」

「だ、大丈夫…夫……。 (アイルビーバック感) パタツ

「あつ、毒をつけ過ぎちゃったわ。」

「艶星に毒の耐性を付けないとマズイな…。」

「ゲーム感覚で言うのはヤバくない!？」

一方、観ていたメンバー達。

「萃君完敗だったね。」

「アイツにも弱点があるのは知ってるんだろ。負けてもおかしくはねエぞ。」

「艶星の弱点がまさか女子だけならず、毒にも弱かったのか…。オイラ、轟の方も観ていたけれど…アイツも結構苦戦してたよ。芦戸の酸で目を擦っていたからな。オイラ達の弱点増えるかも知れねーけど…それがまた新しい課題になるよな！なあ緑谷！」

「うん、僕達にも知らない弱点があるから一戦目を観て分かったよ！」

「その調子だぞお前ら。戦って勝敗は決めていないが、結果が分かった後、お互いに弱点を見つけたら話し合ってそれを自身の課題にする。それが自然と出てきた。高く評価できるから、戦った後結果が決まったらお前らも轟達みたいに集まって話し合え。そう

すれば攻略の成功率が高くなるぞ。」

「僕には弱点が分かりやすいけれど、多分他にもあるはずだから見つけておかないとね☆」

「うっし！なんなら成長するのみだ!!」

観戦部屋にいたメンバー達は俺達の戦闘訓練を観て盛り上がっていた。

一方、俺達はお互いに話し合っていたのだが、俺はまともに話すこともできませんでした。はい、梅雨ちゃんの毒の粘液にまみれてしまっているからなのです。

「萃ちゃんごめんなさいね？拭いても効果がまだ続いているから…。」

「う、うにゅ…ナデナデんにゃ。」

「轟ちゃんがおぶってくれるからゆっくりしてね。」

「粘液まみれで動けない萃っちエロかったなあ…写真撮っておいたよ!」

「芦戸、お前は変なところで写真を撮るな。艶星の弱みになってるんじゃない?」

「そ、そんなことないよ?!ただ癒されるだけだよ!?!」

「…そうか、それならいいか。」

(轟君天然だよ…。)

「艶星はまだ喋れないのか?」

「にゃ。」コクリ

「お前、猫みたいだな。そういうえば艶星、毒の耐性は持っていなかったのか？」
「にや。」フルフル

「まさか、持っていたのか？」

「にや。」コクリ

「……………どうしてだ？」

「なんでだろー？」

「私の粘液の成分によるものかしら。」

「うにや。」コクコク

「萃っち、猫みたいだね。」

「動けなくてこうなっているということは…麻痺性の成分が入っているとかがあるか？」

「そこまでは知らないわ。萃ちゃんがこうなっているなら可能性はあるわ。」

「それを本戦で使えたりはできるか？」

「いえ、それはできないわ。この子はこういうものには超敏感なだけでこうなっていただけだから…あまり期待しない方がいいわ。」

「梅雨ちゃんその粘液と私の酸を組み合わせたら強くなりそーじゃない？」

「今度試してみましょ。」

その後、俺は轟君におんぶされて観戦部屋に戻った。

毒には強くても麻痺性のものに弱いです。

ちなみにどうやって毒の耐性を付けたのかって？毒性のものを取りあえず水で薄めて注射したり食べたりにして、慣れてきたらどんどん濃くしていったと言った感じで耐性が付きました。完全な耐性ではないが。

ちなみにこの日は「にゃ。」しか言えませんでした。

#38 変装、下見、ゴキブロス

擬似戦闘訓練が終わり、俺達は寮で休んだり、特訓したりしていた。

「だけど俺と一部の人はひっそりとやろうとしていたことがあった。」

「よし…っと。バレないように奴らの下見をしておかないと…。何かしら変更する可能性があるからな。」

ガチャツ

「萃ちやーん！何してrあつ。」

「にゃッ…!!？」

「じ、女装…してる…!!？」

「は、葉隠しやん…み、見にやいで…。あとノックしてくれます…??」

「あわわわごめんごめん!!このことは誰にも言わないでおくから！ね?!」

「そうしてくれると嬉しいな…。」

「それで…何しようとしていたの？」

「バレちゃったからには仕方がないかな…。奴らの拠点を下見、盗聴しに行くところ。」

「…ツ!?それはダメじゃない!?皆には!」

「大丈夫、俺だけではできないことがあるから一部に協力願いを出したよ。」

「私は聞いてないよ!」

「昨日の疑似戦闘訓練が終わった後に聞こうとしたら葉隠さんいなかったの…。」

「あ、多分出かけていたかも。ごめん!」

「大丈夫、丁度聞きたかったのです。どうします?」

「もちろん協力するよ!」

「助かります。」

「ねえ萃ちゃん。」

「ん?」

「変装で女装するのはいいけれど、ちゃんとお化粧もしないと。」

「え、っ?」

「三奈ちゃんにしてもらおうよ!」

「いやいやそこまでしなくっ!」遠慮しないで!ほら行こッ!!」グイツ にやああああああ

あ!」

下見や盗聴等の情報を収集する為に向かおうとしていました。

まあその為に変装は必須なので時間をかけていましたかね。

葉隠さんが突撃してきて、俺が女装をしているところを見られて少し興奮気味になっていたようで…。なんで? (すつとぼけ)

ポフポフ

「ふにゆ…。」

「萃つち無理しないでね? 暴れないか心配だからさ?」

「大丈夫にやの…だけどわざわざ化粧までされるとは思わなかった。」

「透もいいところを見られてよかったじゃない? 萃つちがミッドナイトのところに行つてた時に私達気づいたんだ♪化粧したらめっちゃ可愛いんじゃないかなって♪アイライナーを描いたらアイシャドウも塗るから目閉じたままね?」

「あい。プニツ ぼにゆ。」

「萃ちゃん本当に肌ぷにぷにしてるよね。何かしてるの?」

「特に何もしてにやいよ?」

「本当に?」

「うん。」

「羨ましいなあ。胸とかどうなの?」

「俺は男なのでちゃんとまな板だよ? お魚挟めないよ?」

「なんで魚…?」

「分からにやい、突発的に出てきた。」

「リップとチークを塗って…っと。よし！終わったよ！」

「え、何この子…超絶可愛いんだけど…ツツ!!!」

「わっ…じ、自分で言うのもなんだけれど…か、かわ…かわわあ…／／／」

「ねえ、犯っていい？」

「ド直球すぎない?!」

メイクが終わり、早速出発した。

俺の変装は普通にギャルの姿に変装しますなんでもギャルにしたんだろう。↑素に戻った

だけど世の中には男の娘もいるから関係ないよね？

あのV t u b e rの水色髪でもっこりバベルの塔を持ったた○きちちゃんも男の娘なんだから別にいいんだもんね？ね？（威圧）

「本当に萃ちゃんなんだ…可愛いくない??」

「え、えへへ…ありがとう…／／／」

「ドキッ 女の子らしくなっていない?」

「そ、そう…かな??」

「ダメ…理性が持たなくなっちゃう…!!手繋がせて!!」

「う、うん…。」

(こんなに弱々しくなる萃ちゃんやバすぎ…！守りたくなっちゃうじゃん!!いやもう守らないなんて選択肢は処刑ものじゃん!!)

「じ、耳郎さん…。」

「下呼びでいいよ。どうしたの？」

「盗聴場所…教えるね？」

「マジ？」

「うん…ママと一緒に響香ちゃんや口田君の為に隅々まで探したの…。」

「バレたりはしなかったの？」

「大丈夫なの。俺の獣ビーストの鼻と耳を頼りにしたの。」

(やつば可愛い…ツ！喋り方まで女子になってるじゃんツツ!!)

「あ、ここから跳ぶから掴まってて。」

「えっ??」

「早く早く。」

「う、うん。背中でもいい…かな？」

「もちろん。」

「じゃあ…遠慮なくっ…。」

「んじゃ、行くよっ。んっ……!!!」

ドッ!!

「うわわっ!! そんな脚力どこから出てきたの!?! いつもより倍以上に高いよ!?!」

「このくらいは余裕だよっ。それじゃ、空中散歩でもしながら行こっか。」

「…は!?!」

フアスツ

「えっ…ええ!?!」

「どうしたの?」

「いやいやいや! どうやったらそんなことできるの!?!」

「オールマイトさんに言われて知ったんだけれど、何回かやってみたらできたの。」

「それでここまで短時間で出来たってこと…?!」

「うん。」

「凄いよ萃ちゃん、あんた天才的な才能もってるよ。」

「いや、俺はダメダメなんだ。」

「どういうこと?」

「それは…あつ、見えて来た。この話はまた後にしよっか。盗聴位置はここだよ。」

「最高の位置じゃん…ありがとう萃ちゃん。」

「バレたら教えて、すぐに駆けつける。口田君にも伝えてあるから。」

「口田は何処に？」

「あのビルの屋上。口田君には鳥さんや虫さん達にお願いするようにはしてあるから。都会であれば蟻さんがとても活躍するからできるだけ蟻さんをお願いしてもらつてるの。」

「口田が虫が苦手なのは知ってる？」

「うん、だけど彼も少しだけど克服したって言ってた。蟻さんくらいは平気って言っていたから大丈夫だよ。」

「分かった、萃ちゃんはどうするの？」

「ゴキブロスみたいに爪を壁に食い込ませて這い回ってみる。」

「それ〇ケモンの有名なやつじゃん。」

「言ってみたかったの。」

(可愛いしか出てこない…)。

協力をお願いしたのは初っ端からノック無し突撃してきた葉隠さん、俺と一緒に向かった響香ちゃん、先に鳥さん達に運んでもらって指定した場所に向かっていた口田君、俺の母親、口田君がいるビルと似た高さに向かった障子君の五人だ。

俺はゴキブロスみたいに這い回って中に入ろうと思わせての上から侵入する形です。

親も一緒にいます。

「萃、いつからゴキブロスになったの?」

「うっさいやい。やってみたらなんかできたんだい。てかよく知ってるね。ゴキブロスだなんて。」

「そりゃあ〇ケモンやってたんだから。それくらい知って当然でしょ?」

「あ、俺と同じアニメとゲームのヲタクだったの忘れてた。」

「忘れてたの?!あ、そうだ!前に送ったアレ見た?」

「いんや見てない。見る暇がないねん。」

「そっか、余裕が出来たら見て!私めちやくちや頑張ったんだから!」

「おっけおっけ、頑張ったのはちゃんと分かったよ。オーラが練り込まれていたかのよ
うに中身から溢れていたんだもん。それにしても…ママはどうやって手に入れたの?
まだ見ていないけれどさ、アレの中身って希少種フィギュアなんでしょ?」

「そうそう!!ちゃんと分かるようになったのママ嬉しいよ!あれサイン入りのオリジナル
ポーズを取ったフィギュアなの!」

「え、まさか…。」

「あ、やっと分かった!?!」

「ねええええ!!嬉しいんだけどおおお!!」

「バカバカ!! 声がおつきい!!」

☒香ちゃん視点。

「はあ…なんて話で盛り上がっちゃったの…。バレちゃうじゃん…萃ちゃんにはお仕置きしてあげないとね。」

ザザツ

『耳郎さん、そっちはどう?』

「こっちは大丈夫、だけど萃ちゃんのお母さんが萃ちゃん並にめちやくちやヲタクだったってことが分かったよ。」

『え???』

「ま、それはいいとして…二人は私達の聞こえる声が届かないところまで行くところかな。彼のお陰でここまで情報が分かるようになったし、今回はあのメタルレディもいる。萃ちゃんがいなかったらこんな大きな組織がいたことすら知らなかったと思う。私は信じるよ、萃ちゃんを。」

『僕も艶星君を信じるよ。』

『俺も信じる。…耳郎、艶星に伝えてくれ。奴ららしき姿が屋上へ向かっている。』

「分かった。萃ちゃん聞こえる?」

『あいさー!』

「今奴ららしき影が数人上がって来てる！隠れられる?!」

『おっけーりよーかい！ママ隠れるよー!』

『何処に隠れたらいい?』

『え?!無いの!』

『ドアの上の屋根ならあるけれど。』

『それ早く言つてよ!!焦っちゃったじゃん!!』

「萃ちゃん、切り忘れてるよ。」

『わわっ、本当だ!ごめんね!何か変化あったらすぐに伝える!』

「うん、分かった。気をつけてね。」

『響香ちゃん達も気をつけてね!』

ブツッ

「……萃ちゃんつてドジっ子?天然?可愛いんだけれど。」

俺視点に戻る。

「萃、どう?」

「やべーなこれ…一か八かだな…。」

「一か八かつて言われても…。」

「うん、こんなに人間が屋上に来るとか知らんわクソが。」

「どうしよつか。」

「ドアは…うん、閉められてるね☆ 開けられているなんてお約束なんてないもんねクソがー……あ。」

「何?じつと見て…。」

「ママの個性で行けるじゃん。」

「行けるって…え??まさかね??そんなことしないよね?!

「やってください。考えたから。」

「いやだ。」

「やってよ。」

「ダメ!」

「やれ。」

「うう…:萃がママにそんなこと言うなんて…。失敗しても知らないわよ?」

「分かってる。よいしよつと。」

「え?」

「いいからいいから。」

「はあ…分かったよ。『フルメタルボディ重金屬化・ドロップ落鐵』!!」ピヨンツ

ドゴオツ!!

「な、何だ!? 敵襲か!」

「何かが落ちて来たんだ! 見に行くぞ!」

「ママ、解除解除!」

「おっけおっけ!」

「よいしょーっ!」

ピョンッ シュタッ

「なるほど? 普通だと下に降りるけれど、敢えてもう一度戻るんだね? 逆の発想を考えたね!」

「そしてこれ。」

ゴンッ

「ごん??」

「ママが穴開けた直後に予めダンベルを用意しておいたからね。名付けて『殺意もりもり物理的な空からの贈り物』作戦。」

「スラ○りの名前から取ったな?」

「うん、ス○もりから取った。」

「あ、伏せよつか。」

「うん。」

お母さんの個性を利用して穴を開けた直後、俺はすぐにダンベルを置いたのだ。大体15kg程度の重さのダンベルです。

念の為に四つ程用意していたので、その二つを今使ってしまった。

え？合計で重さは三桁行っていたのにあんなに跳べたのは何故かって??細けエこたあ気にすんな。

「おいおい…またダンベルかよ…。」

「筋トレし過ぎなんだよなあ…。回収するか…つて重ッ!？」

「15kgもの重さのダンベルを投げるとかどんな化け物なんだよ…あの脳筋野郎…。」
「ねえママ。」

「うん、あの人達またつて言ってたね。」

「その前に15kgつてそんなに重いのか？俺当たり前のように持っていたけれど…。」

「世間では重い類じゃないかな？私も知らんけど。」

「あ、報告しに行つたみたい。」

「よし、私達も行くか。」

「おっけー。」

下見なのにこんなに慎重になるなんて思わなかった。

これ本当に下見だけだからね？

なのにごここまでなるとは思わないでしょ？
もちろん俺はゴキブロス状態で這い回りました。

#39 蟻の巣、地上、華

カサカサカサ…

「萃、這い回るのはいいけれど、何処に向かっているか分かっているの?」

「んなもん分かっている。俺をなんだと思ってるのさ。」

「ゴキブロス。」

「それは酷くない?」

「それにしか見えない。」

ピタッ

「え? 何で止まるの?」

「んじゃ、ママはここら辺で…っと。」

「やめてやめて分かった謝るから置いていかないで! ごめんって!」

「心が籠ってない。」

「ごめんなさい。」

「あい許す。」

今、地下何階に来たのか分からない。

ビルの高さからしたら15階程の小さなビル。

俺とお母さんはゴキブロスの如くカサカサと目的の地下まで這い回っていた。そしてとんでもないものを見つけてしまった。

「あ、蟻。」

ツマミ

「蟻さんここまで来ていたのか：口田君流石だなあ：。」

「彼にお願いしている蟻の種類はどんなの？」

「大半がクロオオアリ。」

「それにしてはデカくない？」

「……………」

「どうしたの？」

「撤回。」

「なんで?!」

「こっちに向かって来てる。」

「た、たまたまじゃないの？」

「たまたまにしては何故俺達についてきてると思う？」

「……??」

「暗くて遠近感覚が分からなかったけれどこのデカさグンタイアリだわ。あと通り道を邪魔したでしょ!」

「え、ツ…!!」

「その子をすぐに離しておいて! 刺されると激的な痛みと吐き気の地獄に突き落とされる!」

「えいつ。」

ポイツ

「逃げよう。」

「離れたら追いかけないんじゃないの!」

「誰がそんなこと言った?」

「え?!」

「グンタイアリは通行の邪魔をする者や狙った獲物を^{こじと}尽く喰らい尽くすジャングルの兵隊だ! コイツらに刺されまくられたら最悪、死亡演出確定だぞ!!」

「それ先に言つてよ!」

カサカサカサ

ガサガサガサ!!

はい、何故か地下二階辺りからグンタイアリちゃんが出現してきました。人間の手の他にも他の生き物達を利用していると確信した。

ゴキブロス状態で本気のカサカサBダツシユを発動し、上手く屋上まで逃げて来た。

「ぜえ…ぜえ…。」

『艶星、どうだった？』

「奴らやりよった。」

『何かあつたのか!?!』

「蟻だよ。」

『アリ…? 蟻って…今口田が指揮している蟻のことか?』

「そそ、ざっくり言う種類は厄介なグンタイアリだ。」

『ぐ、グンタイアリって…あの密林のジャングルに出てくるあの…!?!』

「うん、しかもただのグンタイアリじゃないんだ。」

『どういふことだ?』

「なんかめちやくちや強化されてた。」

『ますます意味が分からなくなってきた…。』

「安心して、俺も意味分からなくなつた。あと、うちのママがやらかしてくれたよ全く…。」

「てへっ☆」

「てへっ☆じゃねーよバカー!!」

ベシッ

「痛いっ!!」

『脳無みたいな形ではなく、そのままの原型を保ったまま強化された生き物つてことでもいいんだな?』

「うん、そんなところ。あとは何とか見つからずに上手く逃げられたけれど…突入するならばなるべく範囲攻撃が出来そうな…あ、芦戸さんいるじゃん!!」

『芦戸か?』

「芦戸さんなら行けるんじゃないかって思っ t 『一旦それは後にするか。』アツハイ。」

『どうする? 下見だからこれで撤収することはできるが…。』

「てっしゅー!!」

『分かった。口田にも伝えておく、報告は着いてからにする。』

「了解、響香ちゃんにも伝えておくね。」

『ああ、気をつけろよ。』

「もっちー! 障子君もね!」

深追いはせずに大人しく撤収しました。

深追いしてしまえば、多分その先は一人や二人だけだと死ぬかも知れない場所だからです。

ゲームで言えば本体がやられるまで雑魚相手が無限湧きするタイプのしんどくてめんどいやつ。

葉隠さんは俺達よりももつと地下に進んでいたようで、えげつない情報を手に入れていたらしいのです。惚れます。

響香ちゃんと葉隠さんを回収して帰寮の途中…。

ピヨーンッ

「萃ちゃんって本当に力持ちだよね。」

「そうかな？」

「力持ちだよ〜！可愛くて力持ちなんて凄いもん！」

「やっぱり萃はモテるね♪ミッドナイトとは上手くいつてるの？」

「付き合ってるようなこと言わないでくれねーか!？」

「そういうえげつだよね！ミッドナイト先生とはどうなの？」

「気になる気になる！教えてよ〜!!」

ギュームッ

「むぐっ!?!ちよっ…お、お胸がっ…!!」

「教えないと帰ったらこちよこちよで吐かせるよ?♪」

「わ、分かった!分かったからそれだけは勘弁してええ!!着いたら教えるからああああ!!」

恋バナになりました。

帰寮した後、すぐに報告はできなかつたので翌日報告することになった。もう夜になつて遅かつたので。

あ、親は事務所を借りて住んでいたので帰らせました。

そして女子全員が俺の部屋へ集まりました。助けて。

ズイツ

「んで、ミッドナイト先生とはどうなつてるの?」

「え、えつと…お姉ちゃんとは…その…。」

「付き合つているのかしら?」

「それは…その…まだ…付き合つて…:…ない…かな…?」

「付き合つてないの!?!襲われたとかなかつたの!?!」

「襲われてないかな…?多分…。」

「萃ちゃん、なんでそんなにもじもじしてるの?」

「だ、だつてえ…恥ずかしいんだもん…。」

「付き合ってしまったえばよろしいでしょうに…。もったいないですわよ?」

「俺なんかよりもいい人いると思うnモニユツ ぷおっ!」

「ミッドナイト先生は萃ちゃんのが本気で好きですよ?それを踏みにじるのは良くないと思いますの。」

「お、俺だってお姉ちゃんのが好きだよ…。だけど…。」

「だけど?」

「この先生でしょ…。?だから…。」

「…「あ…：納得。」」」

「禁断の恋愛はまずいかなって…。」

「いい子すぎない?」

「ええ、あまりにもいい子すぎますわ。」

「そして可愛い。」

「そして癒し。」

「そして抱き枕。」

「そして撫でたい。」

「て、照れちゃうからあ…!!」

「撫でくりまわしたれええええ!!」

「にやああああああ!!」

頭をめちやくちや撫でくりまわされました。

彼女達曰く、母性本能がくすぐられるらしい。

俺ってそんなに子供っぽいでしょうか？子供じゃないですよね？

そうですね？ね？?? (超庄)

「それで、結局のところミッドナイト先生のごことは好きなの？」

「びっ!!」

「あ、凶星のようですね。」

「あんなに可愛がられちゃうと好きになるのも納得するよ。」

「そういえば先生と萃ちゃんはどういう関係なの？」

「あれっ？言っていないかったっけ?!」

「「「聞いてない。「」」」」

「マジすか。とりあえずかくかくしかじかかってとこころで…。」

「子供の頃からお世話になっていたんだ…。てつきり血の繋がった姉弟かと思っちゃったー。」

「キスはしたのかしら？」

「ぶあっ!?!にや…にやにやにやにやにやを言うのれしゅ!?!」

「その動揺はしたっていうより…されたのね？」

「うっ…うん…／＼／」コクリ

「梅雨ちゃん、萃ちゃんがキスをしたんじやなくてされたって何で分かったの？」

「この子、女子に積極的などころ見たことあるかしら？」

「そういえば…。」

「ないね。」

「寧ろ女の子になってるね。」

「めっちゃ可愛くなる。」

「ミルコも好きなの？」

「好きだけど…ルミ姉の発情期が怖すぎるの…。」

「発情期…?」

「その時期が起こると毎回追いかけて回されては水をぶっかけて冷やしての繰り返しなの…。」

「捕まったことは？」

「ないよ？」

「それってどうやって切り抜けたの？」

「トラップで捕らえて水をかけるだけなの。最終的に関節技キメられて俺落ちるの。」

「結局やられるのですか…。」

「だけどお詫びに耳をもふもふさせてくれる。」

「なにそれうらやま!!」

「尻尾は触ったら殺されるけれど。」

「やっぱり毎回負けとるんやね…。」

気づいたら女子の皆に問い詰められてた。

お姉ちゃんの関係やルミ姉の關係に凄く興味を持っていたようです。

多分俺が毎回毎回お姉ちゃんって呼んでいるからかと思えます。はい。

ちなみに俺はお姉ちゃんのこととは好きだけでも、それをしていいのかすら分からな
いので保留にしているのです。

あ、ちなみに寝る時は皆自分の部屋へ撤収しました。

#40 人と人、愛と相

攻略まであと3日。

俺はお姉ちゃんと一緒にいました。

何故かって？なんか呼ばれました。

ナデナデ

「お姉ちゃん。」

「なに〜？」

「なでなでするのはいいけれどさ？」

「うん？」

「何で俺が撫でる側になって膝枕しているの？」

「たまにはいいじゃない♪」

「そうだけど…髪がもふもふしてて落ち着かない…。」

「褒めてるって受け止めていいの？」

「うん。だってもふもふしてるんだもん。」

「嬉しい♪ねえ萃ちゃん。」

「ん？」

「キスしたい。」

「…は?!」

「私も落ち着かなくなっちゃった…。」

「むう…ん。」

「分かってくれてるの嬉しいわよ♪えいっ!」

「ひあっ!」

ドサツ

お姉ちゃんに押し倒され、俺は起き上がれるような状態ではなくなった。つまり、正座状態で後ろに倒れたのです。

はい、無防備です○

「ちよっ…こ、心の準備だけはさせろ「待たないっ!」チュツ んむっ!?!んっ…//」
(可愛い…早く私のものにした…♡この可愛さに勝てる子なんて絶対いないわ…♡
このまま一線を越えたいな…。)

お姉ちゃんにキスをされ、俺は力を奪われるかのように力が抜けていった。痙攣のようにピクピクと動いていたのだが、お姉ちゃんはそれを楽しんでいたように見え、俺は

何もできませんでした。

あと髪がもふもふしていました。

キスをされ始めてから数十分後。

「ぷはあ…はあ…はあ…お、お姉ちゃんの…え…えっち…／／／」

「萃ちゃんの養分いっただき♡ 私の愛が伝わってくれると嬉しいな♪」

「じ、十分に伝わってるよ…／／／」

「…！じ、じゃあ…プニツ んっ？」

「だけど今はだーめっ。終わったら答えを言うから…。」

「それフラグじゃない？」

「物理的にへし折ってやるさ。」

「わあくゝ脳筋だあゝ」

「ねえ、お姉ちゃん…何処かに出かけない？」

「ええ♪買いたいものもあるし♪」

ギョツ

「お、お姉ちゃんっ!?!う、腕組みだなんて…俺の方がちっちゃいの分かってるっしよ!?!」

「ほーらそんなこと言わないのっ♪」

「まず攻略が近いのにこんなにゆるゆるでいいの…?」

「やりたいことがあるから今日だけっ！ねっ？」

「むう…お姉ちゃんにそんなこと言われたら…言うこと聞かないじゃないの…。」

「ありがとっ♪」

（やつぱり俺はお姉ちゃんと付き合った方がいいかも…ドキドキしてるし…それになんかいつもより可愛さが増してる…。）

ゆるゆるながらも警戒しています。

だけどお姉ちゃんと一緒に出かけたかったので出かけました。

お姉ちゃんは買いたいものが丁度あったため、出かけたかったらしいみたいです。ちなみに俺も欲しいものがあったので。

ガヤガヤ…

「わあ…凄く混んでる…。」

「そうね、これはちよつと心が折れるかも。」

「戦いよりもこつちの戦いがしんどいね…。」

「例えが凄く分かるわあ…。」

「スイーツでも食べて待ってみない？」

「そうね♪萃ちゃんの頬張る姿も見たいし♪」

「何よそれ！」

「ハムスターみたいで可愛らしいじゃん♪」

プニツ

「うう…そんなこと言われたら何も言えにやい…。」

（可愛すぎるわ…頬っぺも柔らかいし顔真っ赤にしてるし…何この子、天使??）
近くのスイーツ屋さんに立ち寄りしました。

スイーツが好きすぎなので食べすぎないように小さめの可愛らしいスイーツを頼みました。お姉ちゃんはまさかのカップル用のスイーツを頼んできやがりましたふざけんなちくせう（）

「ねー！なんでそれ頼むのー!?!」

「別にいいじゃない♪」

「お昼とかどーするのさー!」

「これ頼んだ後に気づいたの。もう遅いからいつかなーって♪」

「良くないよおバカー!」

「萃ちゃんの頼んだのは…何それ可愛い!!」

「ふふーん♪そーでしょ!ちっちゃくて可愛いし、食べすぎずに済むの!」

「半分ちよーだい?」

「だめ!」

「むう…：萃ちゃんと一緒に食べてくれないと、お姉ちゃん食べきれないよ？」
「それは自分でやったことですよ?!」

「だって、萃ちゃんも一緒に食べてくれるかと思って…。」

「はああ…：もうお姉ちゃんったら…。はい、俺のこの可愛いの半分あげる。お姉ちゃんと一緒に食べてあげるから…。」

「ありがとっ♪（チョロいわね。）」

（お姉ちゃんの表情には勝てないや…。ドキドキしちゃうし…：むむむ…。あ、このパフェめっちゃ美味しいな。）

「萃ちゃん。」

「ん?」

「今回、ペアであなたと一緒にになったの。」

「リークすぎない?」

「いいのよ、結局分かっていると思うし、ブレーキ役としての私がいるから。それにあなたのこと心配で…。」

「ふふん…：お姉ちゃん、俺を何だと思ってるの?」

「脱線暴走機関車。」

「うっ!」クリティカルヒット!!

「だけど本当でしょ？」

「何も言い返せません。」

「だけど期待してるわよ？」

「へ？」

「また新しいやつ思い浮かんだんでしょ？」

「なんで分かるの!？」

「私の勘よ♪」

「怖いよこの人。」

「あつ、そろそろあのお店も入れそうね？」

「あ……うん、そだね。早く食べて行こっか。」

スイーツ屋さんを後にしてお互いに目的のものを買い、そのまま寮へ帰りました。ちなみにお姉ちゃんのは俺の部屋に居座る気満々でいました。

俺は全力で押し返そうとしたけれども、皆に引き止められてしまったので仕方なく俺の部屋に入れてやりました。

「ねーねー。」

「どーしたの萃っち？」

「男子棟に行きたい。」

「それはダメ！」

「なんで!？」

「癒し要素がいなくなるのと同じだから!!」

「俺ってペットか何かなの!？」

「兎じゃん。」

「ぐはっ!!」

「あ、クリティカルヒット喰らった。」

「そういえば、萃ちゃんのコスチュームって結構不思議だよな？」

「確かに…少し不思議ですわね…。」

「そんなに不思議？」

「うん、うちも気になってるけれど、どうやったらあんな形になるの?」

「あー…艀装のことか。」

「艀装?!」

「うん、言わば装備みたいなもの。コスチュームには特殊機能をぶち込んでもらってね…俺の艀装したい艦にに応じてそこら辺に落ちてる瓦礫とかで艀装を造ってもらえるの。一度壊れたらその艀装した艦に一時的にはなれないけれど…。」

「萃ちゃん結構使い慣れていると思うてると思ったけれど、まだ使いこなせていないん

だね?」

「ゼーんぜん使いこなせてないの。色々艷装はできても、本人の俺自身が使えてないからまだまだ。」

「へえ…萃ちゃんならすぐにできるものかと思ってたわ。」

「寧ろそれが出来ていたら奴らを一人だけで潰せてたわい。」

「戦闘面になると凄く頭回るの凄いや萃ちゃん。緑谷とか爆豪並に頭が回ってるよ。」

「いや、俺はゼーんぜん回ってないよ。」

「初めて襲撃された時の証拠があるわよ? 萃ちゃんのおかげで捕まえることができたんだから。」

「皆がいてくれたお陰だもん。俺一人の力じゃないもん。俺一人だけだったら何も考えずに脳筋プレイしてた。」

「なんていい子なの…?! ミッドナイト先生、この子お借りしても…!」

「いいわよ♪ 萃ちゃんを存分に味わいなさいね♪」

「えっ…? ちよつと待って!?! あっそこはダムギユムツ はにい…。」

「もう抵抗できないですね?」

「固まったわね。」

「人形みたいだね。」

「着せ替えとかしてみたり？」

「いいねそれ！着せ替え人形にしてみようよ！」

「そして私はこうやって…。」サワツ

「んにゃあああアツ!!」

「反応しましたわね、弱いのでしょうか？」

「弱いわよ。この子の弱点はこういうことをされることだから♪」

「こんなの3日前にやることじゃねーだろおおおお!!」

俺の悲鳴と叫び声は寮内全域に響いたとか響いていないとか…。

ちなみに着せ替え人形にされただけなので卑猥なことは特にされていませんでした。夜なのにこんなことされた俺の気持ちにもなってくれ…。

そして就寝時。

「もうお嫁行けない…。ぐすん…。」

「隣にいるじゃない♪私というお嫁がね♪」

「断つてもいい？」

「なら襲うわよ。」

「やめてください。」

「じゃあ断らないで？」

「……………ふーんだ。」

「素直じゃないわねえ…あつ、えいつ！」

フワッ

「んにやつ!!？」

「どう?」

「ど、どうつて…何がよ…!」

「私に抱きつかれている感覚♪」

「む、むぐぐぐ…甘えたい…。」

「ポロツと出たわね♪甘えていいわよ♪」

「う、うん…。」

ギユッ

「萃ちゃん、本当の気持ち…教えて?」

「…き。」

「ん?」

「お姉ちゃんのこと…好き…だよ…?」

「本当に?」

「す、好きじゃなかったら…こんなこと…してないもん…。」

「嬉しいわ♪」

「お、お姉ちゃん…。」

「なあに？」

「あつたかい…♪」

「襲つていいかしら？」

「やだ。」

「ちえー…チャンスだったのに…。」

「奴らを捕まえて一段落したら考えるよ。」

「約束ね？」

「うん、約束する。」

「じゃ、おやすみっ♪」

チュツ

「にゃッ…ツ…!?!ほ、ほほほ頬つぺにキスだなんて…ッ!ふ、不意打ち…へにや。」コケツ

強制睡眠させられました。

お姉ちゃんは俺が眠れないと錯覚していたのだろう。

まああんなことされたら普通に眠れませんからね!?

そして何だかんだ特訓やら何やら日にちが経ち、攻略当日を迎えたのだがまた次回。

#41 侵略者（インヴェーダー）日本支部攻略戦、開始

攻略戦当日。

侵略者サイドにも情報が行き渡っていると考えている為、プロヒーロー、先生方、俺達

1-A、B組は日本支部へ着くまで変装をした状態にしました。

特に俺の変装はクラスメイトの女子組にしてくれもらったのだが…。

「あのあの？」

「なんででしょう？」

「なんで俺はまた女の子に？」

「男の格好よりも似合うからっ!!——?? (d*, ω*, *)」

「男子組が困惑しているんだけども!?」

「艶星のやつ…エロいじゃねーかあああ!?!」

「艶星が女子だったら確実に告ってたぜ…!!男の艶星もエロいッ…!!」

「か、萃君…似合いですぎて目のやりどころが…!!」

「艶星の変装何度見ても完璧じゃねーか!ちよつとエロいけれどよ…?」

「ほら、こんなに困惑してる。」

「いーのー！本戦ではこう本気にならないとっ！」

「本気…か…。」

「萃。」

「何ママ？」

「別々になるけれど、死んだら許さないから。」

「そんなことかい。俺は死なねエよ。いや、死ぬわけにやいかねえし、恩返しすらもでき

ねえからな！」

「それでこそ私の息子!!」

ガッ

（ふふっ、最強の親子になりそうね♪）

作戦が開始した。

俺、お姉ちゃんのペアは鉄崎さんの情報を頼りに地下へ繋がっていると思われるマンホールのところへ向かった。

その情報が取れたのは当時、本人がたまたま路地へ通りかかったところへマンホールの下へ降りていく怪しすぎる人達を見かけたとのこと。

「お姉ちゃん。」

「どうしたの？」

「絶対コレでしょ。」

「そうよね、絶対コレよね。」

「開けてみる。」

「私は離れてるわよ？」

「分かつてググツ　ん　ん　っ??」

「開かないの？」

「うん開かない。ちよつとぶん殴つてみる。」

「離れるわね…つてちよつと待つて…。」

「ふん　ッ　ッ　!!!」

ドゴオオツ!!

ガンツ!!ガゴンツ!!ガンツガンツ!!ガガガガ…ドゴオオツ!!ガシャアアアアン!!!!

「あつ…やつべ…。」

「なんか嫌な音鳴つたわよね!？」

「お、お姉ちゃん…。」

「や、やつぱり…。」

「やつ☆ちつ☆た☆スパアアアン!!!!　へぶちつ!!」

「なーに派手なことしちゃってくれているのさああああ!! コソコソ忍び込む手筈だったでしよう!？」

「だ、だつてえ…硬かったんだもん…マンホール…。」

「たからつて…力加減をしないのはおかしい話じゃない…?」

「あ、確かに。」

「ダメだこの子。完璧に可愛いアホの子になつてゐるわ。」

力加減をせずにマンホールをぶん殴り、奥深くまで蓋がガンガン落ちて行き、めっちゃくちや嫌な音が響いたのだ。

はい、なんか割れたような音がしました。

だけど今は侵入することだけに集中し、そのまま地下へ潜つて行きました。

カサカサ…

「お、お姉ちゃん…。」

「ん?」

「お、お胸が…。」

「しようがないでしょう? 萃ちゃんに掴まっているんだからあ…。」

ムニユン

「む、むぐぐ…女の子に生まれたかった…。」

「そうなるよあなたはぺったんこよ？」

「今の発言貧乳を敵に回したわよね!？」

「あら、女の子口調になってるわよ？」

「う、うるさいわ！」

「かーわいっ♪」

ギョッ

「あ、お姉ちゃんお姉ちゃん。」

「ん??」

「見えた…奴らの中身が…。」

「何あれ…海外のSF映画に出てくる装置が沢山あるじゃない…。」

「へえ…なるほど…あの人達の話…やべーな。」

「何か分かったの？」

「最悪な事態だ。」

「…どういうこと？」

ドツベルゲンガ!
「影。」

「ドツベルゲンガって…自身と全く同じ存在がもう一人いるっていうアレ？」

「うん、ゲーム内でのものかと思っていただけ…まさか造っていたなんて…。」

「話が全く見えないわ…完結に話して？」

「生物兵器を造ってる。」

「破壊しなさい。」

「理解が早いわよお姉ちゃん。」

俺達が見えた地下空間は正に蟻の巣。

そして俺達が見つけた部屋はトンデモ重要なお部屋でした。見つけるのが早すぎます。

グンタイアリはちまちまいたので触らずに避けながら逃げました。

阻害したらこつちが死にますので（○）

相手にしたら数の暴力+ただでさえ強すぎる蟻酸で負けますから（○）

「スンスン…お姉ちゃんお姉ちゃん。」

「？」

「奥側からなんか匂いがする。」

「匂い？どんな？」

「ホイップクリームみたいな甘い匂い。」

「行ってみる？」

「うん。」

カサカサ…

又ツ…

「…?!」

「何かしら…あれ。」

「今度こそ皆に美味しいってもらうんだから!!」

「…ジュルリ」

「萃ちゃん？」

「はっ…!だ、大丈夫…だと思う…。」

「大丈夫じゃないわね？」

「あのケーキ見ると凄くお腹空いてきちやうの…。」

「そうかしら？私はあまり空いてないけれど…。行く前にいっぱい食べなかつた？」

「うん、いっぱい食べた。」

「なのにお腹空いたの？」

「うん、何故か。」

「胃が凄く膨らむとか？ギャル〇根だつてそうらしいから有り得るかもよ？」

「いや、それはないよ。」

「え？」

「ギヤル曾〇さんは体質でそうなっているんだけど、俺は普通の人間の体質なの。胃は普通の人間レベルだし、体質的には何の変哲もないただの男だもん。」

「シヨタじやないの!？」

「それやめて傷つく。」

「私に言われると傷つくなんて可愛いわ♪」

「とりあえずあの女性はなんなんだ…？」

「スイーツ作っているみたいだけど…。」

「お腹空いた…。」

「だからって得体の知れないものを口にしないでよ?!」

「た、確かに…どうしよベキツ!! ベキ…??」

「あつ…やば…。」

バキバキバキツ!! ガラガララララツ!!!

「ひえあああああああ?!?!?」

「萃ちやあああああん!!」

「お姉ちゃんは一旦退いて報告!!」

「分かったわ…! 無茶しないでね!」

ガラガラ…

「あたた…やつbコツン あたつ。」

運が悪すぎたせいか、キッチンらしき場所に落ちました。

原因は通気口の整備不足による腐食でしたふぎけんな。

ちなみに戦うとしたら、相手が女性なのであまりにも不利中の不利でした。ハイ。

「ああああああ!!私の作ったケーキがああああああ!!」

「ん?あー…ごめんなさい。」

「皆に見返してやろうとして作ったケーキなのにいいいい!!」

「はむっ…あ、この香り辿ったやつだ。この凄く甘い香りなのに甘すぎない甘さだけれどなんだろう…この食べても飽きないこの味…。」

「え、私のケーキ食べたことあるの!?!」

「いや…初めて食べたけれど…。」

「そーなの!?!ねーねー!よかつたら食べない?!スイーツ作りすぎてすっごく余っちゃったの!」

ドツサリ!!

「…ジュールリ。いいの?俺、敵なのかも分からない奴だけど…。」

「私のスイーツを細かく評価してくれたのあんたが初めてだから!うちの会社の偉い人達は文句ばっかり!敵同士でもこうやって評価してくれるの嬉しいよ!」

「他の人には食べてもらってないの？」

「食べてもらったんだけど…美味しくないとか、甘さが足りないとか文句ばかり！
だーれも美味しいって言ってくれなかったもん！」

「俺は好きなんだけれどなあ…。」

「ほんと!?!」

「うん。ほんと。」

「そういえば、あんたの名前聞いてなかったね。私は浅木あさぎ 甘奈あまな！」

「俺はラビットシップ、ヒーローの卵だ。本名は隠してる。」

「ラビットシップ…え…!?!」

（やべ…敵なのかも分からないのに言っちゃった…!）

「私、あんたの大ファンなの！それに頼みたいことがあるの!!」

「頼みたいこと…?」

「私を…ここから出してほしいの!」

（もう一人の自分ラキ、どうする?）

《《どうするもこうするも、コイツは嘘を言ってねえ。獣ビーストも嘘の匂いがねえつつつてる。》

（OK分かった。）

「だ、ダメ…かな…?」

「ああ、出したる。」

「ありがとう！」「ただし！」「ただし??」

「騙すようなことがあれば無かったことにする。いいかな?」

「うん!」

今更すぎるが、ヒーローは戦うだけではなく、戦って助けることがヒーローなんだと俺は今ここで改めて分かった。

まあもちろん俺は騙されようがなんだろうが助けるつもりですハイ。

4 2 ホイップクリーム の 概念

「甘奈さん、君は何故あんなところに？」

「スカウトされたの。」

「スカウト??」

「私の夢はね、パティシエになることなんだ。それでこの人にスカウトされてずーつと修行していたの。」

「変化はあったの？」

「全然：寧ろ教えてくれるどころか来てくれもしなかったし、ずっと密閉空間でやらされてた。」

「その上、文句ばかりつけると：最低だなそいつら。」

「本当だよ！逆に利用されているんじゃないかって思っちゃおうよ！」

「利用されていると思う…。」

「え？」

「個性は？」

「クリームだよ。ホイップクリーム。」

「可愛い個性だな。」

「ラビットシツプの為なら何でも作れるよ！武器でも何でも！」

「武器も作れるんだ…可愛い上に凄い個性だね。」

「ふふーん！サポートなら任せて！」

彼女は浅木 甘奈。

スカウトという名の拉致を受けていたらしい。

彼女はそれをすんなりと受け入れてしまい、数年間ここにいるとのこと。何度か脱走を試みたのだが全て失敗に終わり、脱走させないような作りにされてしまったとか。

「…！甘奈さん、すぐ近くに…。」

「私に任せて！」

モコモコモコモコツ

「こ、これは…?？」

「いいからいいから！」

「入るの!？」

「あーもー！早く！」

「ひゃあっ!？」

モプリンツ

「お、お疲れ様です！」

「あ？浅木イ〜…また脱走kんんんん？何だこれ？」

「私の部屋に入ってきた愚か者がいたのですぐに捕らえました！今収監させるところです！」

「お、やるじゃねーか。お前の個性は中々優れているから俺達の計画に役立ててくれよな？」

「あ、ありがたきお言葉です！」

（あの男…甘奈さんの個性しか見てねエな…。）

「ラビツトシツプ、アイツ行ったよ。」

「んむむむむむ…ポンツ ぷはあつ！た、助かった…。」

「私の個性がホイップクリームだから、呼吸しにくかった…。」

「少しだけ苦しかったけれど大丈夫だったよ。ん〜…どうしよ、ホイップクリームまみれのまま行くのもちよつと不安…。」

「あ、大丈夫大丈夫！ちゃんと回収するから！」

ススウウ

「おお…生きているかのように吸い込まれていくんだ…。」

「ちなみに私の個性は甘いものを食べることで種類が変わるの!」

「へえ…そりや凄いな…よいしょつと。」

ヒョイツ

「きやつ!?!」

ドゴツ!!

てつてこ走っているところ、後ろから気配を感じたので彼女を抱き抱えて俺側に寄せた。

もちろん、さっきの幹部の人間が隠れながら追っていたとのこと。

「ちつ…視ていたのか…。」

「あつぶねあつぶね、ストーカーいたわ。」

「浅木がこういうことをすることはまずないつてことくらいは把握してんだ。大体助けを求めるのは知ってる。ソイツを俺に寄越しな。」

「へえ…消しかけるのは彼女なんだ。もしかして…過去に機密な情報を見られた、もしくは聞かれたからなのかね?」

「ふん、ガキには関係ない。同じことはもう通用しないつったよな浅木イ…。」

「う、うるさいやいバーカ!!私を三年も閉じ込めておいて死ぬ覚悟すら出来ていないと思っていたか!!」

「お、俺にそんな口を聞くとはなあ……！決めた、今ここで殺す……！！バンツ！！ 『回壁突刃』
 ！！』」

シユルルルツ

「えつ……？」

「もう遅い……！ここで二匹まとめて死ねェい！！」

「あらそう？行きましよ甘奈さん。」

「い、いや待つて!?流石にもう終わったよ!!?」

「攻略法見つけたけれど……諦めるの？」

「え??」

「くつ……ちよこまかと……！（まずい……一定距離から離れる……！！ここで仕留めておかねば
 幹部としての存在が!!）『回壁歪刃』
わいじん

「おほほほおおく!!!→→→曲がった曲がったああく!!!→→→」

「なんでそんなにテンション上がってんの!?!」

「楽しいから!!」

「はあ!?!いやその前に攻略法は!?!」

「一緒に突つ込みや分かる!!行くよつ!!!」ピョンツ

「ま、まさかあ……!!」

「脚力105%…腕力200%…火力調整400%…標的確認、砲雷撃戦用意!!」
「待つて待つて!!心の準備g「人間魚雷、発射ああああああ!!」いやああああああ
ああああ!!」

バギユウウンツ!!

抱き抱えたまま侵略者イッヱーダーに突っ込んだ。

もちろん俺は相手の個性の大半は理解していた。

とは言え、完全に理解したわけではないです。はい。

相手の個性は壁を使った個性で、ネジ巻状に罅ひび状のものを一定の距離まで伸ばし、そこから刃を突き出す個性だ。

弱点としては真ん中に空間ができることと、一定の長さの刃しか出せない上に狭ければ狭い程刃が短くなること。体に出る負担は全く知らんけどな。

「こ、コイツ…俺の個性を瞬時に見破ったのか…!?!」

「とりま、寝ておけ。」

「こりゃあ…参ったな…。」

バガアアンツ!!

「ふう…マジで危かった。」

「本当だよ!ラビットシップってこんな無茶したっけ?」

「あ、うん。結構無茶する。」

「思ってたんと違う…。」

「ま、イメージは違うって言うじゃん？それだよ。」

「そういえば、どうして見破れたの？」

「刃だよ。」

「刃？」

「うん、一定の長さしか出ていなかったから行けるんじゃないかね？って思ったの。」

「もしかして…たまたま？」

「うん、タマタマ。」

「この子怖いよ…。」

「あ、そういえばどうする？このままボス部屋に行く？」

「行くしかないでしょ！憧れのラビットシップに会えたんだから！」

「んじゃ、ボス部屋まで…れっつごおおー！」

「ごー!!」

一方、報告しに行ったお姉ちゃんはどうと…。

「はあ…はあ…はあ…はあ…何とか地上にまでは着いたわ…。萃ちゃん、大丈夫かしら…。
いくら大丈夫でも無茶をするから怖いよねえ…。」

「おっと、その女。何してる？」

「あら？待ち伏せされていたの？」

「もう既に追っていたんだよ…あんた一人じゃ、相手できないだろう？」

「へえ…それはどうかしら？」

「ミッドナイト！待たせてすまなかった!!ラビットシップは!？」

「あの子にお願いして脳筋ルートで攻略してもらっているわ！」

「の、脳筋ルート…?？」

「助っ人が一人や二人増えたところで…俺達の力には及ばねエ!!お前ら！殺るぞ!!」

「今ならあの子に私の戦いっぷりを見せていわ…。できればラビットシップを巻き込んでお仕置きとかもしてみたったわねえ…。」

「あんた…ラビットシップをどれだけ虐め倒したいんだ…?」

「泣きじゃくる顔が最高に可愛いから虐めるのよっ♪♪」

「流石ドS…。」

念の為にということで、俺の知らないところで助っ人を呼んでいたとのこと。寧ろ俺は助かります。

だけど、侵略者が足止めしていたせいで、報告しに行くのにかなり時間を消費してしまっただけにより、戦況がかなり変わってしまったのは全員捕縛した後のことだった。

そして、俺視点に戻る。

ガサガサガサガサガサガサガサ!!!

「びぎやああああああああ!!!」

「いやああああああああ!!!何アレええええええええええ!!!」

「強化グンタイアリきちやああああああああああ!!!」

「なんで説明してくれなかったのさああああああああ!!!」

「説明する前にあの子達の邪魔をしちゃったからでしょおおおおおおお!!!」

「それはごめええええええええええ!!!」

グンタイアリ達に追われていました。

強化されているせいで彼らの移動速度がかなり上昇しており、俺達を見失うまで追っかけ回しています。

もちろん俺達もとにかく逃げ回っているのだが、行き止まりが出てきてしまえば一巻の終わりです。はい。

「甘奈さん!!その個性で壁作れない!」

「え?!作れるよ!」

「足止めとして壁を作って欲しいの!!俺があんたをお姫様抱っこして全力疾走するか、その間に壁を作って欲しいんだ!!もちろん二重構造で!!」

「できるか不安だけど…やってみる!!」

「んじや、頼む!!よいしょつと…!!」

「わっ、軽々と持ち上げるね…。」

「ほんじや、準備よろびこ!!脚力現段階最大出力…600%…標的無し…一時的の逃走に集中する。『全力脱兎』!!!」

バヒュッ

「わわわわっ!?こ、これなら作れるかも…!!『ハードホイップ・ウォール』!!!」

ポポポポポポ!!

「次いでに『ソフトホイップ・ウォール』!!」

モプンツ!!

キキキツ…!!

「ぜえ…ぜえ…な、何とかなった…かな…?」

「30cmくらいの壁にしておいた!」

「どのくらい持つ?」

「触ってみる?」

「うん。」

ゴッ

「硬????????
硬いでしょ!」

「硬くするにしても…ホイップクリームの当たり前がないなった…。」

「ふっふーん! 凄いでしょ!」

「凄いや…てか、ホイップクリームで撲殺することもできるのか…。」

「ホイップクリームで撲殺ってパワーワード過ぎない?」

「あ、確かに。」

「あと、一応足を取らせるように追加でソフトホイップで60cmくらい分厚くしてお
くよ!」

「分かった。ん? そういや代償はどうなってるの?」

「私? えっと、個性の代償はね…見たら分かるよ。」

モコモコモコモコ…

「あんためっちゃ萎んでるじゃん?! Σ (⊠ ? ⊠ ;) 補給できるように食料庫探し回
るから行くよ!!」

ドタバタでした。

グンタイアリは沸くわ、幹部が何処からか出没するわ、人質になっていた人は萎むわ
で何だかんだビククリしています。

そして今は敵陣の中にある食料庫へ向かい、見つけたのは良かったものの、扉に鍵がかかっていたのでとりあえず扉を破壊して壁を作ってもらいました。バレるかも知れないが、彼女の体調が良ければ本物そっくりに作れるらしい。後でお願いしておこうと思いました。

4 3 お調子者

ども、俺です。

ドアを破壊した食料庫に籠っています。

壁は人質になっていた浅木 甘奈さんの個性《ホイップクリーム》で元の壁の形と同じくして塞いでくれました。

そして今は補給中のところ。

「もっしゅもっしゅ…。」

「ラビットシップ、聞きたいことがあるんだけど…。」

「ん？」

「何で私を人質だと分かったの？」

「匂いだよ。はむっ。」

「匂い？」

「うん、匂い。」

「どういうこと？」

「ざっくり言うのと、嘘の匂いがなかった。ただそれだけだよ。あー…むっ。」
「個性があるってのは…?」

「それはないよ。全部無個性なの。」

「無個性の人って確か、絶滅危惧種みたいな扱いにされていなかったっけ?そのうちの一人なんですよ?」

「うん、ただ俺は普通の無個性よりも何もできないし、不器用な人間よ。いや、人間よりも下って言えるかな。」

「なんでそんなこと言えるの?」

「そりゃ、俺は出来損ないみたいなものだよ。記憶力は乏しくなりがちで、二つのことを同時にできないし、注意力散漫、すぐに体がガタつく。こんなの普通の人間じゃこうはならない。」

「…:…:そっか。ごめん、変なこと聞いて。」

「気にしなくていいよ。それくらいで傷つくような奴じゃないから。」

「ラビットシップ、お願いがあるの。」

「ん?」

「今更だけど、私をこのまま地上に送らないでこのままサポートさせて!」

「ん…:…:断るわけにもいかないし…:どうすっか…:。」

「憧れのラビットシップに会えたのもそうだけど、一人で戦わせたくない！無個性の子供達や大人達の為にもならないし、私みたいにあんたのファンで憧れを持った人達もいるんだ！だから…！」

「分かった、ただし…。」

「…？」

「ヤバくなったら逃げろ。連絡できるようにしておくから。」

「わ、分かった…！」

「あと、謝罪したいことがある。」

「え？」

「会った時に言ったこと覚えてる？」

「あ、裏切るようなことがどうたらって？」

「うん、俺はそこからずっと匂いで気づいたんだけど、一切裏切りの匂いがなかった。あの時は圧をかけてごめんなさい。」

「えっ?! いいよいいよ! 私も警戒されるようなことしちやっただし…。」

「あと…敬語で喋っていいですか？」

「なんで!?!」

「我慢できなくなっちゃったのです。」

「どゆこと!？」

「俺、タメ口で強がっていたのですが、やっぱり敬語じゃないと落ち着かなくて…。」

「あー…それ、なんとなく分かる。私は別に構わないよ?」

「じゃあ遠慮なく敬語で喋らせてもらいますわね!!」

「なんか急に女の子口調!!」

ドオオン…!!

「あ、そろそろ出なきやまずいかもです。はむっ。」

「いつまで食べてるの…?」

「奴らが困り果てるくらいに食べ尽くしてあげようかなって。」

「あ、それなら私も余分に食べておかなきゃ。鞆ある?」

「もちろんれしゆ。ちっちゃいれすけど、どぞ。」

「ありがとっ。つめつめつと…よし!」

「んじゃ、行きましょか。」

「うん!」

そそくさとする準備をしていた。

ちなみに通路から声が聞こえたので声を殺して過ぎ去るのを待っていたが、少し喧嘩を売るような発言をされていてソワソワしていました。

「なあ、食料庫ってここら辺じゃなかったか？」

「そうだったか？とは言え、いくら日本支部だとしても部屋を作りすぎなんだよな。俺達は蟻かってな。」

「虫の中で最下位レベルに等しいあんな雑魚虫とは一緒にしねーでほしいよな！」

「本当それな!!」

「H A ☆ H A ☆ H A !!!」

ミシミシツ…

「ん？」

バガアアアアツ!!

「どうびらっしやああああああああ!!!」

「ぎゃあああああああ?!?!」

「な、なんだ!?!壁から急に何かが…!!」

「テメエら…蟻さんをバカにしやがったなア!」

「ら、ラビツトシツプ…流石に怒りすぎなんじゃ…。」

「この雑魚共が蟻さんをバカにしたんだ!!絶対に許さん!!」

「あつ…コイツは!!」

「浅木! テメエまた脱走しようとしてやがるな!?!次からは殺せと命じられてつから殺す

わ!!」

「あと…あのチビはなんだ？」

「まあいい、アレと一緒に始末するぞ！」

俺は我慢がでせずに壁を蹴り破り、相手の位置を声だけで当てずっぽうで引き当てて蹴り破るのと同時に顔面も蹴り飛ばした。

生き物をバカにするかのような発言をする人間には容赦しない俺です。はい。

「ラビットシツプ気をつけて！アイツらは厄介な個性を持って…あれ？」

パンパン

「ん？厄介な個性??」

「あー…うん、電気系の個性を使うって言うおうとしたんだけど…終わっちゃった？」

「はい、終わっちゃいました。」

「痺れなかったの？」

「平気、だって俺電気効かないですもの。」

「無個性じゃなかったっけ!？」

「無個性です。」

「どうやったら効かなくなるの!？」

「気合い？」

「気合いつてすげー…。」

「さてと…コイツらに居場所を吐かせてもらおうかな。おい、日本支部のボスは何処にいる？」

「へっ…誰が教えろグギギギ あ、がががつ!!」

「悪いが、俺は優しくしねエぞ。」

「さ、最下層にいる!! だけどそんな簡単には行けねエ!! エレベーターに乗る際に階層ボタンでパスワードを入力しなきゃならねえ!!」

「パスワードは？」

「し、知らねえ! 俺ら下つ端には教えられてねえ!! 一部の幹部しかパスワードは知らねえんだ!!」

「お前…なんでそんなに言うんだ!!? それを言ったら俺達の行く末が決まっちゃうだろ!!」

「ま、負けたからにやそれなりのモノを出さんきゃいかんだろ!」

「うっ…確かにそれは一理あるけれどよ…!」

「まあそれ以上は深く聞かないでおくわ。揉め事は他所でやってくれ。」

瞬殺しちゃいました☆

電気系の個性らしかったけれど、それすら気にせずポカスカして倒しました。もちろん

ん居場所は吐かせたけれど、やっぱり漫画と同じ結果でした。漫画とは少し違うのが、幹部ではなくて一部の幹部ということ。つまりは虱潰ししじみに幹部を壊滅したら吐いてくれるということですね（脳筋）

「ラビットシップ、どうするの?」

「一部の幹部って言うていたので…数匹もしくは最悪一匹が知ってるので荒らし周りながら幹部をフルボッコにするしかないですなあ…。それに、監視カメラに堂々と映ってあげているのにこんなに静かなのもやっぱり妙なのです。」

「確かに、漫画みたいに騒ぎ出すってことがないね。ていうか、匹呼ばわりするんだね…。」

「もしかしたら、ただ地下がバカみたいにクソデカくて存在にすら気づいていないってこともあります。」

「それっていけそう?」

「まー…破壊すりゃなんとかなるっしょ☆（思考放棄）」

「あ、完全に考えるの辞めた感じのやつ。」

「とりま破壊じゃー!!」

ドカーン!!

「ラビットシップがあんなに楽しそうに破壊行動を…ちよつと引くかm「ふにや!!ズ

「テッ」なんか急にめっちゃ可愛いんだけど。」

「ねーねー！これ何ー？」

ゴウンゴウン…

「何…これ…？デカいつていうか、クソデカくない…？」

でっかい装置とよく分からん生き物が入っている装置があった。

なんか見た感じはゲームで言うと、ボス戦が終わった後に二週目で知らないポイントで特殊イベントが起こって裏ボスルートに行くような感じでした。もちろん破壊しようと思っっています。

「よっしや破壊じゃー！！」

「ラビットシップ!？」

ゴツ!!

「……………」クルッ

「だ、大丈夫…?？」

「痛い…。」グスン

「可愛いなオイ。」

ギロツ

「ラビットシップ…。」

「ん？」

「なんか…こつち見てない？」

「マジですか??」

「うん、マジ。」

「あ、本当だ。こつち見てる！」

「動きそうじゃない？」

「あ、もう動いてるー！やつほー！見えてるー?!」

「無邪気で可愛いけれど…流石に怖いことしてない!？」

「そーですかね？ピシッ　ぴし??」

バキバキバキッ…!!

「ね、ねえ…これ…。」

「やつべ、挑発しすぎちった☆」

「挑発行為にも程があるんじゃないかなー!？」

ガシヤアアアン!!!

ザパアアア…!!

「逃っげろー!」

ヒヨイッ

「ひやつ!? ちょっとラビットシップ大丈夫なの!？」

「俺がアレ如きに捕まるもんですか! アレは多分出しちやいけないヤバいやつでしたわ☆」

「なーんかふざけてないかなこの子!？」

「てへっ☆」

「ねー本当にどうするの!?! 多分ボス戦よりもっとヤバいの出てきちやっただけだ!?!」

「ノリで裏ボス出しちやっただからそのまま放置しちやいます☆」

「この子無邪気すぎて本当に怖いんだけどー!!」

ザザッ…

『もしもし萃ちゃん聞こえる!?!』

「あ、お姉ちゃんどしたの? てか、ここ繋がるんだね。」

『まずいことになったわ! 捕まえた奴から情報を吐き出してもらったんだけど、とんでもない生物を造っていたんだって!!』

「とんでもない生物? なー…なんか人型のクソデカイ体の形をしたやつ? 裏ボスみたい

な感じ?」

『そうー…つてもしかしてそこにいるの!?!』

「うん、ノリで挑発したら怒って出てきちゃった☆」

『…は??』

「やっちゃった☆」

『このおバカあああああああ!!!』

「キーン!! んにやああああ!!耳があああああ!!」

『なんてことしてくれちゃってるのよ!!あなた本当にバカなの!?大バカ者なの!?お仕置きだ!!ころじゃ済まないわよ!!』

「だ、だつてえ…如何にも起こしてくださいと言わんばかりな状態だったから…。」

『はあ…これが終わったら覚悟してなさいよ?しっかりお仕置きあげるんだから!』

「はあ…。」

『返事は延ばさないの!』

「はい…。」

『それじゃあ、後でね?』

ブッ

「誰からだつたの?」

「お姉ちゃんに怒られちゃった。」シユン

(可愛い…もうそれしか言えない…。)

あまりにもふざけすぎたことでお姉ちゃんに怒られました。

甘奈さんをお姫様抱っこしたままてってこ走り回った後、エレベーターをたまたま見かけました。

とは言え、ボス戦の前に裏ボスみたいな奴の対策もあつたりと色々起きております。はい。

ちなみに平気そうに見えますが、余裕で疲れています。

#44 情緒不安定

エレベーター見つけました。

特に何の変哲もないただのエレベーター。

だからといって秘密がないということはありません。
なので破壊します。

「エレベーターはっけーん！」

「だけど、どうするの?! パスワードが分からないよ?!」

「んなもん知らねエ!! 大体ぶっ壊しや何とかなる!!」

「ダメだこの子考えるのやめて脳筋になってる!!」

「目エ閉じていてくださいにや!!」

「えっ? 何で!?!」

「壊すからです!!」

「本気で言ってるの!?!」

「脚力現在出力100%から現段階最大出力600%に変更…体内電力を全て脚部に、

標的……ただのエレベーター!!行くぜおらああああああ!!」バチバチッ

「いやああああああああ!!!」

「九七式艦載爆撃!!」

ドカアアアン!!!

パラパラ…

「ら、ラビットシップ…私のこと大事にしてくれない…!?」

「ご、ごめんしやい…。」

「あ…だけど予想通りだ!ラビットシップ、もしかして野生の勘が働いてる?」

「ん…どうでしょうかね。」

「どうする?一旦整える?」

「先ずはそうですね。態勢を整えてから行きますか。次いでにデカブツもあまり動けないだろうし、アレも潰しておきましょうか。」

「もしかして考えるのやめたの!?!脳筋なの!?!戦闘狂なの!?!ねえ、バーサーカー狂戦士なの!?!」

「くききっ♪楽しくなりそうだぜ♪」

ゾワッ

「えっ…?!ラビットシップ…?」

「んあい?!」

「なんか一瞬……いや、何でもない……。」

ボス戦前に裏ボスみたいなのがデカブツの始末をします。

まずは考えるのをやめてフルボッコにすりや倒れるだろうと考えています。もちろん拳で。

ドズン……

「……………」

「で、でかあ……。」

「出られないのでしょうかね？意外と大人しい……？」

「……………!!」

「あ、見つかっちゃった。」

「うわわわっ!!逃げなきや!!ラビットシップ!何してんの!?!」

「んー……もしかして、あのおっきいの……中身子供？」

「え??？」

「おねーちゃんだれー？」

「……?俺？」

「うん。」

「俺はラビットシップって名前だよ。君の名前は？」

「ぼくの…なまえ…?あれ…?おもいだせない…。」

「ラビットシップ、これ畏じやないの!？」

「いいえ、畏じやありませんね。こんな純粋な匂いは初めてです。」

「ラビットシップが言うからには信じるけれど…。あのデカイの子供なの…!？」

俺は正直驚いた。

巨人並のデカイ体のハズなのに、中身は子供というとんでもない事態が発生しました。はっ倒すつもりだったが、子供じゃあどうしようもできないので、お話をしてみることに。

「思い出せないって……………ん?」

ピラッ

「ラビットシップ、何それ?」

「何かの資料みたいでs……………」

「ラビットシップ?？」

「捕らえるだけじゃ物足りねエな。奴らを滅殺する。」

「ら、ラビットシップ…?どうしたの…?」

「甘奈さんはここであの子供と待機でお願ひします。ここからは俺がすぐにボスを引き摺り出して細切れにしてやるので。理由はしつかりこの資料このゴミに書かれている通りなの

で。じゃ、待機お願いします。」

「ちよ、ちよつと待つたダギユンツ!! ひやうつ!?!もう…思っていたより乱暴な子なのね。えつと…これに書かれているのは…は???これはラビットシップもブチ切れ案件よね。」

俺は知りたくなかった。

いや、知つちやいけないものを知ってしまった。

奴らの資料にはこう書かれていたのだ。

【^{テイターン}巨兵製造計画】

【実験素材 子供（日本国籍の者に限る）、ゴリラの腕の筋肉、カマドウマの脚の筋肉、ラーテルの背中、アルマジロの背の皮、デイノポネラの顎の筋肉 e t c …】

他にも生物の一部の筋肉が書かれていたのだが、それに気づいてしまったのだ。生き物一体の部位の筋肉の一部さえ入手してしまえば、奴らの特別な実験をすることによって筋肉の成長や繊維の増殖をすることが可能なのだ。麻酔で眠らせた子供に生き物の各部位の一部と特殊な細胞を埋め込み、本体ごと巨大化させると同時に埋め込まれた筋肉が特殊な細胞によって人の筋肉と結合してその部位を侵食。

まとめて言うると合成です。

タタタタタ

「一応お姉ちゃんにも連絡しておくか。」

ザザツ…

『萃ちゃん今何処!?』

「ボス部屋に向かつてる。お姉ちゃんは?」

『私は萃ちゃんのところに行くところなんだけれど!!』

「お姉ちゃん、急遽予定が変わった。」

『何?』

「さつき俺が言つてた巨大な人型生物なんだが…あれの報告を追記で頼みたい。」

『はあ!?何言つてんの!?』

「見せかけだった。中身が子供だったんだよ。」

『どういうこと!?結論はなんなの!?』

「侵略者の連中が子供を含めたその他の生き物を合成して別の生き物にしゃがったんだ
インヴェーダー

よ!!!奴らは人間としてやっちゃいけないーことを平然としていやがんだ!!!さつき俺達が

見ていた ドッベルゲンガー 影 もその類なんだよ!!」

『何ですって!!?』

「お姉ちゃんは先に本部へこのことを連絡!その後俺が位置情報を書いた場所に向かつて欲しい!!人質にされていた人もいるが、その人に巨人並の子供を見てもらつてい

るから!!」

『次から次へととんでもないものが来るわねえ…!!後で私に何か奢りなさいね!!?』

「ああもちろんだ!!」

『萃ちゃんのところにはヒーロー達を数名向かわせているから、合流したらお願い!!』

「了解した!あとは頼んだ!お姉ちゃん!!」

『しつかり任されたわ!』

ブツッ

「ボスを見つけたら絶対に殺す。」

「艶星!」

「障子君…?!」

「ここに親玉がいるのか…?」

「ああ…そうだ。」

「艶星…その反応…。」

「ごめん、俺…今回は本気でヤバくなる。」
マシのマシ

「…今増援が来る。一度頭を冷やせ。」

「……………分かった。ありがとう。」

「気にするな、友達だろ。」

「……………ッ。」

増援は障子君、尾白君、峰田君、耳郎さん、青山君、Mt.レディさん、ジーニストさんの七名だ。

俺が勢いで破壊したエレベーターから降りたが、結構深かった。

Mt.レディさんがMAXで巨大化しても余裕で収まるくらいの高さだった。エレベーターそのものをぶつ壊しちゃったので、増援組をジーニストさんをお願いお願いして、真っ先に降りて行っただ。

プロヒーローに止められたけれど止められませんでしたってやつです。

ゴオオオオオ…

「デカいな…なんなんだここ…。」

「よくお出ましになられましたねエ。」

「…テメエが親玉か。」

「そうですね。私が侵略者^{インヴェーター}日本支部 所長の呂 創破です。」

「わざわざ親玉がお出迎えになるたあい度胸してんなあこのドクスがよオ…!!」

「ふっふっふ…あなたのような子供には私は倒せませんよ。なんとって…あなた方はここで死ぬのですから!!」

「おうおう自信たっぷりじゃねえか。お手並み拝見とするか!!」

「ふんっ!!!」

バキバキツ

「へえ……そういうものか。」

ボガアツ!!!

出待ちされてました。

ボスとは名乗っているけれど、流石にボスとは思えない。

「どうです！私の個性は!!素晴らしいでしょう!?!これはあらゆる実験を積み重ねて三つの個性を手に入れたのですからねえ!!」

「あつそ。(三つの個性を手に入れたってことは、計四つの個性を持っているのか。代償が気になるなこれは。)」

スルスル……

「出待ちされていたか……」

「オイオイ！艶星もう始めてんじゃねーか!!」

「萃ちゃん……何してんの？」

「何か動き回っているようには見えるよ！」

「今度艶星から教えてもらわねーとな。」

「あの子ちよつと苦戦してない?!」

「Mt・レディ、待ってくれ。彼は何か様子を見ている。まだ私達が出る番ではないよ。うだ。」

ボコツ

「あはっ☆」

「ちよこまかと…やかましいですねえ!!そろそろ消えてもらいますよっ!!」

ヒュウウ…

「ふうん…次は風か。艦艇にとつちや難敵だな。」

「はああっ!!!」

ボンツ!!

ドツ!!!

「萃ちゃん!!!」

「「艶星い!!!」」

「艶星君!!」

「呼んだ?」

「わあああ!!!」

「なんで!?!さつき…!」

「いやー、アレ喰らうと流石の俺も耐えられなかつたわ。」

「ラビットシツプ、あの出待ちの奴は何？」

「普通に親玉でした。」

「何…?! だからあれだけの余裕を持っていたのか…!」

「ちなみにあの野郎は三つの個性を手に入れて現在四つ持ちの厄介な奴になっております故。」

「ど、どういうこと…?」

「結論を言ったらAFOの雑魚版ってところ。」

「あ、分かりやすい。」

「つ、艶星…。」

「どしたの?」

「う…うう後ろ…!!」

「ん? あ。」

「雑魚とは何ですかねえ? 聞き捨てなりませんよお?」

「え、お前雑魚じゃん☆」

ブチッ

「ぶっ殺す!!!」

怒らせちゃいました☆

#45 表のボス、真のボス

「クソガキがあああああ!!」

キュルキュルキュルキュル…!!

「あ、やべ。全員直ぐに降りろ!!!」

「今更遅い!!!」

「んにやろ…!!!もう一人の自分!!!」

『おうよ!!!』

ドツ!!!

「吹き飛ばせ!!!」

『カウンター・ラビッツ
「兎の反撃」!!!』

『コンプレクス
「圧縮!!!」』

メキメキ…ポキツバキバキツ…!!

「ぐっ…!!腕砲台をやりやがったな…!!!月輪蹴菟!!!」

ゴツ…!!

「はあ…はあ…クソガキの分際で…！吸い取れ!!」

ピシユッ

「ふん…!!そんなの視えてンだよ!!」

「やべえ…艷星のやつ、空中戦してるぞ!!オイラ達はどうしたらいいんだ!」

「落ち着け、艷星には策がある。俺と尾白に合図が送られるから、それに応じてくれ。」

「あとは彼の体力次第…つてところかな。」

「僕も役に立てたらいいけれど…:上手くいくかな?」

「萃ちゃんならきつと上手くいくよ。いや、絶対に。」

「だが、今はラビットシップは不利な状況に至っている。合図が来るまでは持たない…

!」

「ていうか、そろそろ私達も萃ちゃんをヒーロー名で呼ばない!」

「あつ…:そういうえばそうじゃん!!Σ」

「釣られて名前で呼んでいたね☆」

「それにしても…:ラビットシップって本当に無個性なのか疑問に思っちゃうね…。飛行系の個性以外で空中戦なんて普通はできないはずなのに。」

「私もすっかり確認していたのだが、やはりどこの診察を受けても無個性判定だった。」

「何かがあるのかもね…。」

俺と親玉を名乗る奴はボカスカ闘り合いながら着地し、降りたメンバーに合図を送った。援護を頼みました。

親玉らしき者の呂 創破という奴の個性は研究を重ねた計四つの個性を持っているが、本体個性は遠隔ドレイン系の個性。

他の三つは飛行、風、地面や壁を利用する個性でした。

ババツ

ラビット・ラビット
「菟の集い!!!」

「テンタコル、準備はいいか?」

「ああ!いつでもだ!!」

タツ

「いつけええええええ!!!」

バシユンツ!!

「オクト…!!」 ギギギギ…

ラビット
「菟月…!!」 ギュルルル…!!

「ぬうん!!!」

ボゴゴゴツ!!

リングフオー
「スペインション／輪 墮」

ベガガガガガッ
!!!!

「くっ……!」

「ちっ……!!」

スタタッ

「テンタコル、ナイスタイミングだ。」

「お前のタイミングにテイルマンと上手く合わせたからな。」

「だが……コイツ思っていたよりめんどくさい奴だ……。グレープジュースの力がかなり重要だ。」

「サポート系の個性にはなるが、かなり強力な個性だからな。ラビットシップは一旦休め。」

「いや、まだだ。それに試したいことがある。イヤホンIIジャックはいる?」

「いるよ。どうしたの?」

「俺のめちやくちやになつた腕に刺してもらえるかな?」

「うっそでしよ……?まさかだけど正気なの!」

「うん、お願い。」

「どうなつても知らないからね!」

ズブシッ

ヴヴヴ：

「何をしているのかねえ!!私はまだピンピンですよお!」

「テンタコル、グレープジュース、テイルマン、Twinkleすまない!!20秒だけ時間を稼いでくれ!プロヒーローもお願います!!奴の個性は本体が遠隔のドレイン系、追加個性は地面や壁を利用した個性、飛行系、風系の個性です!ドレインには気をつけてください!!」

「任された!!」

「任されたよラビットシツプ☆」

「艶星にお願いされたからにはオイラも負けてられねー!!」

「いっちょやるか!!」

「イヤホンIIジャック、この大破した腕腕台に10秒程強力な振動を出してほしい。」

「わ、分かった。脚にも与えておく?」

「あ、それ言おうとしていたから助かる。あとは君にしかできないことを頼みたい。」

「なに...?」

「この床を壊せたら壊してほしいんだ。」

「...どういうこと?」

「奴の追加個性の一つを使用不可にさせる。硬い床や地面限定の個性なんだ。さつきよ

りも火力が衰え始めてきているからそこを狙う。」

「合図はどうするの?」

「もちろん菟ラビット・ラビットの集いで送る。」

「分かった:それよりも腕は?」

「あー:腕腕は使えねーな。中で本体俺が言ってた。火力が一気に下がったからな。」

「振動を与えたのは何か効果があるの?」

「そりゃな。振動を利用して筋肉で粉々になった骨を集めつつ、形を治していたんだ。」

「いやもう個性そのものじゃん!」

「なにをお喋りしてるのかねガキ二匹いいいい!!」

ボゴゴゴツ!!

「しまった!!」

「ん?ふんっ!!!」

ズドオオツ!!

「:は?」

俺、再起。

☒ 香ちゃんにお願いをして、一時的にだが腕を治した。

見せかけなので腕そのものは使えない為、この場面はもう一人エツィルキラーの自分に任せた。

もちろん殆どが脚技なので腕は使いません。はい。
とは言え、やはり強敵に変わりはしない。

障子君、青山君、尾白君、峰田君、ジーニストさんはかなり苦戦していて、特に本体
個性のドレイン系にかなり手を狂わせているようだ。

もちろん俺も狂っております故。

「さあ、今度こそ貴様をぶっ飛ばすぜ!!行くぞゴラああああ!!」

「数が多ければいいと思つてはおるまいなあああ!!」

「算段はついてらア!!菟天脚^{ラビットリング}!!」

ベゴツ!!

「あがごツ…!?(こ、コイツ…この近い距離を一瞬で脚を使って顎を狙ったと…!?)」

「どうした雑魚。その程度か?数が多ければ…なんだつて?」

「くっ…クソガキがああ!!」

「テイルマン!!」

「でりやああああ!!」

バゴオオツ!!

ぶべべっ!!」

「よしっ!!」

「テイルマンまだ侮るな！来るぞ！」

「ガキ共が私を倒せると思うなあああああ!!!」

ビュオツ!!!

「くっ…!!風圧に負ける!!」

「うわっ!?!ラビットシップ…どのタイミングで…!?!」

ヒュルル…

「このタイミングで来たか…。グレープジュース！行けるか!?!」バチバチツ

「オイラはいつでもバッチリだぞ！」

「一発勝負だ！風を潰しに行くぞ！」

「お、おう!!」

(ラビットシップ…もしかして先の先を先読みしていたの?!)

バヒュツ

「ラビットシヨツト…!!」

「ぬおおお?!?!速い!!!ぐぬぬぬうう…!!」

「そのまま塵と化すがいい!!」

「ぐ、グレープパレットおおお!!!」

ビタアツ!!!

「ど、どうだ…?」

「上手くいったようだな…! ナイスだ…グレープジュース…ガクツ あふつ。」

「ラビツトシツプ!？」

「やっべ…脚が動かん。」

「ガキ共がああああああ!!!」 ドンッ!!

「菟ラビツト・ラビツトの集い!!!」

「任せておいてラビツトシツプ!!ズブシツ 『ハートビート・サラウンド』!!!!」

メキメキ…ボガアツ!!!!

「んううううう!!!」

「んなつ…!?!あんの小娘ええええええ!!!」

「解ほつれあり!!」

ビシイッ!!

「ぬあっ!？」

「テンタコル、今だ!!」

「はい!!お前…少しだけ大人しくしている!!!」

ボガンッ!!

「ぶべがっ!!く…そ……があ……!!!」

ガクッ

「か、確保じゃああああああ!!!」

喜ぶ暇すらなく忙しいです。

親玉はテンタコルの重い一撃で気絶。

俺達は気絶している親玉を一瞬で拘束して地上に戻ろうとそそくさと撤退しようとしていたその時…まさかの隠し扉が開きました。

何処から出てきたのかって? 知らね。

プシユウウ…

「おいおい勘弁してくれよ…冗談だろ?」

「か、隠し扉…?」

ズキッ

「うぐううっ?!?!にやにこれっ…!!頭が…痛い…!!」

「ラビットシツプ大丈夫か!?!」

「ごめんグレイプジュース…。野生の勘が言ってる…今よりもかなりヤベーわ。T w i n k l e と M t . レディさんはいるか?」

「呼んだかい?」

「タメ口だなんて何時から偉くなったの?」

「ごめんにやしい。」

「それで…どうしたらいいかな？」

「俺はとんでもねえミスをした…！脱出する際の手段として二人を保っていたんだが…変更だ。最終手段だが…ベストジーニストさん、Mt.レディさん厳戒態勢に入ってください!!グレープジュース、Twinkle、イヤホンIIジャックはいつでも反撃できるように!!テンタコル、テイルマンは近接態勢入ってくれ!!俺は頭痛すつけどあと83秒したら復帰ができる!!」

カツン…カツン…

「おやおや、日本支部副長を倒すとは…中々の手練だね？」

「…テメエが真の親玉か？」

「そうとも…よく倒せましたね。褒めて讃えようじゃあないか。それに…自ら帰って来てくれて助かるよ。個体No.000。」

「褒められても喜びたかねえ気持ちだ。つーか、何だよその厨二病じみた言い草はよww いい歳こいて厨二発動すんなやww」

「ん？君のことだが？個体No.000。」

「……………は?????」

4 6 完全個体と真ボス

「No. 000? 何だそれ? ラビットシップ、知ってるのか?」

「いや知らねえ。クズ組織のことだ。過去をごちゃ混ぜにするに決まってるア。」

「ふむ、あの方の言う通り…やはりあの兵器に回収されたからか…。まあ所詮敗戦国だから誘拐し放題だったから別にどうってことでもないか…。素材を誘拐すれば完成体が出るはずだからな。」

「よし、アレ殺すわ。グレイプジュース、それ一つくれ。」

「お、おい…流石にそんなことはできねえよ!! 抑えろラビットシップ!!」

「アレを始末しなきゃ俺達の住む日本が壊れちゃうんだ!! 怒り狂った獣ビーストと本体俺が出て来る前に早く!!」

「ぐっ…そ、それでもオイラはできねえ…!! 頼られるのは嬉しいけどよ…オイラはヒーローを目指すんだ!! 殺しをする為に使うなんてことはしたくねえんだ!! 分かってくれよラビットシップ!!」

「…すまねえ。目的を見失うところだった。だが…俺はアイツを殺すつもりでいる。他

人の個性に任せっきりにしようしねエ。。俺の全力の本気をあのゴミクス野郎にぶつけてやらあ…!!意識そのものをぶつ殺す!!!」

「ラビットシップ!そんな野蛮なことはすr「大丈夫です。ベストジーニストさん。」どういふことだ?!」

「今のラビットシップは怒りに満ち溢れているものの、意識をしつかり保っています。言葉は野蛮で少々荒いですが、生け捕りにすることは間違ひありません。」

「へえ…成長してるじゃんあの子…。念の為、暴走したら荒っぽくなっちゃうけれど、驚掴みにしても大丈夫かな?」

「どうしようもない時は…お願いします。」

「イヤホンⅡジャック、君はどう思うかな?」

「どうって…何が?」

「ラビットシップは今、かなり危険な状態だと思うよ。抑え切れなくて過去最悪の暴走を引き起こしかねないと僕は予想してしまっているんだ…。」

「その時は…あの子を壊してでも暴走を止める。その後はしつかりお仕置きもしてあげなきゃ。」

「ふふつ、イヤホンⅡジャックらしい答え方だね☆」

真ボスが現れて、俺のことを謎に個体No. 呼びしていたり、誘拐を繰り返していた

りしていたらしい。

そして俺はその誘拐された人の一人らしい。

その記憶はとつくに星の彼方へと消えていますかね。

「実験体が私に勝てるでもお思いで？」

「雑魚如きがよくデカイ口で言えるもんだなア!!」バチバチツ

「…ふむ、流石個体No. 000だ。とても美しい。」

「ゾワツ 気持ち悪。」

「私のことを雑魚呼ばわりしているが…本当に勝てると思うかな？」バシヤツ

「液体になった!? ラビットシツプ気をつける!」

「液体系の個性…いや、違エな…これは…ツ!!!」

バシユツ!!

「ほほう…どう見えていたのかは分かりませんが…よく分かりましたね？」

「はあ…お前、本当に雑魚いな。」ヴヴヴヴ

「…!？」

「テメエの個性は水銀。そして液体窒素だな？ 分かりやすく助かるわ。」

「そ、それがどうしたのかな？ それ以外にもあるとは分からないだろう？」

「あ？ まだあんだろ。爆発系一つ、ドレイン系が二つ、刃物系が四つ、毒系が三つ、地形

変化型が二つだろ?」

「…何故それが一瞬で分かった…?」

「さあね。つーか、テメエの場合代償がエグすぎて使いにくい上、相性そのものが最悪だから使つていねエんだろ? 刃物系を使つていりやあ地形変化はできねエし、ドレイン系も使えねえ。毒系を使おうともドレインは併用不可…その他諸々つてところだな。」

「参りましたねえ…ここまで見破られるとは…。」

「とりあえずテメエはここで殺す。日本ウチらの未来を奪つてんだからなア!!!」

「ふっ…それなら私を倒してみなさい!!!」

「んなこと言わなくたってなア!!!」

ドプツ

「やはりな…!!」

「このまま取り込んでさしあげよう!!!」

ズズ…

「…ばーかwww」

ヴウヴウ…

「?!」

「俺を個体番号呼びしたこと…後悔してねエよな?」

「実験体の分際で…!!」

「音震サウンド・クエイク不通。」

「ペアアン!!」

「ベチャツ」

イヤホン||ジャックがいなかったらこの技は思いつかなかった。実質個性のようなものだが、無個性でここまでやれるとは思ひもしなかった。というか、弾けさせるくらい**の強さにまで発展したことに驚いていました。**

「まだ終わってねエよなあ?！」

「ねえT w i n k l e。」

「なんだい?イヤホン||ジャック。」

「あの子、敵側のセリフを言ってるけれどツツコまない方がいいかな?」

「うん…ツツコミはちよつとマズイかもね…ははっ…。」

ズルツ

「ん?なんだ?」

「グレイプジュース逃げろ!!」

「もう遅い!!」

「何が遅いんだって?」

「ツ!？」

「悪いが、俺だとしても本体俺じゃねエからなア!!」

「ん? あれ!?! オイラさつきまであそこにいたよな!?! ラビットシップ、どうやったんだ!?!」
「秘密じゃ☆」

「ちつ…最早アレは個体番号ではない…! 我々が求めていた完成個体…! 日本を乗っ取るのにふさわしい出来だったのに…!! おのれヒーロー…ここで死んでもらうしかあるまい!! 貴様もだ!! 完成個体!!」

「あ、やっべ…怒らせちった☆」

「このまま戦うか?」

「撤収しよつか☆」

「い、いいのか…?」

「なあに勝ったかのようなことを言っているのかねえ!! このまま逃がすとも思っているのかねえ!!」

ガッ!!!

「うおっ!?!」

「ラビットシップ!!」

「俺に構うな!! 先に行け!!」

「あんたを残して行けるわけないでしょ!!？」

「全く…！オラア!!」ブオン

パシッ

「お、おい…何だコレは!!」

「俺が隅々まで探しに探し回った結果だ!!急展開だが、俺は強制的に戦わされるイベントになっちまったからお前らに任せる!!頼らねーと親にシバかれるからな!!」

「何をごちゃごちゃと…!!完成個体…そっち側の味方になったのなら、貴様を殺さねばならん!!」

「ラビットシップ!!」

「くっそしつけーなアおい!!お前ら任せた!!」

「おいおい嘘だろ!?!お前にこれ以上負担かけさせたくねーのに!!」

「大丈夫、いつものことだ!!しれつと帰って来てやつからよ!!」

「…皆、行こう。」

「何故その判断なんだ!?!」

「僕は彼を見て分かったんだ!僕達はもう任されたんだよ!あの相手は彼にしかできない…それに、今渡されたこの情報は僕達が奪われないうように全力で脱出しなきゃまたやり直しになるんだ!」

「……。」

「Twinkleの言う通りだ。全員、先に脱出の準備を。」

「……分かりました。」

真のラスボス戦に突入してセリフまみれになっていたけれど、結局俺は一人になってしまったが、一番重要なのはテナタコル達だ。

ほんの一部にしか過ぎないが、唯一の組織の情報が入っているカメラを渡したのだ。

ガシャアアン!!

「おっほおお!! → →」

(コイツ…楽しんでるだど…!? 今まで苦労して積み上げた個体をこのままヒーロー側に渡すワケにもいくまい…!! このフロアの最奥まで連れて行ってでも私の手にしなければ…!!)

パシッ

「この俺を最奥まで持つて行って脱出させない形でいたんだろ?」

「…!?」

「悪いが、家族が迎えを待つてんだ。テメエだけ一人でいやがれ!!」

バチッ!!

「くっ…!? 完全個体だからと言って…私に勝てると思うまいな!!」

「勝てるンじゃなくてよオ…勝つンだよ。貴様如きがこの俺を殺せると思つてンじゃねエぞゴラああああ!!!」

『鉄碎参刃裂』!!!」

「本体能！スイツチ!!」

『つしやああああああ!!きちやああああああああ!!長門型式番艦 陸奥 4 1 c m 三連装砲じゃああああああ!!!』

ガキイイインツ!!

「ぬおっ!?」

ガン!!!

「ぐっ…!!!」

バキイイイン!!!!

「この私の技が押された…だと…!?」

「ふうん…お前の技…大したことねえな。まだ本気出してねーんだけどなあ…。そろそろテメエも本気出しやがれ。こんなモンじゃ、俺を殺すことも捕らえることもできねエぞ。」

「ふっ…ふっ…ふっ…。」

「?」

「ふはははは!!!その挑発如きで私が乗るとでも思っていたか?!」
「雑魚。」

「ピツキーン!! ぶつ殺す!!!」

「あ、キレた。本当短気が多いなあ。」

『『脚斬』!!!』

「なるほど…こんな一発如き、力技でどうにでもならああああ!!!」

ビュオツ

「14cm単装砲!」

バキイン!!

「やると思っていたが…この連撃は通用しないぞ!完全個体!!『脚斬・連』!!」

「既に先読み済みだバーカ。標的確認…砲台固定、腕力量限界突破1001%…!!以

下割愛!!!すううう…。」

「遊びはここまでだ!!貴様を捕らえなければ…日本を奪えないのだからなあ!!『毒斬』!!!」

「超弩級戦艦 大和型壱番艦 大和、46cm三連装砲…ッ!」

4 7 正体

「参ったな…。」

「どうしたのジーニスト。」

「あの子に任せつきりにしてしまつてよろしいものかと思つてな…。」

「プロヒーローとしてはマズイよね…。」

「…ダメだ。私、やつぱり戻る!」

「何言つてんだイヤホン!! ジャック!?!」

「ラビットシップが心配なのは確かだけれど、ここから出る時になればあの子は確定でボロボロになる! もし遅れたとしたら…私達はとんでもない失態をする!」

「…もしかして艶星、責任を負わせるつもりだったのか!?!」

「いや、あの子はアホの子だからそこまで想定してないよ。」

「サラツとひでーこと言つてねーか!?!」

私達は今地上へ向かっているところ。

テイルマン、ジーニストさんは前衛に、私とグレープジュースは後衛。Mt.レディ

さんとテンタコルは中衛にという形になった。

本当はM・t・レディさんの個性を使ってショートカットできると思っていたけれど、ラビットシップは思っていたより深いから下手にやらない方がいいと言っていた。

ラビットシップがいたところでさえMAXサイズになっても頭が着くか着かないくらいだったから確かに納得。

「まあ…ラビットシップがそこまで考えているとは思わないだろうな。俺達を優先に脱出させたい気持ちでいっぱいだったんだろう。」

「皆、お喋りはそこまでみたいだね。何か近づいて来てる。」

コツ…コツ…

「…ん？あれは…？」

「お待たせしちやったわね！ラビットシップちゃんは何処にいるの？」

「ミッドナイト先生!？」

「さつきまで地上にいるって情報だったが…。」

「ふふっ♪やっぱり心配になって来ちゃった♪」

「あいつにとつちやミッドナイト先生が来てくれるのはかなりでけーことだな！な、テンタコル!!」

「…お前は誰だ？」

「…ん？」

「は？」

「え?？」

「お前は誰だと言っている！ミッドナイト先生はラビットシップの呼び名をヒーロー名で呼ばない!!お前は誰なんだ！何故騙すことをしているんだ!!」

「うつわあ…もうバレちゃったか…。まあ確かにアイツの本名分らないし、それしか教えてもらってないからなあ…。」シユルル…

「…それが、お前の正体なのか…?」

「うん、僕は個体N o . 0 0 1 ドッベルゲンガ 影。君達ヒーローを殺せと命じられたんだ。」

「ラビットシップの情報通りだな…。どのような攻撃をするかは分からないが、コイツには注意しておいた方がいいと言っていた。とは言え…。」

ドロツ…

「お前、半個体…なのか？」

「アイツとは違って失敗作に近いものだからね。本当はアイツを殺せば僕を完成体に近づけることができたみたいだけど。パパに君達を殺してからにしなきゃいけないっちゃったから代わりに行くってくれって頼まれちゃって…。ていうか、お兄ちゃんをアイツ呼ばわりしたくないから普通に喋ってもいいかな？正直殺る気なんてそもそもない

し、逆にあんのクソ親父野郎を殺したいくらいだよ。」

「なんか口調変わった!!しかもすつこい友好的じゃねーか!？」

「いや、まだ警戒しろ。何をしてくるか分からない。」

地上へ向かっている途中、ミッドナイト先生に会ったと思つたらテンタコルが違和感に気づき、問いただした。

確かにミッドナイト先生は萃ちゃんのことをラビットシップと言つたことがなかった。しっかりと萃ちゃんとはか呼んでいない。

ぼつたり会つた正体不明の生物は実験体にされていた子だった。

ドツベルゲンガ「影、お前に聞きたいことがある。」

「なんだい?」

「ラビットシップとは一体どういう関係なんだ?」

「僕は彼の複製体。彼の遺伝子をそのまま移行させて造られた個体だ。最初は彼そのものだった。だけど個性を取り入れられた時には体が崩壊してこんな姿になつた…笑えるでしょ?彼の遺伝子は外部から受け付けない特別且つ特殊な体質だったんだよ。」

「…ラビットシップは純血の無個性ということだったの?」

「まあそういうことだね。だけど彼は君達よりも実年齢はかなり上だ。」

「君、それはどうということだ…?私達よりも彼の方が上…?!あの見た目でそんなことは

……」

「まあ非現実的だよな。だけど彼はかなり昔の人間だよ。彼の記憶そのものが僕にも移されているから。」

「なんなんだよお……！なんか急に話がぶつ飛んでんじゃねーか！結論から言え!!」

「彼は第一次世界大戦に存在していた人間だよ。パパがそう言ってた。」

「意味が分からねえ……!!」

「意味分らないんだけど!?!ラビットシップはこの時代に生まれた存在じゃなかったの?!」

「もしかして……コールド・スリープか……?」

「!?!」

「うん、彼のことを興味本位で探っていたらこんなのが出てきたから見てみなよ。」

ピラッ

彼が出してきたのは二枚の紙。

警戒しながら受け取ったけれども、彼には敵意がなかった。

その前に殺意すらもなかった。

私には分からない行動だったけれど、気がつけば助けを求めているような目をしていました。そんな感じに見えた。

「そんなに警戒して受け取らなくても…。」

「まだ敵同士で何されるかはまだ分からないからな…。」

「これは…。」

「萃ちゃん…?」

「紛れもなく彼だよ。正直、僕は可哀想だと思ったよ。まだこんなに小さかったのに実験体にされるなんて。」

「ん? 待てよ? それじゃあ今の親は…。」

「…そういうこと。本当の親はとつくの昔にいない。」

「……。」

「ねえ、確かドッベルゲンガー影 って言ってたっけ?」

「なんだい?」

「あんたはどっち側?」

「僕? 僕は…正直、ラビットシッブお兄ちゃん側…かな?」

「それなら、助けてほしい。」

「イヤホン_{II}ジャック、急に何を言うんだよ!」

「やっぱりあの子は一人にしておけない。私達を傷付けさせない為にやってくれているけれど…全部一人で抱え込んでいるの。テナタコルも分かるでしょ?」

「…ああ。アイツは強いが、抱え込みすぎて爆発することがあるからな…。」

「それじゃ、ラビットシップのところへ向かおうじゃないか☆僕だって全く活躍していないからね！」

「私も全ツ然活躍してない！大事な役割って言われていたけれど、中々出してくれなかったんだもん!!」

「ラビットシップには悪いが、こればかりは従えないな！俺はアイツのところへ戻る！」
 「お、オイラも戻るぞ！あんな良い奴がいなくなつてたまるかってんだ!!」

まあ戻ることもなつたね。

萃ちゃんはいつも無茶をするから余計に心配になつちやつたし、崩壊するとなつた際は誰が助けるんだって思ったしね。

そして、私達側と分かつた人？ドツベルゲンガみたいな生物、影。分かりやすく言うとなつた萃ちゃん

のクローンで実験体にされていた子。仲間になつてくれた。

そろそろ萃ちゃんの視点に戻るね。

ドゴオオオオン…!!!

「くっ…!!」

「…けほっ。」

「完全個体め…何故私側に付かないのだ!!」

「あ？テメエが日本俺らの國を乗っ取るうとしてしている上に俺の友達ダチを殺そうとしてっからだ。」

「ダチ……？くっ……ふふっ……ふはははははははははは!!」

「何がおかしい……？」

「久々に笑わせてくれたな。本当の親も知らないでなあ!!」

「……は？」

「お前はこの約100年……この時代が来るまでずっと眠り続けていたのだ!!」

「……………」

「この事実には驚いてダンマリか？」

「あーすまん、日本語で話してくれ。」

「くくくツツツ?!?!?」ブチツ

「短気だねえ!?!ブオンツ おっとと?!」

「約100年前……!第一次世界大戦中に私の祖父が確保しておいたからな!!この計画は既に始まっていたのだ!!私の曾祖父はお前を戦時中に誘拐し、即座に眠らせたのだ!!」
 「言葉をしっかり分かりやすく喋れやゴミクスが!!俺は今を生きている出来損ないだ!!!
 敵である貴様のようなゴミクス共の発言なんざ一言も耳にしてねエ!!俺が何処で生まれようが、何処で育てられようが知ったこっちゃねエ!!!」

ザツ!!

「ラビットシツプ!!」

「んなっ…!? イヤホン!! ジャック達!? 何故戻って来た!!?」

「ふっ…! いい獲物捉えた!!!」

バヒユツ

「…ツ!! テメエら伏せろおおおお!!! (あーもーめんどくせーことしてくれらあああ

あああ!!)」

『『毒烈斬』!!!』

「え…!？」

「しまった…! 間に合わないっ!!」

「馬ッ鹿野郎がああああああああああ!!!」バリバリッ!!

ズバシユツ
!!!!

#48 全力を越えた先

ポタツ…ポタツ…

「…あ、あれ…?」

「っ…艶…星…?」

「ラビットシップ?!」

「ごぶっ…いやあ…困ったモンだな…。」

ドチャツ

急に来たので俺は全力で親玉の攻撃を総受けした。

めちやくちや痛かった。毒も中々だったが、免疫力が凄まじかったせいかすぐに毒が治まった。

だけでものすぐく痛くて膝を着いてしまった。

しかもものすごい出血量だった。

痛かった。(三回目)

「…ッ！萃ちゃん…！ごめん…私達…！やっぱり心配で助けようと思ってばかりで…」

「！」

「まあ…：そうだろうとは思ってたよ…：いやあ…：久々にいいもの喰らったなあ…：」ムクリ

「艶星！流石に動いたらまずい！あとは俺達がやるぞ!!」

「いーや…：俺もアイツを叩き落としてやらねーと俺が落ち着かねエ…：」

「それなら艶星君だけじゃなく、皆で戦わないとね！僕だつてまだ戦えていないからね！」

「怪我させない為に戦つていたが…：限界つつーもんがやつと分かったわ…：」バチツ…

「お、おい…：まだ使うなよ?!」

「いーや大丈夫だ…：もう俺だけが戦う相手じゃねエからな…：」

「ああ、任せろ。」

俺は思った。

俺は恵まれているんだと。

仲間を傷付けまいと言わんばかりに一人で突つ走つていたけれど、それでも追っかけて追いついて助けてくれる仲間がいる。

無理はするが、それは俺も変わらないし何も言えない。

あとでお礼を言うか。

「お兄ちゃん、僕とは初めましてだよ。ワケはあとで話すね。」

「お前……ドッベルゲンガ影か……。存分に手伝いな……。だが、裏切ったり友達ダチを傷つけたら容赦し

ねーからな。」

「うん、大丈夫。あと、ありがとう。シユルルツ それじゃ、」

「No. 001 ドッベルゲンガ影、貴様も裏切ったか。まあいい……数が増えたところで何も変わら

ない!!」

「あつそ、んじや俺の……いや、俺達ヒーローの力を見せてやるよ!!」

「力と言いなながらも同じことだ!!」

「それはどうかしらねえええええ!!!!」

「チツ……!」

ドガツ!!

「私の可愛い可愛い萃ちゃんをよくもこんな状態にしてくれたなああああああああ

!!!」

タタタタタ……

「うひゃあ……Mt. レデイさんの全力しゅげえ……。相手にしたら絶対勝てないわ……俺即

死☆」

「艷星やベエぞ! ターゲットをこつちに変えてきた!!」

「大丈夫だ峰田君、もう既に計算済み！斬撃を飛ばして来るから準備をしておいてくれるか?！」

「どうやって対処するんだ!？」

「粉碎させる!」

「あつ…脳筋艶星だ。」

『『飛烈斬』!!!』

シュババババツ!!!

「7・7mm機関銃!!!」

ゴガガガガガガガツ!!!!

「テイルマン行くぞ!!」

「もちろんだテンタコル!!」

バヒュツ!!

「やかましい連中だ…!!墜ちるがいい!!」

ズバツ

「ぐっ…!負けるかよおおおおお!!」

「ま、まだだ…!!こんな傷如きで負けるかあああああ!!」

「なにつ…!？」

「でりやあああああああ!!!」

バギヤツ!!!

「ぐふうツツ!!!」

「からのオ…ネビルレーザああああああツツ!!」

ジユツ

「ぐツ!!このツ…!!」

「うううううっ…お腹がツ…!」

「私のロツクを直接聞かせてあげるからこつち見る!!『ハートビート・サラウンド』!!!」

ゴオオオオオツ!!!

「チツ…袋叩きじゃないか…!!しまった…完全^ヤ個^ツ体は何処へ行つた!」

ビタツ!!!

「あ?!」

「俺／オイラならこの真下にいるぞ!!」

グインツ!!

「ぐうっ?!」

「グレイプフォール
葡萄大落下!!!」

ズドンツ
!!!!

パラパラ

連携プレーを見せ、奴を地上に引き摺り下ろすことができた。

まあ、常に浮いているから話にならないし。

とは言え、ダメージを与えたとしてもそれはHPゲージで例えるとやつと半分くらいと言える。予想だが、そろそろ第二形態になる頃だと思う。

「くくつ…寄つて集つて倒せるとでも言えるのか…？この天才的な私を倒せる者などいない!!ただでさえ回復しているのだからなア!!」

「…匂いが変わった。ここからが本番らしいな。」

ボゴツ…ボゴボゴツ…

「この、私が…最高の…状態に…させるとどうなるか…分かせてやろう…!!」

「あくあ、巨大化なんてしたら大抵雑魚になるやつじゃん。耐久だけはありそうだが…弱点さえ見えてりや即殺だな。テイルマン、テンタコル、お願いがある。」

「一発で決めるんだろう?」

「投擲なら任せな!同時に投げればいいんだよな?」

「それなら私もやらせてもらおう。君達の体に負担がかからないよう強化させておく。」

「ありがとうございます、ジーニストさん。よし影、俺に合わせてくれ。」

「もちろんだよ。あの技を撃ち込むんでしょ？」

「流石だな…いきなりで申し訳ないが、この技で終わらせてやる。俺の体がこれ以上持
続しねエからな。」

「うん、分かった。」

「『極・風烈斬』!!!」

「全機能フルスロットル・フルブースト…!!」

「標的確認、超弩級戦艦大和型壱番艦 大和!!」

「超弩級戦艦大和型貳番艦 武蔵!!」

ピヨーンッ

スタツ

「46cm^{センチ}イ…!!」

「照準…^{エイム}…主砲発射オオ!!!」

ブオンッ!!!

「三連装砲おおおおおおお!!!」

バギイイイン!!

「ぬううっ!?ならばこれでツ…!! 『重鉄槌』!!!」

「効かねエよバアアアアカ!!!」

ダガアアアアアアアアアア!!

「ふあつ!!」

「とつとと……くたばれええええええええええ!!!!!!」

メッゴォッオッツ!!

「ぐおおおおおおああああああああああアツツ!!」

「おおらああああああああああああああああああ!!!!」

ドゴオオオオツ!!

艦装無しで日本最強の戦艦の大和を技名として繰り出したのは何回もあったが、今回ばかりはガチでレベルがおかしすぎるほどの威力をぶちかました。俺がさつきまで最大でぶちかました1001%よりも大幅に上回っていた。奴が出した技の鉄の槌（めっちゃ重かったやつ）をバキバキに破壊していたことがあとになって気がついた。

ちなみに俺は気が付かなかつたが、超限凸でぶちかました代償として約三日間の強制シャットダウンがもうそろそろ始まる。

「……………ぶつ。」ブシュツ!!

「艶星いいいいいい!!」

「私のこと、忘れてないでしょおおお!!」

ポフンツ

「あ、ありがとうお姉さん…それよりお兄ちゃんが…。」

「ごぶっ…げぼあっ…。」

「全くラビットシツプつたら…あとでミッドナイトに報告だからね!!」

「ラビットシツプ!これくらいしか応急処置できないが…耐えてくれ!!」

「ぜえ…はあ…ごぶっ…。」

「Twinkle!治ったか!？」

「う、うん…なんとか腹痛は治ったよ…。」

「奴を捕らえました!すぐに地上へ離脱しましょう!!」

「よし、脱出だ!!」

脱出しました。

数話前に会った浅木 あまな 甘奈さんという女性と、なんかクソデカイ部屋に閉じ込められ

ていた巨人のような子供も脱出済み。

どうやって脱出したのかは聞かないでおくとして…ちよつと厄介なことがはたまた起きてしまったようです。

ズラッ

「このまま逃がすでも思えるか!?殺されたくなけりや、ボスを置いて行け!!」

「おいおいマジかよお…!こんなの相手にしていたらオイラ達がやられちゃうよ…!」

「艶星はもう戦えない状態だ…このままでは全滅も間違いない起きてしまう…!!」

「G r r r r r r r r ……」バチッ

「まずい、暴走を引き起こしかねん」

「どいてどいてええええええええ!!」

ガシャアアアアン!!!

「ぎゃああああああああ!!!」

「今度はなんだ!?!」

脱出したかと思われていた女子がまさかの登場。

個性 ホイツプクリームの浅木 甘奈さんです。

どうやら、地上で何かしら変化が起きて戻ってきたとかなんとか。

いや地上に着くの早いし戻るのも早くない??

「はあ…はあ…ラビットシップ大丈夫!?!」

「えつと…あんたは?」

「私は浅木 甘奈!その子に助けられたって言っているのかな?とりあえず説明はあと

!!面倒な奴らが来ちゃったから逆走して!!」

「なんで?!説明してくれないと信じられないんだけれど!」

ガサガサガサガサ!!

「やっぱあく!!もう来ちゃった!!グンタイアリがもう来てんの!!」

「ぐ、グンタイアリ…?もしかしてグンタイアリってあのグンタイアリ?」

「そうなの!!しかも魔改造された奴らだからもつとヤバいの!!」

「ごふっ…お…これに…や…らせ…て…」

「何言ってるんだ!ただでさえ意識を保つので精一杯じゃないか!流石に無理はさせられない!!」

「たの…む…」

「…………、オイラの身長でも大丈夫か?」

「峰田、何をするつもりだ?」

「オイラは艶星を信じる。それしか言えないんだ…だから頼む…!」

「…なるほどね。私も加勢しなきゃね!萃ちゃんの今の状態では本気なんて出せないしっ!!」

ブスツ!!

「行くよ萃ちゃん…!!皆は私と萃ちゃんの後ろに下がって!」

「分かった。峰田、艶星をしっかりと支えておけよ?」

「んなこたあ分かってるぜ…! (それにしても…前よりも軽い気がするな…。)」

「無茶だけはするなよ。」

スッ

「『スタービート・サラウンド星の立体音響』!!!」

メッ ギャツ!!!

ズガガガガッ!!バガッ!!!

「ごぶっ!わ、悪、イ…俺寝る…。」

「おうゆつくり休め!無茶しやがって!なんか羨ましいぜちくしょー!」
「それはいいんだけど…どうやって出る?」

「「あっ…。」」

俺は完全に落ちたのでどう出るかすら教えていなかった。

他に出る場所を知っているとしたら…はい、尋問たいむが始まります。
俺が目覚めた頃は3日後のことでした。

#49 目が覚めて――

俺がボス戦突破してぶっ倒れてから3日が経った日…病院へ運ばれてそこで目を覚ました。よくお世話になっています。

「ん…あれ…?ここは…?」

「艶星少年!?目が覚めたか!!」

「オールマイトさん…?」

「いやあくよかった…。今はじつとしていた方がいい。君は相当なダメージを受けているから。」

「あ…すみません、ご心配をおかけしました…。つてそうじゃねエ!!皆は大丈夫なんですか?!俺が寝た後はどうなっていたんですか?!奴らは!?!」

「大丈夫。怪我人は多少出ているが、君ほどの怪我人は出ていない。侵略者インヴェーダーのことは安心していいぞ。峰田少年がとても活躍してくれたからね。ギチギチになっていたよ。」

「流石だな、峰田君は…。傷を付けない方法で捕まえるのはとても難しいから…。俺は

またこんなにやらかしたんですから…。」

「その右腕かい?」

「まあ…はい。右腕の修復治療ができてても以前のように全力を出すことは不可能になってしまいましたから…。」

「相当な戦いをしていたことはしつかり聞いたから。まあ、無茶をするのが君だからね。」

「うつ…すみません。」

「だが、成長しているじゃないか。前までは全て自分で背負っていたが、今はしつかりクラスメイトに頼ることができている。やらかしたとしても、君のクラスメイト達は絶対に見捨てるなんてことはしないから。」

「あ、あの…。」

「ん?」

「皆に起きたことを言っただけです…。」

「それはもちろん伝えておくよ。あ、先に君の彼Jゴホン!! お姉さんと面会したらどうかな? もう伝えたんだ。」

「え、ツ…?」

ズドドドドド

!!!!!!

バアアアアン!!!!

「お、お姉ちゃん…!?」

「…ツ!!」

カツカツカツ

「あつ…お、お仕置きは…あ、あとにして欲しいなつて思つて…。」

ギユムツ

「にやつ?!」

「もう…見ないうちに馬鹿みたいにまた無茶して…!」

ギユウウ…

「あつ…お、おね…痛い…グググ あだだだだだだだだ!!!」

(さて、ここはミッドナイトに任せて私は戻るとするか。)

パタン

お姉ちゃんが全力で入つて来て抱きつかれました。

そしてオールマイトさんは空気を読んで俺のいる病室から出て行つてしまいました。なんか嫌な予感しかしません助けてください。

「本ツ当におバカ…!しつかりお仕置きしてあげるから大人しくしていなさい!」

「え、えつと…今怪我しているから優しくして欲しいでち…。」

「目、瞑りなさい。」

「え……？」

「あーもう！鈍感なところは本当に変わらないわね！お仕置きよ!!」

ギユウウ……

「もぶぶ……んむむ……。」

「本当にお馬鹿なんだから……ぐすつ。」

「ご、ごめんによしやい……。」

「萃ちゃん。」

「ひやい？」

チュツ

「んにやつ……!!? あつ……お、おね……おねねね……!!?」

「約束のキスよ。今度また無茶したら強制的に私の女になつてもらうから。」

「へ……? よ、嫁……? 俺は女の子じゃn「仕草が女の子だからね。」グサツ ううっ!!」

「だけど本当に無茶だけはしないで。そのせいであなたの右腕がダメになつちやつてい
るじゃないの……。」

「気をつけましゅ……。」

唇を重ねられました。

無理矢理の口付けではなく、優しいフレンチキスをされました。

お仕置きではなかったけれども、約束を破った時の内容がもうお察しの通りでした。

お約束を破ったら強制的にお嫁にされてあんなことやこんなことをされる羽目になるとかならないとか…。

俺は怖いです。

「あと、血が足りていないわね。」

「あ、っ…う、うん…。」

「果物食べる？」

「あるの!? 食べろズキツ 痛、エ!!」

「そんなに飛び上がらないの。何食べたいの？」

「ブルーベリー食べたい。」

「うーん…入ってないわねえ…。」

「何入ってるの？」

「林檎、蜜柑、葡萄にメロン…これもあるわよ?」

「あつ、李^{すもも}食べたい。」

「今切るからね。あと、この果物はテンタコル達が持って来てくれたのよ。」

「障子君達が…? あつ…!! 色々お礼言わなきゃ!ズキツ 痛、ええ!!!」

「だから急に動かないの！」

ベシッ

「ごめんにやしい！」

「優先順位は分かっているわよ。だけど、今は無茶しちやダメ。皆が来た時にお礼を言いなさい？」

「はーい…。」

「はい、すもも切り分け終わったわよ♪それにしても、すももから食べたいだなんて珍しいわね？ 大体大好物から食べるじゃない。」

「燃料補給するには鉄分が多いものを摂っておかにはkガジッ あでっ！」

「萃ちゃんってそんなに舌噛む子だった？」

「多分…燃料が足りにはいかりや…。」

「滑舌も悪いわね…。後遺症にならないことを祈るわ。」

「俺もそう願いたいにや。」

「たまに『にや』って言うの反則レベルに可愛いからやめて。襲いたくなっちゃう。」

「やだ怖いこの人。」

イチヤイチヤしました。

キスされた時は脳内が真っ白になってバグを引き起こしたCPUみたいになってた

けれども、お姉ちゃんはお構い無しで抱きついたりしていた。
めっちゃいい匂いしました。

ちなみに俺はお姉ちゃんの髪がもふもふしていてそれに埋もれていました。めっちゃもふもふでした。

「そういえば、例の女の子も来ているわよ?」

バアアアン!!!

「ラビットシツプああああああ!!!」

「浅木さん!? あっちよつとその距離はまずいんじゃない」

「『ホイッップ』!!」

モプリンツ!!

「んむもっ!? ボフツ むぼっ?!」

「やつと起きてくれたああああ!! 爆睡しすぎいいいい!!」

「むもも…もももも…。」

「ねえ、萃ちゃんクリームで埋もれて凄いいことになっているんだけれど…。」

「あつ。」

「ぷはっ! な、なんで俺をクリームまみれにするのにや…。」

「抱きつこうとしたんだけど衝撃が強すぎるかもだから緩和させる為にやった!」

「あ、納得。」

（クリームまみれの萃ちゃん：いいわね。美味しそう…。） ジュルリ

「お姉ちゃん食べようとしてるよね？」

「バレちゃった☆」

「えっ?! ミッドナイトに弟がいたの!?!」

「この子の彼女よ♪」

「付き合っていたの!?!」

「ちがーう!!」

「違う訳ではないでしょー?」

「うえっ…：そ、そーだけど…。」

「先に取りられちゃったかあ〜! 狙っていたのにい〜!!」

「残念だったわね♡」

「だけどラビットシツプが幸せになるならそれでヨシッ!（某現場猫風）」

「もうやだ泣きたい。」

その後も彼女達と俺でお喋りをしつつも、今の状況がどうなっているのかを聞いた。被害は甚大ではなかったが、負傷者がやたらと多かつたみたい。個性+武器持ちが厄介だったらしくて苦戦を強いられた人達もいたとか。

出久君達の視点にいきます。

「萃君が起きたんですか?!」

「緑谷少年ちよつと近い…。」

「早く面会したいんですが!!」

「まあまあ落ち着こうか…。今は安静にしているが、艶星少年のことだから上手いこと治しているだろうね。会うのは明日でもいいんじゃないかな?」

「あつ、そうですね…。そういえば、萃君の様子はどうでしたか?」

「血相は良くなかった。血をかなり失っていたからね。今は血を増やす為にあれやこれやと口に入れていると思うよ。」

「変なものまで食べなきゃいいんですけれどね…。」

「まあ…彼だからね…。」

そして俺の視点にモドール。

「お腹痛ええええ!!」

「何か変なもの食べたの!?!」

「知らねえええ!!お手洗いに行ってくる!!」

ダダダダダ!!!バダン!!!

「食べ過ぎでお腹痛くしたんじゃ…あら?何かしらこれ…。さくらんぼの種…の欠片

??」

ジャアアア…

「くっそおお…さくらんぼの種まで普通に食べちまった…。気がついたら普通に噛み砕いていたなんて…。咬合力がないと砕けないはずなんだが…?」

コンコン

「萃ちゃん大丈夫?」

「まだお腹痛い…。さくらんぼの種を気づいたらバリバリ食べていたみたい…。」

「それでお腹壊すつてどういうことなの?」

「さくらんぼの種にはアミグダリンっちゅー天然毒の成分が入っていて、凄く簡単に言えば青酸カリが種の中に入ってグギョルルルル ぬおあああああつ!!!あとで話しゅ!!」

「あ、うん。分かったわ。え、毒!」

変なものどころか、知らないうちに咬合力が上がってさくらんぼの種まで食べてしまいました。もちろん食べていた時は種無しさくらんぼかなとか考えていたけれども、思っていたよりとんでもねーことになっていました。

「それで、なんで種ごと食べていたの?」

「種無しかと思つてたの。」

「硬さくらい分かるでしょ？」

「それさえ気づかなかったの。」

「どんな顎してんの!？」

「俺も聞きたいよ。」

「計測器あるか聞いてくるわね。」

「へ?う、うん…。」

数分後。

「許可貰って持ってきてもらったわよ。」

「あ、ありがとう。」

「この子がさくらんぼの種を致死量以上に食べてお腹壊す程度で済んだのですか…?」

「本当よ?今でも食べさせられるけれど?」

「またお腹壊してお手洗いに行くハメになるからやめて!」

「と、とりあえず測ってみましょうか…。はい、お口を開けてね?」

「んあー…かぶっ。」

「はい力入れれミシッ ミシ…??」

バキキャンツ!!!

「へ?」

「んむむ???
壊れた☆」

#50 体のバグ、平和な一日

「ねえ、咬合力どうなってるの？」

「俺が聞きたいのだが？」

「これで…無個性…??君、その力は何処から出てきたんだい…?」

「俺の力単体なのですが…?」

「ええ…。(困惑)」

「これくらいが個性くらいの咬合力かなって思って鍛えていたんですが…。」

ポニユッ

「もにゅ!!」

「きーたーえーすーぎ!!」

「ご、ごめんいやひやい…。(何で謝ってんだ俺!?)」

「んー…これで個性を持っていないって言われても中々理解されないのも納得してしま
うな…。調べても大丈夫かい？」

「あ、俺は大丈夫ですよ。」

「…変なことに利用しないわよね？」

「大丈夫だ。レントゲンで撮って見てみるだけだから。」

少年達移動中…

「それで…何故お姉ちゃんは今俺を抱き抱えているの？」

「落ち着くからよ♪」

「はあ…お姉ちゃんらしい変態さだよ…。」

「頬っぺも柔らかいからすりすりしたくなるのよ♪」

スリスリ

「にやつ!? や、やめろおおー!! 離せええええええ!!」

「や〜よ♪」

「なんて賑やかしいんだ…。」

イチヤコラしたくないのにめちやくちやされていました。

気がつけば診察室へ着いてそこへ入った。

「はい、お口開けてね〜。」

「んあ〜…。」

(ん〜可愛い。いじめ倒したいわ。)

「んー…やつぱり何の変化もないねえ…。これと言った気になるところがないし、歯も

普通の形をしているし：レントゲンとCTスキャンも撮っていいかい？とりあえずお金の心配はしなくていいから大丈夫だよ。」

「あ、お願ひします。」

少年診察中…

「何かありましたか？」

「特になかったね。」

「なかったの!？」

「単なる鍛えすぎです。」

「萃ちゃん、少しは休まなきゃね。」

「ええー!？」

「ええく!?じやないの!お仕置きと休むのどっちがいいか今ここで答えなさい!」

「お姉ちゃんの鬼イ!!」

「お仕置き決定ね!!」バチンッ

「ごめんなさい休みましゅ!!!」

(何だこの愉快な二人は…。)

お姉ちゃんにお仕置きされる前にしつかり休むことを誓いました。

ちなみにこっそり鍛えようとしたりするなどの行為を行った際はお姉ちゃんからの

マジチョップを喰らわされることとなるらしい。絶対痛い。

後日退院はしたものの、お姉ちゃんは離れてくれずにべったりとくつついて来ていました。

「かーなめちやくん♪」

「や、やめろおー！変な目で見られるでしょーが!?頬っぺすりすりしないで！というかなんでついてきてるのさ!!」

「いいじゃない♪どうせ明日は土曜日なんだし♪」

「…はッ！ま、まさか…!!?」

「おっやすみ〜♪」

眠らされました。

タイムミンクの悪すぎる金曜日だった。

お持ち帰りされたが、俺は寝ている最中に俺の中にいる二人がようやく顔を出示してくれた。

「よ、俺本体。」

「あつ、もう一人の俺キとラー獣ピースト。何していたん？」

「あー…悪い。俺らさ、思ったことがあつてさ。」

「何かあつたの？」

「これを見てくれ。」

「えー…?! 繋がってる?」

「いや、なんか合体しちった。」

「ナンデ!?!」

「知らね。」

「何がどうなつたらそうなるん!?!」

「分かんね。本体が戦^俺っている反動でそうなつたんじゃねーか?」

「ええ…ま、まあそんなにデメリツトが起きるような感じでも無さそうだし…いつか。」

「あ、いいんだ。」

「まーね。」

「それにしても…よくそんな体になってまで動いたよなお前。」

「無茶しちまつたぜ☆」

「なあ、次また戦闘になつた時は俺を呼んでくれないか?」

「ああ、もちろんだ。お前^{キラ}の力が必要だからな。その時は頼むぜ?」

「おうよ。」

「おつと…そろそろ目が覚めるみたいだ。俺ん中で暴れ散らかすなよ?」

「大丈夫だ。制御はできてっからな。」

夢の中で二人に会ったあとそのまま目を覚ましたが、めっちゃめっちゃ眠くて目がすつごくシパシパしていた。

ちなみにお姉ちゃんの家にお持ち帰りされてから二時間くらい経過して膝の上で目を覚ました。しれつと膝枕しないでいただきたいですね。

柔らかくて困惑します。

パチツパチツパチツ…

「ふう…眩しっ…。」

「あら、やっと起きたの？」

「誰のせいでこんなに寝させられたと思ってんのよ…ふわああ…。」

「このまま覚まさないなら襲ってやろうと思ったけれど、ダメだったわね…。」

「強制睡眠からの夜這いですかい。犯罪よそれ。」

「うるさい要注意人物。」

「うっ…お、お姉ちゃんが虐めてくるうう!!」

「ほーらそんなにすぐ動かないの。まだ体が治りきっていないでしょ？私の傍に来なさい。」

「む、むうう…変なことしない？」

「私をなんだと思ってるのよ。」

「変態、痴女、いじわるなドSお姉ちゃん。」

「泣かすわよ？もしくは絞めるわよ？」

パキパキ

「ひっ!？」

とても平和です。

お姉ちゃんと一緒に過ごしている時が何かと楽しくなる。

たまーにお姉ちゃんのドスの入った声があつてビビる。怖い。

「さてと萃ちゃん、ご飯は何にしたい？」

「え、ご飯？どうしよっかなあ…。」

「私でもいいのよ」「ハンバーグで。」なんでそんな面倒なの選ぶのよおお!!」

「お手伝いするつもりなんだけれど…。」

「いや萃ちゃんは座っていなさい！私の未来の嫁なんだから！」

「しれつと女の子扱いしないでくれ。」

「え？私の女でしょ？」

「俺は男だつて!!」

「そうやって認めない子はあ…こうだああく!!」

ワシヤワシヤアア!!

「んにゃああああッ!!俺の頭をぐしゃぐしゃにするにゃああああ!!」

「それっ!」

ムニユ

「んぶっ!」

頭をわしやわしやされて只管ひたすらに抵抗してポカポカと叩いた。

もちろん強くやっていません。

しかも隙を見計らって俺に抱きついて何がとは言わんが柔らかいマシユマロみみたいなナニカに頭を押さえつけて顔を埋うずめられました。

呼吸できない!

「萃ちゃん、少しだけこの状態になりなさい。」

「んむむむむ…!!むぐぐーっ!!」

「こら暴れるな!」

ベシッ

「ぶえっ!」

「こうやって抱くのはいつ頃かしらね…。まだ萃ちゃんが小さかった頃よね?」

「んんん…ぷはっ!!そ、そんなにやの覚えてないよ!急になしたのさ!!」

「さあね?」

「つたく…人前では絶ツツツ対にこれはしないですよ?!俺マジで死んじやうから!!精神的に!!」

「はいはい♪あ、ゆつくりしてなさいね?お手伝いは不要だから♪」

「そこまで言うなら…分かった。ゆつくりしてるよ。」

「あ、それとね?」

「んえ?」

「もしよ?待っている間に新しい技を考えようとするなら、その前に自分の技の一つを鍛えることを考えたらどう?」

「あ…確かに。やってみりゆ。」

「試しでやってみたいならその部屋でやってね♪」

「はい。」

パタム

鍛えるにしても加減を覚えることを考えなきゃいけない。

強力な個性を持つているにしろ、反転させる個性持ちもいるかも知れないしそういった厄介な敵も出てくる可能性も有り得る。

変に力を入れるとお姉ちゃんに襲われる可能性があるのです、イメージをするだけにしようかと思ったり…しています。

(…やつぱり心配ね。少し見てみようかしら?)

チラッ

「あああああッ!!ちよつと待ってちよつと待って!!イメージだけのハズなのになんか力んだら電気バチバチつてしちゃったあああ!!」

「何ドジしてるのよおお!!」

バチインツ!!!

「へぶちつ!!!」

ビンタされちゃった。

ちやんと理由も話したけれど、頬っぺに出来た美しく跡が残った手形は凄くヒリヒリしました。しかも吹っ飛んだので顔面から壁にぶつかりました。痛かった。

「全く…イメージするだけでそんなことになっちゃったら何もできないじゃない…。」

「ごめんにやしい…。」

「まあいいわ。ご飯食べてから考えましょ?」

「はーい…。」

「それと、お仕置きね?」

「ひえっ!?!」

「頬っぺぶにぶにの刑ね!」

「ええー!？」

「痛い方が良かったかしら？」

「やだ！」

「なら我慢してね♪」

「むう…ぐぬぬ…。」

ご飯食べた後からはずっと頬を触られ続けた。それと噛まれた。

何故だか分からんけれど、やはり力の差もある上に弱点をド突かれてしまっているの

何もできなくなっていました。必死に抵抗したけれど、やはり力の差もある上に弱点をド突かれてしまっているの

もちろん翌朝はお姉ちゃんの抱き枕にされていたので身動きすらとれませんでした。